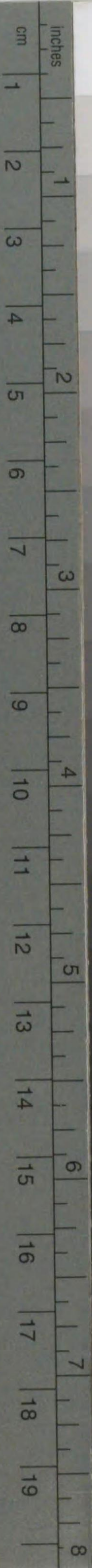


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

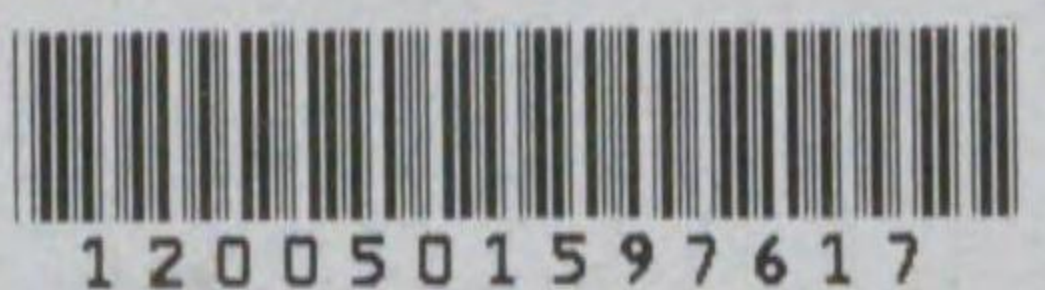
© Kodak, 2007 TM: Kodak



複製

4

34



764-34



510





安房先賢遺著全集







安房先賢遺著全集





## 例言

一此の全集は、曩に本會に於て顯彰いたしました安房先賢の遺著遺稿類を収載したものであります。故に本書は、昨年本會で出版いたしました『安房先賢偉人傳』の姉妹篇でありまして、傳記の主なる資料となつたものであります。故に是等先賢の人物事蹟等を知悉せんとするには、是非とも兩書を併讀することが必要であると信じます。

一本會に於て顯彰いたしました先賢偉人は、十六名であります。その中で遺著遺稿等が遺つて居りますのは、石井三朶花、奥澤軒中、山口杉庵、新井文山、加藤霞石、堀江顯齋、恩田仰岳、野呂道庵、鳥山確齋、鱸松塘、鈴木抱山の十一先賢であります。本書は此の十一先賢の遺著遺稿を収載したものであります。

一十六先賢中、伴家直主、武田石翁、會根靜夫、畠山勇子の四先賢には、遺憾ながら茲に収載するやうな遺著遺稿がありません。又菱川師宣畫伯には、多くの版畫繪本の類があれぬから、之は今後手に入りました機會に發表するより外はありません。又菱川師宣畫伯には、多くの版畫繪本の類があれぬから、それは普通の著述とは異り且又印刷費等の關係もありまして、遺憾ながら収載することを見合せた次第であります。而して之が全集の如きは、藝術史特に浮世繪研究の方面に於て最も必要のものであります。微力なる一地方の郷土的事業としては、その實行頗る困難でありますから、何卒大方の學者藝術家等の有力なる後援を得て實現の時の來らんことを祈るのであります。

一本書は、その名を全集と題しましたから、あるだけのものを悉く収載すべきであります。が、いかにせん印刷費に制限がありますために、遺憾ながら一部分を割愛いたしました。それは山口杉庵、堀江顯齋、恩田仰岳、鱸松塘四先賢の分に於て



省いたのであります。その委細は、解題の條に述べてありますから、こゝには略して置きます。

一右の如き事情によつて已むを得ず省いた部分がありますから、本書は選集と申した方が適當であります。併し概観すれば、十一先賢の中で、杉庵、顯齋、仰岳、松塘の四先賢を除いて、他の七先賢の分は、全部を収載いたしましたから、やはり全集と申すことに致しました。此の點は大方の御諒恕を請ふ所であります。

一此の機會に一言して置きたいことは、上述の如く已むを得ざる事情に依つて全部を収載し得なかつた先賢の遺著については、他日各先賢個人別の全集として完全なる全集を出したいといふ希望であります。之は勿論困難なる事業ではありませうが、成るべく早くその時の到來せんことを祈るのであります。

一本書内容の排列順序は、漢文漢詩體のものを先として、國文國歌體のものを後に致しました。それには格別の理由はなく、たゞ印刷の都合に依つたのであります。

一原本は、版本もありますが、過半は著者自筆の稿本でありまして、塗抹不明の個所も尠からず、また最も蠹蝕が多くて、謄寫校正には苦心を極めました。それでも編者微力のために、粗漏も誤謬も多くあることゝ存じます。先賢に對しては、その名著を冒瀆した罪を謝すると同時に、讀者諸彦に對しては、批正を請ふ次第であります。

一原本の漢文漢詩は、多く白文でありますから、今本集に収載するについても、そのままにするのが、翻刻としては忠實な方法であります。編者は婆心を以て微力をも願す、文章にだけ返點を付けて置きました。併しそれには誤謬もありません。うから、識者の是正を俟つ次第であります。

一本書を讀まるゝ諸彦は、大抵先づその前に『安房先賢偉人傳』を讀まれますことゝ存じますが、若し傳記を讀まずして、

直に本書だけを讀まるゝ方の便宜のために、簡單ながら解題と著者小傳とを卷首に書き添へて置きました。

一最後に本書收載の貴重なる原本を、お貸し下された諸彦、並に校正其の他種々の方面に於て援助を賜はつた諸彦に對して茲に厚く感謝の意を表します。また印刷所開明堂に對しては、此の未曾有の事變に際したるにも拘はらず、萬難を排して仕事を進められ、面倒なる製版をも厭はず、懇切丁寧に努力せられて、茲に完成を告げられた厚意を深く感謝する次第であります。

昭和十四年二月

安房先賢偉人顯彰會編纂委員

中	佐	川	狩	大	奥	稻
村	久	名	野	野	澤	村
時	間	貞	鷹	太	福	眞
中	喜	治	力	平	太	里
	平	郎		郎		



# 安房先賢遺著全集解題

## 石井三朶花篇

【著者小傳】 石井三朶花先生は、名を收といひ、通稱は彌五兵衛、三朶花は其の號である。慶安二年九月十日安房郡山萩村(今安房郡豊房村山萩)に生れ、治太夫盛定の三男である。幼より學を好み刻苦して獨學せられ、二十歳の頃本多出雲守政利に仕へられたが、數年にして致仕して房州勝山に歸り住せられた。延寶二年四月水戸城主徳川光圀公勝山に來遊の際、公に知られて召出され、右筆となり彰考館に入り、後に大日本史の編修に與かるに至られた。寶永元年五月病に依て職を退き享保九年九月二十五日に歿した。享年七十六。墓は水戸市常磐町神崎寺にある。著書には『破日蓮編』六十卷、『勸學文』一卷、『右筆日次記』『年代記増補』『御發明書』等があつたといふことであるが、今悉く散逸して見ることができない。甚だ惜しむべきことである。

## 三朶花詩文集

一卷

未刊

之は今回編者の編輯したものであつて、水戸彰考館所藏の『文苑雜纂』及び『薙露遺響』と『大日本史』との中から取つたものである。此の資料の蒐集騰寫については、同館長雨谷毅氏の多大なる御盡力に預かつたのである。こゝに厚く謝意を表します。此の如くして集め得た結果は、七絶二十四、五絶九(その中の二首は女古今の作)、七律一、七古三、五古一、楚辭體一、文章四、和歌は短歌九首、長歌二首、その外に『大日本史』中にある傳記二篇である。今までに發見したのは、之れだけである。



### 新井文山篇

【著者小傳】 新井文山先生名は世傑（又は升又世文）、字は宏明、通稱は文左衛門といひ文山はその號である。安永八年館山新井浦に生る。父三九郎早く歿し母に養育せられた。六歳邑の三福寺住職秀哲和尚に學び、又柏崎の鈴木直卿に學ばれた。十四歳の時江戸に出て杉浦西涯の門に入り後更に林家の門に入り佐藤一齋に學び又松崎慊堂に師事せられた。文化三年二十八歳にて郷に歸り家塾を開いて教授せられ、天保七年五十八歳の時、領主館山侯に召されて經書を講じ、天保九年士籍に入り後郡奉行となり目付を兼ねられた。嘉永四年七月二十四日歿。行年七十三。墓は三福寺にある。遺稿は詩文の稿本十冊、その他に『四書輯釋』の書入がある。本全集には詩文のみを収載することとした。

#### 文山詩集

九卷

未刊

#### 文山人文集

一卷

未刊

文山先生の遺稿は、纏まつたものは詩文の稿本十冊である。その標題は、第一冊は『詩集』、第二冊は詩集ではあるが標題はない。第三冊は『甲戌集』、第四冊は『乙亥集』、第五冊も同じく『乙亥集』（前の乙亥集と大體同じであるが、此の方には詩の外に文章十二編を加へられてゐる）、第六冊は『丙子集』、第七冊は『丁丑集』、第八冊は『戊寅集』第九冊は『詩稿』、第十冊は『蠟坂集』である。以上は悉く未定稿であつて、中には同一の詩が彼にも此にも出てゐて、互に字句の異つてゐるものもある。又詩と文とが混じつてゐる冊もある。故に編者は之を整理して、右の如く詩集九卷、文集一卷として此に収載した。而して文集には、その外に編者の蒐集した遺文數篇を加へて置いた。遺稿は今館山町の出雲氏方に藏してゐる。

### 加藤霞石篇

【著者小傳】 加藤霞石先生名は濟、字は世美、通稱玄叔、霞石はその號である。幸右衛門の長子で享和二年の出生である。家は農であつたが先生は醫業に志し長狭郡平塚村（今安房郡大山村平塚）の醫内木玄通の門に入り後江戸に出て足立長雋の門に學び歸郷して醫業を開かれた。また天保四年には同郷の原野水と共に長崎に遊ばれた。併し天性文墨の才に富み書と詩とに長じて居られたので却て文人としての名が高くなり、梁川星巖、大槻磐溪、大沼枕山、小野湖山等の名士と往來せられた。嘉永四年家を玄章に譲り江戸に出て、日本橋茅場町に帷を下し、やがて伊勢長島侯増山河内守に仕へられた。明治戊辰の春、亂を避けて歸郷せられ明治六年四月一日（實は三月三十一日）七十二歳で歿せられた。墓は平群村舊宅の側にある。遺稿は『掬靄山房詩』上巻一冊あるのみで他は散佚してゐる。外に『品石風雅』一冊（慶應二年刊行）があるけれど、之は著述ではなく、先生愛藏の名石小豫山一名赤城霞に對して、當時の諸名家の寄せられた賛辭の詩文書畫を集めたものであるから、本集には之を省いた。

#### 掬靄山房詩

一卷

未刊

之は著者自筆の淨書本一冊が東京の加藤六郎氏方に遺つてゐる。それには上巻とあるから、下巻があつた筈であるが、いかに搜索の手を盡しても發見することが出来ないのは遺憾である。或は下巻は未着手であつたかも知れないと思はれる。併し此の一卷だけでも、先生の詩風や一代の行動を知ることが出来るので重寶である。

### 恩田仰岳篇

【著者小傳】 恩田仰岳先生名は利器、字は大用といひ、通稱恭太郎後豹太と改め隠居して豹隱と稱せられた。仰岳はその號である。文化六年三月四日駿河の田中城内に生れ、新五右衛門利久の長子である。七歳から藩儒石井繩齋に學び、十九歳



の時江戸に出て市川梅嶺の門に入り長沼流の兵學を修め傍昌平塾に學ばれた。天保四年四月兵學の印可を受けて歸藩し軍學師範を命ぜられ日知館目付を兼ねられた。嘉永安政の間、藩の兵制を改め洋式訓練を厲行し、又海防の任に當り、後藩政の機密に參與せられた。明治元年九月田中藩が安房に移された時、藩命を受けて築城の任に當り地を白濱に選定し長尾藩と稱して起工せられたところ、半途にして風害のために建物が倒潰したので物議が起り、譴を受けて退隠せられ白濱村に塾を開いて子弟に教授せられた。明治二十四年一月二十八日歿。行年八十三。墓は白濱村杖珠院にある。遺稿は頗る多く今嫡孫恩田利用氏の許に藏せられてゐる。それは『周易傳義蠡測』十六卷、『左傳杜解鈔說』十六卷、『大學章句翼』二卷、『孟子集注翼』十四卷、孫子纂注三卷、『南朝紀事本末』二卷、『雞肋雜誌』七卷、同補篇三卷、『得則錄』一卷、『仰岳樓文鈔』一卷、『西洋砲術一斑抄』十卷、『動植字彙』(未脱稿)等である。その他に『握奇集解析義』二卷、『拳旗燈』、『講武津梁』、『示彪書』二卷、『垂綸腹語』、『海防問答』、『銃戰問答』、『草書集體千字文』等がありし由なるも今は散逸してゐる。以上の如く非常に澤山の稿本が遺つてゐるが、それを悉く収載するとすれば、本全集の如き冊子を十數冊要することであるから、その全集は他日を期して、今回本集には、代表的のもの四種を選んで收めることとした。

### 孫子纂注

三卷

未刊

此の書は、兵學家としての仰岳先生の最も力を注がれたもので、稿本が三種遺つてゐる。その最後のものは、割削に附するために板下として淨書せられ、芳野金陵の序文と石井頼水の跋とを附けられてゐる。故に本集には、先生の注釋書の代表として此の一部を加へたのである。

### 仰岳樓文鈔

一卷

未刊

先生の文章の見るべきものは、多數の遺稿の中にも此の一冊だけである。而も少壯時代の作であつて、未定稿であるから、之を以て直に先生の文を評することは出来ない。僅に全豹の一斑を知るにすぎないのである。

### 仰岳樓得則錄

一卷

未刊

之は漢文で書かれた隨筆的のものであつて、嘉永七年(安政元年)七月の著述である。短篇であるけれど、學殖の片鱗を見るに足るものである。

### 雞肋雜誌抄

未刊

之は假名交り文の隨筆であつて、正篇七冊、補篇三冊から成つてゐる。如鷗遠藤俊臣の序文まで附けてあつて、之も正篇七冊は、出板のために板下のつもりで書かれたものである。補篇は最も晩年に書かれたもので、眼病のために視力衰へ、次第に書法が亂れて行き、最後には全く手さぐりで書かれた跡が歴然としてゐる。本全集には、此の書を全部収載するつもりであつたが、經費の都合で已むを得ず、編者が適宜に抄出して收めたのである。

### 野呂道庵篇

【著者小傳】野呂道庵先生名は俊、字は俊臣また民父といひ、道庵又は同庵はその號である。文化十年十二月七日江戸下谷の長者町に生れ陶齋の長子である。幼より龜田鵬齋について學ばれ、十一歳の頃から既に生徒に教授せられ、十四歳の時には、備前の支封新田の藩主池田信濃守の辟に應じて月六回の講義をせられた。又駒込吉祥寺の僧徒に教授し、天保三年からは、新に下谷徒士町に明善塾を開かれた。之より入門者益々多く伊豫大洲藩主加藤遠江守や房州勝山藩主酒井安藝守の辟に應じて、その藩邸に於て講義せられた。然るに明治戊辰の三月戦亂を避けて房州勝山に來られ、藩校育英館に於て教授せられたが、明治四年廢藩と共に廢校となつたので、明治七年明善塾を開き廣く子弟に教授せられた。明治二十二年二月二日歿。行年七十七。墓は勝山町下佐久間の天寧寺にある。著述は多くあつたらしいが今遺つてゐるものは、『東海漁唱』一卷、『道庵文約』一卷、『同庵先生文集』一卷、『學制攷』一卷のみである。



東海漁唱附道庵遺珠

一卷

未刊

之は詩集であつて先生自筆の稿本が遺つてゐる。之を書かれたのは、房州來住以前であらう。附録の『道庵遺珠』は、本全集のために今回伊藤庄之助氏の蒐集せられたもので長短十四首ある。こゝに厚く謝意を表す。

道庵文約

一卷

未刊

之は文集であつて『東海漁唱』と同じ頃に書かれたらしい自筆の稿本が遺つてゐる。いづれも野呂家の所蔵であつて、そのまゝ剞劂に附するやうに書かれたらしいものである。

同庵先生文集

一卷

未刊

之は高弟安房郡保田町の早川圖南（字は九萬、通稱儀之助、別號鯤堂）の編輯せられたもので、圖南自筆の原本は早川祐吉氏の所蔵である。

學制攷

一卷

未刊

之は明治三年閏十月藩校の學制改革について建議せられたもので、自筆の稿本が遺つてゐる。勝山の藩校育英館は明治元年の創立であつたが、明治二年一時廢校となつたのを再び開校する事となつた時の建議であらう。稿本は野呂家の所蔵である。

鱸松塘篇

【著者小傳】

鱸松塘先生名は元邦、字は彦之、松塘はその號である。道順の長男にして文政六年十二月十五日平郡谷向村

（今安房郡國府村谷向）に生れ、少年時代には元名村（今保田町元名）の岩崎禮齋に學び又家庭に於ては家業の眼科醫學を學ばれた。併し天稟の詩才は醫たるを好まされず、十七歳の時在江戸の梁川星巖の門に入り忽ち玉池吟社の俊秀として名を顯され、その後は年々江戸と郷國との間を往來し又京阪地方にも旅行して詩壇に闊歩せられた。慶應元年の頃江戸に出て塾を淺草に開き經書詩文等を教授せらる。之れ後の七曲吟社である。明治の世となつて遂に東京に定住せられ、詩文教授の間には、毎年各地を漫遊せられ、その足跡は、九州を除いて全國に及んでゐる。明治三十年郷里に歸り那古町川崎に別莊を營み隱棲せられたが、翌三十一年十二月二十四日行年七十六歳で歿せられた。墓は國府村谷向の梅咲岡にある。著述は生前に大部分刊行せられた。それは凡そ左の如くである。

『松塘小稿』一冊、『松塘詩鈔』二冊、『房山樓詩』二冊、『快説續々記』一冊、『超海集』一冊、『香山遊草』一冊、『久地探梅詩』一冊、『房山樓集』別集二冊、『房山樓集』初編一冊（前の松塘詩鈔と同じもの）『房山樓集』二編二冊（前の房山樓詩と同じもの）『房山樓集』三編二冊。

本全集には、右の内で『香山遊草』と『久地探梅詩』とを除き他は全部を收め、且つ小澤槐庭の編輯せられた『房山樓遺集』四冊を収載した。なほ七曲吟社に於て出版せられた『七曲吟社絶句』二冊、『七曲吟詩二集』二冊、『七曲吟社閨媛絶句』一冊等があつて、先生に關係深いものではあるが、主として門人の作を集めたものであるから經費の都合上割愛した。

松塘小稿

一卷 一冊

天保十四年刊

之は先生最初の詩集で、内容は青年時代の作のみである。

房山樓集初編

二卷 一冊

明治二十七年刊

内容は、嘉永四年刊の『松塘詩鈔』二冊と同じもので、『松塘小稿』以後嘉永三年頃までの作を集めたものである。



房山樓集二編

四卷 二冊

同

内容は、慶應元年刊行の『房山樓詩』二冊と同じもので前の『松塘詩鈔』以後の作即ち慶應三年から文久二年までの作を集めたものである。

房山樓集三編

四卷 二冊

同

之は前の二編以後の作を集めたもので、凡そ慶應元年乙丑から明治七年甲戌までの作を収めてある。

超海集

一卷

明治九年刊

之は明治八年に北海道に遊ばれた時の作を集めたものである。八月東京出航、十月歸京せられた。

房山樓集別集

二卷

明治十八年刊

之は、乾坤の二卷あつて、乾は「芳雲遊稿」、坤は「北遊存稿」と題せられてゐる。『芳雲遊稿』は明治十六年四月から西遊して、芳野山に遊びそれから出雲の松江に到り十二月歸京せられた間の作を集めたもの。『北遊存稿』は翌明治十七年五月東京出發、信濃越中飛騨美濃の諸國に遊び、十二月歸京せられた間の作を集めたものである。

房山樓集遺集

四卷

未刊

之は先生の女婿小澤槐庭の編輯せられたもので、内容は、凡そ明治九年丙子から明治二十八年乙未までの作を集めてある。卷末には文章も集めてあつて用意周到の編輯ぶりである。原本は槐庭自筆のもので東京の小澤家の所蔵である。

快説續々記

一卷

明治六年刊

之は漫言的隨筆的のもので、先生の快事とせられてゐる得意の感想を警拔なる短文で發表せられたものである。題名を續々記と命ぜられたのは、金聖歎の快説、王丹麓の續記に續ぐの意からであらう。

鈴木抱山篇

【著者小傳】 鈴木抱山先生名は恭、字は思道又克齋、抱山はその號である。家業を繼がれて後は襲名して正立と稱せられた。天保四年館山町中町の家に生れ、父は正儀通稱正立といひ、その三男である。初商業に志し江戸日本橋の砂糖商の店員となられたが、天性學問を好まれたので十六歳の時、志を繼して淺草の醫家伊東玄晁の門に入り醫學を修められ、二十二歳の時歸つて白濱村に醫業を開き、兄東海の歿後館山の家に歸つて家を繼がれた。明治初年館山藩の醫官となられたが廢藩後は専ら家に在つて刀圭の傍、子弟に漢籍を教授せられ、明治三十一年五月二十六日行年六十歳で歿せられた。墓は館野村大網の大巖寺にある。先生は醫學にも造詣深かつたが、特に漢學に通じ詩に於ては天才を有せられ、長篇短篇立ち所に成り更に苦吟せられなかつた。併しその詩は殆ど散佚して、今遺つてゐるものは、『克齋詩稿』一卷、『唾棄殘草』一卷のみである。

克齋詩稿

一卷

未刊

之は弱冠時代の詩集で、自筆の稿本であるが、半分は塗抹されてゐる未定稿である。加ふるに蠹蝕甚しく字體不明の個所が頗る多いので、編者は苦心して謄寫校正したけれども、なほ誤寫も多からうと思ふ。偏に博雅の是正を俟つ。

唾棄殘草

一卷

未刊

之も自筆の稿本であつて、前者と同じく蠹蝕の多いものである。鈴木家の傳説によれば、此の草稿は、文久元年藤



森天山の房州滞留中に批正を受けるために浄書せられたものであるといふ。併しその機会を得ずしてそのまま遺つてゐるといふことである。

### 抱山遺珠

一卷

未刊

之は編者の編輯したものであるが、舊門生川名房五郎、富田嘉松、保田文太、太田力藏氏等の盡力に依つたものである。こゝにその厚意を深謝す。

### 奥澤軒中篇

#### 【著者小傳】

奥澤軒中先生字は岐庸、號を富山といひ、平郡久枝村(今安房郡岩井町久枝)の人、明和元年の出生、父は半助といひ代々農家であつたが、先生は醫者となり初は漢方を修め、後長崎に遊學して蘭方を兼修せられた。併し師匠は不明である。而してその醫學は、産科専門であつて、専ら独自の研究を積まれた。その方法は、人體解剖を許されなかつた時代の事として、鹿猿等の動物を解剖して比較研究を試みられた。かくてその結果を集成せられたのが『産科發明』三卷である。先生の手術は、當時最も進歩したもので、それに用ひられた器械類は、独自の考案に成つたものであつたといふ。天保十二年十月八日歿。行年七十八。墓は岩井町久枝の蓮臺寺にある。著書には、『産科發明』の外に、『産科發明附録』一卷、『産燈』二卷、『血脈詳解』四卷、『神經劑』三卷、『難病質疑』二卷、『婦人經驗』一卷等があつたといふことであるが、今散佚して遺つてゐないのが遺憾である。

### 産科發明

三卷

天保四年刊

此書は、殆ど著者一代の研究實驗の記録であつて、現代醫學の大家も大いに感心せられるさうである。序文は太田錦城の第四子玄齡と、先生の舊友小澤道茂とが書かれ、跋は加藤橋山(後の霞石)が書かれてゐる。

### 堀江顯齋篇

#### 【著者小傳】

堀江顯齋先生名は是顯、字は仲益、謙齋又顯齋と號せられた。通稱は太左衛門といひ、文化二年の出生で、長狹郡和泉村(今安房郡東條村和泉)の磯部三右衛門の二男である。幼より附近の龍泉寺で教育を受け、十三歳の頃同村の堀江太左衛門の養子となり、相續の後襲名して太左衛門と稱せられた。農業の傍子弟に教授せられ、漢學の外に國文學をも研究せられ、江戸の狂歌師燕栗園千壽との交りが深かつた。又郷土史を研究せられ、『佐殿草創記』十卷、『蓮祖舊跡志』二卷、『房總遊覽誌』一卷等を著はされた。又中年以後算學の研究に力められ、江戸の長谷川橋溪の門人となつて研究せられたが、大成するに至らずして嘉永三年七月二十九日享年四十六歳で歿せられた。墓は堀江家の宅地内にある。著書は上述の外に、『算學雜記』二冊、『韻學雜記』一冊、『越路のしをり』一冊があつたさうであるが、今散佚してゐるのは遺憾である。

### 佐殿草創記

十卷

未刊

之は源頼朝の幼時から幕府を草創するまでの事歴を叙述せられたもので、美文的の國文で書かれてゐる。今堀江家に遺つてゐる自筆本は、板下として浄書せられたものである。著述の目的は、房總に於ける頼朝の行動を叙述するのであるが、併し十卷の内大部分は、その前後の記事であつて、房總に關する部分は、第七第八の二卷だけである。故に本全集には、經費の都合で此の二卷だけを收めたのである。

### 蓮祖舊跡志

二卷 一冊

安政三年刊

此の書は例言に、「弘化二乙巳年六月」の日附があるけれど、嶺田楓江の序文には「安政丙辰(三年)佛生後一日楓江嶺田宣識」の署名があるから、刊行は安政三年である。内容は、房州に於ける日蓮上人の舊跡を巡拜する者の案内記として著はされたものである。中に略地圖を掲げられてあるが、本全集には印刷の都合で省略した。



房總遊覽誌 安房部

一卷

大正三年刊

之は上總國長者町の中村國香の原著であるが、先生は、その中の安房の部に増訂を加へられたものである。併し増訂といつても字句などの増補訂正ではなく、自分の考證を加へられたものである。故に獨立の一書と見てもよい。此の書の原本は堀江家にも遺つてゐないので大正三年刊の『房總叢書』第二輯から轉載した。

鳥山 確齋篇

【著者小傳】 鳥山確齋先生名は正清、字は子幹、通稱新三郎、確齋又は義所と號せられた。文政二年二月二日朝夷郡大川村(今安房郡七浦村大川)の宇山孫兵衛正實の二男として生れ、七歳から同村大聖院住職法印盛侃について學ばれ、二十歳の頃江戸に出て東條一堂の門に入り儒學を修め、弘化三年二十八歳の頃から教授を始められた。嘉永二年頃には、芝増上寺の學寮に寓居し、要門流の兵家加藤環龜齋について兵學を修められ、嘉永三年三月印可皆傳を受けられた。そこで京橋桶町に塾を開き蒼龍軒と號して兵學を教授せられた。然るに一般の入門者は少くして、多くは尊王憂國の志士の宿所となり梁山泊の名を以て稱せらるゝに至つた。その志士の中でも吉田松陰、江幡五郎(那珂通高)、宮部鼎藏、來原良藏、桂小五郎、櫻尾藏等は最も親交の人達であつた。嘉永六年米艦渡來し開港攘夷の論朝野に轟々たるに及び、『和戰論』『軍制改革考』等を草して幕府要路の人に獻策せられた。此の間に於て吉田松陰とは、特に肝膽相照し、松陰外遊の機密にも與り知られたので、安政元年三月松陰外遊の壯舉があらはれると、先生も連累者として罪を蒙り主家溝口家に預けられ蟄居を命ぜられた。併しそれは一ヶ月で赦されて、爾來溝口家に在つて家士に兵學を教へられたが安政三年七月二十九日に享年三十八歳で歿せられた。墓は駒込の吉祥寺にある。明治四十五年二月二十六日從五位を贈られた。著述は『鳥山家系』一卷、『鳥山家譜考』一卷、『軍制改革考未定稿』、『和戰論』、『國喪議』一卷、『房海私策』二卷、『桑梓兵賦』二卷、『節制略』二卷、『慎終錄』、『安房志』、『同宗氏族關係抄』二卷等であるが、今遺つてゐるものは『鳥山家系』、『鳥山家譜考』、『軍制改革考』、『和戰論』だけである。

本全集には、『鳥山家系』を除き、其の他を全部収載した。

鳥山家譜考 未定稿

一卷

未刊

之は安政二年九月先生の母堂が逝去せられた後、その喪中に執筆せられたものである。その頃先生は既に不治の病に罹られ且短時日の間に書かれたので、未定稿のまゝにして、其翌年逝去せられたのである。しかも今鳥山家所藏の稿本は、原本ではなく何人かの謄寫せられたもので、粗寫本であるから、編者は嚴に校訂を加へたつもりであるけれど、なほ不完全のものであることをお斷りして置く。

確齋遺稿雜纂

一卷

之は先生の著述の中で短篇のもの及び文章書翰等の類を、編者が集めて一卷として假に右の如く題したものであつて、その内容は左の如くである。

『軍制改革考未定稿』 之は閣老阿部伊勢守に上書せられたものらしく思はれる。

『和戰論大要』 之れまた同閣老に上書せられたものである。趣旨は攘夷の論である。

『壬子紀行』 之は今原本が遺つてゐないから、先年半井吹城の編述せられた『義所鳥山先生傳』の中に引用せられてゐるものを集めて、編者が假にかく題名を附したのである。壬子は嘉永五年であつて、此年先生は、上野國に遊び房州に歸省し鎌倉を経て江戸に歸られた。その紀行である。その他は遺文書翰の類である。

山口 杉庵篇

【著者小傳】 山口杉庵先生名は志道、通稱利右衛門、杉庵はその號である。明和二年長狹郡寺門村(今安房郡吉尾村寺門)安房先賢遺著全集解題



に生れ、先代利右衛門福敬の長子である。先生の學歴は全く不明であるが、漢詩、和歌、狂詩、狂歌、俳句等に長じ且繪畫彫刻にまで長ぜられてゐた。壯歳の頃は、狂歌を好まれ、江戸の狂歌師算木有政(荷田訓之)大昇堂岡住等と親交があつた。又國文國歌を嗜み殊に語法の研究に心を注がれ、五十一歳の時荷田訓之から五十連音に關する稻荷社の古傳を受けられてから、いよ／＼専門的研究に入り、江戸に出て益々研究せられ、文政の末に至り所謂神代學を大成せられた。かくて天保元年六十六歳の時に京都に上られ、播紳を始め大阪伊勢等の各地に、その學を講ぜられた。天保五年には、小倉百首を細字で富士山の形に書かれたものが、畏くも、光格上皇の勅覽に達し院中の紅梅一枝を賜はつた。かくて其の學益々京畿其他までも喧傳せらるゝに至つたが、天保十三年七月十一日京都に於て歿した。行年七十八。墓は今吉尾村寺門にある。著述は頗る多く『水穂傳』七卷、『火水與傳』一卷、『百首正解』三卷、『祝詞正解』一卷、『夢の浮橋』一卷、『安房日記』一卷、『伊勢參宮西國巡拜道中記』一卷、『神風伯』一卷、『安房勝景圖繪』四卷、『萬葉集言撰』二十卷、『古今集言撰』十卷、『旅寐の夢』等がある。併し今遺つてゐるものは、本全集に收載したゞけである。(但火水與傳だけは省いた)

### 安房日記

一卷

大正元年刊

之は江戸から郷里に歸省せられた時の紀行である。年代は判然しないが、編者は文政六年正月のものと推定する。原本が見當らぬから、大正元年安川文時氏の編纂出版せられた『杉庵志道遺稿』の中から取つて本集に收めた。

### 夢の浮橋

一卷

未刊

之は天保元年の上京から逝去の前年までの和歌を集められたものである。その歌には、相當に詳しい前書があるので、よく先生の行動を知ることが出来る。故に傳記の資料としても貴重なものである。自筆の原本は、板下の草稿であつて、館山藩の家老小倉輔山に贈られたもので、今安房郡豊房村の安西隆朝氏の所藏である。

### 伊勢參宮西國巡拜道中記

一卷

未刊

之は寛政十二年五月二十八日郷里發足、伊勢神宮に參拜して、それから西國三十三所を巡拜せられた時の道中記である。宿驛、渡船、旅舎、賃錢等まで明細に記され、巧妙なる見取圖まで添へられてゐる。原本は出版の心構で書かれた自筆のもので、今安房郡富崎村布良の神田辰太郎氏の所藏である。本全集には、經費の都合で其の中の詩歌のみを抄出して『道中記抄』として收めた。

### 杉庵歌文拾遺

之は編者の集めたものであるが、主に安川文時氏の『杉庵志道遺稿』の中から抄出したものである。

### 百首正解

三卷

天保九年刊

之は小倉百首の解釋であるが、通説に見えない卓抜な説が多い。殊に田子の浦の詠を房州の田子の浦であると主張せられたことは、注意すべきことで、それから「田子の浦人」の號を貴紳から賜はつたほどである。序の歌は從二位高松公祐卿の書かれたものである。なほ書中には、房州海岸から富士山を眺めた景色を、先生の自筆で寫された圖を、六枚半に亘つて掲げられてゐるが、本全集には、印刷の都合で省略した。

### 水穂傳

七卷

天保五年刊

之は先生の主著であつて、所謂神代學を詳説せられたものである。序文は日野前大納言資愛卿及び白川神祇伯雅壽王の撰、跋は正四位下秦親典の撰である。本全集には、全部七卷を收載すべきであるが、經費の都合で、最も主要なる卷一卷二の二卷だけを收載することにした。之は甚だ遺憾千萬であるが併し神代學の大意は此の二卷だけを見



れば會得せられることと思ふ。他の五卷は、その應用注釋ともいふべきものである。

『火水與傳』一卷は、自筆の原本があり且主要のものであるから、本全集に入れるつもりであつたが、その内容は『水穂傳』の第一卷と大差のないものであるから、經費の都合で割愛した。

神風伯かみかぜのいさ

一卷

未刊

之は健康長壽の秘法として門人や知友に傳授せられたものである。こゝに收めたのは、先生自筆のもので館山北條町吉田敬三氏所藏のものである。

石井三朶花篇



三 朶 花 詩 文 集

三 朶 花 詩 文 集

甲子 新館迎新春 得識字

(貞享元年甲子)

華木回春山有色 庭上迎影月自馥 舊館扁額雖新遷 新園黃麗是舊識

庭菊

霜後夢々秋色衰 風流猶自屬東籬 閑庭黃菊無人見 獨嗅清香吟古詩

如意

堅若鑿兮潔似瑤 瀟然骨格俗埃除 指揮筆翰和詩賦 又令三軍力有餘

彰考館白櫻

奉和 洗天雨始收 香雪映明眸 遮莫花開落 廟堂青實求

又

石井收女 名古今字明德號桐花局今茲十歲也

風裏亂無收 白櫻照兩眸 瓊瑤吾甚愛 外事不須求

又

坐月意漸收 清輝爽寸眸 愛櫻任口詠 終夜他無求

春水

石井 收 (以下同)

石井三朶花篇

日にそひて落ちそふ谷の雪水にふけゆく春のほとそ知らるゝくみてしる君かめくみの深みとり水にも春の色はみせける

上某人啓 斯文蚤成。欲繕修而獻之某人。某人既轉任而不居舊職。故唯書某人。不著姓名。嗚呼。

某聞。葵藿在陰。知所向。竊傾伏。驚駭放遠。顧故軒。以長鳴。何則內有所感。外必激發。某以無用之樸樾。幸當喬雲之壽。茲不秀之稗稊。深蒙湛露之惠。近假吹噓之力。微毛忽翔。故山。既何噴咳之珠。舊華倏生榮耀。恩渥山積。感緒絲棼。某出身以來。冀願。蓋為實說心。而後假雌黃。乃作文。常恨情隘習成。更乏吞炭之義。匏瓜徒繫焉。有結草之忠。挺身獻款。抗志感激。嗚乎文木爰悴。何謝萬分。辨河謾酒。唯增數黷。伏以。某人妍思妙發。夙吐靈芬。生具勝襟。卒號明達。虹蜺其氣。聲蜚萬丈之光。山岳即心。名重三都之價。茂材幽傑。清德鎮浮。綉旨星稠。縷言霧密。嶺句則煙霞並韻。譚兵乃雪霜同調。意緒蘊榮。漱五經之芳潤。神機狗美。塞七書之英莖。塵尾衍言。秋陽以暴。簪頭李筆。春華以絢。倚鞍賦。成雲飛。旌旗之下。橫梨吟。就玉散介胃之前。掩孫吳而霞褰。罩朱張以嶽立。是以夙膺靈寵。入敦穆乎綉幃。卒占妙簡。出綢繆於史館。發麗文藻。光直支墀。抽英思華。芳薰青縹。子駿難窺其境。士龍莫際其瀾。卒新一都之榮。既縱七步之譽。故再蒙溶拔。重陞崇階。品藻乃文。



評論庶彥。入即翻。載於景命。出亦光。讚于微猷。暢以炳然之風。開以郁乎之化。英風日張。雄威時漲。仰光耀一人。照其末輝。汲流波者。潤其餘澤。若夫論談數理。窟窟無敢當說。玉潤水清。玠廣爲之讓。權衡乎蘭薰雪白。錙銖乎龍翰鳳雛。可謂七曜珠華。五雲玉葉也。某遭家之不造。越落魄于民間。絲身之無聊。卒憔悴於田野。支離維抱。擁腫惟長。鄰燭難求。遠游無歧。故瓊尾成乎溝內。細塵生於甌中。弓矢僅雖存。耒耜漸遼業。門素日就荒。箕裘無由。灌畦鬻蔬。纔供養親之膳。投竿垂餌。少爲首孤之資。常冀子雲之淡貧。僅慰淵明之詩文。然德非孤竹。學首陽而不成。身同介山。委手足以爲什。豈圖高下之驚。擊短翮於雲霄。汚底之鯁。奮纖鱗於洋海。於是陸沈之羽。忽與飛雁共行。繪餘之鱗。終與游魚同隊。誠千載之奇遇。一時之錦榮。况又告休古鄉。年々重葺臚味。凝思雲霧。日日極琴酒盤。特今何殊。恩而放歸。懷異寵以赴。翻乎如秋。帶隨風波共流。露焉若春霞。拽孤旆。遂往。入門抱稚子。登堂問桑麻。卒去精衛填海之勞。竊就知章泛湖之逸。若乃棹船月夜。恨辟地無可訪之人。含毫荒園。愧貧家無樂天之句。雖然心因境而更轉。思所轉而自幽。且開放却乎情。茂美茂醜。認得乎性。無樂無憂。故擬神於恬淡。寄思乎水露。是以暖日行吟隣里。離落疑願。梅人。夕陽強叩禪扉。春院

爲哭。花客。家臨碧海。簷接綠林。酒釀茗薰。謝屐每賦山上。深燈夜雨。杜吟時出蓬頭。顧夫削壁側巖。雖有永之雅。探奇闢異。恨無子厚之文。唯撫裏園之孤松。興責子之慨嘆。顧古城居北里見兵部之古城在之春草。想感時之風流。曩時折腰吏前。驟壯標柱之志。今日頤神歸賦。既醜。嚙臂之行。卒夸買臣之妻。私報蘇秦之嫂。此蓋伏遇某人。惠和忠肅。標峻龍門。風朗氣嚴。振儀鳳穴。加以澄神機於水鏡。分妍媸於玄淵。炫妙德於冰壺。育豐確於智府。嘗降包荒之體。納非對之言。以含垢之仁。回掩庇之愛。故此最品竊辱。湛恩重念。某荒林鄙人。葦帶侗子。興頹田圃。出入煙霞。結影茅茨。混跡樵牧。爰忘羊質。動美虎彪。遇蔚豹而知慙。見羣狸者微抗。是以節越雞而遙集。抱遼豕以遠來。識彘黔。質儷蛙鼈。唯非取晒於海若。抑亦見禍於虎視。加之嵒筋甚驚。齊氣多緩。進學德而肖。輜羽。退論才而離。糞牆。愚質類乎周兄。癡夫異于濟叔。故動懷。稊田難生之患。適認鄙野獻芹之嫌。况宿直日少。負職曠之譏。休息間。多見空食之耻。親盡歸觀之養。公闕夙夜之勤。仰雖愧類於鳥鳴。俛亦致愛于吐哺。近在私室。閱史而嘆山河。間上故墟。撫時以傷日月。望筑波之日。顧館山館山見古城之煙。葵心愈屬。愛輝枯腸。頻興感慨。於乎紫臺雲鎖。回首難堪。碧海波沈。凝眸空慘。居夫江湖之遠。何無古人之

情。矮屋昨日倒。風。雖予孫晨。藁束破牆。今般緝綴。再

修陶潛蕪園。松菊雖就荒。三徑還依舊。於是自適容膝之易。或審庇床之分。妻子仰而喜成。燕雀來而呈賀。竊思。某雖被冬日之愛。而得寒鄉之回暖。未盡秋霜之烈。而答國都之隆恩。退而顧之。五技才窮。別亡雀環可報九天。聞遠亦乏鶴鳴之分。不如下。鼓吹鉛槧。稱贊明時風教。砥礪牙齒。揄揚交游微休。是以進序文。言退事。鑽仰。非敢望活水於筆海。抑寓以竭思於文江。仰冀。某人洪開山藪含弘之量。收夫蟠木。重降大匠不擇之手。容其枝柯。使之下。核於談叢。裁發。類于文圃。恩同。陽春之煦。惠崎。雨露之濡。景仰無。敷宣何究。

春日遊水戶相公名園。綴一章奉呈左右 (貞享二年)

花下酌 楚辭體

後樂園兮景狀多。風景霽々兮物自和。惠鷗扇兮花飛颺。恩露瀼兮櫻有香。雲變體兮花含情。遊芳園兮弄新晴。飛羽觴兮賦絲櫻。滿座起兮奏頌聲。上下喜兮歡洽成。日午設宴兮至三更。和久保台丈遊後樂園高韻

語帶烟霞句自新。高標下見水雲因。月華紅葉兩奇夕。招得風流此等人。又  
山下雲收宿雨晴。清流濯足倚藤棚。青波紅葉龍田錦。染出歌林柿本情

石井三朵花篇

恭奉和尊韻詩并引

(貞享三年)

上公一日宴于史館。且賦一絕以示群下。群下皆庚韻。上唱下和。至再及三。煥爛之文。芳郁之章。咸一時之盛觀也。僕素乏詩才。故退嘆不能。上公辱命。僕賦之和歌。僕既醅酌。丁此之時。無奈何之。雖然恩命之辱。譬久病之人。神藥新入。口。舊痼。此の下。脫字。如。快然拜賜。於是賦和歌一首。稽首再拜。以轉呈之。醒來而後覺。悟前事。憐若大夢。心神迷亂。不知所爲。恐懼憂嘆之餘。竊奉和玉韻。伏呈之先生。仰冀先生。推下情懇篤之誠。得同僚芳韻之下。僅掛賤名者。先生之賜也。

其詩一

實學貴正中 經筵興教風 筆誅千載下 待看汗青功

其 二

千載騷壇中 仰看大雅風 新詩存古意 古樣見新功

其 三

盃盤雜選中 數酌醉恩風 醅酌雖堪笑 幸償筆墨功

奉假尊韻兼賦竹

折節雪霜中 長陰和暖風 朝陽兼夜雨 葉上看天功

奉假尊韻兼賦鶯

清夢一場中 黃鸝轉暖風 從教妨午睡 宥恕報春功

三



奉假尊韻兼言志

身居翰苑中 意慕武林風 十載對書案 可羞無寸功

得館字

詩酒開宴湧文瀾 高吟咳唾布瓊々 櫻花潤色筆頭花 爛漫複郁映岡館

不將富貴傲群芳 巧吐文章占麗光 玉蕊珠苞總無類 香風遙仰百花王

としの緒の ながきためにしに ひくいとの さくらがもとに  
まどゐして くむさかづきの かげうかぶ ながれのすゑ  
の われらまで もれぬめぐみの 春雨に うるほふ袖の  
ひちかさて はるかにをちを 見わたせば 雲かあらぬか  
しら雪の ふりにしあとを おもひ出て くれり出せる か  
らやまと そのもろ人の この葉に めもあやをなす 青  
柳の いとくりかへし かへしても けふのながめぞ おも  
しろき いでやおもへば いはし水 清きながれの すゑと  
ほく はるかにてらす 天津そら くもらぬ御代の しるし  
もて 谷のうもれ木 色に出て 又春にあふ こともやと  
花さかぬ身も たのみある けふのめぐみに あふひ草 か  
けてぞたのむ かも川の すむもにぐるも 底もなく たゞ  
すの神に たゞさなむ めぐる盃 敷そひて 酔をすゝむと  
いひはやす その春風の 吹みだす 霞のとばり かゝげ  
あけて 名のる鶯 聲きけば はや春の日も 紅に にほふ

山邊の 花の枝も をちこちゆかぬ 木のもとに 君がちと  
せを よばふこゑのみ

鵲巢亭七言古風

維亭鵲巢構鵲岡 位置高燥宜遠望 山分東西風樹隕 地接村落炊烟長  
側聞喜鵲巢山中 茲禽有靈人為祥 疆々風質六翮具 知歲占風善行藏  
茗華為食露為飲 會駕天孫渡銀潢 茲禽佛法自有緣 芻尼傳名貝葉香  
如來昔日在雪山 來巢頂上伴禪牀 主盟又是如來徒 能為迷衆繼遺芳

けふばかり風もよきてよ櫻花春の名残も日數なければ

奉謝常山君賜佛手柑。五言排律二十句示與山立庵丈人

(元祿元年)

編者曰、こゝに五言排律二十句とあれど、之は五言排律にあら  
ず。恐らくは誤なるべし。彰考館所藏の史館先賢真蹟には、三  
朶花の自筆にて、「佛手柑、用元善韻」と題せり、五言排律云々  
とは記せず元善は大串元善なり、之を正しとせんか。  
紫磨一指稱獨尊 三十二相號金仙 方便示寂沙羅下 假緣既  
歸兜率天 護念猶更思末法 尙留一手救沈湮 東方世界藥師  
佛 遙受遺詔取妙痊 酒飲湯送各有法 自此衆病多乎蠲 佛  
法由來說東漸 宜也斯柑日東傳 仄聞此物出讚州 讚州密宗  
滿陌阡 學得大日金剛印 十爪合掌兩部全 身口意業三密壇  
應化分身未開蓮 孰識一實圓頓味 生三摩耶蘇悉田 遊戲

三昧喻伽場 笑命文士賦嬋娟 文士博洽通儒佛 暫時積成金花  
花棧 昔年陸續遇名橘 童心雅思北堂邊 况微臣之逼老境  
分居方知十餘年 荒宣孤松非不思 只為奇觀忘漁船 三取佛  
手三歎息 編辟竊羞陸州賢

春有仁德

(元祿元年)

生々不息乾元德 和氣流行品物亨 先遣黃鸝播號令 繼教布  
穀促農耕 烟霞浩蕩仰無外 草木文章因至明 憶得傍花隨柳  
客 日長山靜寄高情

得源順

源氏白旗雪風迅 酒旆闌色如平陣 詩人講解藏筆鋒 騷壇主  
盟事和順

春日會梅花下

天厭明潔蒙汚黷 更令高標在山谷 可憐一生守幽獨 歲寒知  
已唯松竹 由來此物霜下傑 菊花冒名浪僭竊 任他膝六下白  
雪 更喜微風送香秘 潔若純綿裏玉璧 芳似腦麝薰羅帕 不  
須桃李論品格 獨步春場天下白

海邊月

(元祿三年)

欲看高雄楓葉秋 遠携瓶錫入皇州 江城風景人相問 為道隅  
田釣月舟

奉賀西山新居書

(元祿四年)

邑名勝母。會氏爲之回車。蓋諱其名也。井名盜泉。孔子忍渴而過。蓋惡其名也。甘棠不翦不伐。蓋愛其爰。

也。文公不入于木閭。蓋敬其人。也。西山者。夷齊所隱。疆壤雖異。名號是同。我公適退休于茲。蓋夫偶然也。夫以。伯夷叔齊者。古之聖人。孟子以清稱之。固百世之師也。行著子長特筆。德見孔子正經。以讓而去。求仁得仁。我公之讓退。似耶非耶。子長異怨于逸詩。以臣見之。夷齊必不怨。孔子曰伯夷叔齊不念舊惡。怨是用希也。與夫功名之人。毫有所礙。則憤焉激然。釐有不滿。則咨嗟怨望者。天壤懸隔。趨舍大異。若伯夷者。窮天地。亘萬世而不願者也。我公飽擅西山之美。曾不羞夷齊。以優遊自得。恬憺無事。義讓猶爲不足。退休得遂志也。古所謂達則兼善而不渝。窮則自得而無悶者乎。魯論曰不知而不愠。周易曰遯世無悶。於我公見之。我公懸車維閉是耽。平昔近習。猶不許調。况士大夫幣問。一皆罷謝。至朝家之事。藩廷之政。曾以無聆。唯西山之月照襟。思李白。西山之泉濯纓。笑屈平。西山之雲出岫。感淵明。於我公之風。山高水長。我公之行。月白風清。我公之德。雨行雲施。以此文之。則結爲泰山喬嶽。流作長江大河。爛然與日星。同其耀。冲乎與陽春。共其和。以此上與朝廷之皇風。以彼下獎蒼生之教學。加之易嗣而唱大義。止殉而明大道。好禮下士。興廢從古。嘆澆俗之頹廢。慕淳素之正風。是以海內文士。交口稱讚。天下英雄。望風仰止。開闢已降。身在將家。兼能文事。如我公。幾許有



哉。夫以天下之事。唯文與武。孔子曰。有文事必有武備。因此觀之。我公之雄武。有必可觀。然天下升平。四海無事。無所用此。則退修文事。是以編集講習。著述考訂。天下奇書。無不脛而至。我公文章無不翹而飛。懿哉文之爲用。河圖洛書。人文既明。述爲天下大器。施謂經國大業。歷代聖王。用此治天下。於堯乃曰欽明文思。於舜乃曰濬哲文明。大禹文命敷于四海。湯武偃武修文。天相斯文。興廢與之。於睿詰俊傑。立爲君。立爲師。爲君也難。爲師不易。自非稟賦明敏。間出英才。未易當此。是故吐辭。人以爲經。舉世以爲法。嗚呼我公之於初。行足以爲法。我公之於終。文足以成教。是天然良質。雖自令然。又由道學。所依涵養切磋之功。不然何以回曹子建之筆。爲司馬遷之事。潘養切磋之功。不蕭昭明之手。其文其詩。一灑再瀉。長川萬里。流星一天。雲興濤湧。鸞翔鳳翥。顧夫山壑純粹。呈精神於我公。垂則于后昆者乎。不爾我公鍾河海靈妙。輝德于當時者乎。我公獨欲行天道。功成身退。名遂簪投。於人爲難。於公爲易。而今西山爲地。山高土沃。泉甘水清。其高沃。探可喰。其甘清。掬可洗耳。三公換哉。江山之趣。千歲親得子陵之賢。我公必言。天下之至樂。終日在山間。

戶塚即事 分竹籬茅舍  
詩人屋爲韻

(元祿七年)

郊野渺々接園圍 境靜檐下白雲宿 幾重青岡橫梅窓 一帶綠水遶竹屋  
浦千鳥 (元祿七年)  
浦風にだけ物やおもふらん岩うつ波に千鳥なくなり  
旅館名月  
こよひしも名高き月にさそはれて旅ねの枕夢もむすばず  
閑居懷舊  
むかしおもふ草の枕にとづれてさびしく過ぐる軒の松風  
中秋陪宴彰考館。看月。分曹松中秋對月詩爲韻。  
得直字 (元祿七年)  
水天萬里共一色 赤壁風致今方得 今宵須觀端正月 從他世上曲與直  
奉和 (元祿七年)  
史館書生催宴。請菊童賴慶。予亦陪席。聊綴俚言申謝。  
文雅風流蘇老偕 霞章煙筆送生涯 長江萬里蒼波遠 料識詞源滾々來  
霜楓九月未全勻 溝水蘸紅驚細鱗 宮怨寫情題葉去 人間流落到何人  
贈某書 (元祿八年)  
足下懷吳鈞。久斷刺之利。未一見試。荏苒涉歲。千載

望氣。爲之開函。於是龍泉大河。燁然出鞘。伏希。他日成神龍。增振鱗鬣。逾獅冲霄。惟祈惟祈。予聞足下榮遷。喜謂天下蒼生之幸也。匪言言足下。兼論某君。何者文武者。如左右手。不可偏廢焉。獨本朝以武爲先。故輕薄少年。動貴武鄙文。雖然往古詔奏。勅章。教令。表啓。疏議。書牋。上下皆以文章而通。稍泊末代。斯道雖陵夷。猶未至盡廢。甲士武夫。讀書綴文者。往往不以爲少。及戰國之時。天下乖歎。州郡紐解。各邦虎賁。姦雄狼鬪。人以攻伐爲貴。世以文章爲迂。聖經賢傳。流蕩爲浮屠之有。道德仁義。破壞而以陷塗炭。茲日光東照宮。神明以降世。靈威以振人。夷凶翦亂。號曰大平。於是文憲浸興。典籍復古。巖窟之儒。草莽之士。崛起而帶緡紳。挺出以拖長裾。相與維持此道。相謀裨補此術。雖然鼎貴高門。雄威毅武之人。未聞以斯文能顯者。寡君西山。自幼志學。及長游道。天下士大夫。靡然仰之。宗之。有二經品題。人僉爲上龍門。今聽某君。以聰明質。志大中學。夫如斯。此道之興。可翹跂矣。是廼匪天下蒼生之幸也。足下嘗潛心於性理之學。沈思于濂閩之流。道根藝華。超凡出羣。今也幸仕某君。至祝。唯所恨者。足下稱好性理之學。廢詩賦文章之業。是故授弟子。不以詩文。予不肖。竊以惑焉。夫以文者。貫道之器也。是以古人論之曰。離文無道。離道無文。夫文不明。則

道奚由講。道不正。則文奚由述。予謂。道俟文著。文緣道生。方今言性理之學者。棄詩文。捨博學。且罵詈曰。著述有害于道。博學有妨于工夫。我有可爲之才。吾自忍不爲。吁迂也哉。吁迂也哉。彼所讀者何耶。非古著述者流之書耶。四書六經又此文章也。棄本取末。斯猶欲斷流遡源。博學者君子所崇。不博讀群書。奚知古今治亂之由。忠臣孝子之分。惟區々于一經一章。欲求道德仁義之說。何從得之。子思曰。幽處深思。不若學之速。跋而望。不若登高之博見。斯謂工夫之害。贊博學之益。今足下以英髦之質。仕賢明之君。豈無意于經濟。苟欲經濟焉。捨文章博學。今也聞足下榮遷。不堪雀躍。聊忘固陋。敢獻芹誠。狂斐踰僭。無地遁罪。謹言。  
奉賀相公四十英算 (元祿八年)  
純忠至孝夙成名 不惑臨朝封內清 筑嶺影高東海標 惠陰逐日更繁榮  
岩舟觀瓶花記  
古曰易俗移風。故君子所居。夷以變華。仁人所處。野以成都。孔子曰君子居之。何陋之有。常州者。東海之一僻地。俗野風鄙。大君藩于茲若干年。俗既革。風漸變。人向化。戶歸德。今茲元祿八年乙亥七月。大君偶遊岩舟。幕下諸士。獻瓶花于惠明院中。以慰大君閑居之寂。臣收新來於江府。被命往觀。凡瓶數四十有餘箇。闢奇競麗。或



形山水之勝。或爲鳥嶼之趣。或設松竹之奇。或作巖石之怪。座上忽回三春。瓶裏劇見九秋。實一時之壯觀也。因思之。居之移人。人之向化。大君好德。人亦好德。大君好義。人亦好義。大君好詩歌。人亦好詩歌。德義者。事之大而不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>一二詳悉。其事繁冗而匪<sub>レ</sub>今之所<sub>レ</sub>論。至其詩與<sub>レ</sub>歌。臣收素所<sub>レ</sub>與知<sub>レ</sub>也。甲戌年兩君在<sub>レ</sub>江水二府。八月望日。共開<sub>レ</sub>詩歌之宴。獻<sub>レ</sub>詩歌者。凡若干人。人以爲<sub>レ</sub>盛事。今也獻<sub>レ</sub>瓶花者。既四十人。又以不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>少矣。論者曰。惜哉併<sub>レ</sub>合江府之人。復以加<sub>レ</sub>瓶數。臣收嘗謂。常州文武之邦也。武者士人之尋常而不足<sub>レ</sub>舉<sub>レ</sub>稱之。文者大君之所<sub>レ</sub>專攻。而新以向<sub>レ</sub>化。至<sub>レ</sub>風流左道之事。臣收所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>嘗思<sub>レ</sub>也。今及<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>此盛事。感慨生<sub>レ</sub>于斯。伏願大君保護珍重。增添<sub>レ</sub>福壽。則華益爲<sub>レ</sub>大華。都逾成<sub>レ</sub>大都。謹記。

夜宿江畔寺。探樹密當山徑。江深隔寺門句。爲韻。得當字

山晴氣清涼 樹密寂禪房 相携上山堂 景況興自長 綠苔命酒觴 騷客探詩腸 韻逸句調良 吟成是非忘 月陞好風光 山庭樹々當 唯有紫花芳 幽趣不尋常

慈緣師のもとより菊の花たてまつりしにうたをそへられし返し

菊 たてまつること葉の花にてりそひて色もことなるやどの白

海邊九月十三夜 時在磯原

年々吟賞十三天 清影今宵最不全 東嶺愛觀東海月 桂華映水自明鮮

松

蒼髯峻嶒氣突天 煙籠翠蓋綠條鮮 寵臨今日增顏色 世上幢々塵自燭

遊山寺 分因過竹院逢僧話 又得浮生半日閑句 爲韻 得又字

滿山紅楓裝錦繡 推敲吟哦到三漏 醇酒三爵猶醉眠 數行大盡敢多又 詩三偈不識別敢多又

三月既望 三月十六日 賜宴後樂園賞花同賦即興

(元祿九年)

やま／＼の 木々の木ずゑも はるくれば 惠の雨に うるほひて はるかにゑみの まゆひらけ 君がためにと さくらさく 木の下影に まどひして 花のもとにて くむ酒に 酔をすゝむる うぐひすの こゑのあやおる 錦ぞともろこし人も いひはやす やよひなかばの 春の空 くもらぬ御代の しるしとて 月日のかげも うら／＼かに 照らす光に み雪とけ おとなし川の おとたてゝ 千代にやちよを さざれいしの 岩ほとなりて こけのむす 松に契りて ひな鶴の 生ひたちしるき 池水に すむなる龜の 萬代を いはふよもぎの 島に生ふる おいすしなすの みくすりを 君にすゝめむ ときは木の かげにすむなる 山鳥の

石井三菜花篇

八月十五夜在鷺子松山。關松山田舍名月六字。爲韻。得松字

秋露團々興味濃 田翁芋栗子孫供 月光今夕尋常異 立盡茅庭望嶺松

八月廿一日下野州馬頭村夜會。雁爲字

離家萬里一身輕 到處江山水草清 字々成行煙雨裡 何人讀得解鄉情

金澤道場賞秋 八月廿七日

寺門苔深晚涼生 金澤道場風日清 色卽是空秋山水 唯身淨土已心成

和飯村氏韻

同俱諸子侍山堂 月上草頭揚露光 因病今來廢平側 苦險終夕不成章

停車坐愛楓林晚

蕭瑟清風林半空 夕陽葉翻舞紅風 吟筇日々醉山裏 勝景停車愛錦楓

山家秋雨 分有雨有風人行之句。得有字 九月八日

山家寥々雨打牖 主客相倚談空有 遠檐滴聲々益清 流入前川更澗々

旅中重陽

秋雨滿城物就荒 旅窓蕭索氣淒涼 風流不滅孟嘉古 醉插菊花欲作裝

おのがうれひも わすれはて 花をかざしに まひあそぶ そのいにしへの よろこびを 今のためしに 引きつべし いでやおもへば はたちあまり 二とせまでに 見し花の色かもふかき めぐみとは しづえにむすぶ 白露の玉ならぬ身も おもひとりて 澤邊のほたる まどの雪 かすみにわたる かりがねの つばさにかけし 文をまなび 心のやみも はれやかに あきしげき夜の 月見むと 願ひのいのの くり返し くりかへしても 我君の 惠のかけぞ たのもしき みどりの櫻 手折りつゝ かざす日かげに 花ちりて おのが袂も ひきかへて けふはにしきを きてかへるかな

おなじ日旌櫻寺の花を見て

おくれしとおもふいのちは先立てとゝむなみだぞまづすゝみぬる (薤露遺響)

宇都宮公綱 從姪泰藤 (大日本史卷一百七十七) 列傳第一百四の内

宇都宮公綱。初名高綱。稱彌三郎。下野人也。宇都宮系圖。彌三郎。據其先出關白道兼。道兼四世孫僧宗圓爲宇都宮座



首。子孫因氏焉。宗圓生宗綱。稱座主三郎。為下野守。宗綱生朝綱。稱彌三郎。為左衛門尉。襲宇都宮檢校。鳥羽後白河朝為武者所。補北面。及源賴朝起兵。伊豆。擊平宗盛等。東國盡屬焉。宗盛以朝綱崑山重能等家。亦悉在其下。因拘留不遣。及戰敗出奔。欲殺朝綱等。賴平貞能之言。得免而還。賴朝授伊賀壬生野鄉地頭職。文治中朝綱與孫業綱。從賴朝討藤原泰衡于陸奥。有功。尋削髮更稱尾羽入道。建久中以掠下野公田。為國司行房。所劾奏。廷論處朝綱于遠謫。及孫賴朝朝業。賴朝深以為歎。朝綱生成綱。為左衛門尉。成綱生賴綱。賴綱亦稱彌三郎。子孫因襲稱焉。賴綱為下野守宇都宮檢校。善和歌。元久二年鎌倉流言。賴綱圖不軌。北條義時欲遣兵擊之。賴綱懼。難髮抵鎌倉。就結城朝光。獻所刺髻。因而得釋。賴綱生泰綱。為掃部介。襲宇都宮檢校。泰綱生景綱。為下野守。景綱生貞綱。下野守宇都宮檢校。弘安中蒙古寇于西邊。北條時宗使貞綱將兵禦之。比至已平。因修繕邊備而還。貞綱生公綱。歷備前權守。兵部少輔。任治部大輔。系以驍武。聞。元弘二年北條高時以京師兵少。遣公綱助守六波羅。會楠正成出兵四天王寺。擬復京師。北條仲時。北條時益。使隅田通治。高橋宗康。將兵五千。往戰于渡邊。大見敗。仲時謂公綱曰。勝敗兵家之常。雖然渡邊之

敗。實由謀拙兵怯。以取衆笑。即使此曹再發。豈復能為。嚮使仲時鎮京。重煩足下。以備緩急耳。今日是國家成敗之機。非足下則不可。公綱曰。二將已挫矣。今復以寡臨衆。未見其可也。然公綱自受命西上。思出死力。以展效。事之濟否。豈追計較。乃起而直出。見騎僅十餘。比過東寺。手下兵追至者七百。遇馬騎輒奪之疾馳。翌日至四天王寺。火傍民舍以進。楠正成避其銳。夜拔營而去。公綱馳騎報捷六波羅。仲時大喜。公綱以兵寡難前。又恥不見敵而還。因留陣寺內。既而正成夜列炬四山。漸而相逼。公綱嚴兵而俟。如斯數夜。敵終不至。士衆頗怠。各生退思。或諫公綱曰。以寡敵衆。固非良計。嚮敵幸為我退。是足以藉口。請全軍而還。公綱從之。即旋。明年北條高時遣大佛高直。將兵攻楠正成于千劔。久而不效。公綱復受北條仲時指揮。將手兵千餘騎。往攻淡旬。破柵薄城。更使士卒前者戰。後者鑿山。三日傾倒樓櫓。餘軍效之。晨夜剝掘不已。未幾王師復京。北條仲時北條時益伏誅。公綱與大佛高直等。走于奈良。楠正成左近衛中將源定平率兵來攻。公綱據般若寺拒之。相持數日。會賜書招諭。公綱乃以七百人出降。及足利尊氏作亂于鎌倉。公綱從新田義貞。破之鷺坂。復與千葉貞胤。從脇屋義助。戰于手越河原。有功。賊夜逃走。適公綱族人從宇都宮來會。義貞進戰于箱根。公綱復有功。尋從

義貞。禦尊氏于大渡。軍敗。與大友泰氏降于尊氏。先是公綱促發部下留宇都宮者。會鎮守府大將軍源賴家將兵入援。公綱之兵五百人從之西上。至志那濱。聞公綱屬尊氏。他道至京師。公綱併之。據神樂岡。官軍來攻勢銳。公綱請援。未至見破。遂偕尊氏西奔。道還復屬官軍。追擊尊氏于豐島河原。破之。新田義貞西征。大軍先發。公綱及賀古川。遂從攻赤松則村于白旗城。又與脇屋義助及大井田氏經。攻破船坂山。退禦尊氏于湊河。軍敗還京。扈衛延曆寺。守東坂下。與義貞擊高師重于叡山。卻之。山徒今木隆賢導納敵兵。公綱部下遇之山下。擒隆賢。悉殺餘兵。尋與諸將。攻尊氏于京師。連戰不利。及尊氏伴送款。公綱護駕至京。為尊氏所錮。削髮易服。逃還于宇都宮。延元中帝幸吉野。新田義貞起兵于越前。王師又振。公綱乃率兵五百詣行在。帝慰勞之。詔著髮。授左近衛少將。敘正四位。聽升殿。源賴家破足利義詮于利根川。駐陣武藏府。公綱提兵千餘會之。共攻破鎌倉。遂從顯家西上。與上杉憲顯戰于青野原。大敗之。及顯家軍敗。還宇都宮。又削髮。更名理運。號正眼庵。正平七年帝遣兒島高德赴關東。促新田義貞子弟復京師。公綱應之。約舉兵定東國。聞王師敗于男山。不果。十一年卒。年五十五。公綱累世守下野。以紀氏清原氏為部曲。兩氏族繁。每出戰必為羽翼。以

故兵強甲一時。目之曰紀清兩黨。公綱二子。氏綱。義綱。氏綱小字加賀壽丸。敘從五位下。為下野伊豫守。延元初公綱從源顯家。討足利義詮于鎌倉。時氏綱尚幼。紀黨芳賀禪可挾之。據宇都宮。顯家遣兵急攻三日。禪可力盡出降。未幾又以氏綱屬義詮。及顯家赴京師。禪可率清黨千騎。戰于青野原。敗。足利尊氏與直義相持薩埵山。氏綱用藥師寺元可言。發兵一千五百援尊氏。以高師直族三戶師親為將。會師親風發自殺。兵士多逃亡。餘衆大懼。元可曰。是吾宇都宮神。不使他人將兵也。衆乃推氏綱為大將。直義遣桃井直常兵七千。逆擊于利根川。氏綱力戰敗之。兵勢大振。比至薩埵山。直義敗走。後足利基氏以事削芳賀禪可越後守護。與上杉憲顯。禪可憤恚。與憲顯戰見敗。常思有報。伺其往鎌倉。謀邀擊之。基氏聞而怒。親將兵來攻。禪可遣子伊賀守高貞。按與本太平或貞綱。本書或作公賴。芳賀系。駿河守高家。本太平記。逆擊于武藏苦林野。大敗。禪可出走。基氏以為氏綱與謀。遂進兵攻之。氏綱馳詣基氏軍于小山。陳無異心。基氏意解乃還。建德元年卒。子基綱。為下野守。天授六年與小山義政戰敗死。倉大草子。系圖。時年三十一。公綱從姪泰藤。泰藤稱美濃將監。祖泰宗居下野武茂鄉。因為武茂氏。至泰藤復稱宇都宮。歷任右兵衛尉。系圖。右馬權頭。建武二。左近衛將監。尊卑。直武者所。建武二。建武初足利尊氏



作亂于鎌倉。破官軍于箱根。長驅犯京。泰藤從脇屋義助。拒敵于山崎。不利。遂與諸將俱扈蹕保延曆寺。及尊氏納款。車駕還闕。泰藤從新田義貞奉皇太子北走越前。與脇屋義助等投瓜生保之杣山城。會保屬足利高經。閉城不納。乃奔于金崎城。高經與高師泰率保及北地諸兵。來攻金崎城。亡何。保聞弟義鑑謀為義貞援。密圖逃還。時泰藤亦降在師泰下。一日與天野政貞在營。可北條新田足利三氏旗號。泰藤右新田氏。政貞然之。保竊聽聞之。因厚結二人。遂用密計。俱脫還于杣山城。師泰遣兵來攻。泰藤襲擊于湯尾驛。走之。尋與保兄弟往援金崎城。戰于敦賀津。反為所敗。保義鑑死之。脇屋義助與高經戰于鯖江。泰藤與政貞等共擊走之。太平泰藤薙髮號連常。終于參河。子孫更氏宇津。後以大久保為氏。大久保系圖。系圖曰。武茂綱家子持綱。嗣本宗。疑泰藤子孫也。今無所考。

會我祐成時致。大日本史卷二百二十九。列傳第一百四十九孝子。

會我祐成。小字一萬。弟時致。小字宮王。伊東祐親之孫也。父河津祐泰。尊卑分脈祐泰作。今從東鑑。為從祖父工藤祐經所殺。時一萬年五歲。宮王三歲。會我物語。其母抱屍哀哭。撫兩孤曰。汝等成長。能報父讎乎。一萬泣曰。兒等成長。必斬驪頭。及母再醮。會我祐信。兄弟遂為祐信所鞠。年稍長。嬉戲常以擊刺為事。一萬挽弓射屏障。宮王曰。復父讎。何用弓。自執木刀斫之。一萬嘗仰見畫雁。獻款曰。禽

磯黃瀬川三浦。屢覘祐經。祐經每出。從卒自衛。兄弟時或望見。不能下手。建久四年賴朝獵于富士野。祐經從焉。祐成時致大喜曰。天也。因定計往富士野。時致謂祐成一曰。弟獲罪於所恃。不能面訣。死而不瞑。祐成見母告別。因請召見時致。母峻拒之。祐成叩頭涕泣。具告時致憂懼之狀。母意解召見之。兄弟請賜衣。母解所著授之。戒曰。狩獵之場。士庶麇集。慎勿致忿爭。兄弟遲遲不忍去。泫然泣下。退而復進。回顧數四。母頗怪之。兄弟至箱根。見行實。行實察其志。取社中所藏寶刀授之。遂往富士野。百方狙祐經不得間。既而聞賴朝還府有日。兄弟憂之曰。時難再得。機不可失。今夜急入神野營。以殺祐經。乃陽為警夜者。過列營前。入祐經臥所。祐經已移別室。兄弟彷徨。不知所為。會山重忠家士本多親經至。素欲兄弟遂其志。指畫祐經所在而去。會我物語。是夜祐經召倡妓。與吉備津祠官王藤內宴飲。大醉酣寢。兄弟舉炬相視曰。殺醉臥人。猶斬死人。因蹈席大呼曰。祐成時致為父報讎。祐經驚覺。將執刀而起。兄弟揮刀交下。遂寸斬之。并殺王藤內。倡妓驚呼曰。會我兄弟殺父讎。時五月二十八日。雷雨闇黑。營中騷擾。平子野右馬允愛甲三郎等倉皇出鬪。兄弟殺傷十許人。力極而疲。祐成與仁田忠常接鋒。遂為所殺。時年二十一。時致見祐成死。徑前突入將軍營。小舍人五郎丸被婦人服。俟時致過。自後抱

鳥猶有父母。使我孤者誰。宮王曰。驪之首豈堅於鐵石乎。一萬遽掩其口曰。勿妄言。因相對號泣。焦思勞心。復驪之念。未嘗一日懈。會源賴朝滅平氏。管轄天下兵馬。祐經事之被親信。以賴朝嘗怨祐親。乘間勸殺祐泰遺孤。賴朝既使梶原景季往會我論祐信。致一兒於幕府。母子泣而別。景季心憐之。見賴朝白其狀。請宥之。賴朝曰。祐親殺我兒。奪我妻。今已死矣。吾欲逞志於其孫子。如何宥之。山重忠和田義盛等營救甚至。二兒因獲放歸。母喜其免死。而切戒之。深自晦匿。一萬年十三。更名祐成。冒繼父氏。稱會我十郎。乃遣宮王為箱根山僧行實弟子。宮王腹驪之志日切。適祐經從賴朝詣箱根。宮王欲識其面。從山僧歷問將士姓名。及祐經。不覺色動。乃袖小刀密圖刺之。祐經執其手曰。子非宮王乎。容貌肖廼父。我與子至親。今日相遇。且喜且悲。宜速祝髮。專歸佛乘。因出一裝刀授之曰。表一時相見之情耳。宮王欲得間刺之。而眾人環座。又恐力不敵。終不果。宮王年十七。行實命披緇受戒。宮王憂之。竊還會我。謂祐成一曰。弟今日為僧。如仇讎何。願早束髮。以避師命。祐成然之。相與造北條時政訴衷曲。時政壯其志。即為備禮加烏帽。命名時致。稱會我五郎。母見時致大駭曰。吾使汝為僧。何遽如此。汝不母我。吾何子汝。母子之恩絕矣。勿復來見。時致嗚咽而退。自是兄弟歷遊大

持。衆共禽之。參取東鑑。會我物語。賴朝乃遣和田義盛梶原景時。檢祐經尸。翌日賴朝坐幕中。諸將環列。召見時致。使狩野宗茂新開實光。詰問所以殺祐經。時致頓首。叱二人曰。祖父入道歿後。子孫沈淪。雖不得昵近。何就汝輩對狀。願面一言而死。賴朝壯其言。親問之。時致曰。祐成時致自誓亂至今。復驪之念。無須臾忘。今日志願畢矣。犯幕府者。欲一賜調而自殺也。夫祐經我之驪。而君之寵臣也。寂心入道。君之驪。而我之祖父也。君寵吾仇而驪吾祖。能無憾乎。意氣益猛厲。聽者竦動。賴朝愛其膽氣。欲宥死。祐經子犬房丸哀訴請殺。乃斬之。時年二十。賴朝得祐成時致遺其母書。彈淚讀之。命藏之書庫。東鑑。時祐信在獵場。賴朝召而慰諭。使還鄉修二子冥福。除會我莊租。我物語。後人為立祠於富士野。緣起。祐泰少子律師為僧。犬房又請殺之。賴朝召見。至則自殺。東鑑。會我物語。祐成有妾。名虎。大磯倡也。祐成屢遊大磯。見虎而悅之。虎亦相愛。諸豪競欲通殷勤。皆不顧焉。會和田義盛來飲其家。召虎佐酒。不出。義盛怒欲罪之。其母懼促之。虎不肯曰。會我寒士也。和田豪貴也。妾豈忍以下貧富易其心乎。時祐成在虎許。義盛請祐成與虎同出飲。及酒行。終不與義盛相酬酢。引盃飲屬祐成。會我及祐成報驪闕死。賴朝召虎問狀。既而免歸。哀慕悲泣。登箱根山。請僧行實。修祐成冥福。作諷誦文悼之。以祐成所騎



馬<sub>ニ</sub>爲<sub>レ</sub>嚙。遂爲<sub>レ</sub>尼。如<sub>ニ</sub>信濃善光寺<sub>一</sub>。時年十九。東鑑 後歸<sub>ニ</sub>大磯<sub>一</sub>。住<sub>ニ</sub>高麗寺<sub>一</sub>云。曾我物語

〔水戸彰考館主管雨谷毅氏の談に曰く、大日本史中三朶花先生の起稿にかゝる部分は此の二篇に止まらざるべし。されど原稿本の中にて、明かに署名せられたるものは、今日までの發見は右の二篇のみなり。今後なほ發見することあるべしと。依てこゝに附記す。編者識〕

新井文山篇



文山詩集(未定稿)卷一

尋梅

溪村各自尋梅入 霜自添清雪亦情 枝北枝南玉三尺 林間香路判新晴

元旦對梅

臘寒封萼園清奇 凍得烟梢誤負時 忽等東君布政令 十分開遍暖邊枝

遊春

花得新暉分外香 狂蜂戲蝶趁時忙 吟行過處渾如畫 桃李家々楊柳鄉

牡丹

朝雨嫩晴曉臉寒 噉紅起蝶報平安 錦繡一疋無疆界 白牡丹籠紫牡丹

訪某家

小桃雨後弄柔晴 紅歷攤枝出錦城 水外橫門林外屋 花陰稍聽讀書聲

夜雨有感

不爲桃花染出紅 鶯簧弄舌轉東風 幾聲點滴織聯雨 報到書齋窓外桐

潮來竹枝

隨波隨浪送郎風 十二橋邊一舸通 爛醉不知畫樓近 新聲已在菰蒲中

十年苦界老年華 不似流鶯獨託花 小立梨邊口出月 滿顏香露落銀葩

生憎狂風切妬花 更教春意向花加 結如朝露清於玉 亂學曉鬢長似麻

芙蓉

開向秋庭出錦城 滿顏香媚朱唇明 紅粧非引西風妬 自約一花一日晴

扇面猿

枯木巉巖巴峽秋 一聲悲叫結清愁 不知顧視何口地 水畫銀鈎遠入眸

芙蓉

滿面秋容烘日加 墻頭無數著秋花 宿紅已謝新紅發 自送自迎本一家

秋山老松

誰人隱居弄烟霞 春自對花秋亦佳 簷有老松高百尺 半宵露鶴付居家

詩出幽圖圖引詩 兩般清致幾分奇 鱸魚可愛江堪鑒 風定紫山日落時

晴秋釣艇



晴江葦釣鱸魚艇 世上漁翁即醉翁 醉對碧灣不知晚 寒潭波  
白荻花風日作 蘆花繚亂菱花輕 閑人今作秋江畫 著我橋

尋梅

幽討淺流蘚石中 對梅小立野橋東 寒香入骨清如水 一朵聯  
珠更舞風

秋水白屋

水甘盤谷萬疇田 笑對世人稱樂天 物入吟眸無不可 一行山  
靄半潭烟

探梅

江村雪裏青藜杖 醉哦新詩醒結愁 隔水一村誰占魁 暗香添  
月照溪流

竹裏幽居

輕韻只聞戛玉聲 細香非作不平鳴 龍姿瘦盡凌霜骨 伴我十  
分吟味清

驟雨

遠傳雷吼雨聲雄 忽瀉瓊瑰車軸同 一洗乾坤去無跡 淡紅僅  
照夕陽風

松魚

二尺銀膚臙脂肉 不辭重價百千錢 世間四月誰能喫 家是權  
豪競最先

一片鱸魚當寸金 桃花簇地玉盤深 一壺新釀葡萄綠 獨却繡  
腸豁錦心

桃花溪村

夕照在山日欲昏 尋花坐遠入溪村 紅霞映水桃千樹 擬問路  
人更探源

尋花

曉鳥促吾早起行 草鞋臨土下陰晴 花時探勝多如此 雨似無  
情却有情

家庭菊開

天巧生奇霜下傑 秋庭浥露更精神 唯能詩句千鈞力 咏盡金  
葩各自新

印疊金錢

屏邊位列太精鮮 近對清輝驚欲顛 冠帶光榮莫斯盛 鷺行銀  
盛粧紅靨細金妍 已認瑤池却不僊 獨向人間脫羈絆 昂然隱  
趣隔香烟

秋山烟汀

時來將去就鱸魚 一葉梧桐正落初 嶺骨半灑水如練 江山久  
待我樵漁

十月菊

幽姿猶在孟冬天 餘烈欲驚寒蝶眠 雨後濕香一園雪 日蒸帶  
紫數行烟

驟雨

送雨濃雲如澆墨 震雷太起平不鳴 電光閃掣金龍躍 寰宇時  
開側目驚

尋隱居

尋到洞門有柳家 松醪換骨醉流霞 日蒸高樹庭披錦 不是桃  
花必杏花

送秋

敗荷瀾水菊粗明 寒蓼花叢銀鷺聲 已欲送秋愁未果 還遭催  
促我詩情

良夜月黑

一年正約今宵期 無月烟昏引興奇 認得天公有思意 蟾宮久  
待我新詩

孤村尋梅

稻花叢裏過橋馬 一道斜光田外明 看入吟眸無不可 半天秋  
色起詩情

春晴

美人招我欲交言 聲隔香烟日又昏 尋到枯蒲淺流外 東風先  
送玉梅魂

春晴

茅檐殘滴兩三聲 窗外鳥喧知雨晴 洗盡林庭花狼藉 夜來被  
雨亂詩情

小集

花落色衰復認春 嬌顏夜白柳眉新 露篔引留堤頭客 愁枕月  
寒任路人

新井文山篇

相逢詩酒短檠明 殘滴聲疎知雨晴 竹影橫斜窗外月 啼過半  
夜杜鵑聲

偶成

箇樣廢書本爲病 生平成癖長疎慵 詩情欲結眠魔促 風末僅  
傳半夜鐘

登城山

路入幽奇鹿跡繁 細泉隔谷伴啼猿 班荊相對松陰下 指道桑  
麻各々村

蘭

深探城墟入山遠 怪松古柏臥如龍 歸來試倚書樓望 綠樹萬  
重雲萬重

春曉

香飄九畹芳根紫 似訴清冤弔楚魂 蜂蝶狂飛被花誅 不知露  
浥月黃昏

遊春

蝶舞瓊鬚愁不起 枝頭清露認輕寒 翠簾不捲三竿日 窗外香  
暉夢牡丹

春夜

春入池塘草似烟 蕨芽風動奮兒拳 桃花一簇維舟岸 正是武  
陵二月天

春夜

院宇沈々地似霜 半宵素月牡丹香 空階清露人不寐 虬水聲  
咽夜漏長



范蠡

十策獻君吳沼滅 半施於越半施家 朱公巨萬不貧富 不嫌人言爲貸賒

畫鯉

金鱗鼓鬣吼龍門 直排雲烟叩帝關 銀箭走飛千壑雨 萬聲雷震震乾坤

月夜

水檻開筵仰蟾窟 中天如水彩光清 夜深露冷蛩聲切 更把酒杯對月明

放蝶

手持黃花停杖立 滿衣秋冷鯉魚風 慇懃來就雙飛蝶 誤逐芳菲落手中

和韻

蝶引韻人到陶家 傑然霜下耐相誇 新詩更有人難和 幸使吾人不負花

護花幄聯

開向翠簾媚十分 香風輕過觸紅裙 清容豈是人間物 天上月高五彩雲

秋雨

秋蛩聲濕草庭間 細送微涼解醉顏 一樣靄烟水無際 僅分相甲列秋庭

荻竹桃

芳姿笑臉特堪憐 對竹鮮深紅欲然 掩映香霞四圍彩 更添斜照媚晴天

虎

地裂天崩絕壑風 負嶠怒吼震林叢 智窮狐兔皆逃避 人世果知百獸雄

鷹

立怒金眸高四顧 傑然竦翮入雲端 須臾飄落纖々物 八月西風膽氣寒

送別

身在客中更送客 離筵花落送君飛 囑君寄意溪邊柳 他日迎風送我歸

秋夜

閣上書幃獨坐寒 金風欲動響烟灘 雁聲遠落山端月 竹影夜深半上欄

紫微

鶴頭草詔見天才 光彩十分映筆來 刻漏日長省中靜 黃昏唯有紫微開

豆斷連山

縷々輕梢帶落暉 逐香鶯鳥學校飛 東風織出千尋錦 自在裁

梨花

春夜九重虬漏聲 冷唇露滴洩幽情 廣寒宮裏三更後 高吐吐香立月明

春雨

傾聽無聲慘淡天 疎簾影暝雨纖連 鶯簧半濕桃花淚 蝶夢全纏柳絮烟

竹

半夜南園戛玉聲 老姿疎影月中明 蒼龍欲闖烟梢動 翠碧衝雲嘯太清

魚

秋潭如練菱花灣 爭餌率兒往又還 鏡面秋明波似織 金梭玉尺戲萍間

白牡丹

月照香顏鬪清艷 瑤臺露冷五更天 夢魂風妬驚危立 本自不須彩色妍

芭蕉

芭蕉昨夜戰秋風 只似雨聲敲畫櫺 霜露人間一瞬夢 對人說執與梧桐

龍

養成天下英雄物 骨角鬚髯都異常 一躍得志雲漢路 直從海表接天光

山水

筆破天機入石根 晴沙潮退亂杀痕 清溪幾轉過橋客 綠樹深藏水外村

送春

紅落枝頭三日雨 林塘處々綠千重 欲將好句送不果 已迫今宵半夜鐘

古碑

試說往時暑却寒 腰間長劍孤心丹 于今碑裂魂如憤 爲問本志猶未安

有爲作

元是阿顏巖下電 幾換籍眼俗間精 一朝忽藉金鑿力 洞視乾坤萬古明

春江花柳圖

隔水相呼聲似通 誤驚黃鳥柳蔭中 杖藜乘興過橋客 一處仙



村西與東

老松睡鶴圖

夕下瑤池玉羽清 雲衢警露兩三聲 蒼松枝老仙風淡 更待子

晉眠月明

和某見訪

向暮歸聞君倚欄 定知對菊結交歡 寒家屬爲食魚肉 獨遡前

溪抱釣竿

夢與天民先輩話詩

相逢悟對情何切 親解錦囊共鬪雄 更就夢中疑有益 覺來燈

下竹窓風

北下晚歸

山送淡烟月有情 黃茅影冷晚禽鳴 虎溪橋外林中寺 隔水時

聞木魚聲

秋山孤亭圖

雨過桂林金粟清 起凭水檻聽秋聲 賦詩莫過此幽興 寸碧晴

時夕照明

偶成

趁晴散步鳥不疑 歸把玄經語鬪奇 樹老山堂白雲徧 往來只

許酒家知

蛙

聲々相喚臥青茵 如訴聖恩及細民 烟草池塘寂寥雨 一場鼓

吹滿田春

垂絲櫻

楊妃曉起步中庭 醉臉春深風吹醒 沐雨雲鬢數千丈 紅粧無

力倚香亭

樓眺

曉起凭欄疎竹岸 小樓高聳枕晴江 溪間疎樹來漁屋 波上芙

蓉直紙窓

惜花

朝怨東風夕怨雨 身如蛺蝶惜花殘 闌干疎影三更月 秉燭不

眠子細看

關將軍

捋須一顧敵如雲 膽氣雷震挫萬軍 宿意惜哉雖不遂 于今說

義獨推君

○

幾年淪謫脫人間 風起長嘯跨鶴還 萬頃秋□都如鏡 此行遊

我菱花灣

江蘆秋釣

天文動象駭星官 歸釣江湖七里灘 蘆荻輕烟巖畔月 滿身秋

露薛蘿寒

李白

博問宇寰引遺賢 從來病酒起朝天 金鑾殿上帝賜食 誰與謫

僊俱爭先

擁傳歸來馳驛時 五彩雲霞逐君移 開筵但說新詞富 解說芙

蓉白雪詩

芍藥開 有約不果

會開紅藥發僊家 有約不果辜負花 花落欄前餘彩在 十分香

氣撲窓紗

畫牡丹

苦節一年待郎來 笑風舞雨玉顏開 他人不識妾心切 狂蝶戲

來又作媒

畫美人

二八蛾眉顏似玉 霧鬢金釵爲誰粧 密讀艷書渾不語 春情一

々向胸藏

春水獨居圖

春堤十畝菱花開 鏡鑑烟扉柳岸隈 徹底光深蓄龍水 長嘯臥

待雨雲媒

牡丹

香閣深籠國色奇 半醒半醉露乾時 醜顏烘日含金粉 不許人

間蜂蝶知

尋友人山居

過橋數轉遡溪行 春草鹿鳴谷霧晴 樹老莓苔人跡絕 花陰遙

聽讀書聲

送春

春光九十屬吾人 怨雨怨風與杖親 今日好將惜花句 送流鶯

又送殘春

無題

彩毫和露灑天宮 翠竹秋高爽氣通 影動琅玕凌雲色 蒼龍欲

上躍清風

秋末某會

霜飛秋盡不暫留 詩賦不成增我愁 好矣君將半宵宴 延教坐

客更悲秋

雪夜

細聲入竹閑齋冷 光逼紗窓換蘭缸 雲散半宵梅梢月 定知有

客棹前江

畫贊

對凭水檻無塵事 秋屬吟眸醒醉顏 返照不沈射村落 裁爲一

樣錦繡山

元旦

早倚檻干風觸箏 寒階梅綻動芳情 千金購得黃衣客 獨趁曙

曦聞數聲

問某梅

淡粧似笑傍墻開 此種本從豐後來 輕屐裁詩冒泥訪 草庭依

舊幾朶梅

留別

鶴啼狷叫促歸舟 客入醉鄉賦四愁 誰思新詩扛鼎力 千鈞係

得獨留秋

瓦盆海棠



醉顏向客吐胭脂 蚊蝶不來蜂不知 初解盆中天地闊 對花指問去年枝

櫻 阻雨失期花半落

蜜噴天香絳雪重 枝頭幽露粉痕濃 雨泥無句臥三日 已被塵埃汚玉容

春雨

誰送雨聲打竹窓 蕭々傳響過前江 三更春夢瀟湘雨 半入離騷濕蘭缸

賞花 夜會某樓

開偏園花春有情 瘦梅朶々子初成 賞花因鍊清新句 已報隣鷄先一聲

會芙蓉樓

烟梢龍盤千畝竹 風來時作鳳皇鳴 半爐茶熟書樓靜 野鳥聲々弄晚晴

梅廬別筵送子照之江戶

蜀酒春香魚亦肥 離筵一處對斜暉 彩霞織出桃花錦 裁結他年歸省衣

海棠

染盡胭脂啓笑唇 曉粧巧學捧心�� 香姿因被東風妬 移種瓦盆爲護春

某亭卒賦

庭模蓬萊松千歲 蘭生芽紫闌芳菲 短牆別引幽姿得 似雪名

辛未仲冬

到丸村 見楓 誤聽失路 跬步僅通 其山峻峻 苦不可言 至則葉落樹空立 鳥聲風送烟藤亂 猿叫谷

某寺見紅梅

度水離村山又山 入山更愛此山閑 楓林霜迫空零落 風帶餘芳送我還

某寺見紅梅

問到水邊香骨雄 朱唇似語媚輕風 對花躊躇兒童笑 指道金鏡換臉紅

送子潛歸相州又約再遊 二首

寒江十里盪歸舟 之字風帆行不留 一抹晚烟天若水 芙蓉和雪落相州

新湊見月出

誰爲宰主轉洪鈞 輾出東灣素玉輪 映水湧升數千丈 清光直照九州人

俊伯所藏孤雁圖

回頭停立水涯邊 丁寧喚朋聲似咽 身在南房口口裏 還思故鄉天北地

花學雪飛

夏日

畏日迫窓魂耐驚 竹陰財結護吟情 構思時入華胥夢 呼覺街頭賣水聲

尋梅

杖藜渡水對參橫 行踏霜葩疑月明 瘦盡西湖窮措大 被梅註誤百年生

海棠

紅錦裁成蜀地春 鶯簧向我訴精神 香唇欲笑芳口媚 還令西施更學顰

雨

巖壑隱淪天上仙 謫期既盡再歸天 一翼搏風三萬里 遼城玄話隔青烟

楓林白屋

簷頭銀竹若干行 已打芭蕉別有聲 齋裡爐烟口口夜 半分餘溜和風箏

送別

何人卜宅秋湖上 獨遂醉翁歸穎思 楓林聲冷綺口外 屋後遠山已畫眉

元且對梅

遼城仙鶴搏風翰 決意歸辭七里灘 江外書樓烟柳雨 悲歌三疊一簾寒

書義山卷末

帝曆閏苑玉 結構玻璃宮 一時風吹去 入我書籠中 句敵長城

有期見山茶花

一年約此晚秋期 晤對不須精鍊詩 吟賞牆東花一樹 夕陽亭檻立多時

訪弄花亭老主不遇

柴門和月叩不答 簷有半殘蕉葉留 時欲題姓名歸去 黃花依舊媚清秋

睡海棠

鶯入宮庭呼不醒 曉風香雨濕雲鬢 沈香亭北高唐夢 枉被太真妬睡顏

窗梅

讀餘机上書幾卷 夢覺爐邊殘蠟缸 天上何人放明月 巧教老幹瘦橫窓

避暑

送鈴君某歸江戶 懷吾故友文貞君別南樓 綠水青山幾里程 山送水迎奈離情 模糊烟樹新過雨 記出南樓別亡兄

避暑

綠樹幽亭託浮生 清陰涼味動吟情 詩成窓裏茶烟淡 不聽人



聲聽鳥聲

扇面仙宮

何人創意揮毛奴 碧浪漣漪二月風 今識仙村果不遠 蓬萊宮  
在水中央

避暑

幽篁疊起一簾樓 溽暑從來令我愁 得意四圍風吟竹 清風一  
味屬詩眸

山堂螢火飛

遠結小堂近傍江 水光嵐色逼紗窓 半夜不眠竹簟冷 時飛螢  
火兩三雙

赤壁圖

畫出秋江萬仞山 蘆花一簇老西灣 鶴仙喚起坡翁夢 影在灘  
烟濛冥間

悼龜吉

慟哭血泣為誰發 神童本懷此奇行 廣寒宮裡人真在 月照風  
鈴和樹聲

賀某

明齋置酒會群賢 賀直尼聖知命年 坐上風光十分好 南山排  
闥入華筵

雪後樓眺

山映雪庭梅映樓 噪鴉飛處對寒洲 閑翁醉口開窓紙 灣壑碧  
江晚釣舟

鬪雞

長鳴撫翮聳朱冠 臚膊專場膽氣寒 戰勝歸時得天寵 彩光帶  
日立寶關

夜雨

揭帳聞時如奔馬 還侵窓竹起風聲 短檠焰冷瀟湘雨 苦讀離  
騷第幾行

偶成

幽院沈沈深竹中 風吟一處起清風 半爐茶熟簷頭月 淡照疎  
簾寫露桐

櫻

如雪舞風又似雲 幾堆香霧簇成紋 誰思專有花王美 獨向日  
東更命君

秋江獨釣

求仙不遠入崆峒 我與乾坤齊似通 樂事秋來在漁釣 不知畫  
著銀波中

蚊

帳邊何物素吟情 半夜教人轉不平 細脚步時藏已首 長噓潛  
處出利兵 渾如隊卒登城吼 却似陣車逆敵轟 獨有薰烟疊蚊  
賊 五曲齋裡一洗清

雨中樓眺

淋雨泥濘絕往來 庭無屐齒損莓苔 小樓好矣凭檻看 一樹榴  
花映竹開

和某韻 卒賦

小齋話罷送吾歸 寒水潺湲激石飛 時別虎溪橋外路 露秋素  
月照羅衣

雨洗征衣垂柳閑 出山旬日又還山 拂衣遙指青山腹 猿鶴從  
來待我還

君問再期未有期 再期於我豫難期 滿園梅樹輕寒夕 請待花  
開為再期

山調畫鳥贊

夢裏驪駒親入畫 四蹄踏雪欲生風 李家從遠搜天馬 蹴破萬  
軍立大功

訪人不遇

欲題名姓歸去來 蕉心未舒葉全摧 只看庭裏梅花樹 笑傍簷  
頭對客開

停杖哦詩清致加 佳花當在巧詩家 斜陽染出簷頭錦 依舊寄  
來一朵花

月夜泛舟

船破水烟棹半流 幾行鳴雁屬吟眸 滿天清露寒潭月 兩岸蘆  
花媚老秋

燕

新粧鑿水點汚無 雄去啣泥雌護雛 畫閣清風斜口裏 更隨花  
影入簾呼

竹窓雨

透梅雨密於梅雨 鳩子喚晴隔暗江 醉起門前無客到 東風引  
竹叩紗窓

梅廬小集 以會友賦詩為兼題。廬有竹可愛。

此日小集關有期 高齋置酒闌新詩 何時移種淇濱竹 磨出清  
韻醫頑痴

納涼 舟發兩國

解纜和烟發二洲 翠簾風冷柳邊流 畫成歌妓梅花粧 新聲齊  
喝斜照舟



文山詩集(未定稿)卷二

秋意

一夜西風掠地來 竹林憂玉起鳴雷 籬邊露菊花全發 簷外桐葉梧畢摧 群雀傳呼啄畦穗 隣翁相邀酌村醅 爽秋物々皆堪感 併令詩情向我催

紅藥

嬌媚鬪雄紫白芳 紗籠翠幄護清妝 欲紅或受几眸寵 窈窕不遭蜂蝶傷 幽露全疑玉人立 微風時觸羽衣香 廣陵爲我裁詩句 報向東君獨專場

遊春

繫舟官櫻堤邊隈 亭午新晴水樹開 望遠緣元顧親老 相携當是爲花媒 小桃紅下人千舞 綠柳陰中燕萬回 入眼懷襟皆堪動 十年花事入空來

欣某來

因辱韻人過窮巷 篳門開逕竹林斜 葡萄濃滴如油酒 軟葉先煎似縷茶 客吐机頭錦腸咏 翁誇籬下水仙花 芳情不盡將昏日 隔水鳴歸一簇鴉

王申梢冬廿七日 和某韻

螿龍將大發山阿 魚鼈螻蟻奈我何 庸俗拭目千闕伏 英名攬

修竹幽居

買田五畝小齋開 竹庵閑庭無點埃 露氣遺梢疑宿雨 風聲在簾似殘雷 清新半句留金韻 激澗一杯漲綠醅 唯爲琅干遮萬目 薺枝碎玉供吟材

登山

風末時聞猿叫喧 雲根坐久就微暄 千林霜葉紅籠寺 一道晴江藍繞村 已引醒愁穿瘦骨 欲將清爽沁詩魂 世人言我忘言客 擬化羽毛吐太言

春日

簫聲近響賣傷人 柳巷花村兒喚傳 雨歇清明黃犢戲 日蒸上已紅桃然 西隣訪客來構社 東里松醪醉欲眠 此日山行嘗有約 小童豫具杖頭錢

秋

荒草老梧一抹烟 已聞蛩思感涼天 芙蓉花下輕々露 楊柳池邊淡々蠅 愁意解來松葉酒 厚行書破蘆花箋 平生遣悶閑潭水 不嫌對人醉語顛

秋聲

商金執權叫西風 一夜秋聲起樹叢 初似哀瀉瀉湘濱 後如怒浪洗蒼穹 鳳簫律爽鳴禁苑 虬漏聲咽響紫宮 星斗影輝銀漢白 曉來殘月在梧桐

冬日

地裂陰凝威日加 機聲疊々響家々 木凋窓外山生骨 竹護墻

新井文山篇

筆百倍過 心存禁闈奉廟策 身在江湖解鼎和 請看從今三日後 半天雲雨啓門蘿

和雪後見贈之作

几膚愛箇格標深 卓約迫人趣苦吟 今日新詩解難和 古來郢曲少知音 影明銀燭乘樞裏 舟棹瓊林斷岸陰 一夜築成水晶闕 聲聲細入無絃琴

元旦

八荒共識育萌芽 唯賴東君賦歲華 柳逐朝光發青眼 梅迎曙氣著芳花 不贊羽客傳僊語 無價青山入我家 儂亦心肝從此改 織成奇巧寫窓紗

梅

青帝傳春筆闌峰 詞場於我獨橫縱 孤根俯石將眠虎 瘦骨臥烟欲上龍 已歷東風傳芳信 更因深雪誤清容 織娟疎影寒宵月 遠隔僊霞高幾重

桃花月下宴

雲字無塵月換燭 櫻桃花下瓊筵明 香浮杯酒看不見 花撲朱絃聞有聲 玉兔奔飛銀蟾窟 紅霞疊出錦管城 詩成清賞馳康樂 一斗金波攬筆傾

春雨

蘿薜幾重開草堂 鶯黃隔雨弔詩腸 碧潭鏡裏 二字 躍 綠柳堤頭絮縷長 密迫爐邊熏烟濕 靜侵花臉淚痕香 琴書懶弄眠又足 起邀隣翁入醉鄉

頭梅著花 風緊孤鴉啼凍樹 霜嚴連雁叫天涯 三冬苦讀蘭窓下 唯說藻詞簇玉葩

秋興

老秋載筆坐幽亭 蘆荻花開媚釣汀 草際烟蛩聲斷續 梁間海燕話丁寧 山顏著雨全凄瘦 樹色經風半寂零 日暮詩成饒清興 但看兒女撲流螢

牡丹

無端更嫁東君得 新製仙衣出闥闈 已傍玉階掛明鏡 更開朱戶曬紅衣 向郎欲言風唇動 對客且啼露臉肥 一種天香呈國色 香霞馥郁帶朝暉

露

去秋一夜寂無風 顆々綴珠蔓草中 天上瑤池餘曉月 漢庭金莖爽清空 柳蟬腹滿聲應律 籬菊顏滋唇吐紅 只怕後身化霜後 擁芭蕉更殺梧桐

夜引隣明

牆頭梅熟雨初晴 池上錢蓮浮水平 田際螢光千萬點 草間蛩韻兩三聲 柳條拂檻輕風過 竹影橫庭新月清 背巾小樓開引客 天南星斗夜深明

石榴

樹壓中庭氣勢雄 只疑剪綵描成叢 朝暉染出猩唇血 晚雨碎流鶴頂紅 密葉藏花惱遊蝶 幽香洩氣嫁清風 書樓簾外鱗明色 半對梧桐半對櫳



夏日

奇峰高起勢嶙峋 趙盾威嚴迫此身 池上榴花因緣子 梁間燕子似喚人 半窓竹護清風冷 滿坐茶香韻味新 亭午時微中散懶 華胥入夢得天眞

芙蓉

酌酒賦詩無爾如 奇花成隊映奇書 呼爲繡國全不寬 號曰錦城豈是虛 日照穠芳立窓外 露霏艷色娟庭除 曉粧秋老全無力 猶鑿清流侍蝸廬

舟下墨水

宿醒未定洗朱顏 記得謫仙鑿碧灣 鼓棹追鷗下清水 把杯邀月對青山 扁舟過處烟從破 蘆葉飛時秋自閑 試把巴牋揮毫奴 數行鳴雁弄潺湲

望東洋

包括乾坤涵星斗 灘聲數里似傾聞 素波摧岸千層雪 怒潮捲天十萬軍 水面遠連含紅日 潭心半破吐青雲 盪滌濺濁心腸闊 極目爽神自十分

梅雨

麥秋細雨閉乾坤 新竹翠垂護筆門 梅子全黃欲始落 池心細點不成痕 有無松裏山中寺 出沒槐陰郊外村 滿地花泥懶乘屣 讀書日々に到黃昏

柳

曉烟春暗自無聊 僅帶暎光逗矜驕 風動千條梳翠髮 雨沾一

和某月夜見寄之作

烟草露延蟋蟀聲 揭帷欄外彩光明 苦心逸調凌騷客 觸耳新詩起病生 砧起後村戶々響 月輝前浦家々清 清章君故將秋色 寄使吟身到五更

舟釣菱花灣

強倩隣翁放小舟 織綸百尺釣寒流 幾堆蓼葦遍舟露 一簇蘆花滿眼秋 栖逸更無媚人思 無心還懷羨魚憂 日斜斷岸西風淡 閑鷗隨波伴雅遊

馬

迅電奔星遠絕群 龍姿神骨五花紋 沙場踏盡幾千里 胡地蹴開百萬軍 朔雪遙飛吳門練 秋風近過隴頭雲 一嘶所向渾無敵 購得千金厚報群

鬪鷄

乘風排去三軍衆 光彩精輝鍊石肝 臨敵一場鏖金距 竦身五德胄朱冠 勢勇昂尾心腸冷 戰勝長鳴膽氣寒 殿上日高上歡甚 崢嶸撫翮立寶欄

和韻

一樣菱花池上春 始知恩暖及遊鱗 已除凍水徧身骨 還疊漣漪滿面皺 禁壘萍絲時結帶 野塘梅樹財開唇 錦心吐出長城作 請賴東日日皆新

步月

長空如水菱花圖 十二闌干寒瓊筵 影白雲衢一輪月 光清蟾

采媚纖腰 已迎來客臨宜道 且送去人拂野橋 青眼由來屬青眼 門外朝暉對碧寥

鷺鷥

柳陰石瀨捕魚情 青脚一拳窺底行 閑傍白蓮難詳悉 却依青草易分明 群飛山上翻空雪 孤立溪頭呼友聲 氣格高風真別物 蓼花日映立秋晴

咏山茶寄某

麗秀不與衆芳同 一樹天香傑且雄 花萼膩潤肥雨 枝頭骨軟笑迎風 質明霜上更加雪 文斑白中細點紅 勁節唯誇君與我 君鳴南海我鳴東

漫成

避暑放曠追異蹤 山齋遙對夏雲峰 酒欣厨下松醪熟 詩富窓前山色供 草際披襟倚黃石 竹林散髮撫蒼龍 涼風驚覺華胥夢 月出遠村聞水春

夜妓

各々相呼頻留客 堤邊月落畫長眉 接噓切々哀離別 推枕丁寧約再期 頃刻厚情人却笑 一生深契誰敢知 難忘寤寐情癡病 從古由來不易醫

良夜

金環高掛地如霜 爽氣浮杯洗苦腸 光通蟾宮飄玉露 風侵雲路送桂香 冰輪兔躍十分白 銀漢龍飛萬里長 清賞瓊瑤半宵會 揮毫欄外邀清光

痛半宵天 立迎皎彩衣疑濕 獨步中庭草似烟 銀漢秋高風骨冷 傲遊身一挾飛僊

舟到江戶

輕舟解纜衝烟發 蓬底秋寒羅薛衣 兩岸山青都似黛 一帆風急俱如飛 東南地迫鯤蠶起 南北天垂鵬翼圍 直到峴橋永代口 芝山鏡動帶餘暉

芝山鏡動帶餘暉

幾畝琅玕渭水隈 傲陵千戶篳門開 蒼龍將闕清光散 彩鳳且鳴寒玉摧 半檻雲雷披簾去 一簾烟雨長芽來 不讓六逸徂徠會 滿眼吟材不乏裁

閨思

霧鬢金釵懶更容 巫山入夢覺春慵 新衣未刷琴臺風 枯骨猶滋藥店龍 眉黛吐烟曉城月 額黃和露五更鐘 思君不見湘江水 曲々哀湍聲似春

芙蓉峰

瓊瑤削出芙蓉嶺 萬仞孤峰高接天 登極眼中小寰宇 下來足下踏虞淵 洞門雲起三千雨 巖岫風寒碧落烟 聳立關西駿州府 光霞蒸處福聖賢

雪

六出袁門徧 集衣瑞異常 清皓明似月 凝結密於霜 如雨聲無信 疑梅樹欠香 蘭缸何須借 窓下供韶光

(此の詩重出せり、但し一には踏虞淵を望虞淵に、三千雨を丹丘雨に、光霞蒸處を光霞極處に、編者)



曉起

昨夜喧蚊賦 曉來學就擒 露蓮翻翠蓋 烟竹含清音 細雨疎  
又密 遠山霽且陰 書樓望不極 咸入我詩吟

桂花

金粟銀宮裏 移陪物外遊 天香飄素月 仙友媚金秋 樹老見  
仙骨 花新對畫樓 清姿美而淡 唯似我茲幽

溪居

茅屋檀欒竹 琅玕綠四圍 溪風飄荷葉 野草點螢輝 梅子黃  
時落 榴色紅自飛 懶眠月出起 題竹有人歸

鶴

仙物如何翫 清妍不待容 長鳴聲似訴 高啄形如春 玉羽振  
晴月 雲衣睡露松 子晋依託再 一舉到高峰

白蓮

紫府瑤池會 僊衣誰得裁 水清銀鷺立 風動玉人來 半夜天  
香墜 中天月色開 秋潭饒冷露 六郎濕芳顛

梅 二十韻

東君傳清信 水姿簾外濃 清霜襯骨節 冷露注心胸 欲笑全  
未笑 似容豈是容 孱顏如麗女 高臥似蟠龍 遠出衆芳右  
高爲百花宗 素面寒零色 幽艷嚴威冬 零隔烟霞遠 忽似醉  
起慵 夢魂不可近 天門高九重 清寒氣浸迫 羅浮追芳蹤  
瓊筵特馥郁 佳期難再逢 張宴酌芳漿 凭欄役神童 金衣客  
弄舌 仙人文奏工 侍婢敬奉硯 縱橫詞場空 戈炳獨扛鼎

和某韻

坐對乾坤金氣高 黃花處處點蓬蒿 閑居琴韻魚開藻 散步詩  
吟鶴舞皋 無我風情陪芳客 有君清格對香醪 醉鄉不識秋陽  
晚 一痕月明映二毛

菊

寄身柳外小堂東 時媚高秋九月風 素手粧成醉楊妃 化工剪  
出白頭翁 傑軀挺出繁霜下 豪氣不讓濃露中 更有老容似吾  
淡 帶烟和月傍籬叢

基

秦家失鹿群雄競 特令項劉馳力謀 犄角陣圍心欲轉 魚鱗兵  
迫勢不留 地通泉脉分方域 天著宿星定九州 戰勝卯金擁方  
面 基奩收得雨聲幽

落花

蜂愁蝶駭我堪哀 獨指餘芳引杖回 已被朝鶯啼踏破 又因暮  
雨妬飄摧 香魂隨水只流去 芳意從風更往來 夕照滿園綠陰  
裏 臙脂繞樹姿莓苔

尋梅

侵曉尋花入野蹊 蘆叢呼渡水東西 一丘隔樹知村落 十里遡  
溪聞犬鷄 群過犁牛田際路 獨行驢馬柳陰隄 踏遍山壑渾無  
見 日落炊烟天欲低

菱花灣

花筆聖恩隆 當仁不可讓 意氣盡豪雄 佩環過丹墀 復道攀  
橋虹 香飄雲縹緲 竹圍影玲瓏 長裾拂椒房 仙袖撲珠櫳  
異香翰墨濕 滿窓梅花風 夢覺黯淡月 知遊水晶宮

梅花 五律

梅花幾樹羅浮夢 銀鈎珠簾水晶宮 奇骨月明見清格 冰心風  
觸驕芳雄 牆頭屋角縞霞疊 庭外簷前香雪籠 覺擁寒衾竹窓  
曉 新詩鶯和媚東風

品川樓月出

百花推魁搏花場 玉質不敢難稱王 老幹婆娑視芳骨 精神卓  
犖呈清腸 鳥侵倍蕾遍身雪 風撲高標滿地香 尤愛江南水村  
外 黃昏和月臥寒塘

芭蕉

老標比竹又爲瘦 付與冰姿獨搏清 苦節含烟益韻味 芳心和  
月引吟情 孤根能向冬寒傑 繁蕊特輕風雪真 香雨滿園容色  
好 喚金衣得定論評

芙蓉峰

梅花疊出玻璃閣 月映雪香詩到加 風過窓邊香馥郁 夜深簾  
外影橫斜 甚欣晚操隣霜竹 却厭曉粧效冰葩 獨爲瓊姿占花  
魁 教儂吟意易春誇

和某韻

鶯訴南園梅幾樹 半傳春信半懼寒 曉風梢顫香唇綻 晚雨枝  
輕玉色殘 畫至妍姿摸影艱 詩賦瘦骨寫心難 書樓窓裡清韻  
極 唯對烟標獨倚欄

芙蓉峰

東君引我促遊春 果遇君家玉骨新 穿竹僅通隣竹宅 與梅偕  
笑對梅人 只今好見潛龍臥 豈是人間風鳥倫 別有一壺不老

芙蓉峰

萬頃晴光一色鮮 海門日午鷺鷥眠 沙明圓浦如洗岸 水白平  
波無際天 烟裏細分太房樹 雲間半落芙蓉嶺 須臾風起聲如  
吼 浪躍銀龍飛紫淵

芙蓉峰

削出芙蓉幾千丈 登來脚下萬山連 髻青腰際殘雲岫 顏白雲  
間盛雪巖 勢壓九州聳東海 氣通紫府逼南天 斗星近對如經  
緯 銀漢手撐細似絃



鶴

閑庭高啄出鷄群 千歲仙風有異文 桂樹花明遊紫府 松林霜  
白宿青雲 冲天高翮迎風振 警露清音對月聞 骨格秋深丹頂  
冷 彩軒非願守吾分

某竹居

幾朵翠筠綠水灣 琅玕聲冷和潺湲 清風龍闕前園裏 皎月鳳  
吟後畝間 開戶精粧菱花面 揭簾直對芙蓉顏 長嘯推枕燒香  
坐 寸碧如烟螺結山

避暑

流金燦石懼彼侵 非此幽亭不可禁 箕居披襟脩竹下 長嘯散  
髮孤松陰 水咽已見蒼龍躍 影動時聞彩鳳音 坐久閑眠我忘  
我 一瓢春酒一張琴

某樓成

高樓招月聳崔嵬 露鶴飛鳴寔宇開 簾映槐陰綠波傍 欄涼杉  
下翠巖隈 枕邊氣冷銀河往 簾上天迴星斗來 滿耳潺湲半宵  
急 灘聲風激百千雷

紫薇

簇錦禁省紫薇樹 更加紅日太鮮明 餘香翻閣諷疎意 密話對  
簾寄厚情 猩血霑唇時欲語 鷄冠蒙首或如鳴 輕風朱檻清標  
重 鐘鼓樓中虬漏聲

桂花

孤格無塵老奇骨 高堆金粟聳清空 枝頭氣滴秋庭露 葉底花

敗荷

芳魂和夢繞烟塘 零落從波遺恨長 鏡檻時々凝殘色 幽亭曲  
々結餘香 紅衣風送歸天上 翠蓋雨摧辭水鄉 一夜老秋霜露  
冷 敗荷入眼苦詩腸

杜鵑

我不遠客那歡歸 欹枕半窓慘月輝 一叫訴冤三月破 三更啼  
血一聲飛 錦城樹冷賦詩客 湘岸竹寒鼓瑟妃 涼色非秋氣似  
砭 簌簌影密畫紗幃

漫成

十年從事五車書 鳩喚晴林頻引予 荷葉疊錢誤乳燕 蘆筍長  
角駭兒魚 野塘邀友相携步 綠畝帶經且自鋤 日落東林新月  
淡 歸來跨石望清虛

閏二月

三百六旬六日期 帝置閏月授人時 遙因天象知時運 細賴曆  
家推數奇 宇內更歡春色永 民家故說日行遲 兩辰斗柄果指  
否 請問義和以不知

雨

倚几閒時風浪急 還如奔馬過空灘 園中梅子枝漸卑 牆外榴  
花色半殘 村落近連難爲際 乾坤遠合不辨端 隣朋乘屐時相  
問 便引書樓子細看

惜花

亭外斜陽散彩虹 朱闌翠幃簇園中 池邊烟柳垂枝綠 水傍霞

翻商宇風 已送天香入蟾窟 更迎仙友立天宮 翠簾半卷涼如  
水 珠檻影橫素月中

蛩

爲誰相喚訴不平 有底悽涼向我鳴 昨夜西風起悽意 今朝秋  
露動愁情 藤床簾冷幾千韻 窓壁草寒三兩聲 疎檻簾前一痕  
月 梧桐葉落石塔明

七夕

別恨經來凡幾度 今宵高會七寶臺 佳期莫嫌銀河闊 良會定  
如烏鵲媒 天上不愁五鼓促 人間唯懼鷄鳴催 捉裾頻停金閨  
淚 更使芳魂半被摧

小集

遙看秋老山顏瘦 半岸蘆花紅蓼中 舊意猶含寒柳雨 餘香僅  
送敗荷風 彩鳳數韻存脩竹 皎月一痕在露桐 懼飲庾亮樓上  
客 蒼頭時對白頭翁

秋夜

涼侵枕簟夢魂驚 更使詩人吟意清 夜冷西風蛩數韻 天垂北  
斗雁幾聲 牆邊殘菊微霜白 庭上老桐皎月明 立揭疎簾向窓  
坐 市頭殘柝伴風聲

訪某山居不遇

離郭入山幾十里 白雲深處問僊翁 石泉百轉通前水 草徑千  
回到後峰 青竹香濃吟彩鳳 老松影動闔蒼龍 石龕露冷柴門  
閉 風末遙傳昏寺鐘

桃芳葢紅 戲蝶忘歸帶香露 遊蜂不息舞東風 只憂妬雨妨容  
色 秉燭獨行花塢叢

端午

居士平生多散髮 會逢佳節著儒冠 田文論命其名在 屈子沈  
江此日殘 梅雨不晴洗黃暗 榴花無他送香寒 離騷讀破松醪  
酒 醉步汀州獨佩蘭

松

氣格孤高經幾春 棟梁材就託江濱 髯蒼千歲凌霜色 鱗疊一  
身傲雪皴 百尺丹心呈真節 數圍仙骨見精神 中天月白青龍  
動 欲以仙風對鳳筠

蟹

鼙鼓震天憤氣盛 無腸公子獨橫行 身衣犀甲穿金闕 手操吳  
戈登鐵城 一戰長驅只試劍 萬人無敵特摩兵 周生忠漢身囚  
縛 豈計俱歸鼎鑊烹

睡起

會開三逕愛閑幽 滿坐清蔭涼似秋 相喚相呼草間虫 自歌自  
哭石湍流 蕉心半卷臨朱檻 榴子全肥對畫樓 長夢寤時新月  
白 對人但說得仙遊

蟬

貂冠高聳翠雲裳 心慕清虛拜日光 會服仙丹全羽化 因吸清  
露獨飛揚 孤吟如訴聲悽急 亂噪似歌韻切莊 驛路古槐綠蔭  
冷 聲々但送夕陽忙



海棠  
一樹海棠著異葩 玉肌香骨直窓紗 香風枝顫燕脂雪 情雨膚  
沾紫臘花 被酒含羞眠翠檻 凝粧欲語立香霞 獨因身介東風  
嫁 春老未知何處家

送別  
趁暖惜花又送春 此筵今奈子離人 驛亭離酒青藜杖 馬上征  
衣烏角巾 峽裏猿聲豈堪聽 湖中山色自相親 舊廬本是酉陽  
窟 萬卷奇書臥綠筠

鶯  
細雨添寒春又深 寄身幽谷自幽沈 漸々趁暖遷喬木 切々尋  
香穿上苑 細投金梭錦似織 巧調簧舌句如吟 風光最好幾千  
囀 欲和風笙舞柳陰

梨花  
玉墀靜極對花繁 閑院春深絕羈喧 遙側醉姿眠翠檻 高開嬌  
臉媚禁園 枝頭踏動黃鶯雪 花影轉移素月魂 香氣涵衣清露  
冷 黃昏幽味滿乾坤

金魚  
數圍菱花託爲家 尾動銀波漲水涯 池底縱橫煥簇錦 水中絡  
繹爛裁霞 爭餌玄鶴時呈頂 吐沫仙桃頻墜花 虛碧水天盆池  
冷 凝眸對客獨堪誇

牡丹  
白雪肌膚水晶質 珠闌深護自幽間 冷唇受雨聊傳意 芳臉輕

蜘蛛  
逆敵機心警備忙 縱橫屈曲定幾行 疎絲巧向牆頭設 密網細  
於屋角張 清露或連有奇彩 落花時掛帶餘芳 秋朝圍破蜻蜓  
脫 一縷逐風百尺長

樓眺  
江湖春色樓中望 主老哦詩捋白髯 風流萬條開青箔 露杏一  
簇動紅帘 烟輕飛鳥如連水 霞疊歸舟疑接簷 獨坐清磯垂釣  
者 兒童指道定姓嚴

蝶  
爭飛輕狂聳香眉 經檻過牆人不疑 花影動來勻粉翅 紅唇開  
處接芳頰 心尋幽味遊禁苑 身嫁東風宿嫩枝 唯恐黃鶯破春  
夢 與海棠覺共眠時

賞花  
賞盡桃李圖畫中 醉行醒坐水西東 香飛小徑幾千蝶 紅散開  
庭一陣風 天上清妍紫雲閣 漢家精彩未央宮 不關人事於吾  
切 日懷華牋結世雄

龍  
失勢隱淪幾十春 英雄無力寓砂濱 古聖特舉應陽德 蒼黔高  
仰知化神 奮躍乘雲脫淵水 飛騰捲水入雲津 人間魚鼈稱難  
測 骨角鬚髯冠百鱗

和某韻 辛未秋盡夜 (文化八年)  
窮巷曾無長者過 薜蘿秋老鎖山阿 竹林閑逕通樵客 窓下柱

風爲解顏 樹上花搖玉羽扇 枝頭葉疊翠雲鬟 素容粧出簾前  
月 始信天香不易攀

葡萄  
種向西風作媒妁 前庭九月瘦藤脩 千尋鐵鎖連高架 百尺龍  
頭傲老秋 露冷清漿綠馬乳 質明香顆黑琳球 新詩裁得三更  
酒 時解書齋消渴憂

鵬  
北溟有物變爲鳥 遙望天衢脫故衣 九萬志成翻水上 一朝身  
化馭風飛 中天振羽程千里 碧落垂翼雲四圍 笑向人寰謝尺  
鷃 細論埃我圖南歸

蘭  
弱々幽姿秀麗質 楚人緱佩博詞場 叢生庭畔陰彰德 獨立河  
邊深護香 爽氣輕侵含幽露 西風纔觸帶秋光 清芬誰縱名中  
國 更把芳顏較苦腸

芙蓉晚色  
日落前洲螺結岸 幽峰遠鑑菱花中 秋意霜濃醒面白 夕陽烟  
疑醉顏紅 青天雲破臨蒼海 碧落霞開聳上穹 芙蓉一朵開如  
畫 半浦蘆花暗淡風

池亭  
毒陽日々炎蒸迫 蕪簾逐涼獨倚闌 坐久林端新月白 夜深草  
際老螢寒 池頭風送香時過 水面花浮紅尙殘 蕉扇不須驅蚊  
賊 小亭氣冷四支安

香驅睡魔 樗散不材弃不顧 蠹魚爲癖自無他 不思錦字風吹  
送 此夜三更感慨多

和某韻  
歸結草堂故誅茅 琴書於我不暫拋 露侵瘦骨沾花筆 秋屬愁  
顏事吟嘲 村巷夜深無犬吠 柴門月下有人敲 各居遠隔江南  
北 書信雁媒得舊交

宿星高掛列蒼穹 五彩雲明記英雄 十里寒潭見清底 萬疇露  
麥育東風 往時施德沾中國 今日分符鎮海東 聞說府君備北  
虜 半宵新月好如弓

冬至宴  
桑熟金醅溢玉杯 王孫此日朱門開 寒宵豫識初長晷 老幹先  
傳欲放梅 柏梁臺高引上客 梁園宴酣馳詞材 慇懃好是簷頭  
月 特帶暗香照座來

春曉 席上  
拆破五更斗星沒 不知日彩趣烟鴉 聲々弄舌窓前鳥 樹々凝  
香雨後花 曉露密沾一庭草 瞰光高射萬山霞 賣花聲裡江南  
夢 呼覺洛陽十萬家

牡丹  
洛陽三月競奢華 烘日彫闌嬌媚加 金粉近飄四香閣 檀心深  
護碧籠紗 風吹翠蓋雲磨月 露結天香玉剪葩 爭賞新粧漢宮  
艷 舞衣細疊綠絲丫

義士  
窮巷曾無長者過 薜蘿秋老鎖山阿 竹林閑逕通樵客 窓下柱



國士肺肝堅於石 漆虜飲炭寸腸回 精神射斗千秋響 英氣拔  
山萬古哀 霜鏗匣開奸膽消 鐵椎門墮敵心摧 功名不沒長流  
水 碑字風寒臥草苔

送春

帝投玉梭脫杼機 錦綺委地綠陰圍 詩襟日日因愁結 花事處  
々與意違 芳草池塘住餘雨 落紅枝上含斜暉 有情只是郊邊  
蝶 相送慙慙繞樹飛

漫成

稚龍尺寸竹孫羹 林下清風舉酒觥 夢入佳鄉眠忽覺 書開數  
節眼旋明 老鶯穿樹孫枝動 母燕入巢乳子鳴 荷葉疊錢碧又  
鋪 一池波面晚涼生

夜雨書懷

巖壑非關託隱淪 養親日與老農親 微時談達輕方朔 思古英  
風慕子真 簷外滴聲疑刻漏 帷中冷氣逼衣巾 論經追琢淹中  
學 于今不成已十春

天門居圖

萬重翠壁老秋金 寫比天門竦傑岑 身入雲關叩紫府 手開霞  
戶闔天心 藤蘿月影明紅燭 巖畔松聲調素琴 玉露桂陰寄居  
者 子為誰乎曰姓林

雨中牡丹

珠簾高捲雨纖聯 細點芳唇紅欲然 似笑不笑已含羞 欲言肯  
言唯如咽 宮中美女喪顏色 園裡名花鬪清妍 偷竊東君寵暉

渥 沈香亭北傍華筵

九日城山懷古

英傑事業雖難測 小不服大禍根深 知窮鑑浦城見毀 意阮東  
金身就擒 古言僅存前世俗 老松猶遺舊時音 豈思民闕重陽  
賀 此夜月寒響露砧

蓮

十里清光步々蓮 霞標灼爍撲綺筵 玉冠立水花如扇 □□點  
波葉似錢 茂叔開窓愛君子 玄宗臨水校……(以下破損)

文山詩集 (未定稿) 卷三

〔甲 戊 集〕 文化十一年

燈花

不為灌溉不須培 創意綴華六七枚 夜半前溪雪三尺 定知有

友叩門來

寒梅

粧飾殘年報我知 今年不似去年遲 山村微雨多為雪 了木將

撐凍折枝

尋梅

朶々受風隨處飄 不看花落看珠跳 枝南枝北避無地 行踏瓊

瑤度小橋

伴月黃昏入僻鄉 一林霜嚴鎖幽香 吟邊時有清風信 不是月

明不是霜

報春香雪徧南村 橫水老柯月有痕 勞客溪頭須約約 不憂厲

揭涉黃昏

避珠獨脫野梅圍 風送幽香伴夕暉 依例前村犬迎吠 先登詩

將策勳歸

觀櫻

粧春輕靄結遙天 幾朶山櫻露氣鮮 行被落花圍繞去 不嫌路

濕坐芳氈

雨中觀梅

山郭水村來幾回 譜花之句始於梅 蓑衣今日匆匆過 形不熟  
人有犬猜

雨後牡丹

群花已謝牡丹春 曉雨掠來多作塵 別有東君為吾處 餘芳留  
得屬詩人

秋收

平田稻熟畝無疆 滿地金光人亦黃 秋未後場紅子粒 質春為  
雪案頭香

梅

十年辛苦育奇材 清瘦太嫌蜂蝶媒 的皜牆頭梅一樹 時來不  
待著詩催

春來句々見天才

不為花開 緣是東君把轂推 咏盡梅花倩鶯和 嚙枝聲

舟行

一支秋水練光斜 兩岸鳴蟲各立家 舟過斷橋向西轉 滿川紅

葉亂如花

醉後 黃鸝攪夢喚東風 牽牽宿醒茶有功 坐久疎簾猶懶卷 惱人桃

杏雨中紅

不忍池



結伴來看不忍池 小樓一座枕漣漪 清香撲面涼侵座 知是池  
蓮曉發時

午睡

屈我南柯就陋邦 當時庖厨富春缸 夢中無限小天地 覺有槐  
陰轉到窓

秋雨

雨將愁意屬吟身 不與愁親愁自親 已碎芭蕉心幾莖 清涼逼  
到讀書人

殘菊

秋英人間今無幾 餘芳剩蕊從殘摧 僧家賴護霜威取 如此寒  
天一面開

春月

碾到中天分外清 春衫太冷夜三更 俱香月下梨花雪 不辨是  
花是月明(此の詩は重出せり、但し俱香月下梨花雪を共香階下梨花雪に作れり。編者)

不向春花強較奇 天然要此感秋詩 一家清婉元無敵 開到月  
明露冷時

潮來竹枝

桃臉杏腮深護春 爲風遊詠啓丹唇 芳情有約今難說 苦界十  
年未字人(此の詩は他に二ヶ所に出でたり、一は代妓東某郎と題し、遊詠を誘詠に作り、一は杏賦を杏脂、護春を保春、遊詠を炫誘に作れり。編者)

梅

病約久寒難惹情 竹爐獨坐唯願晴 南村忽報梅花信 撥棹忙  
侵雨雪行

有賣花聲

晚春送某歸鄉 送春不似賞花辰 詩情困盡併詩困 遮莫落  
花飛送人

探蓮

曉霧籠花醉葦宮 鳳釵鑿水刷香風 逢郎欲語含羞立 身在深  
紅濃白中

時樣衣裳趁節新 可人蓮對可蓮人 佳人笑語蓮亭立 要就荷  
花直質真

春雨

曉靄輕籠無點塵 花朝雨爲愛花人 不妨吟意不慵出 染出村  
々種々春

雁聲

一叫咽霜喚夢醒 風傳餘響在簷鈴 披衾不覺推窓立 數盡散  
聲也數星

雁字

體不八分不鳥跡 西風澱墨月中明 天孫乞與雲箋錦 寫得數  
行吐實聲

夜觀花

碧瑠璃淨夜三更 露氣凝香月有情 黃犬馴人還不吠 向花吠  
影映花明

漫興

清明過後雨傳寒 凡紫庸紅掃地殘 唯有晚櫻剩春意 偶然飄  
墮入闌干

塙居

池堤春草一叢生 喚雨林鳩去喚晴 十日春寒約難出 門前已

訂盟不許他人與 筇杖要看日百回 今日寒威甚於昨 黃昏微  
雨凍花來

菊

結伴由尋霜下傑 幸逢人傑醉花前 幾階位列金銀印 一樣瓊  
瑤霜露天

答某需詩

生活常如客畫蛇 從來窮極立詩家 莫嫌書字漸々大 不醉眼  
中病有花

榴花

五月開遍猶及六 教人滿面醉仙風 果然君亦身先表 不飲香  
唇已上紅頓孫國有安石榴、取其汁停杯數日成美酒、李義山詩集

松魚

春衣欲抵恥懸鶉 人情誰不好時新 就中此物冠纓具 高貴魚  
薦高貴人 漁人云松魚上時素冠紫纓或釣得入舟猶不脫

紙鷲

紙鷲輕颺二月天 侵雲登入競誰先 挾風鬼面懷餘怒 猶似當  
時瞰渡邊

冬

叢竹雪中守剩年 火紅寢熾颺茶烟 半句臥讀詩時節 算到梅  
花第幾天

五寒約體出遊慵 凍視臨書燦筆鋒 不見文史猶足用 幾年屈  
指過三冬

有賣花聲

病約久寒難惹情 竹爐獨坐唯願晴 南村忽報梅花信 撥棹忙  
侵雨雪行

晚春送某歸鄉 送春不似賞花辰 詩情困盡併詩困 遮莫落  
花飛送人

雨中海棠

似晴不晴海棠天 人自不眠花欲眠 樹外翠簾愁不捲 移筵趁  
雨泣芳妍

春遊

雨後春泥遊客稀 偷閑吾去戀芳菲 喚人黃鳥欺人得 遠出紅  
圍入綠圍

至日

及時恰喜富詩材 兀坐究奇心未灰 起步後園試春意 一於柳  
眼一於梅

尋花

起數殘星領了晴 急粧野服待東明 落花滿地前宵雨 路濕值  
人相讓行

漁落樵村看不厭 逢人先話野梅開 兒童拍手迎吾笑 昨日頑  
翁今又來

牡丹 當風西子酒新醒 僅轉倦眸立內庭 亞字欄邊人不近 黃鸝啼



觸護花鈴

悼亡

欲招離魂繞水歌 花陰月影惚如過 夢醒燈下披衾坐 夜淚甚  
於畫淚多 時當春暄詩反寒 沈吟使我復悽慘 桃花雨後留香淚 朝日午  
風乾不乾 蝶

身趁落花共上下 一雙差重一雙輕 領春光取心猶未 更問壯  
丹開處行 四月

輕展爲花來幾回 半晴半雨起心灰 今朝天定風尤暖 一樹剩  
紅得之開

麥老梅黃欲雨天 半旬但得箇閑眠 醒來自笑心灰盡 身化蝶  
魂繞柳烟 紅梅

新粧或有杏桃情 唇血近爲吟社盟 孤瘦未全成俗格 十分春  
態九分清 不眠

閑過半生無事牽 偶然不睡識茶權 關心夜半新過雨 得暖庭  
梅孰最先 雪中尋梅

夫須不藉早行時 未踏成泥步自遲 辛苦叩門非訪友 尋梅細

逐番栽種逐番忙 早稻已成晚稻黃 一頃山田輸租外 全家幸  
喫雪花香 夜歸

送我鳳鳴何處簫 步傍柳堤攀柔條 卒然一過雨來雨 好認梨  
花度斷橋

三五小星西又東 明朝欲雨又東風 前程似熟元生路 錯駭鳴  
蟲入草叢 寒蠅

不似平生趨利移 徐交雙脚物如糜 點身難進還難退 猶學奸  
人失意時 尋花有約欣晴

乍寒乍暖衣難適 爲雨不真晴亦猜 唯有東風黨花意 一時放  
起日紅來 白桃

身無半點帶紅粧 一朵露叢與月香 不借東風不著雨 飄清葩  
落試方塘 遊春

朋儕分隊步莓苔 樹外小橋逢復回 拾得花間金鳳釵 因知遊  
女踏青來 小保田村觀菊

邇溪不必問桃源 漑菊人洗離騷冤 芳葢未乾時十月 秋光在  
小保田村

見雪添奇

賣花翁

和雨移苗取次栽 一肩更逐四時閑 曉來呼急過門外 知道起  
儂強鬪梅 甲戌元旦

寒厨濁醪抵珍烹 新詩招友費論評 天公鳴得清真句 木鐸梅  
花窗外驚

帝洩春機不伐功 不欺詩老發東風 黃鸝喚醒軒窗外 夢在清  
標潔格中

秋日田園雜興 五首

早秈半熟村醪熟 已招西隣又招東 先賀有年笙鼓鬧 賽田神  
厭一番風 本邦距節分後二十日 土人爲一番 二十日爲二番 三  
十日爲三番 此候狂風至 則不稼將熟 忽見飢渴 故是  
日會于村社 笙鼓以厭勝焉

如糠細雨起輕雷 忽放一聲雹樣來 豫卜秋成翁喜甚 家人笑  
我不心灰 土人謂細雨爲糠雨

一碧秧針軟似氈 春來用力唯論先 豐穰常爲他人祝 自笑身  
無二頃田

得晴急穀登場 不愧平生爲口忙 堪笑乃翁有村癖 小詩亦  
帶稻花香

犬吠山南桑柘村 一行新雁屬黃昏 今年雨足田餘水 穫稻不  
句見稻孫

途中作

夾水懸崖路轉通 黃花透我出村東 田家在否人無否 聲在丹  
楓紅樹中 蚤

通宵哀訴又何情 如咽如鳴伴月明 笛外旋寬笛內急 細聞一  
樣送秋聲

情緒切時響尤緊 聲々吐出惜秋情 苦吟無我驚他句 愧爾徹  
宵驚我鳴 惜秋響韻倍平生 不管三更又五更 都訴心情聲啞止 不求知  
己出哀鳴 蘆花

不須恃氣鬪春華 斷送清金吐雪花 橫岸釣舟水猶暖 蘆花分  
界漁人家 花

爲花減我幾分閒 早發匆匆遇雨還 今日蓑衣預具雨 家童太  
笑乃翁頑

十分詩缺九分材 時至顛狂非獨梅 黃蝶化吾々化蝶 夢魂細  
問百花回 至日

清葢霜嚴瘦欲乾 培根禦簡幾分寒 已經至日花猶未 早起買  
梅南市看 尋花



閑中別有問花忙 紅上小桃日亦長 結伴及時須早計 莫分使  
雨亂新粧

花

性拙與花似有因 天教將病作詩人 家々紅紫村々白 歛屬詩  
家清瘦身

偶成

節及黃梅雨不乾 蠶餘桑樹露枝寒 收斃功畢身無事 移植逼  
窓竹兩竿

問梅

締盟與我約黃昏 新月一圓 迎月偏知是返魂 依例杜藥入水村 自我不慵慵不果 必遭黃  
鳥訴清冤

四月

送春旬日不堪情 洗盡殘芳雨亦晴 可笑吾儕好新甚 起聞賣  
過松魚聲

蝶

身與芳叢常相依 花陰被露濕金衣 幽情無力抱枝立 夢入香  
場不易飛

福壽草

花名福壽最先開 五寸形軀暖已回 若向東君論苦節 幽香未  
必獨推梅

四月

雨送殘紅四月天 蘆笳管針一池泉 花神不敢離休得 猶在殘

海棠開有約病不果

羸病百方磨不磨 海棠時節負花多 閑愁不睡詩爲癖 我作因  
緣人作魔

尋梅

晚問梅花入僻鄉 寒腸語欲較幽香 須臾映水清輝甚 不是月  
明不是霜

貧甚

腸不寒空語不天 清貧例在貪清眠 小詩未巧窮先極 猶有栽  
花一畝田

芭蕉

坐擁薄衾豫判晴 雨聲過盡起風聲 夜深月明無消息 又得曉  
風鳴到明

春雨

清閑得雨策詩勳 細々絲々入夜聞 已向書窓添睡味 却於桃  
杏損三分

落花

清苔碎玉散西東 錦綉鋪庭花後風 驚語鶯來驚夢蝶 晴陰疊  
碧一林空

紅葉

天遇吾儕本不倫 三春好景得詩工 秋來又變清霜白 染出山  
々千萬紅

秋聲

新井文山篇

蜂刺蝶邊

桃

東君起君占花魁 與我較慵醉眼開 此約有期且盡興 山靈不  
許再尋來

舟尋花

與花交結有前因 取次清吟知寫真 淡沲水光柳陰外 不妨呼  
作畫中人

春日

喜晴眸屬海棠簷 貪看紅粧太不廉 巢燕一時殺風景 掠花蹴  
落入珠簾

過某

閑行避暑倚槎牙 自過西隣栽竹家 數畝琅玕不計富 清陰日  
淪午時茶

牽牛花

元學仙家服碧丹 十分清極骨全寒 靚粧朝日身隨化 不似凡  
花買醉看

又

羸病貪眠怕覺遲 宿醒扶起負朝期 丁寧葉底瑤理碧 留到趙  
眉亭午時

癸酉七夕

佳期近迫動芳魂 忽脫機杼婉出關 添雨銀河高幾尺 裁詩且  
細問天孫

際水有松繞屋橫

聲發吼鳴

送清陰又弄新晴 夜來忽化蒼龍否 暗激秋  
聲發吼鳴

臨居

植梅正愜此心寬 水外蝸廬容膝安 早起對花較清節 知他輸  
了十分寒

畫

秋容老矣鯉魚風 淡々青山接碧空 絕似南房好風景 漁舟罷  
釣入蘆中

鏡湖晚眺

遠樹擁村西又東 芙蓉落水菱花中 人聲喧闐舟不先 只有菰  
蒲稍動風

冬

酒興詩情掃地盡 淡思蕭想注於冬 菊花委地梅猶未 只有山  
茶經雨濃

壬申四月遊大正院

枕簟甌鉢與我俱 供厨玉版誅龍雞 稚牙果懷凌雲勢 胸次益  
清俗骨無

編者

出洞疑身坐畫圖 牛羊爲伴自相呼 一支溪水桃千樹 仙艸結  
時花已無



增間靈泉 人傳呼癡村

本入癡村學癡俗 却將仙液化凡身 靈漿換骨詩緣未 盪盡塵

情半不真 千丈怪蛇須縷繁 古藤有靈達泉源 忽開智竅癡因盡 撲去頑

魔無半痕 有蟬入窓無畏色 將爾風吟羽化生 來先當我石泉性 清音難敵仙衣客 孰與吾

儕詩句鳴 松魚 本邦四月、貴新太甚、十倍于平價、非貴人豪客、不能餐。

十分聲價正逢辰 先繪肥紅赤玉鱗 忽笑先生尤負雅 誇言措

大已嘗新 胡支 開向詩翁誇且親 十分嫵媚百條新 芳情誰肯言知己 昨夜西

風亂錦茵 十五夜賞月 癸酉 (文化十年) 乍晴乍暗不言明 祈望偏愁賞玩情 已至三更人定後 冰輪高

擁一年清 落葉 早落絲風飄蟲傷 霜庭面々逐方忙 須臾刻畫黃金地 不讓黃

花持晚粧 櫻花 美人招我欲交言 形隔翠簾日又昏 探向香烟香靄裏 不尋芳

四月 梅梢綿豆子鱗々 僅現清香化後身 深友不忘雪中盟 綠蔭正

庇葛天民 祈雨 金蛇掣來滅又生 雷公歎作不平鳴 須臾銀竹飛如矢 已報頑

民懇祈情 贈菊 嘗伴吟翁獨搏場 歎由蝶使嫁僊鄉 西風秋競黃金印 不負陶

家骨格香 鷹嶼 倩刀獨探洞中天 骨換吟翁今欲仙 岸上蒼龍松樹老 不知誰

種又幾年 菊 霜下寒英鏡作肝 瘦顏欲笑露唇乾 珍重百顆黃金印 飽領秋

光好到剎 獨殿衆葩別出奇 時哉時頻促新詩 一流清彩尤難得 更有傲

霜苦節枝 仲冬某寺問菊 花傑鬪芳起人傑 蝶媒遠訪上方家 霜寒給我君先謝 別有情

知更厚花 春夜 風破淡烟月色明 千金在此半宵晴 一庭清影梨花白 人向梨

新井文山篇

樹間芳魂 秋江 朝鍊晚放艇新詩 世人誤認號林逋 月鈞釣出黃金尺 半夜歸

來吾畫吾 村行 野溪橋響沁詩魂 近有紅霞護洞門 幽徑無人日尤暖 獨隨鷄

犬入花村 北里櫻花 花深一處女仙州 芳靨香肌自啣羞 姿色半殘連日雨 令人無

地解春愁 上野櫻花 飛閣涉空壘々長 花深湖外一僧房 粘衣不冷漫天雪 處々僊

風自在香 新晴 宿雨纖連三日同 簷聲歎斷夕陽風 晚晴喧有兒童報 染出西

身棄草堤寒水外 雲鬢不梳負春情 縱無宦道織要嬌 別有院

家青眼清 雪中尋梅 凍雲凝雨雪花繁 六出元無剪刻痕 都眩詩眸出銀海 餘香風

送認梅村 花白處行 元琳宅冬牡丹 後菊先梅分外香 妖紅特地媚寒鄉 故將詩律千鈞力 引得喧

陽護異粧 和蛺蝶牡丹 筆破天機密彩成 自然出此十分晴 精神最在偷香蝶 風動似

驚還不驚 村行 夾路桃梨驢不前 繞村溪水柳迷烟 吟身瘦盡詩尤老 不學蜂

狂學蝶顛 隱居 居士本無干世策 詩聲引我起虛聲 梅花韻格蒼龍骨 已落人

間非爲名 書齋 竹新迸筍逼梧桐 翁自落書類蠹蟲 香篆成文烟縷靜 榴花時

落一簾風 初夏 書窓幃外夜雷輕 病羸因知今日晴 量減由來添酒敵 忽々花

送首魁時 凱旋在近約秋期 破賊手題中興詩 豈下漢家錄功石 檻車囚

送首魁時

送首魁時

送首魁時

送首魁時

送首魁時

送首魁時

送首魁時

送首魁時



文山詩集(未定稿)卷四

〔乙亥集〕文化十二年

元旦  
龍顏有喜賀芳辰 天象分明斗建寅 此日庭梅開幾朶 清香輪  
與讀書人

雪夜  
一夜寒水闌淺流 半宵無客棹輕舟 玻璃鋪遍梅邊雪 月淡瓊  
瑤十二樓

春寒  
輕霏密鋪淡々風 忽將細雨襲墻東 已於梅梢收香去 却向桃  
花出小紅  
旬日春寒難惹情 閑人懶起臥天明 學音鶯語時猶澁 却向花  
陰吃々鳴

上午本邦以二月是日 賽稻荷祠 往來相賀 都鄙皆然 猶彼土社日 今年上午二月二日 而房地暖時桃開  
飄出紅旗鼓似雷 遊人喧闐地生埃 朱顏有我如泥醉 不爲桃  
花映面開  
幾樹桃花上午天 何人結義醉芳筵 家童扶起踏花過 緣是田  
翁祝有年 灌佛

身披鶴鬢乘銀鸞 貝闕銀樓白玉闌 清迫肌膚光奪目 醉中夢  
在月宮寒

水晶世界水晶宮 墜下桂花銀粟叢 誤洩廣寒宮裡祕 天香吹  
送五更風  
屈指今宵十分月 一分雲蝕九分晴 桂花併與清光白 珍重高  
標帶露明

讀書忝吟傲李義山 律二絕四

對雪研求腸九回 不須對酒玉山頹 聲微自在眠魔迫 律變本  
由况味摧 頃刻喜悲逢境發 卷中苦樂趁人催 三冬讀破書千  
卷 愧莫一分供梁材  
及時不勤果無爲 不借蘭釭闌月移 特厭南柯適分夢 尤甘黃  
卷不吾欺 半宵報柝頻傾耳 終日無賓或解頤 自笑讀書千萬  
卷 向人却祝不逢時

春

誰把離騷誦晚風 數峰雨歇聳蒼穹 桃花籬落柳邊水 聲在紅  
烟碧霧中

夏

徹夜讀書月爲伴 小樓近對紫薇開 疎簾高卷向花坐 滿面清  
涼風送來

秋

小齋構枕漣漪岸 前有病荷瘦立江 日暮風來蘆葦戰 水禽啼  
過讀書窓

有漏金仙天縱才 花亭今向水中開 呱聲不絕處身大 先指浴  
盤爲八垠

春眠

紅日一竿露不乾 聚香國裡倚欄干 即時夢覺人慵起 蛺蝶一  
雙戲牡丹

小詩換具酌春缸 渴夢誰催起吞江 冷極即時聳身寤 槐陰密  
疊落半窓

子規有感

惜春聲兼訴冤聲 坐聽小窓月色明 因子歡歸已歸得 不思播  
種老農耕

薔薇

元非貞傲厭諛譁 支幹露針爲護花 不肯似他任攀折 十分冤  
冶媚明霞

殿春花接麥秋天 泣曉丹唇滬露鮮 一語素無舌針毒 身邊綠  
刺任天然

良夜小集

妻藏桂醕不爲貧 與賞洪鈞轉玉輪 地白半庭銀似月 夜深不  
信月如銀

涼氣砭膚衣怯單 人間好酥抵仙餐 坐中有此詩人瘦 醒對冰  
輪不勝寒

仙媛奉硯重磨墨 醉在月宮攬筆賦 元是嫦娥嫌洩祕 半宵夢  
破我無知

冬

邇聽五伊發病軀 定知窓月挂梅樾 前溪吾也回舟去 即是雪  
中訪戴圖

村行

幽溪通處小桃源 密有紅霞護洞門 草徑無人日尤暖 獨隨鷄  
犬入花村

(前卷に同じ村行と題して、後半は幽徑と草徑との一字の相違あるのみにて他は全く同じき詩あり、但し前半を異にするが故に此に出す。編者)

夏日

疎桐密竹影交加 忽健懦身起試茶 猶有炎威消不盡 夕陽留  
在石榴花

病臥探韻

吟身懷病是詩胎 依例吟評心不灰 記取村々放花遍 窓前有  
蝶帶香來

病骸怕雨不看花 却鼓吟情日益加 雨霽急尋有花郭 香泥踏  
遍落花涯

烟霞入髓發詩葩 吟哦寄身廬似蝸 庭樹爲陰猶未起 夢魂化  
蝶戀殘花

寒食清明容易過 此中情思果如何 佳詩常對繁花枝 北枝南  
綠日加多



枝北枝南綠日加 春光兼聚落誰家 偶然扶起繞籬步 猶剩晚

窓向窓紗寫影明 露顏趁月從更傾 爲隣身不共梅發 素有檀

開三兩花

心徹骨清

榴花 日蒸焰々燒清空 紺碧叢中萬點紅 遠映遙天近書閣 珊瑚高

葛丞相 塵俗囂喧百不聞 豪然氣勢應天文 此公非世逃名者 人區臥

檻晚霞風

龍擬待雲

春居 疎花密柳締清交 後庵幽居鎖竹梢 訝取乃翁卷簾坐 懼妨乳

范蠡 用才無地太平天 名遂功成稱息肩 滿室黃金聚還散 胸中固

燕定新巢

有買山錢

兩國納涼 高樓水次似魚鱗 鈎卷珠簾聲競新 淨除人間煩苦熱 百千遊

梅 黃昏寫影半斜欹 雪後幽尋與雪期 尤是鍾情要疎處 清香不

舫繫橋人

在最繁枝

一齊喝采烟花戲 鍵玉二家技競新 烟罨碧波江口闊 行天人

一水壘嶂 岸畔桃花擊礮山 溪南地可屋三間 移居欲領畫中趣 還被家

是過橋人

人笑我頑

沒膝田翁並鉏犁 山田設闢接村堤 撥耕相問判晴雨 猶聽乳

村面東南通一溪 有花此境不孤栖 尋春騷客時々過 轉樹黃

鳩隔樹啼

鷓鴣吃々啼

四月江南梅熟天 半簾絲雨濕香烟 聲々細送簷頭滴 染出榴

北里清明前後。列植櫻花於衛衙。衆妓分隊舒行。百媚兼

花紅欲然

樓者。絡繹接踵。往來喧闐。郭中之盛。槩倍於常盛。

月蝕

對惜春人

銅樣雲間黑水精 潛光遠向九門行 不知冤屈欲何訴 天定左

塵區佳人天上僊 轉生淪適結塵緣 十年辛苦青樓夢 身背櫻

邊露寸明

梨花

梨花影眠

在一林巔

各樣靚粧都入時 對花情致與花宜 了鬟不會阿娘意 指點櫻

三園堤 譜花吾不舊時顏 十里長堤往又還 何事流鶯轉鶯遷 聯鞍有

花說盛衰

客過林間

萬斛清愁向誰訴 不容更誤十年期 花時常被狂風妬 緩了一

夕嵐紫色始於紅 八葉芙蓉放晚風 遠在駿西千里外 日春頰

句子滿枝

鏡湖望富二

看花幽討約西隣 春服已成岸烏巾 步到去年賞花處 既遭人

面鏡湖東

領十分春

水村夕陽

菱沼書所見

山園一處半天霞

境似武陵溪僅通 人家處々小桃紅 菜花滿地人不見 只有紙

屬別人家

鷓鴣碧空

尋花

冷香暗結吐天葩 漸上闌干寫影斜 起捲翠簾看不見 半宵皎

日邇清明旬日晴

月在梨花

花半日情

郊行

夏景

舞蝶奉嬌鶯轉黃 閑人趁節偷閑忙 行々又出昨遊處 却失桃

認爲雨得元非雨

家楊柳鄉

影熟梅初

喜晴

紅葉

半句無我跨吟鞍 送雨東風料峭寒 今朝似晴窓白甚 爲花沐

樹不凄清山不童

浴問平安

林一色紅

早起

端午

殘星失色欲曙天 幽鳥一鳴破靄烟 早起揭簾恣四顧 櫻花雪

雨染烟梢梅半黃

新井文山篇

分楚粽香



梅雨

黃鬚老穗橫晴黯 收得漸々爛于場 饒舌入雲告天子 換人逐  
一訴遙天

偶成

晝永三眠日未頹 香烟結縷麝消灰 翠簾不捲慵鈎卷 時被清  
風吹放閑

紅葉

飽霜秋葉勝花時 忽被西風隨意吹 一道流紅滿川錦 此中知  
有惱人詩

枝上今無一葉風 夕陽影裏錦叢々 化工能變秋霜句 染出百  
林一樣紅

晚色宜看曉色同 早行疑入百花叢 臙脂滴墜梢頭露 已染客  
衣却不紅

菊

霜下瓊英寒瘦姿 花神促我寫新詩 幽見難狀殫思處 但在雨  
摧霜折時

誰學剪裁放夜涼 銀披金碎秀寒鄉 一時風來知真菊 緣是秋  
英到底香

學陶身世似癯仙 不用對籬爛醉眠 唯有清貧同渠者 入秋三  
月會無錢

九月十三日會于遣水昌隆寺 遣水ハ今ノ安房郡保田町遣水

入山證果果如何 寺在中峰伏妖魔 霜樹軀軀皆羅漢 比他五

香禾已成種花白 學家衣食出山田 一年三百餘堪樂 免把雨  
晴訴上天  
主人平生閑暇無事。身不服田畝家事。一附家長。屬  
者命舍以百洲。因賦此

水潔元緣流自東 天然壽樂在閑中 閑中試對長流水 歷算灣  
々百不窮

畫蘭

蝶入露叢狂欲拋 無心使我出書巢 強將詩瘦和幽節 枉縮三  
秋莫逆交

葡萄 龍鬚一架熟清秋 嚼作曉寒九月霜 詩老豪饒強自爲 不將一  
斗博涼州

茶

手滄龍團破悶情 甌鐺分置小窓明 蟹魚眼過細珠躍 作雨洗  
簷瀉竹聲

一椀驅憂如決河 詩情得汝百千過 午窓時有策動大 卷上醺  
魔立倒戈

詩魔茶癖老吟髭 出入枯腸吐納奇 茶政得宜家政荒 滿腹中  
便妻啼飢

水仙

清霜淬玉沁冰魂 帶雪柔英立水村 元欠好枝自佳處 擬將短  
句洗清冤 山谷老人云只比寒梅無好枝

百不妨多 東窓可三四人坐 貝葉翻經西引明 幽鳥不啼山不邃 碁聲隔  
竹有秋聲 地名遣水亂山重 水繞村南獨自春 極目秋天淡於水 蓼花却  
出水中濃 欲賦四愁更慙愁 不悲秋客却悲秋 芙蓉零落梧桐殺 階下斷  
腸獨含羞 滿地黃金日午天 紅波穠穠溢東阡 吟人未免方頭譏 不避擔  
夫步稻田 月比前宵才覺清 今宵不必十分明 風流天子自爲備 無限人  
間隨吠聲 山茶花 竊嗤紅葉藉秋霜 不伐寒鄉獨搏場 泣露紅粧乾欲拂 緣誰詩  
力挽暄陽 甘受雪霜迎北風 幽貞不入百花叢 天姿難把凡紅比 別出丹  
心一種紅 收稻 黃金滿地畝聯天 汗浹羸牛驅不前 辛苦祇知有今日 豐登豈  
是卜他年 腰鎌手斧尙隨役 換酒易魚只任眠 香稻半成際秋  
社 公餘力作得私田 對人不伐我多田 却說今年輸去年 家釀纔成引隣酌 曾無縣  
吏夜催錢

花著金環放自秋 輕盈雪裏弄香柔 暗香離水恍難近 氣壓東  
方六十州 本邦買輸水仙於江戶者莫先於元名焉 溪水仙姿早媚秋 迎花獨信是神遊 瑤庭行盡無人處 香冷清  
溪三尺流 鋸山晚眺 襯苔落葉疊紅茵 遠洩斜陽別有春 路外桑田得村近 炊烟淡  
趁過橋人 氣勢衝天踞地垠 點沙石似蟹輪囷 斷崖風惡霜天緊 水碧銀  
刀潑刺鱗 踞江氣勢排蒼穹 雨景晴姿觀不同 晚斂斜陽山欲紫 鐘聲時  
在彩雲中 竹 玉槩攙雲翠萬竿 便遮火傘護西關 鳳鳴憂玉誰能使 別有清  
風透骨寒 梅 依例歲寒共結盟 烟庭小立對參橫 去年自築墻移竹 纔免害  
廬養玉英 雪夜煎茶 茶窓頻觸定誰欺 傾听無人聲稍疎 判得烟梢遭雪悶 放心讀  
畫讀殘書 四月 午窓鳥駭破閑眠 絲雨迎梅四月天 認取離騷江上曲 新聲時



在遡溪船

落蕊無香爲返魂

伴蜂隨蝶闌林園

綠陰滿地清閑地

元是當

時熟開村

火傘水輪如駒奔

賞花閑地老農屯

麥秋時節家々開

錦繡村

爲紺碧村

南天燭

冷葉不凋朱實堆

瘦軀著雪伴窓梅

飢禽啄飽蹴枝起

非懼小

獨認影來

柯々吐烟烘霜庭

葉底顆珠片頰青

破網斷罟隨處有

不論世

有護花鈴

雨餘點々綴珠垂

影動紙窓知鳥窺

爐外寒軀坐慵起

倩人封

護啄殘枝

儀子浦晚歸

池水溫噉暖可漁

曲灣如練似秋初

一程石路當山轉

黃葉村

南人賣魚

皺波著鳥似詩箋

畫裏誰催人上船

四面潭烟罩山密

蓼花斃

臥碧灣邊

浦頭烟冷些無風

洩日斷霞射水紅

歸艇無人吾與月

半宵流

在菱花中

雪夜煎茶

古鼎煎茶試雪乳

雲腹露味異平生

搜空腸取人難寐

坐聽琅

玕雪折聲

茶抵金丹却藥鎗

郡城漏鼓短長更

鴛鴦開亂似人襲

撤夜不

看收蔡兵

獸炭堆爐坐竹房

庭明疑月屯銀墻

天孫剪落風前玉

碎入梅

窗雪亦香

寒梅

踏雪閑行體生粟

冰魂切惱我吟魂

度橋斜指旗亭說

此是去

年醉倒村

比梅儂亦合衣單

憚說幽尋怕峭寒

但是病骸慵度水

古瓶挿

玉自由看

芙蓉峰

啞雪半旬坐白氈

洪崖再勞摩吾肩

耳根洞徹聞仙樂

眼界區

分窮大千

移坐嘯吟致玄鶴

驚人詩句問青天

塵緣洗盡身隨

瘦

不負人間呼癯仙

郊行

清明時節氣清明

鴨綠不皺水鑑平

燕剪觸花疊香壘

鶯簧滋

露吐新聲

一堤嫩草牛群睡

滿地落紅人避行

自笑閑人鍊詩

開

半旬負箇十分晴

觀兒闘蛛

撓枝粘葉作金城

慎密結廬養老兵

一尺銀絲縋上下

幾分鐵

嘴淬研精

臨場速々爭先進

追北輕々伸脚行

戲罷身就露叢

憩

不教密網挂簷晴

尋花

文山詩集(未定稿)卷五

〔丙子集〕文化十三年

自漁

花間哦句甘如蜜

蜂蝶媒吾似放衙

自笑不才閑日月

常誇多

病好生涯

推敲無語非忘我

風雨傷心怯負花

到處名園仍自

主

醉顛不管是誰家

自把簞竿爲生活

不知人喚稱漁翁

葦篷臥處多南岸

罷釣歸

時果北風

世外艱難舟出沒

桃花籬落水西東

但疑身登天宮

去

一夢樓臺蜃氣中

金氣砭膚曉難抵

旋舟南岸若春風

蘆花白似秋江白

蓼葢紅

於夕照紅

是日有魚當酒資

即時得句著吟筒

閑中適趣人不

會

自我漫然喚釣翁

梅

不敢品評獨搏場

爲他被誤喚情郎

但知哦句唇加冷

緣是咏

梅脾畢香

冰雪魂返月波岸

玻璃影濕水雲鄉

十分於我詩窮

足

未必好詩出枯腸

春日

不學老農搏事禾

生來多病得三多

透簾香是風吹送

落研花

由鶯踏過

遊杖欠錢無酒癖

寒腸吐秀覺詩魔

漫吟但得天機

發

不覓世人一憚和

鶯鴦滋

肥

社前三日蒙々雨

黃鳥不

啼蝶懶飛

小艇渡頭嫌水肥

賞花有約事多違

月下無人聳肩立

滿身香

露不知寒

梨花清影上闌干

起趁晴宵子細看

銷紅寒口有威力

花上不

尤不語鶯

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

端坐似愁心不平

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力

春衫對此小窓明

銷紅寒口有威力



鶯

晴餘新試縷金衣 暮柳戀花任蝶譏 上苑織成錦千匹 擲軀百轉學梭飛  
 金衣得雨甚狂癡 宛轉戀花不自持 蹴顫香梢驚起立 動人聲在欲飛時  
 抵死爲花卜此生 丁寧著意喚春晴 庸紅凡紫關思有 千萬花爲千萬聲  
 情厚濃黃澁舌鶯 慘紅愁綠形分明 惜春意異惜花意 今日聲非昨日聲  
 春日 山陰結靄易黃昏 機穢芒蛙行不煩 堤路□□果逢雨 先生猶問杏花村  
 批紅判白尤多事 似蝶學蜂甚有情 童子平生見爲癖 山妻近日慣呼卿  
 花筵揮筆謝花神 風送餘芳繞此身 月下醉歸橋獨木 只如乘鶴古仙人  
 入山近識此身尊 自在到尋各々園 幕地櫻花受風墜 花陰人立玉乾坤  
 途中結伴卜陰晴 終日探春一意行 茶店酒樓相陪坐 花陰臨別不知名  
 花底黃鸝似喚名 一林春雨得風晴 菜花畦外尋花客 終日黃金界裡行

竹

竹外鳳鳴雨忽晴 清風掠地入軒楹 穉龍乘勢衝烟起 千畝輕雷籟落聲  
 籟龍兒出小琅玕 犢角使人膽更寒 元是齋中第一友 不容人斫勸加餐  
 翠滴龍孫綠一叢 遮留火傘立庭東 昨洗新竹開三逕 一道清涼簾外風  
 避暑 負郭小村埭路長 溉田斲水野花香 竹棚紋簟尋涼坐 不似隣翁盡日忙  
 各自成村處々家 槐陰相值談桑麻 閑人見慣性爲癖 近學樊遲試種瓜  
 枕水樓臺水界鄉 清風一面荷花香 葦簾半揭□□坐 知是誰家新嫁娘  
 花溪閑居 敢向里中不稱魁 清閑脫俗絕塵埃 春花挾水舟橫岸 知是隱人時往來  
 不許他人來卜隣 世間富貴在閑身 午鷄茶社傍花去 呼渡人皆被錦人  
 花樹高低壓水涯 愛幽小屋矮如蝸 人間樂事於吾足 朝釣溪魚午煮茶  
 牡丹

春光一段爲他香 枉費騷人爲主張 富貴於花渾不管 天然無物比紅粧

白牡丹

草亭亦是沈香亭 露坐凝香雲母屏 起向月中看不見 襲人瓊液浮空庭  
 嘗向梅花恨生後 却嫌妖艷稱弟兄 肌膚照眼皆瓔珞 骨格逼人盡水晶  
 液滴清香露一庭 影明□□夜三更 塵身洗盡清如水 不與人間富貴名

雨中海棠

不關黃鳥問平安 雨駭春眠大半殘 昨夜□□被酒 起來無力對闌干  
 日々對花學酒卮 盛筵常趁異香移 不須嬌臉日高睡 唯愛曉粧露冷遲  
 醉顏浴罷判新晴 好藉月光費品評 靜夜不聞物喧闐 一時尋出錦官城

宮詞

偏妬幽香蝶巧偷 搔頭玉碎向花投 額顏羞照青銅黑 燕語呢喃燕子樓  
 桃杏謝枝紅藥濃 妬花新粧麗冶容 不知城外春深淺 試問嬌鶯與蜜蜂  
 一場春夢覺無痕 半日不言非憚言 病怯□□被風折 殘粧無力立黃昏

納涼 兩國竹枝

銀波清灑似瑤池 妓舫逐涼取路遲 驀地水風吹箔過 新聲齊唱竹枝詞  
 蘭燈銀燭綴明星 吹面清風醉半醒 戶戶醉人風不醒 小力賭酒間占勝著  
 樓上三絃樓下箏 入時雲鬢蠟油清 須臾閃出烟華戲 兩岸共喚玉屋聲

蓮

香靄籠舟素水程 紅霞十里裊衣清 梵王宮裡雨花地 曉日分光散赤城  
 玉色之人雲錦裳 金蓮步步水中央 斷霞洩日瑤池曉 滿面清風自在香  
 草叢々裡臙脂肌 國色比君能有誰 只是天然君子質 枉遭人喚醉西施

送老軒假山

金波如疊石奇頑 坐我湘江露月間 一撥朱□人不見 不知誰是九疑山  
 潺湲曲々注湖心 一坐釣磯十竹陰 知否金魚遽失隊 幽禽掠水過西林  
 古景今憑誰手存 無花也復小桃源 溪頭坐久無鷄犬 竹樹深藏秦代村  
 竹



影瘦新筠骨相寒 旬餘脫苞碧琅干 書窓懇擇宜看地 移種墻東四五竿

洗竹漫營避暑亭 藤床移向綠陰庭 鳳聲取次得風起 清夢幾時喚不醒

解籜三旬身益輕 烟梢風觸出金聲 蒼龍忽卷雨雲起 新竹清於老竹清

七夕 別恨天孫不可逃 添憂金氣夜如號 不知人世如乞雨 添得天河幾尺高

獨笑天孫却懷憂 隔水機聲如織女 歸村吾獨憂身本自天游

是即牽牛 獨笑天孫却懷憂 隔水機聲如織女 歸村吾

強說別離斷衷腸 一年悲喜說難盡 遠隔銀河猶喚郎

銀漢漸明獨認秋 綵樓宴罷望牽牛 東風吹度人間曉 知是天孫獨懷憂

牽牛花 此時早起闔朝期 定知清曉花開遍 算至萬千不我欺

道裝切忌調紅噉 深護瘦顏綠葉繁 朝露密鋪碎又合 碧瑤理裏水銀奔

送逸洲師浴箱根溫泉 佇立身如畫中客 不疑此短長亭子日黃昏

詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

短長亭子日黃昏 詩在楓林錦繡村

佇立身如畫中客 不疑此

處一乾坤 換骨靈泉身欲仙 不知我是已癯禪 山高水綠詩家事 日夕吟

情任自然 日夕能詩誰討論 飛泉痊痾都無痕 愁霖只是惱人得 處々烟

迷柳外村 秋江獨釣 何人定寫釣翁真 香餌笑笑出沒鱗 眞箇我非干周者 蘆花江

上一閑人 到處鳴榔卽十洲 釣竿日々爲身謀 楓林岸畔移舟去 錦樣浮

江截不流 淡烟黃葉滿天秋 涼味適身不惹愁 水外斜陽紅似染 思詩人

在荻花舟 九月 糝糊秋樹暮天低 慣看山々殆易迷 一帶淡烟遮不盡 夕陽染

在數峰西 已有丹楓映夕陽 却無殘菊帶清霜 秋思不盡斷堦上 猶剩木

犀幾斛香 籬下繁霜報晴時 滿天慘意悉秋聲 靚粧一簇不爲老 形瘦無

人淩落英 哀叫一聲又兩聲 淡烟籠影不分明 蘆花水濶寒潭裡 轉寫華

箋字幾行 竹窓燈火屬詩儔 不認簷頭掛月鈎 半夜不眠江上雁 幾聲喚

送蠟油來 仲秋杏梅盛開 勤六油をよこせ 晴江晚眺 水好山奇紅葉秋

人試放舟 山繞霜灣家欲無 雨餘微暖適頑軀 金波不碎浪聲裏 隊雁衝

烟入菰蒲 脚倦軟沙任杖扶 棲鴉西去似呼吾 夕陽黃葉遮村盡 蜀錦叢

中家有無 斜照不收水界山 櫓聲人語落波間 霜汀一面無家處 漁艇鯉

々戴月還 木犀 金粟幾堆經雨殘 天香面々逼衣寒 始知仙味薰人醉 不醉吟

身欲起難 庸紫凡紅誰比得 天分清趣俗無些 世人不敢窺仙味 却說天

香亦是花 至月賞梅 人間不見一分陽 却有園梅依舊香 一壺松醪逐香坐 向人不

詰問宮商 枕肱幾卷讀南華 稍信生涯亦畫蛇 不識乾坤爲底事 霜庭閑

立嗅梅花 設宴席間闕珍烹 家人相聚笑飢餓 一箋苦茗一聯句 擬向梅

花與鬪清

起幾聲愁 時樂山丁家艱故語及 聲々叫月得霜驚 忽排雲烟似陣橫 獨立印畦皆蚪斗 群飛落

水盡眞行 送潛山之江戶 一語抵金家不貧 離堂燕々似留人 向人常說詩窮事 何計在

君今日身 夏日 一炷香烟伴懶眠 清風一味我疑仙 世間壽樂無他覓 無事自

養卽是天 野詩押以賀康哉翁七十五壽筵。嘗觀鳴戶春舉孤猿叢樹

圖。能極其巧。殊於花竹口口更妙。雖未唔意欣。故及

墨花耀池彩雲靨 相會茶顛兼醉顛 孫子賀君還自賀 年豐有

鶴啄青田 入耳聲々足自娛 晴簷紅日雀呼雛 知將春舉丹青手 爲畫戲

花百老圖 丙子仲秋後風邪盛行。名以坎六。厭勝之。以穉餅蕎麥團

子。爲供。工廢肆農輟耕。家々交慶。一日儀如新年。村

々相繼而然。不知 誰唱之誰和之。其始於何所 終於何

所。我里當于十月十一日。二絕爲紀。

野羹薄酒相追陪 村婦坐庖屠芋魁 也是田家小正月 麻梗杉

菜挿簾來 一年二度賞春杯 天意先人梅杏開 門外有聲頻拍手 歌過郎



鶴

警露長鳴不似愁 玉衣高舉屬誰儔 半宵不睡寒江月 喚醒詩人蘆外舟  
寫音清趣入幽琴 也是冰霜一寸心 孤立素非樊籠者 梅花帳外放仙禽

鷹

壁頭紅條簇祥雲 一報主恩意甚勤 劍翎冲天知擢鶴 雲間脫毛雪紛々

寒林歸鴉圖

雪餘冰柱出球琳 四五十鴉六七林 簡裏有家人不見 聲和天籟一絃琴

青帘高揭夕陽樓

寸々琅玕楚麥疇 山瘦林鴉栖可數 冰融淺水繞還流

寒鴉掠樹過江濱

下有溪水閉躍鱗 凍髭森然勁如鐵 擔薪人伴思詩人

茶社會友

都統小籠自爲謀 茶中百事無他求 今宵坐客皆新話 奇窟怪窠務冥搜

雪餘惹客茅三間

隣友入門笑我頑 一種奇觀今日具 一今日茶窓添一種 瓊瑤庭樹玉英山

寒威箝口默如囚

彫鐫詩腸死不休 茶政於身安乃足 梅花村裏小封侯

文山詩集 (未定稿) 卷六

〔丁丑集〕 文化十四年

貓

兒女乘閑聘狸奴 買魚屠肉轉丸呼 頑心只是欺人得 戲去犬邊捋虎鬚

送某西遊

素月紅花見在身 交情逐境有雷陳 怪窠奇窟每人問 不是懷憂遠謫人

離亭黃鳥聲頻澁

早促杜鵑強勸歸 眼底無花春已盡 餘香併送野薔薇 送龍甫之江戶

磬水翁六十

古鼎漿酥異國珍 餘香遠醉苦吟身 黃花列位黃金印 定是坐賓紫綬人

於原村女賣薪圖

夢中戲樂幾年榮 銀闕貝樓箇々名 猶是當皆舊脂粉 羞顏喚過賣薪聲

村夫擔簞圖

一擔不輕兩擔心 可中定是萬黃金 太平民富無人懼 不護大刀長戟森

新井文山篇

我聞鳴戶阿州險 奔渦卷注天一隅 莊怪變相出名士 就中鳴者醫且儒 別有春風著物溫 知是冥中有神扶 能畫幽人見愈瘡 飛禽潛魚洩秘樞 傳神筆力不可當 氣勢一排十萬夫 已看猿狖愁叫月 今聞孔雀啄散珠 未識面心眷戀眉 無可<sup>?</sup>由接 毫換濡 藉君神通自在力 醫我詩骨吟骸枯 詩畫一律出天趣 試寫溪藤諾<sup>可</sup>耶無 春水如染鴨頭綠 野花埋岸草繁蕪 爲將無盡造化手 揮出雙鯉出藻圖 (草稿)

春眠

得暖病骸却脚婆 一場曉夢入南柯 閑人不起日三竿 黃鳥掠飛花落多

佳人引我入天闈

身在畫樓傷別魂 只是塵緣難去盡 花窓春夢覺無痕

一分杯味一分愚

醉笑世人却笑吾 酒渴焦腸眠忽覺 井頭面命喚奚奴

櫻

輕標軟朶逐風低 到處天香路欲迷 只是不來可三日 瓊瑤委地化爲泥

自在逐香蜂蝶身

花筵我醉嚇花神 黃昏<sup>崑山晚風吹落</sup>碎落風前玉 各々清粧帶雪人

香飄樓後又樓前

花落神通自在天 一地清光銀世界 境中人

是月中仙

春雨

醒起對花覺峭寒 雨中何似月中看 惱人檻外胭脂露 濕透紅唇欲語難

幾日閑居悶不禁

愁霖却促看花心 對門麥穗垂攢針 夾路菜

花碎披金

元爲催花々却老 惜花乞此午時晴 疎簾不捲心如醉 困蝶臥

枝妬懶鶯

似晴不晴雨亦稀 寒不必寒人脫衣 梅子連枝如豆落 蝶衣襯



草似花飛

桃花

溪外洞門如鐵城 種桃人去不知名 平生一樣助嬌具 奇在仙  
村雨後晴 境似人間無俗喧 春風著樹見仙根 爛霞處々紅如彩 點綴水  
南水北村

花下飲

梅花籬落試東風 一壺瓊漿稱枯躬 身似神仙班裏客 暗香薰  
出太清宮 幽淚漲胸收不收 半宵不寢坐如囚 平生無恨梅窓月 今日小  
詩字々愁 時予丁母憂

落盡繡衣花下筵 時豪自稱地行仙 人家一處在巔住 鷄喚雲  
中犬吠天

尋春

昨夜催花雨一番 尺書結伴趁微暄 春泥一路困人甚 歷盡江  
南處々村 探勝莎衣雨亦佳 路傍垂柳任他遮 杏花村裏題詩處 昨夢尋  
春醉倒家 滿地堆紅路欲無 避花豈待杖藜扶 渡頭又復一過雨 隔水柳  
陰人相呼

五月廿五大會于書癡堂

老米鳴書於潔癡 大蘇富學苦官癡 二公癡所無人會 說夢癡

村中午牌听鳴鷄

罷馬草堤見水嘶 只是乃翁頑到底 教童頻

促餉田妻

梅雨蒙々屬麥秋 黃穗爛臥老農愁 隣家何事機聲續 蠶事於

吾猶未收

旱甚乞雨

曉來霧氣不降雨 却激炎威泣老翁 水際桔槔俛仰開 高樓獨

唯管絃聲

一連五十雨無些 畏日增威稻葉焚 鬱氣蒸人夜不寢 時々開

戶卜癡雲

天下安危係于農 何爲惜漢水千鐘 好將詩律清新力 驅出黑

雲興潛龍

蟬

羽化仙風自在身 不知何苦出哀呻 清虛咽露韻旋巧 別有新

蟬劣做響

神丹和露得精神 乃是天仙羽化身 樹底無人驚忽去 還來屋

角伴吟人

小羽大宮股腹中 俗詩奈此滿腔空 半時驟雨半時霽 處々清

音樹底風

螢

數箇流星跡似追 弱流軟草寄身宜 即時一點離群去 咫尺近

人轉又移

越女怨魂結水鄉 化爲虫吐焦身光 憂情在々至今有 占斷愁

人反笑癡

茶具琴書到處隨 新笋解籜影離々 清陰密結綠如許 已倍去

年避暑時

君自臨池外世人 官情半箇不妨真 寸絹尺素書無剩 張芝前

身公後身

不敢以書鳴曰書 英雄何引世人譽 胸中巖壑龍蛇走 出是古

賢勤學餘

瓜

不祈仙方沁枯腸 蜜津生頰唾成章 向盤堆肉黃金色 當熟嚼

水甘露漿

珍重甘腴蠟蜜房 鸞刀削玉幾分香 一瓣落喉如滌暑 潤透南

人涸渴腸

溪橋歸樵

烟迷水外綠楊堤 簡是埭南簡是西 一擔插花薪不重 嫌橋却

出架橋溪

歸村樵嘔暮爲期 險石怪流非問奇 中有一翁頑似我 賞花坐

待月明時

平生百綴稱身衣 花送出山月伴歸 肚裏不知人畫我 長堤短

杓入柴扉

初夏

會無山雨破芭蕉 却有清陰歸柳條 紅藥無花庭寂々 雙飛蛺

蝶應誰招

烟慘草涼

草叢々裏闌清輝 已照莎庭又照扉 團扇就他如捕影 冷光明

滅誑人飛

訪隱者不遇 竹風拂盡世塵氛 抱節稱君今日分 綠樹掩門人不在 招童傳

語曰吾文

山隔山來山隱山 隱山山邃隔山山 入山知得住山貴 飽領青

山不說山

老僕應門古佛生 未來現在說忘名 主翁也是神仙耳 風末傳

來鐵笛聲

月夜舟下二州

月吐長江々吞天 淡烟一抹錦雲箋 遊舫訪落龍魚窟 水府始

知今謫仙

萬屋々中人演戲 千樓々上妓彈箏 繁華一樣非吾事 一斗新

篇醉月行

自然圓鏡有誰鑄 露凝氣清光似冬 上下玻璃天一碧 遊魚呷

浪化金龍

梅雨

黃梅已熟雨如烟 却染榴花紅欲然 氣濕在人看不見 更張石

上舊時琴

遠樹前山鎖濕雲 閑池受雨却無紋 細聞只是隣鷄午 一縷香

烟遺篆文



灌佛以來夏五前 些涼凝氣熱梅天 出簷燕子聲々濕 傳屋蛛

山乃是閑 不知何意棲青山 弄月還忘躬礙閑 有否月中真殿宇 詩章不

糸顆々聯 小舟晚興 雜賦 湖心著艇有精神 醉月歌風太古民 水面不波銀世界 冷烟混

朽在人間 紫薇 扇頭楷字小於豆 樓上文章非草麻 不似樂天在禁省 自由身

影似無人 小舟流漾水雲鄉 不是美魚爲口忙 花影浮沈天上下 風醒烟

對紫薇花 生來不肯媚春風 執拗因何百日紅 長眉迫人威可畏 錦英誇

似染不深染不紅 吳江錦繡厠青楓 涼風衣薄蘆花絮 秋在月

箇炎天中 秋日村居 畝々祥雲金玉鄉 田禾老竦似髻芒 分泉竹筧無人顧 際水枯

明露白中 山近不明樹不青 不知雲影現池萍 須臾月上白於練 誰就嘴

棹獨自昂 爲誰辛苦呈吟材 兩部鼓吹水際催 唯是前身蚪斗質 掉頭出

洲安水亭 石榴 嫩叢青裏軟香紅 宮裡抹黃時世粧 猩血染唇心不嘍 聾身猶

打稻聲々處處家 却迷箇々舊籬笆 月村如水白無路 便是堤

借夕陽光 傳說昔公淪謫窮 思朝怒焰見孤忠 熱中不洩如然耳 失箇天

晚烟密結樹難紅 淡々夕陽淡々風 罷釣老翁魚貫柳 潺湲伴

然噴火紅 噴焉 則化爲烟 戶闔爲之火起 噴榴 求仙不必入深山 唯卜此身日々閑 方朔九千適心耳 不知金

早稻已收晚亦收 半年辛苦我先秋 原田無際黃雲舖 中有叱

馬亦人間 出山還復苦羨山 豈愛金鸞殿上閑 不信酒顛爲公累 甘心奉

聲驅羸牛 良夜 一行飛動月明天 垂針真如鐵柱堅 勢溢吳江幅疑隘 丹楓亂

命謫人間 聞說遠逃棲碧山 何思詩句落人間 人間隨處有閑適 未必入

點錦雲箋 眞口口端寫碧空 轉爲行草過江東 遠人有怨說思慮 都在雁

高扶中天水玉輪 蟲聲清徹四無人 冷香著物皆銀色 銀色全

水畫詩送河繼明之江戶 其意蓋在以其 所得誇彼人士 大寰天上有誰知 今在人間出此奇 水面即時隨手見 盆中畫

非月色倫 水吐玉輪冷欲流 小舟邀月試仙遊 漁人只有似吾處 遠聽櫓

聲斷續中 是腹中詩 老喜山南水北陽 入春例爲問梅忙 一痕霜月板橋白 甘與水

聲動蓼洲 世界流銀白無物 只疑身坐水晶樓 有時樹影上闌暗 不是關

魂立水鄉 喜某至 撤燭三更坐月明 冷光如水似君清 眞詩別有難當處 如鐵蘇

雲欺雨愁 蓮露助嬌凝艷粧 花神奈此半時涼 霧圍忽被朝曦破 嬾起睡

州五字城 題畫 碧波疊々漾紅蓮 岸上水樓對紫烟 櫛櫛無時害清況 野禽隨

蓮夢裡香 報秋嬌艷吐天葩 豈讓春芳各立家 詩句此時評不定 空看花

處破高眠 夏景 巧綴畫成午霧圖 牡丹滋露沁香膚 逆風蛺蝶欲飛嬾 卽壁幾

落又開花 叢生霧外姮娥面 正立烟中君子鄉 何事半宵妬花雨 一池漲

回迷狸奴 牡丹新晴 不學羽衣不倩舟 華山富嶽試仙遊 筆奴洩祕泣神鬼 燈下臥

水漾殘香 爭榮叢菊古交情 眼界先明詩乃亨 有命元無羈繫累 酒量獨

看六十州 夜閱谷文晁日本名山圖

唯耻淵明 應律金風草木萎 時哉籬菊果逢時 何因濯露孤芳質 獨出傲

霜英傑姿 縱使筵邊無美醞 豈容花下賦頑詩 滿園香露香風

裏 無懶遊蜂蜜滿脾 苦竹園南椒塢邊 微香冉冉淚涓々 已悲節物同寒雁 忍委芳

心與暮蟬 細路獨來當此夕 清樽相伴省他年 紫雲新園移花

處 不取霜裁近御筵

秋聲

新井文山篇

六三



時稱太平聞角哀 西風觸樹送聲來 病羸入耳夢魂墜 欵枕半

宵起幾回

靜窓獨坐月初絃 忽報天兵今降天 起推軒窓人不見 霜林一

處剩寒烟

挂月初知窓外紅 經霜豈讓吳江楓 狂風捲地去無跡 一掃閑

庭蜀錦叢

漁父賣魚

晚市賣來忽不貧 餘魚獨鱸玉鱗々 自誇今日鱸魚美 不說清

閑在此身

眼界觀它佻薄風 擲書甘受喚漁翁 晚來僅有魚當酒 睢盱仰

天對大空

小々漁舟當頃田 有魚晚換杖頭錢 蓬窓霜白滿紅月 醉而不

眠醒而眠

冬日

一醉濁醪當玉醅 曾無世累襲人來 日寒兒子在傍坐 荊婦擁

爐煨芋魁

蘆荻森然列短矛 蕭々一處蓼花洲 新霜猶尙水難結 波面有

皮如紙流

渡狐或疑雲母屏 躍魚欲觸水晶城 銀池忽受噉紅烘 水面時

口碎有聲

至日賞梅

天意原明現瑞霞 例爲此日賞梅花 江南陽氣先他領 不似世

人強立家

性愛清閑不探奇 四十不受世人知 天心唯有報人厚 著意開

遍屋角花

素有所分清似梅 格高無引蝶蜂媒 床頭周易消長說 不爲窮

亨把意回

雪

夢覺梅窓夢一場 疑身今入水晶鄉 雪華不似月華白 密封孤

標不洩香

倩翁試此雪中遊 茶社筆床舴艋舟 四顧無人白於月 一聲鐵

笛下寒流

橫窓疎影益清華 知是月光雪後加 無復山陰探奇友 凍髭如

鐵嗅梅花

文山詩集 (未定稿) 卷七

〔戊寅集〕 文政元年

春曉

簾梅朵々攢霜葩 綠是東風早促花 蒼藹籠花天將曙 清香已

在讀書家

得暖病骸蠢似蟲 簌簌葉戰送東風 聯織至曉催花雨 臥看杏

花破蕾紅

喚向紗窓似有情 一聲懇報一聲晴 春寒猶尙迥人甚 臥聽黃

鶯失曉明

多病困人心欲摧 賞花一事未爲灰 夢中尤怯落花夢 覺有杏

花著雨開

鶯

將身觸顫惜花落 急轉歌喉却欲狂 本似有情覺情薄 忽然調

舌過隣牆

破曉聲々認早鶯 有時一轉奏仙笙 細聞猶有難真處 舌澁間

餘出谷聲

上巳

弱柳高花三月三 泡茶換酒得泉甘 桃花對我嫌顏白 梳酒從

來不易堪

由疾平生受苦辛 今年無疾賀佳辰 頑夫猶有人心在 強做女

兒祀偶人

到處輕柔不借筵 池塘春草疊青氈 柳烟鎖岸鶯聲暗 中有米

家書畫船

春寒

雲氣風心太有情 今朝果得牡丹晴 春寒猶尙在花有 露濕蝶

衣飛不輕

淡雲翳雨杏花天 濕透金爐細々烟 亭午無愁人不起 鶯聲一

處伴春眠

探勝身間還不間 太忙紅意綠情間 今朝有約憚穿屐 門外猶

餘帶雪山

落花

戲蝶遊蜂惜落花 逐香各自過隣家 跡明白々紅々雨 影暗濃

々淡々霞

已去日邊粘屋角 却來月下撲窓紗 東君功畢斂香

骨 一地清陰自此加

訝是前身蛺蝶身 惜花幾度恨花神 只知似夢却非夢 未必賞

春早送春

有意隨風上朱檻 無聲如雨糝青茵 浮紅取次隨流

去 旬日不容吾相親

羸病避人窓懶推 三春賞事將歸誰 黃鸝啼倦蹴花起 不是關

風詐雨欺

五更殘夢月光低 枝上遺香鳥亂啼 知否人間足離別 芳顏一

夜化爲泥

以上 戊寅晚春 天門稿



牡丹

異氣襲人三月天 珠庭日麗玉階前 人呼國色定非誣 誰稱花  
王任自然 巧笑春中香富貴 極高世裏艷神仙 東君不敢挾私  
令 北面群花元有緣

天香自古稱傾城 默而不言何有情 奉媚厚荷半句寵 競妍獨  
搏一時名 醜顏帶露泣無語 粉面迎風愁又驚 富貴在君日無  
幾 品花我作忍讓聲

為誰泣露凝宮粧 心醉教人狂勝狂 花若有情花亦戀 愛花被  
世喚情郎 天孫為織錦雲裳 定是後宮時世粧 天寵添光春不老 階前日  
暖牡丹香 戊寅晚春

星夕

一道銀河落樹巔 立庭四顧月如絃 半生不會牽牛苦 直入清  
宮欲問天 村翁自得小仙遊 散步試流不用舟 隔水機聲疑織女 牽牛行  
我即牽牛

扇面小景

蟲聲今報嫩涼新 誰就扇頭別寫春 五寸青山五分馬 買花人  
又鬻花人 甘露亭席上追悼卜鵝師 行歛錦囊長短句 不知身也入囊中 忽然骨朽名無朽 有恨花  
朝月夕風

銀箭射人利於矢 漸々勢變作微聲 忽然觸傘碎如水 已有前  
山帶雪晴 送高子信歸阿州 惜別從來似惜春 匆匆如夢事難真 無情流水惱人甚 送盡落  
花又送人 四月 清和天氣燕輕飛 起曝花筵舊醜衣 青帝收春猶不遍 紅薔薇  
壓紫薔薇 一春不出賞春奇 躑躅燕支早入時 橫襪蓑衣非我用 偶然臥  
閱譜花詩 雜賦 戊寅稿 二百年來時稱明 一朝奸細謀東京 鼠偷狗竊元難測 戶々無  
人不說兵 田荒不耕心似然 農夫課戌泣呼天 無情縣吏索錢急 又說海  
西起狼烟 一日不耕奈此生 插秧未畢又徵兵 明時反欠明時樂 只似傳  
奇歌太平 投筆眇軀親礪劍 切憂北虜鬧平民 養成義膽堅如鐵 却是身  
非肉食人 瑩 宇治河邊怨魂結 于今逐亡跡似追 隨風水際解憂散 受露草  
叢若泣垂

定知原來身死灰 詩魔吟魅招神猜 自今不問人間事 一任花  
開花不開 看花對月適傷神 却似月花煩此身 素定與君福祿壽 虛名歸  
我天分貧 寄上毛達川氏

甘露亭松

老幹不羨百卉榮 格高歲晚推髯鄉 定知風裡化龍動 好是月  
中聞鶴鳴 天造資材無俗氣 自然簫籟發仙聲 珠々鋪綴朝々  
露 甘與群生共養生 階下圓砂畢琥珀 簷頭清韻真風箏 主人桂醕仙家具 不厭時  
來聞鶴鳴 割麥 至治恩波淡九州 金莖玉粒麥楚秋 雲鋪西野白芒碎 風捲南  
疇黃浪流 叱々不遲策肥馬 喘々知重飯羸牛 早知催雨東風  
急 明日作操今日收 打麥場中誇粒肥 耙枷轉手玉芒飛 砭膚針刺避無地 急著新  
衣脫舊衣 村婦入城解學時 歸家逐一畫長眉 近來就畝有餘態 高唱勢  
州新竹枝 戊寅四月 小景 疑有神仙慕我遊 人間別有小仙州 枝々金粟俗無些 四面天  
香鳥喚秋 途中雨雪

斷腸花

果是前身腐草身 化為蟲得放光神 輕飛群點凌虛上 潛伏一  
行循水巡 露痕如泣粉難濃 殘蝶時々弔瘦蜂 別有一般斷腸處 吟蛩聲  
哀狀愁容 階前面々為誰容 粉面露班情所鍾 一夜西風引難駐 但餘慘  
蝶與愁蜂 新霜先染最高枝 風叢亂亂葉離披 中見慶雲一朵垂 不是斜陽洩雲射 新霜先  
染最高枝 各々江頭蜀錦濃 紅波如洗戰西風 夕陽影裏淺深色 種々不  
齊一種楓 冬牡丹 天意為君宰不平 切嫌惡札費凡評 花神故變媚春質 擬與寒  
梅強鬪清 莫怪天香蒸窓紙 捲收造化萃詩家 一枝紅玉掉頭取 欺得坐  
人話勝花 入春為厭粉痕濃 出箇受霜悴惟容 猶有靚粧脫離盡 一場變  
相又鳴冬 幽靈足跡 天門構思默不言 窓間有聲看不真 問誰乎何素思為 奴非訴  
冤君莫嗔 四大六根生死一 幽明異處天定因 業已現形謂無



足 別有奇談更足珍 梨園優人模幽狀 其字松六即我身 打  
扮上場不視足 鐵釘安體自由巡 長裾曳地次第細 妙技常駭  
江戶人 日暮戲罷突相逢 赤脚穿履飾衣巾 兒童相見笑指道  
幽靈再出人間新 此事紙上空談耳 我入鬼錄已幾旬 近來  
益得冥中趣 今子所窘吾通神 我手如此足亦然 我體如雪面  
似銀 弓鞋雖織步有跡 但怨無飲醍醐醇 言畢慘風引愁雨  
無冥業火幢無焰 忽然燭滅形隨泯 空餘殘月影太冷 遠有夢  
魂纏迷塵

文山詩集 (未定稿) 卷八

[詩稿集]

一二田家畎畝中 四邊麥浪夕陽風 多事門庭渾不掃 柳陰時  
有晚花紅  
雨霽田園綠四圍 菜花開處蝶雙飛 南疇西畝忙農事 晚與家  
童牽犢歸  
及時將有事桑田 箬笠蓑衣烟雨船 兩岸桃花花若錦 田翁迴  
棹過前川  
村々疎雨落花春 壺酒釀成堪惹人 誅葦新通竹間逕 滿庭桃  
李入無因  
花村鷄犬一程霞 淺水咽流不可槎 漁客欲探洞門樂 過橋先  
問有桃家  
數戶樵漁鎖水湄 桃花開處鳥先知 上岸怪見烟景殊 阻風舟  
繫柳陰時  
會種窓前竹與梨 頻年竹繁恨梨卑 痛因洗竹迎風月 却落梨  
花三兩枝  
十年世路步間關 非愛烟霞依疾歸 從今帝鄉不入夢 尋花採  
藥入家山  
軀衰路遠欲何之 世事從來不可期 鑑浦風光堪託意 琴會自

樂復奚疑

竹新筵筍逼梧桐

翁自潘書類蠹蟲

香篆成文烟縷靜

榴花時

落一簾風

春雨中探韻

移種桃梨培後丘

亦尋奇句適迴頭

林花受雨婉然發

投毫仰

看臙脂流

移居今來墨水西

吟詩喫茶午時鷄

涓々細雨侵來後

小徑彩

花落作泥

破窓春雨漠々煙

移種海棠茅屋前

鍊得新詩試毫後

一般浴

罷一般眠

尋句爐邊春雨詩

笑看柳絮與花枝

少陵得卷纔吟去

小溪浣

花又一奇

鍊句闔奇一小亭

移來花樹數株馨

蕭々春雨睡催後

身與海

棠醒未醒

破窓穿見一漁翁

寂寞寒洲淡々風

半榻詩書終讀去

千山春

色細雨中

寂々斜濺茅屋花

笑攜春酒見桃花

醉來半睡海棠雨

寂々斜

濺茅屋花

寂寞寒洲淡々風

破窓穿見一漁翁

爐邊詩卷纔吟去

弱柳紅

花細雨中

遠鶴驚鷺墨水涯

亦看少婦浣春紗

涓々紅綻桃花雨

細々香

飛茅屋花

柳鞦鶯嬌細雨中

已尋花塲見花紅

樽前微笑檐口晚

屋後清

流淡々風

吟見桃花在水涯

巧攜詩箋獨攢眉

檐頭新竹受風去

綠鞦

々凌雨枝

得晴後園濯春衣

見破桃花步水沂

受雨蜘蛛口着去

隨風點

々與花飛

雁字

染出吳江風錦箋

無端雁影描霜天

一行直下如垂針

數字受

風學張顛

半夜驚聞鬼神泣

斷連有物發聲々

雲中難辨太古篆

月裏忽

明一二行

水仙花

海氣蒸顏冬似春

渺身雪後出精神

仙粧道味搏場立

早有暗

香遠可人

曉霜柑口封幽香

柔態拋身臥荒唐

遺恨著花招離得

湘江々

上水仙王

庚辰元日

學家相屬酌新醅

話在平生笑口開

柳眼未青梅白盡

東風次

第送春來

偶作

誰使吟蟲發自然

寸軀各自寸軀天

臥龍起歲我還伏

不把聲

名論後先

以下三首作在去歲







不許他人費細評 天保五年四月病中戲詠將菜 文山稿

宮澤竹堂來訪 (原本には題なし今假に之を加ふ 編者)

十月十八夕 有客時叩門 通名且道姓 非子又非孫 老友竹堂子 抗顏忽縱論 鋒銳豈易當 語路避舍遜 五字何能攻 偏師難爲屯 詩壇君得霸 文場誰稱尊 篋席馳筒牌 燈前愧空樽 濁醪錯缺備 淡膳希慰魂 軟蘇尤可口 蹲芋亦堪食 雨晴人自定 月出江似渾 竹爐茶烟颺 古鼎浪珠奔 坐久自催睡 客主對忘言 天保十五年小春 文山堂

(文政十一年) 戊子正月落成書牘 安于棟上

歲維戊子 時在春頭 文年五十 茲構書樓 風雨自和 禾麥咸休 日月快朗 我樂而遊 寬乎此居 遠出微猷 俊孫英子 鸞鳳所儔 西得芙蓉 名播九州 德化施物 共鑑海流 丘壑得意 奚讓王侯 富貴在天 獨學聖丘

文山詩集 (未定稿) 卷九

〔蠣坂集〕

天保甲午九月十三日。正木村。會與渡邊杉田二子。相遇于蠣鼓坂。一舊識。一新知。途後中口號二首

一 飄飲邂逅途中 香潔烈於梅外風 傾蓋立談田際路 說名告

字別西東 二子風流非易得 相逢此處事尤奇 君過橋去吾攀坂 一出畫

中一入詩 讀史 項籍

秦家失鹿萬人爭 已翻妖蛇誰斬鯨 威力全加眼無敵 風聲已

發氣吞城 幾年有恨烏江水 半世決功垓下營 讀畢高樓捲簾

坐 月光入竹利於兵

啼鶯柳外和新詩 舞蝶花陰摸醉狀 遠水分光練幾道 前林分

綠絲幾重 鬢髮柔髮感秋顏 寬步苦吟傍水灣 外岸漁家說魚價 棹舟篙

師定人班 潮生吳越紫赤山 日落豆相渺茫海 時向老翁呼不

答 洒然引杖入林間

似雪不寒定是花 瓊瑤圍繞瑞烟遮 夜深疑坐水晶界 雲路無

風月影斜 遊伊豫嶽下 會三子和田氏

豫嶽誰群秀諸峯 中天口發小芙蓉 學仙傍有幽人室 竹起風

鳴松化龍 遊嶽東 宿于龍泉寺 歸後賦贈

投宿山房夜雨晴 月光纔滅斗牛橫 塵喧已定心全寂 不聽風

聲聽水聲 四月一日晚歸 坐南軒 見牡丹

庭有逐香蜂蝶迴 百花已謝牡丹開 送春此日留春在 但怕晚

寒引雨來 賞花 寄甲州南松院禪師

本是前身蜂蝶身 顛花迷柳弄芳春 今辰殊比他辰甚 願謁能

詩松上人 書與醫生福島道安

福島道安本事醫 來過四月迎梅時 子如功訖疾還國 門有老

親听雀遲 送渡邊弘平歸江戶

月下清論花下筵 相逢如昨已三年 卒然告別弃無顧 身不鐵

腸怨壯鵠 哭千葉

學易幾年不假年 四十缺一屬天然 短篇遺韻杳如響 長夜快

十月十七日 舟行到竹裏

小艇發港口 靜波不著痕 帆張天或運 舟疾岸如奔 山動青

藍水 烟迷紅葉村 灘聲遠近裏 唯道訪桃源

過柳橋故趾 會住橋頭額岸前 尋花逐蝶又泛舟 今朝屈指年三十 依舊金

糸紊似烟 霜曉

滿天如濕絕纖塵 疑月無痕冷覺新 曉靄四散鴉隊々 夢歸霜

路問梅人 至日宴 小集 (葉松岸三 葉は千葉胤禎、松は松下綱舉、子就宴 岸は根岸定宜ならん。編者)

至日從來例賞梅 今朝僅有一枝開 滿堂賀客皆賢傑 詩賦獨

裁瓊玉來 天保六歲在乙未

歲旦 園內富春色 日光早自東 聖賢臨席上 面々仰仁風

寄甲州南松師 二妙詞壇樹赤旗 英名常向八州馳 吾儕幸遂西遊願 何日杖

藜訪遠師 有感 學歐廿年韓十年 自思唾玉伏前賢 臨箋畏縮獨心愧 始信真

才固在天 櫻花月下



眠滅似烟 畫燭光殘垂血淚 青詞聲哀哭朱箋 篆香影字風將去 但有賢名世々傳

甲州桃溪禪師。裁佳什。遠見示惠于東房菱花灣漁々翁。因賦短章。奉謝。

君飽詩聲我扣舷 西東百里一方天 清音在耳蹤難接 隔海往來月裏仙

題元名巖崎氏壁 四首

山自如鋸牙 巍然秀海東 幽人鍊丹鼎 端坐對蒼穹

仙夢元非夢 中天見月宮 香風三月雪 人步櫻花中

絕壑靈泉涌 巖前玉兔春 半宵人定後 鐵笛響中峯

紅日舖霜彩 清流出芙蓉 方池甘如酥 魚鼈化虬龍

春風惹興類秋霜 蠟管一枝持短長 縷々瓊烟解還結 令人思却令人忘

深川

虹橋一道架長空 大舸自西小舸東 隨浪過客疾如矢 應神廟裏落花風

月宮未辨人間否 三十三天別有天 曲々新聲珠箔裏 始知身已藉神仙

又

永代橋東蛤坊岸 築成新地五明樓 玉杯盛月瓊瑤席 枕水畫欄冷勝秋

武陵城東三月首 沙洲萬頃蛤蜊香 午潮不到舟難進 歌妓伴郎立水莊

絡繹遊人七寶鞍 錦裳輝日霞初乾 鶴峯門外人喧雜 知是開山許縱觀

仲坊靚粧時樣清 纏頭買笑受春晴 萬金用盡渾如土 重向二軒茶寮行

青柳のいともしろくおりそむる花のにしきの春のあけぼの

七條氏耳順宴 創意以豆州不思議 之老杉根 作壽杯

杉腹胎祥後定天 幕家餘烈于今傳 老根盡獻耳順壽 孝子慈孫侍賀筵

題龍甫子之壁

一斗豪腸屬自然 前身定是李青蓮 我今欲睡君先去 重說醉仙夢裏天

會于法安寺書所見

深院倚山腹 高門啓碧空 潮從天際湧 鳥到日邊窮 遠浦漁舟火 前灘漕舫風 晴寒秋已老 七島列眸中

阿州七條氏北堂耳順

年過耳順健加錢 賀賓賢哲列前庭 老萊醉舞曹參侍 夫子就中說孝經

布良龍宮洞祠

風激灘烟暝遠空 神龍送雨過龍宮 須臾天定江如鏡 夕照西殘帆影東

會聞將軍創業地 英氣乘時發幽關 今日遠遊入仙窟 洞門猶尙似轅門

又題畫

曾無童子應門出 果是主人採藥行 約略僅通墻外路 花陰香報早鶯聲

又

引杖來遊圖畫中 但疑夢裡搏仙風 滿山松樹如新口 淨界香天出梵宮

尋花

緩步細尋白與紅 一如蛺蝶戲春風 微軀不識乾坤大 隨畝逐疇出堤東

天保七年三月十四日 侯入部 葆尋德政數布 仁風大行 衆庶悅服 老亦荷辭命之恩 講左氏傳于館山殿 因不堪感恩之至 賦 (侯は館山藩主稻葉兵部 少輔正巳公なり 編者)

生來多病伍編民 仕路官情擲若塵 不計樵漁蓑笠老 講經較美有周人

殿上乞禁烟之令 獨除

愛山翫水臥蒼烟 未必樂天性嗜烟 陛下故除禁烟法 令詩翁幸飽仙烟

初夏出遊殿上制試

君駕出遊一得時 願耕省斂足公私 正陽四月昇平日 路傍人庶仰武儀



春風衣衫潔 修禊是龍宮 洞口江如鏡 布帆島嶼東

天保七年丙申元旦

瑞氣祥雲表太平 家々慶賀快人情 黃橘綠松皆春色 龍闕金門車馬聲

村風學古太平鄉 松檜護門竹繞墻 一處清香籬落裏 梅花媒我入新莊

四月

祝融秉柄雨初晴 昨日殘花逐水行 子規一聲樹紺碧 街頭叫賣松魚聲

發橫渚到天津途中

萬樹行松分路程 東西如砥直於衡 已過濱荻望清澄 影遠雲衢老鶴聲

贈某

加州金澤鏡毫家 來訪房州鏡浦涯 此日文翁行不在 醉歸爲寫月中花

上野氏見花

旁有良甫之碑石 櫻花不管主人逝 獨領春風得意開

春雪

曉起脫衣寒益加 但疑殘月掛檐斜 須臾日出融無跡 一處猶餘竹外家

四月十六日 會于野島法界寺



四月廿四日詩會 公手烹茶。賜詩臣。因賦上

一盞涎香氣味新 細雲蒸處爽精神 誰圖今日瓊筵上 手滄芳

茶賜下臣

碧玉嫩氈錦繡幕 一場幻夢覺知痴 筍評花喙萼全十 拋惜春

思旬未幾 猶有殘香留舊樹 却無繁實結新枝 閑身日々看書

坐 朝雨暮晴任物欺 積雨漸時屬暮天 卒然著屐步庭前 主翁例有<sup>旬力來力</sup>喜<sup>旬成</sup> 脫擲龍

孫倍去年 無題 氣凜春水三尺劍 妖蛇中斷滅無痕 怪風腥雨漸々霽 天日照

周乾與坤 偶作 愛山釣水小遊仙 身本農儒稱樂天 老矣文翁無用世 歸來月

下枕眩眠 六月九日館山邸詩會 江村夕照 曉烟已滅望無涯 相嶂豆槽螺結加 浪勢漸平潮欲退 彩霞面

又在漁家 泛舟 一葉小舟逐浪移 曉風午雨任渠欺 晴江四面平如鏡 已會釣

紅蓼蘆花早徵秋 送人愁逾送秋愁 江南幾里沙頭路 我已歸

家君放舟 新涼 攪夢蟬聲破懶眠 覺疑身已藉飛仙 清風一道涼無限 樹々秋

光屬暮天 和 公之玉韻 詩愁暗迫破幽眠 豈計吟聲到枕邊 伏識君恩次第渥 與梅俱

發侍芳筵 送別 庄五郎子 相逢話舊小蘇家 攜手山巔又水涯 今日別君釣漁地 離情碎

骨斷腸花 送別 長哲老 君元雄偉古人風 不唯獨醫兼能弓 老矣文翁疎世態 重來爲

我療詩聾 和人飲金澤總宜亭 旗亭領勝自然臺 小酌慰懷綠玉醅 此地宜看又宜步 醉人爭

拾蛤蚶來 身是南房鑑海人 小舟載酒繪金鱗 腐名誤落世人耳 不認白

鬚認烏巾 九月十三日慈恩山主過訪 因賦 多雨減秋日改容 階無戲蝶檻無蜂 遠公此日山堂會 霜下金

英摘作供

機又會詩

六月廿一日會于紫雲寺

寺裏新涼俗不同 重添綠竹引清風 半庭香氣雲花墜 簷有午

天百日紅

藤井殿中之會 分韻賦早秋 銀漢星光次第移 天於萬物不容私 蟬聲入耳方幾日 樞露結

香定數時 蓼蘆蘆花從此始 愁情慘思自今知 強做杜老感秋

作 不管喚頑又稱痴 席上和慈恩山主之韻 不厭蟬聲樹裏喧 午眠夢步樵花村 覺知今日秋先到 欲養黃

英入後園 席上 秋曉 風捲痴雲過 雨洗遠樾奇 山月漸碾出 漁父入村遲

天保七丙申三月 館山侯入部 因賦上 水外三十六里程 旛旗春暮入郡城 州縣無事知官理 耆耄有

歸覺政平 殿樹雲晴懷喜氣 公田雨足發歡聲 此身幸侍經筵

末 仰見賢君道德明 恭裁巴調一章 伏奉送 館山賢明府君之歸驂

錦茵華轂映朱輪 六轡如絲馴且均 露濕旌旗光綴玉 星輝劍

佩影布銀 賢良方正天然質 富貴功名自在身 欲引難留路邊

柳 儼焉儀仗隔河津 送別 韻尤

春日 暖光鶯語熟 獨坐<sup>(C)</sup>薊簾前 春意朝々動 花容日々悛 已通壺

外趣 却得靜中天 九十自由樂 安居卜後先 絕句書寄阿儂

百年廢興半宵中 曲々妙音發老翁 肉眼却譏達人道 一場演

戲覺如空 丙申初冬與渡邊氏遊山名村 討古碑 歸途與高木生相約

口占 試伴小童討古碑 冬晴更暖訪花時 歸程豫有吟朋約 酒店路

迂錯錯期 題畫 各々營生閭俗厚 南隣採藥北隣艘 暮鴉相伴灣頭路 一自山

歸一自江 丁酉元旦 官鶉報曉賡官鶯 旭日增輝次第明 紆柳紅花捧金闕 銀鞍朱

轡入龍城 昇平時節人庶富 寬政渥恩寰宇清 聖主重添賢輔

力 傳神南郊鳳皇聲 春日 鷄語奏春墻角梅 清香一帶日光來 十分氣格精神足 不似去

年雪裏開 人以文比江湖處士。有詩因賦之以贈 民伍講書非避世 僻鄉誤得世尊名 家無童僕園無鶴 但有暗



香枕水橫

贈牧田神作氏

神作主人尤能詩 詩人自古耽新詩 卽今三月櫻花雪 莫獨負  
花坐鍊詩

跡入樵漁與世渾 浮名誰洩達朱門 官餘有意君來看 家在桃

花源裏村

秋染樹林葉半黃 短吟長嘯屬斜口 小樓一望川如練 曲々掉

舟誰遡流

山水 春

水不藉舟陸省車 安居無事領榮華 半生餘樂三春富 不必俟

王貴戚家

去歲何緣遇小蘇 大蘇今日訪吾廬 此筵堪喜兼堪感 記對乃

翁撚凍鬚

山水 夏

柳罩漁村水隔城 汀蘋砂草與波平 杜鵑綠樹有無影 誰遡上

流冒雨行

竹

城東幾畝結清陰 移植十年早作林 已有穉龍穿砌迸 却無老

鳳向窓吟 月光射幹舒冰玉 日影照枝篩碎金 自是侯王眞富

貴 不嫌韻客擁瑤琴

賞櫻花贈法性上人

盛香瓔珞幾條開 多寶佛前紅玉臺 老袖了吾愛花意 袒肩合

作餞春詩

又 城山眺望

海水通途得自然 鶴城天險隔雲烟 日東六十餘州地 運米往

來數萬船 右六首挂于館山邸會席上

又 五日前一日 五首送別一

夏日小園 未句用圖格 孔門弟子多文學 我學攀

一道寬泉通水源 入雲稻塢旣村々

遲鋤後園

又晴江望山 同用山格

樹護人家列碧灣 梅霖漸霽見孱顏 芙蓉遠在晴江外 天疊瓊

璠出玉山

又漁父圖 同用圖格

半日釣魚半日儒 輕舟一葉伴鷗鳧 三人漁老一人我 誰寫文

翁入畫圖

又午夢 韻歌

獨坐軒頭非養痾 詩書煤我入南柯 茶烟馥郁鷄呼午 又被家

婆破睡魔

又初夏雨晴 同用晴格

旬日陰雲奈此情 林花已謝杜鵑明 新茶相約人來往 刈麥田

家待雨晴

又同席上送小林君江戶之歸

相遇半旬如午夢 山悲鳥哭江尤慟 勾々分手沙頭舟 望眼屬

新井文山篇

掌折枝來

花朝藤谷山主見訪。因賦

破曉遠公叩草扉 但看蛺蝶逐蹤至 吟身就席覺清氛 知是踏

花香滿衣

四月廿九日。書呈于玉案下 第二

熊羆輝武純陽時 依例往來不愆期 舊政貴寬人益富 新恩在

厚衆忘飢 城池早見禪魚躍 階樹重聞老雀怡 今日微軀亦何

幸 講筵侍側仰君儀

傾耳聲存影入雲 不圖此日得先聞 飛禽亦又非無意 一爲同

僚一爲君

細雨纖連人困霖 落花無跡綠成陰 市頭未見松魚鬻 早有杜

鵲稱賞心

殿會 夏日村居

雨後清風初夏天 懶翁飯後曲肱眠 隣鷄在午君須起 西舍夫

妻已在田

又

昨夜潮聲帶雨聲 豈思得此麥秋晴 田園近日人忙甚 餉婦分

途二隊行

又 自嘲

尋盟吟伴不吾欺 堪笑隱人却逐時 難奈韶光忙裏過 逾旬漸

君不易送

○

醉眸揮筆似眞仙 一斗相忘人與天 不用入山搜屬穴 市中今

見小青蓮

涼簷睡起得農餘 重對鄰翁百慮虛 依例蒹葭催小酌 城東小

市買松魚

館山同 閑怨

對郎羞意言難發 紅玉搔頭理亂髮 又憑欄干嬾移步 梨花花

外織々月

驚醒開戶挂殘月 疑月有聲定非月 蓮步夢過水上途 同池同

素館山月

痴思訴誰何日歇 山河路遠夢難越 生憎夜々月往來 慚我片

魂不若月

納涼

鯨飲葡萄酒一壺 乘涼細鱸松江鱸 醉來不識乾坤大 吾不笑

彼彼吟吾

月明山水共蒼々

誰棹仙舟入月衢 山蒼水碧洞庭湖 素琴一曲淒風起 聲隔烟

波影欲無

奉送 館山公之歸驂

高車指北就江程 勝致行從馬足生 衛仗如林藩格正 旌旗照

水武儀明 名聲本自修自得 德器重因篤學成 人望儼然鸞鳳



質 殿階異日聽公評

告暇奉恩百日期 及瓜歸邸未為遲

炎威纔退蓮池雨

割送  
分秋  
送行

涼不可知

七月九日別筵 韻先

一簇部從破曉烟 旗亭別酒會群賢

冷香和淚荷花露

飽領秋

光君入船

又 同韻

飛仙未識人間然 相遇時既孕別緣

已送牽牛纜二日

今宵又

復陪離筵

又呈渡邊氏 同韻

初秋清似晚秋天 鐵笛一聲遠隔烟

人道此中非可到

月宮今

夕會飛仙

尋花

雨餘輕暖下花開 春服已成出幾回

喧雜女徒過橋去

細尋何

處賞春來

渡邊君賜茶且有詩。因賦小詩奉謝。且步玉韻

茶名淀月各方流 先似金龍水上浮

今日幸緣詩社好

清香波

漾及房州

春日

寒威次第減 堤草綠烟生

飴笛梅籬落 紙鳶風篋笙

丈人醉

踉蹌 家婢戲閑行 社鼓兒童樂

農桑祝太平

仲冬吾臥病。得梅花詩三

吠兩三聲

五

六十餘州々一社 武門棟梁屬關東

赫然霸略風波靜

神鼓琴

々八幡宮

六

一川切解衆庶愁 傍岸稻田有此秋

今日乾溪奔無顧

從西流

又從東流

七

臨岸徘徊知是冬 小春雖暖設徒杠

老夫今幸獨揭厲

過堤西

光寺裏鐘 以上病床所得

戊戌元旦

雷鼓奏時曙色開 城頭碧瓦日光明

衣冠人士龍門裏

車馬相

傳警蹕聲

送政五郎歸鄉

入春隨意賞庭梅 重就江程踏月來

旬後歸鄉涉園看

桃花亦

當逐時開

奉呈 館山賢明府君之机下

第三

一隊車輿形肅然 遠聞呵殿逐風傳

已敷教化逾於境

本立功

名發自天 花氣薰知恩意渥

鳥聲和表國君賢

儒臣今日拜儀

衛 祥瑞特書編玉箋

赤穗汐田又之丞讚

一鎗之勇 敵地當千

鍊心石腸 其姓汐田

性好清閑手植梅 厭風怕雨卜花開 月明半夜影無恙 獨自吟

行繞樹來

又

百尺高樓柳接梅 緋衣魚袋玉堂開

夢中皆是侯王事

暗踐傳

又

人定江村犬吠聲 城頭疎柝已三更

高吟門有同心客

携手梅

又

花影裏行

又

喜暖書樓寄水涯 曉霜威薄莊梅花

病中所願非他事

欲拜東

君賞物華

自館山到正木途中之作

海霧稍收紅日催 金波一面白鷗回

漁舟有獲人爭叫

舴艋張

帆衝浪來

二

社日賽神人醉歌 紅花軟草闌鮮奇

就中小唱學時態

多深川

新竹枝

三

間關進步不求詩 路出砂灣運脚遲

不覺杖藜遶岸轉

但疑富

士逐人移

四

蒼烟已散月初明 雨後暗香冷盡清

黃犬漫訝賞梅我

潛身頻

五月廿一日應召謁藩朝。有帶刀之命。因賦

避世入山半白翁 六十脫褐朝公宮

不圖三尺腰間劍

還致少

年英邁風

又

鏡浦漁翁年六十 一朝奉命揮霜毫

村夫不解君恩辱

却使釣

竿博大刀

殿中會試

荷花帶露呈紅粧 新竹受風抽翠香

早有蟬聲報涼意

厚顏爲

客領秋光 右立秋

東市犬鷄亭午天 書窓淋雨易爲眠

文翁無友烹茶坐

池外清

風吹白蓮 右雨中即興。奉和君之玉韻

奉送 館山賢明府君之歸驂

我侯此日出江城 驄馬太旗雲影明

令發常存優恤意

政成全

見慈恩情 一州鷄犬表庶富

數處絃歌奏太平

皎首孩兒夾路

拜 鞭聲如聽鳳皇聲

漫成

漁村夫子號文翁 討詩論經老學究

年過六十無一事

公然欺

世說詩窮

秋日湖上 席上九日

玉露清風滿眼秋 蘆花蓼穗秀寒洲

晴湖波穩天如水

獨向月

中試放舟

秋日別人 席上九日



別袖難牽何可留 他人不識送人愁 斷腸花上珠々露 不恨落

香只恨秋

一路蛩聲漫訴秋 無愁身亦似知愁 洒然小立板橋上 蘆外輕

烟人喚舟

和物茂卿之韻 (草案)

日本大軍覆大明 神兵無敵迅雷生 如何 何圖百二金湯固 山河 化作山

叫水哭聲 絕海樓船震大明 豈知此地柴荆生 千山風雨時々惡 猶作當年叱咤聲 (徂徠)

十月廿三日懷福島大槻二子 書以似

別後無恙否 參回夢二儒 引愁衣上露 分手寺門途 陸地雖

云遠 帶江堪還艫 詩惜如不惜 重問菱花吾

雜詩

少年英氣崩如土 寄此病軀于大邦 老矣文翁無用世 梅邊讀

易坐西窓

瓶花 十一月十八日會于那古大津屋

天工誰奪出春暉 一若東君廻駕歸 座上風香幾種鼎 賞心援

筆慚芳菲

釋尊

啓蒙進道 天花飄風 奧祕萬劫 在一語中

富嶽

日東第一嶽 影入菱花寒 朝夕觀不厭 寫爲元且看

家世崇儒德器馨 本支守業自康寧 後場菽麥前庭菜 鳥雀喜

呼似讀經 圖南樓講筵散後作 天保十年歲在己亥春王正月

牧田歸途 賞梅籬外立晴暉 獨領香風吹入衣 婦女知文有詩癖 笑言何

得此笨肥

秋盡

日落吳江楓樹風 蘆花臥岸蓼花紅 鱸魚未必隨秋去 漁老放

舟錦浪中

寄福槻二子

小築幽閑足 添梅堪稱候 僅通桑際徑 斜達竹間流 月下宜

尋杖 雪中可棹舟 不忘攜手到 亦是小仙遊

己亥元旦 (天保十年)

時運啓辰曙氣清 春光粧點鳳凰城 彩霞一道拜天日 文武衣

冠軍馬聲

雪

入春漸五日 東風吹雪堆 豐瑞雖云兆 高吟足作媒 線衣絮

襖煖 獸炭紅爐開 獨有好奇子 放舟試問梅

賀泰玄七十

七十翁翁號泰玄 俳諧素自出天然 醫方併得活人術 不見人

寰如此仙

二月廿二日浴于七尾山溫泉。迷路。一右攀羊腸。不

果。歸路訪連枝書屋老主。相伴鄭重示教。因賦以詩爲謝

又

一朝膏雨降金玉 三日陰雲表太平 沽酒買魚人鼓舞 歸牛放

馬世清明 萬方黎首無飢色 四海幸民遂厚生 惟是農桑治邦

本 勿迷他說好浮名

秋曉 韻清

雨氣送涼曉氣清 野情聊復愜官情 新篇題月詩幾卷 欲伴蟬

聲俱發聲

又

秋在梧桐足動情 滿庭涼意露華清 前津亦有鱸魚信 東市隔

塘議價聲

星夕後一日侍送別之筵。和我 公之玉韻

難奈涼風早感桐 歸興依例屬秋中 舟行似遠元非遠 一帶長

江一日通

己亥七月十八日 奉送 公之歸驂

遠送華輿夜就程 郊原坐列待天明 彩旗迎日出江郭 大旆帶

星趣花城 部內仁風隨物發 官中機密逐時成 我侯稟資彬々

質 早聽名聲殿上清

重陽後會于東傳寺

瓶頭挿向晚晴開 滿坐清香引客來 好是籬邊霜下傑 瘦容孰

與折殘梅

遊于三幣氏之宅 劇談不寐夜幾更 忽認曉光疑月明 老樹高岸氣莊猛 聲如驟

錯入羊腸惱旅情 奇花媒我訪華名 已因靈液換凡骨 歸路忘

筇移步輕

仲春遊于坂足村不動堂。庵主有意展待甚盛。因賦之爲謝

庵對大洋疑吳鄉 庖中誅斬淮南王 約君重問月明夜 何鳥爲

朝捕鬼方

恭裁疎詩一章。伏奉呈 館山賢明府君之玉案下 第四

發都旌旗幾日程 春風暖意長途平 州中豐富人歸教 部內輯

寧民事耕 花氣全經池水濕 鳥聲忽入殿階清 年々依舊仰儀

衛 猶見有加德器明

殿試 四月廿日席上

小園花更開 柳陰滿地綠條々 杜鵑今日紅將發 伴蝶逐

賞盡梅花更賞桃

蜂過小橋 畫臥初起記事 功成名遂適逍遙 半生快樂無餘事 爲賞開

棹月姑蘇第幾橋

花築小寮

初夏感事

雨漾落花去無跡 酒徒詩伴似相忘 送春四日眠全足 不似逐

香狂蝶忙

殿試席上 喜雨 韻清

賽神社鼓響尤清 老少爲班各說情 坐有陣平齊宰肉 醉歌醒

舞祝君聲



雨帶潮聲

庚子元旦(天保十一年)

曙鼓奏時氣色清 龍光敷物萬方明 衣冠人士朝天日 丹鳳門前車馬聲

○ 纂山蒼靄欲黃昏 遠治行厨步出園 野水有聲雲外雨 濕衫逃避杏花村

○ 第五 (館山藩主稻葉兵部少輔正巳公) (に奉呈せしものなり 編者)

鎗戟映花氣亦清 銀鞍朱鬣入郡城 人庶豐賴君恩渥 部伍整知政理平 一境連畦麻麥秀 四方無具犬鷄聲 今年依例仰公德 遠拜仗儀道左迎

戲代花嘲主人

宮圍深闕見無期 胡蝶偶來似慰思 一任風飛兼雨落 紅顏恨在別春時

送小林氏奉命拜謁於伊勢神廟

雨餘晴日馬蹄輕 奉命銀鞍意□□ 伊勢神明加護力 往來無恙看花行

藤井御殿席上分韻

夏夜坐月

小亭倩月伴閑吟 樹影交加接竹陰 卒爾扣門有僧訪 相忘坐

到五更深 中夏多雨 分韻

### 文山文集 (未定稿)

天門居記

房爲州。去東都。東南四日程。多是巖壑水灣。寬閑奇麗。勝形萬趣。居民概就便。以爲村落。其最秀絕者。曰菱花灣。內環而外對。相豆。澄徹可鑒焉。因命以菱花云。而其對峙于菱花南北者。左曰洲崎。右曰太房。孤秀奇絕。有特類于天門者。予故命曰天門。而以下我築宅於天門菱花之側。且獨兼有其形勝。因又自命曰天門。天門先生燕毫於綠波。圖其所見。咏其所得。怛然以獨自樂焉。有客誦曰。古之士。少而學。壯而行。英名被竹帛。芳譽溢後世。子何獨隱鬱不願乎。曰士賴逢主之寵遇。仕進得志。高臺巨桷。意氣豪然。是非我所能及也。不幸而不遇。退而偃蹇。傲于山野者。亦非我所好也。我遠欲友乎谷口子真。而其人今則亡矣。嗚呼將誰從。我則樂吾所好焉。曰子所好者。何乎。曰古聖賢其所以治天下。又自脩者。載在簡策。是足焉爾(矣)。若夫窮達則命之所由有也。我亦何知焉。乃起掉頭曰。罷々。何較錙銖爲哉。今我將下放。意于物外。舒其沈鬱。客笑曰。所使子舒沈鬱者。其爲何乎。先生乃笑指曰。我天門菱花灣是也。辛未五月世傑書。

天弔黎庶降此霖 民心無二稱君心 挿秧萬頃碧如玉 農父□於泥裏深

賞茶

殿宇無塵夏暑長 東風送雨々添涼 農儒何幸侍君側 寶鼎茶香甘露香

(天保十一年)

保子五月廿二日。我君省耕。賜餘光于蝸廬。文不在。君歸館之後。尋又拜高吟之貺。文何等之洪福。草堂之光輝。花卉亦添榮。因不顧多罪。恭奉和玉韻。以謝不敏。

雲意洩光日氣晴 舌耕此日踏泥行 歸來驚見門前轍 猶剩我君車馬聲

避暑 殿中會

保子六月六日。我君一遊之餘。賜寵光于茅屋。文不堪感恩之至。恭賦小詩。伏奉呈我賢明府君之玉案下。

半白老翁釣海湄 府君採摘賜恩知 鄉民羨道世文爾 如個籠光今有誰

溽暑惱人夏暑長 晝眠結夢々難忘 文翁有幸侍君側 高館茶烟終日涼

### 一谷之戰

元曆元年。將軍源範賴。將兵五萬。源義經將兵一萬。輜重糧車凡六萬五千。號十萬。出攝州。追擊平氏於一谷。二月四日。發京師。其日至昆陽。止營。休軍馬一日。昆陽去一谷。概二日程。長驅一日。徑據三草山。敷陣。會議要戰期于七日詰旦。(義經直襲擊平將資盛。敗走不入城。舟趨屋島。)義經性剽悍果毅。其夜竊率麾下勇敢數百騎。徑三草山。將出城後鴨越阪。會于旦期。以擊其不虞。路程二十里餘。多是狐兔之跡。峻峭狹隘。暗不能進。辨慶薦民家健丁。義經賜姓鷲尾。改名經春。以爲先導。平大將宗盛。憂資盛敗。更命諸將當之。衆懼其營地曠平敵易襲。相顧皆辭不能。能州守教經。膽氣勇傑。豪然應募。其營與越前三位平通盛接。通盛招小宰相於樓船。通宵鳴咽。小宰相教經讓之曰。平原曠野敵易襲耳。何做兒女。囁々爲。且妻孥之愛。人皆一也。若一旦有急。其如幼主何。通盛愧而遣焉。初平相國清盛。納女於大內。宗盛與姦。有身。以爲奇貨焉。有寵。生男。名某。後四年高倉帝崩。某即位。是爲安德帝。清盛以英武之質擊擊之材。嘗擊源義朝滅之。子賴朝義經等皆幼。室常盤艷。見而心說之。使人誑而納之。以故二子得免。清盛擁婦翁之重。倚外戚之權。陵轢公卿。朝廷披靡。威振海內。皆言霍王復出。清盛薨。子重盛仁而愛人。先卒。弟宗盛以父祖



之故。位極人臣。宗盛嗜味無斷。號令不建。當是時。賴朝起相州。義仲起信州。命擊之。兵不利。隨擊隨敗。義經範賴等大起兵而西。關左源姓畢屬焉。使邀關于中途。平氏兵瓦解。遂要安德帝。載寶器。率其妻孥而去。移於一谷。構皇居。築城塞。浚溝塹。據山。前水。以為固。艤舟數百。便於緩急。正欲邀源兵至。與定榮枯。義經麾下。有熊谷直實者。與男直家。俱欲先登羅武。乃竊至城下。夜未明。城門不開。樓上猶有管絃之聲。仰視呼曰。我是日本第一剛漢。請出。欲與較勇力。不應。但從城上。矢如雨下。平山季重亦至。與俱出海濱。待旦。有頃。城門開。盛繼景清等數十騎突出。季重直實短兵接戰。氣勢不能當。梶原景高景時從進。範賴令之。得大軍與俱進。請姑俟之。不聽。咏梓弓。意言急遂進力戰。大軍亦迫薄城下。真鍋助光從城上射殺數十騎。兩軍迫鬪。幡幟對連。紅花墜地。白鷺飛天。蹶張射士。欣飛健拳。東西矢互飛。南北兵交聯。雄雌未可辨。會義經臨鴨越坂。懸崖馬不能下。令軍戰酣驅之。佐原義連奮先下。義經連麾騎士。曰。急之。不可獨使義連徒死也。士皆張膽怒目追下。崑山重忠負馬徒行。衆皆奮服焉。幸軍馬皆得無傷。亂驚疾驅。大呼乘之。鉦鼓聲動地。敵駭呼曰。天兵降矣。前後戰危不能救。義經令縱火。適西風烈。平氏軍大潰。一如散置。源兵追逐。敗軍爭舟。舟中指可掬。蹂躪陷

溺者數千。斬首虜亦數千。平將盛俊通盛業盛等皆戰死。重衛就擒。薩州守忠度與家士四人。循水濱。求舟。不得。走過須磨板宿。岡部忠澄追之。問源平孰屬。曰源將。源將盡東人。莫有類西人金冠白哲者。知為平將貴族。疾馳得及焉。家士熊王等知其不可免。留拒戰死。忠澄接馬就抱之。忠度刺之。甲密不能達。馬開與共落。又刺之。亦不入。復刺。傷頰。創淺得不死。忠澄家士來救。萃拔刀格之。斷右肱。忠度知事不成。掉胡投忠澄沙上。輾轉不止數尋。曰。我死必矣。汝勿急焉。端坐念佛數聲。忠澄曰。君為誰耶。不對。又問。曰第斬之。卒斬忠度首。搜其袖中。得稿一卷。由其有旅宿之詠。知其為忠度。後賞功食忠度五園。平將軍宗盛等奉幼主。僅至屋嶋。復營皇居城塞云。文化辛未晚冬。

答債客解

天門子方倚机獨坐。聞客劇叩柴門。童子應門。問子為誰。從何來。且何所說。客勃然不說。曰。子之先生負債若干。於今不償。何言無所說。童子入告。主人躍履起迎。稽顙謝。客責曰。子常謂。養由基射柳葉。然不能出。乎百步之外。我一開口。能動萬乘。此我亦不為巧也。我獨疑而不信。今果知子愚而信之虛。子修仁義。誦詩書。幾年於茲。勤不為不贖。積思于文辭。施巧乎簡牘。日久。不可謂缺精緻。而人無一顧而拔之。今歲已

暮。窮飢迫身。然而籍口閑居。不能一塞債客價豎之責。何有於萬乘。豈可不謂愚乎。既已愚也。則丹漆靡所施。且夫詩書溢于胸。著述滿於篋。人其誰能當之。幾箇銀子。充子之行。填死干溝瀆而已。今而後。折節更操。遵我策。逐十一之利。尚猶庶幾於保妻子。免飢餓之厄。主人默不應。良久曰。子策是乃是矣。未為全盡之。聞千鈞之弩。不可為奚鼠發之。高敞之說。無所措于庸細。我性癖。不能曉進仕之途。遂陷窮餓之深淵。有人藉之寸繩尺木之援。前引而後舉之。令容身於丹墀之末。得仰龍顏天日之威。而開口吐其碑。則一發不可謂無中。乃死無餘憾焉。且天生人物各有分。羽毛鱗介。皆濟其用。假設我質之鈍。如鉛刀。強而推之。不為必無一斷。今幸有舌。吐珠啣環。蛇雀猶不忘謝厚意。子姑賞之。客弗鬱而去。頃之東方白。客又盛服來。主人驚悸避。客隨排闥入。笑曰。賀新年。

代人取進仕書

某再拜言。某公閣下。僕聞。去春某某人士。有蒙閣下賢明之知遇。而被拔擢者。其中私心未服者有矣。雖然僕固巖穴之士。豈敢自謂有智識。嘗竊聞之師。今又較之所學。蓋士處其身於此世也。非唯如尋常之徒。專貪富貴于一時而止。其自待也。不外飾。不他慕。乳之食之撫之育之。將養成其資材。以供賢主大有為之求者也。然材

成則常被。揜揜。老死於窮鄉。自非以下幸有力人。蔑去俗格。而廣舉偉材于窮鄉。終身不免困厄抑陷也。今請言其所因。凡進取之士。射名利於世途之間者。其始也。日以奔走馳逐於朱門高閣。顛蹶望拜。請謁之勤。視氣受顏。不可動之地。以自膠結。設雖士有剛明之質。堯舜其君之資者。非伏其門乞其憐。未遇一階級之榮。自古皆然。有識者。其或愧焉。巖穴之士乃不然。誦六經。脩仁義。韋帶蓬髮。不飾其外。頑乎如愚。然而人也是也。素有偉才。負其有偉才也。常不求賢。故人亦不知也。至於甚焉。隣里之女兒。指笑曰。此翁是何物也。不徒女兒然。雖其少有才識者。視其迂于人事也。曰窮措大可笑矣。至於一時賴賢主拔于草莽。居之顯職。而事業特顯。舉世驚駭俯伏曰。是人也有偉才。我亦嘗知之。至於甚焉。恐其不明之謗也。乃又從而賞之。曰秀才子從。今其事業之赫々。伊尹傅說即是其人矣。夫就其成見之。雖庸愚。甚易見耳。唯至於獨察諸人未言而言。未舉之前。量其材之所長而任之。決然無疑。可謂尤難焉爾。雖然。此非謂賢知人可獨能之也。苟於其所因與其所安。能強見之察之。則從賢非下愚。其或庶幾乎得焉也。況今閣下。以剛明之德。豈曰遠鄉草野不能悉知也。措而不問可耶。何則。賢者。舜之徒也。然則不微



乎賢知之爲。而其拘于常格庸算者。必不肯下愚之徒也。閣下其於此二者。孰冀孰不冀焉。周公曰。立政其勿以儉人。其惟吉士。又曰。學古入官。閣下學士。其取法于周公乎。將襲流俗之所謂例且格者乎。閣下其宜審擇焉。今有人於此。其一所常見聞。而其一所未嘗見且聞也。而孰賢孰愚。人無能詳焉。若思其難詳焉。無如引而併試之。開閣下巧於圍碁。請以譬之。今有草野之士巧于碁者。以其生長于草野也。人亦不知。雖然。其實無敵手于天下。幸有人舉之。引試之高閣。環而坐視者滿堂。雖然是人也。眼耳鼻七竅。無復異乎衆者。故莫有辨其孰巧而拙者。雖然。方其頽然攤局安子。彼豫前知情之所不能免者。決之幾十手之前。胸臆心計無遺。術智。而後巧拙始顯矣。當是時也。滿堂人舉曰。此人是非尋常凡手也。夫辭章者。處士初見之圍碁耳。今夫併試舉子於高閣。閣下其臨究質之。論業而試之前。考職而課其殿最。則私謁請囑。無所于託。巧拙。賢愚顯然。必有不能免其情者。今僕有類於此者。數年來退居山野。研求讀書。以俟明主之需者久矣。雖以不如古人之美。而自顧其心事學術。豈謂出于庸庸凡俗之下哉。請舉而試之。不可則罷可也。不舉。不試。唯曰遠鄉之士。其材不能盡也。措焉豈可乎。恐於公論。或無闕然者耶。幸賜之一見。痛究質其事業可也。敢布一言于下執事。冀恕

振之當世。終令是書散亂于俗手。惜乎哉。雖然天固與善人。斯文必不泯滅矣。數百歲之後。幸得良期會。或一見。經有力者評品。則世應孕而知金玉貴之。然則雖今湮沒于當時。使數百歲後同其志之徒。知天明享和年間有休養者。且因其書。會讀傷寒論。於其所謂傷寒論中。辨別伊尹湯液論。而發明乎張機運動活法之妙。則子平生所慮幾者足矣。子其於地下。宜無憾焉。今茲白河賢明府。爲益某某縣。來房州。若使休養在今之世。懷其書。伏閣下。獻其說。閣下必舉于偉品。今其身既死。人又無告焉。卒至于賢明君亦不能知。異人于席門桑樞中。悲乎哉。文化辛未十月四日。修周祀。不瀆羞奠尙饗。

夢中禿吟

一夕欲賦梅花詩。而不得。氣力昏。憑几就眠。衣冠老翁語曰。卿赤貧荏苒十年。無一樂事。卿佳鄉距宅約東南三里許。必有所見。何不往乎。余信教而行。至則雨後斜陽射山。黛若畫。竹林流水。綠於藍。旁有板橋。涉而上岸。只見簾門洞開。徐步而入。玉堂文窓。繡欄朱戶。筆硯書札具備。壁下置瓶。插奇花。不知何名也。其前庭則梅花幾千萬樹。橫枝老幹苞蒼霏發。放葩颯々。如坐水晶世界也。俄而有舞妓。身輕而婉轉者。名燕孃。聲清而唱歌者。名鶯孃。其風韻清絕。淨除人煩襟焉。蒼奴曰。操觚士。入此域者。皆必賦得新詩。今卿何爲而來。余曰罷。

罪垂裁制。再拜再拜。

弔大貫休養文

士處身于寒苦不可忍之地。守其所志。不他慕。其言足以師人。其術足以貴世。然而時適出于不遇。流落窮死者。世或有之。仁人君子求異人于四方者。其可不爲之歎息而哀惜之哉。苟其言果足可師也。其術果臻可貴也。則雖其殘篇餘牒。天其必不蔑棄。矧至於其全者。雖一時爲俗輩所掩蔽。必發于數百歲之後。以此今期于千歲不可知之遠。人其必謂之迂遠。請試解之。夫安居逸樂。以爲足者。衆人之情也。君子乃不然。焦思苦心。不寢不食。以著述爲事者。以其不欲與草木禽獸無聞者。偕泯滅耳。果其言可傳耶。雖更數千歲。猶可也。是與小人汲汲于當時。以貨利爲榮者。不可同歸論也。休養相州人也。常刻苦傷寒論。老而不倦。排其宋元以來諸注。以己見別作漆湯解者。刪定其謬錯所不可讀者。其業可謂勤矣。休養性朴野。喜論是非。以故不合于世。流落困苦。來房州。文化七年十月四日。以病死。實歲七十三。葬于館山某寺。嗚呼。不幸有數耶。將天命有常耶。世之術。賣術于當世者。安居逸樂。至以終其身。且其所著覆瓿之書。黨比傳噪。而一時相爲稱譽。獨休養不媚。不諂。苦心于一書。以致窮飢。老而乞食於編民。嗚呼痛哉。休養常謂。我爲知己。吾亦雖知其書之不誣。我力不能

汝等安能探得我輩錦心繡腸。傲然把筆蘸墨。直寫梅窓

二絕

詩情未盡日西斜。獨傍梅花步水涯。無限江南江北路。梅花

窓裡夢梅花。

雨聲已歇溪聲急。林外鳴禽爲句媒。時入書齋向窓坐。梅花如雪十分開。

寫畢意氣自豪。旁有人。一喝曰。卿何狂吟。駭極而頓悟。熟視。山妻擁稚子而在側。因撫几一笑。喫茶。

村兒刺狸

房之園村。有一田翁。會誤熏狸巢穴。乳子死者二三焉。狸不堪憤怒。常欲欺罔翁。村之西北有松樹。枝葉鬱々晝暝。翁月夜過樹下。有人之從後而呼阿翁者。顧而見之。野僧長可一丈。按塵尾大罵。熟視之。滿體如鬼焉。翁戰戰慄走歸家。遂病卒。其兒頗有義氣。怒狸爲怪而劫殺父。百計搜索焉。而狸之變不可窮。無術可以施設於復仇矣。一日天氣快朗。滿野菜花如金世界。松樹濃陰可愛焉。不覺獨行于樹下。忽陰雨洗衣。沙石撲面。咫尺不可辨。野僧飄々然見。兒果知此狸。張腕投一巨石。僧忽不見。天氣亦復平。從此後懷此首。往來樹邊。而也不見怪也。適夜半過田畦。一童子卒卒然出前。驅而行焉。兒果知此狸。藉草而座。探烟管筒而弄焉。童子直進對立。鬼形不可得而狀。竊抽匕首而備焉。鬼叫一聲。



欲張口而噬兒。兒潛而刺之。翌日拉鄰翁往見之。狸長五尺。斃死於路傍也。從此後絕不見怪。嗚呼無知之老狸。不察事。至死可笑焉。文化貳初冬稿

孝子

神田鍛冶街有一商翁。性沈默。家果貧。數離祝尤氏災。自覺宿因不可止焉。浮生之變幻不可測知焉。明和中相携。巡禮於佛閣以靈驗者焉。適至房之高井村。妻病而卒矣。翁悲哀之餘。不自保。亦病向死。唯無飲食餌藥可以養。四大者而已哉。亦無草屋可以凌雪霜者矣。有二子。資質果美。長曰音次。齡十一。少曰次郎。齡九。二子相携。傍松樹草庵。使翁代枕於膝上。相共安撫焉。朝把節籃。乞食於館山市中。人多憐之。而資其志也。晚歸以供翁。二子爲間不食。後數月翁卒。二子涕泣。埋葬於廬傍也。其禮敬供養。有大人不可以及者。村翁憐之。惹二子於江戸。奉仕於某家。後繼樋口姓家。益富盛也。再至房之高井村。請僧。興祠堂。擲數金祈冥福。且厚報。昔時有德於己者而歸矣。語曰。孝不之乏。永賜爾類。豈不信哉。(草稿)

送篤義中君序

昔者管鮑二子。時當窮厄之際。他人相見。蔑焉耳。但二子其交結之深。心情相合而純也。至後始見心知之遇。夫以管之智。以鮑之明。人不不知。則流離窮厄如此。且夫賢人

俟時焉耳。前使二子偃蹇終焉乎不遇。則其遺風餘烈。赫赫豈有稱于今世之如此甚者歟。故士當窮厄之際。唯自守俟時耳。相與歎息不止。篤義又曰。依不待志。將爲祿仕于江戸。嗚呼吾獨所遺。其奈之何。雖然人各有腸胃。不可留。且子方寸。寬有奇術足以干王公貴人者。豈能鬱々于閭閻耶。往矣。唯夫江戸。其地卑濕。水病甚行。寒暑最威烈。子常患脚腫。其自保護。吾亦終老親百年之事。則將遊於江戸。希吾輩遭管鮑晚年得志之時。還又相與舊話今之艱難。子其自守俟時。吾亦自守俟時耳。庚午三月升述。

淡水居記

天下有大始者也。能生一。一生二。二生三。萬物於此乎生也。吉凶是非於此乎起也。能虛而歸其始者無物。況亦有此吉凶是非者耶。夫人不可得而名。人不可得而狀。恍々惚々不可得而端視者。我能知其果天也矣。天則物之大始者耶。人不可得而見。人不可得而聞。順萬物而無盡。玄々淵々。人不可得而測知者。我亦知其果道也矣。道亦大乎哉。凡天下之至柔者。無如水也。至和者。無如水也。至虛者。無如水也。至卑者。無如水也。彼金石之堅剛也者。遇之爲被磨滅也。彼飲食也者。特生於和。非和無以養生也。彼載重行遠之便於民。非虛無以行船也。彼盈而溢。貴而危者。非卑無以持滿

君子知人者。當時豈無。而唯二子相知之深而切。至今人嗟嘆焉。嗚呼知己之難遇。一至于斯也耶。既而方鮑子遭當塗塗言見聽之時。連稱引不措。遂使管展驥足。相桓公而排天下之擾々。管之功爲大。鮑之明又益甚矣。吾輩不肖。不自謀。常喜讀古聖賢之書。好考質古聖賢窮達出處之際。家無旦夕之儲。晏如。初余遊于江戸。丙寅歲。以親老歸于鄉。中篤義亦遊于江戸。以親老又歸養。先于余若干年。而問巷相接。篤義性不嗜酒。余亦不嗜。余嗜茶。篤義又嗜茶。氣韻好尚既相同。以故往來友善。讀書暇。寂寥夜。品評古今之人士。每及之。乃嗟嘆不止。專美知己之難而特二子能處乎艱難之際耳。其夏篤義聞君永逝。越明年余外母又永逝。今年夏仲住卒。惜乎哉。仲住放達。有義氣。務黨于善人。爲吾輩所取重之人。而篤義又所依賴焉。近者余尊師又永逝。此所使余立志成學。而日夜柱梁之所望也。嗚呼痛乎哉。天掃除吾善人之黨。何酷也。因語篤義曰。我南房鄙薄之俗。性不好學。唯同志者僅有三兩輩耳。今皆永逝。然則自今艱難疾苦。把手相弔者。唯是除子與我。外不見有他人賞譽于前。推引于後者。嗚呼人與善其何如此難也乎。且夫好古之士。從古雖世不見容。豈謂管鮑窮厄之交。正今在我二人之際。此其可以不以歎息乎。退而自省。凡守道之士。豈與俗輩庸愚之徒。齊漸盡磨滅耶。夫當其艱難之時。要自守

也。容百川而不溢焉。利萬物而不德焉。意者此特何物乎。獨能順道而復歸於其始者也。不然安能得柔制剛。五味成於和。虛供於用。卑持滿耶。水其果幾於道焉矣。我常語曰。水之淡兮。可以制剛。水之淡兮。可以養人。水之淡兮。可以泛船。水之淡兮。可以守成。獨我性亦淡如水。於此此四者。我其能從我所適焉。因號曰淡水居。乙丑初冬稿

獲賜書。知本船無舵無篷不進退。故見請著小船。牽進港內。實知其情之痛切。宜其疾奔走救之而勿辭。奈官有制。異域之賈舶。不許土人私諾而左右焉。昨里正既申達于官。路僅四日程。往來不彌旬。宜得其可而從所請。其中小波大浪。盡意保護之。若萬一有不可測。則豈敢熟視而不拯之乎。聞柴米缺乏。相謀餽糶。精米數石。意在救且夕之急耳。不見推却則幸甚。臨事勿々不逐一。

問貴艦今下碇之所。素非異域之客所宜泊舟之地。崎陽往來之閩船。失風飄所致耶。將別有意思耶。宜詳陳之。無隱。國有法。官有制。謹待貴客。以上二篇是詩集第りも亦同年のものなるべし、其の頃外船の房州に漂着せしことありしもの如し。編者



女達磨贊

今吾問爾。有生何得無死。有口何得無言。有心何得無欲。因知不能免。如來愛水之說。爾女菩薩耶。將冬瓜鬼耶。抑亦誑阿難之麻登耶。如何如何。果不能免。吾青蓮眼之察。爾時達磨合掌曰。如是如是。爾言者。非平生焚香念佛之佛子。日々捕魚宰肉。東房菱花灣漁翁是也。文政三年臘月廿日 (草稿)

文頓首。以文懶惰。在大君子宜見奇絕。而遠辱手書。何堪何堪。霖後。重暴熱伏。知尊體無恙。萬々福々。所惠贈。紀曆詩。并畫。創意巧妙。以君之賢。推而知其林氏者亦是君子人可仰。文從投身於釣漁。文事渾拋擲。無一事可見。奉教日。羞面發赤漸汗併至。村夫之頑在可笑。可恥可恥。但即本師歸府。呈復書惡詩一章。辱賢覽。伏請被恕。幸甚。秋天晴雨未定。萬々護保。重陽後一日。文拜手

間宮君 足下

祭文

文化乙丑。九月廿三日。過柳原新橋。有一僧乞兒。蒼々然。進高論清言。如過人之素質。已而去。後廿六日。亦過橋邊。晚雨撲衣。寒柳拂面。路頭有死者之蓑笠掩焉者。熟視則所嘗見之乞兒也。我愛爾精神潔白而不屈之操。

操。以祭。辭曰

自拋却物我無一箇。虛々無々玄又玄。生如往死如歸。往遊人間去歸天。世界幾億萬劫。爾是幾億萬年。與天地終始。總從物仕遷。爾形已朽而爾神不朽。爾須長住持圓覺焉。

比翼傳奇

第一齣

【櫻花雪】拯弱抗勢太有情。英風骨格出天性。一箇好漢忠又貞。不負江戶第一名。【英雄星會】因讀書知字。說孝弟。不足奇。不茹柔。不吐剛的好漢。資質出於天性。不似他惡作劇如蟹橫行。戶不貧不富。心鏡可鑑的英傑。世上推為江戶第一。自家非別。花川戶幡隨長兵衛是也。為甚麼。加箇幡隨二字。以俺生有於幡隨院側。世人喚做混名幡隨。不在話次。頃獲一箇義弟。喚做平井權八。雖秀麗可愛。膽氣太可怕。因甚厭讀書。搏武於教場。【副】試喚來(丑)向內喚介(生)應介(丑)平井華弟。今日良友會。快上來(生)夢與劇孟談。夢與劇孟談。覺有俠風存。果聞門外珠履響。

【花下盟】趁暖尋芳蝶蝶來。羽衣清舞瓊筵開。獨求彩鳳

訪秦臺。緣是櫻花深結媒。

【環座款洽】淨入春幾句不見花。近聞北里盛種櫻花。請與家兄往賞花。平井華弟陪俺麼(生)素自有意。非關老兄煩心。衆共微笑。

細柳籠烟。行遮客。艤舟訪人桃李蹊。

今夕天晴氣爽。又是一番好風景。畫舫清筵備茶具。不許醒臭塞智竅。

(天香人自認仙境。櫻花開時銀世界)

船丁繫纜。各上岸。束裝。

(金鷺一雙碧籠中。相對不言西與東。不識心情何所在。名花相引訂春風。)

一處女仙州。畫樓櫺比。櫻花映欄干。往來皆家々。數一數二名妓。別出一箇仙孃。幽艷獨可愛。風格不易攀。雖不識他裁縫。琴棋書畫習熟的人。櫻里喚做第一之妓。從容對花。媽母了家丁各供。使役(生)一見忽心動(小旦)亦深愛(生)非凡。雖不交一言。情緒已膠結(丑)扮生上樓了。寶辦茶具。媽母辦華燭洞房。畢竟欲知小旦為誰。請見下齣。

(清曉不冷比翼簾。嫩紅共眠鴛鴦食)

五更柝響月靜 (草稿)

(以下闕)

三秋葦歌夕碑文

三秋葦歌夕者。大阪人也。以櫛為業。婚于房州館山伊串

氏。性洒落。以俳諧聞。句々能言人所不言不得者。往々有驚人語。以寶曆乙亥生。以文政己卯三月十七日。卒于家。年六十五。葬于鄉之三福寺。通稱平六。無子。友人相議。釀費以建石。釋追號心譽受樂信士。

天鳴之歎 抑人自鳴 死而無知 藉友以鳴

天保四年癸巳三月 文翁書

(尙碑面には「まつ人もあらでのどけき旅路哉」といふ辭世の句を刻せられてゐる)

產則全書序

田子有二術。沼野玄昌。受而習之。目掃耳染。無施而不可。著書一篇。以公于世云。國家昇平幾百年。於茲世醫以大篇長冊。街賣於世者。實為不少。多是趙子之子。臨事輒取覆敗。如此篇雖小冊子。盡是鍊磨于血戰中。諺云。寸有所長。是揜天下之肌。拊其背。加之長沙之微意。猶虎而羽翼之。常山之蛇。魚麗之陣。世醫一對之。則莫不駭汗驚伏。叩壘而乞降焉。揣摩之勢豈不愉快乎。小湊地。面東海。朝暉一發。錦波萬里。長鯨揚鬣。銀浪千丈。自古名士往々出寒鄉。如疑我言之不信。請質之海濱。天保辛卯正月 林世文撰。

房州雜詠後叙

東洋有大魚。曰鯨。鼓浪奮鬣。吐吞潮水。其形如山。舟人畏而避之。不知者曰為偽也。菜畝有小蟲。羽化為蝶。遊戲花園。戀香尋氣。而有時乎飛揚。越大海。不



知何意也。不見者曰爲謠也。竹堂老人。善詩。長什短篇。隨手而成。恢偉纖麗。無不如意。比之物則鯨固有矣。蝶亦不爲無也。一朝以年老致仕。往來于房州。以讀書爲業。屬者。題詠各郡各縣之景況。編爲一小冊。以表其勝地。文住菱花七十年。而反忘焉。余忘而人記之。此皆仍詩教詩。不可不學也其如此。弘化五年花朝。文山撰。

養生新語序

老友百蘿翁。通稱山下玄門。以醫鳴于房總。其意以爲。尙未足遊上國。僑居于日本橋。奉賢主之寵遇。今茲翁年八十。開賀筵以招諸豪。以一冊供來客。壽觴三行。開讀之。仙風道氣。宜哉。翁之康強。百歲非難焉。文少翁八歲。今幸得是書。以加壽算。則雖文百歲非難焉。而翁處北海。我處南海。雖隔一長江。花朝月夕。每思之至。或乘筏。或乘鶴。與翁周旋在近。翁能加餐以俟。文亦制杖以俟。嘉永三年二月。菱華新井世文撰。

房陽郡鄉考序

烏海醉車。袖一小冊子。來示予曰。嘗著南總沿革圖。既梓行。今又將刻房州地圖。子其序之。開閱之。郡邑地界。山川之嶮夷。與岸涯程路之廣狹。一以備載焉。予曰。自古聖賢千言萬語。約歸了五倫。今斯書亦歸了日用。非大言虛語誇多以釣聲譽者。要於國政。不爲無益。故

欣然以書。嘉永三年夏五。文山新井世文撰。

加藤霞石篇



掬 靄 山 房 詩

霞石加藤濟世美氏草

詩酒由來稱莫逆 素居何以話平生 閑窓愁寂無人問 臥聽梧

桐葉落聲

秋日訪山寺

踏破烟雲十里程 丹楓曝錦滿山明 聞來柯響知樵路 隨着溪  
流到梵城 童子偷眠如有態 老僧入寂似無情 點塵不洗維摩  
室。便覺湛然禪味清

湯本驛阻雨

綠陰深處易黃昏 沉復雨中烟霧繁 坐睡覺來支枕聽 一溪春

水繞孤村

函嶺關

二十年前經過山 閑雲依舊走孱顏 昇平韶歲征途穩 何用欺

雞開曉關

桶峽懷古

聞說三軍此地屯 姓名千古只空存 山花寂々含風落 野草茫  
々帶雨繁 猶有行人尋墓碣 曾無後裔薦蘋蘩 一杯松下莓苔  
土。埋却英雄未死魂

和州途中作

西征千里信枯筇 朝發南都夕塔峰 孤客生涯何所似 浮萍流

水去無蹤

高野山

連天風雨滑春泥 幾處僧房枕虎溪 憶起當年阿母逝(此處三字空白)

上子規啼

山村夜歸

十里歸來山更山 樵家人定水潺溪 鷓鴣啼歇天將雨 月落遠

巖雲樹間

漁溪春雪圖

人煙憮憮半漁莊 十里梅花吹酒香 纔出店門天又雪 笠檐蓑

袂萬琅璫

送定觀上人赴京師

飄然孤錫向京華 水送山迎去路賒 五十三亭誰作伴 雨蓑風

笠徹袈裟

悼木子讓

二十年來精學功 今秋仙去總成空 可憐霜下蘂葭路 日々奉

花三尺童

睡起試步

蠻童報道熟瓶茶 起見簷前日脚斜 蝴蝶夢香三徑草 倉鷓歌

媚半山霞

綠楊陰裏呼漁舫 紅杏開邊問酒家 隨處一杯還一

詠 君看顏色醉如花

寄遠玄由 加藤霞石篇



從浪華抵丸龜舟中作

海色磨銅暑氣微 客船到處霧霏々 布帆六幅護吟坐 不覺露  
華露葛衣

五峯山

五峰歷々雨方殘 雲吐霧吞風力寒 將道山靈藏畫本 米家筆  
意與人看

御手洗島訪高橋良策。々々曾學鑿於江戶足立先生之門。

與予同其塾。今茲天保癸巳。予將游長崎。航海過藝州。

阻風雨。入所謂御手洗港者。偶然得面晤。仍留予宿焉。

可謂奇緣矣。記其事兼代留別

分手十年魚雁絕 地圖天數無聞說 風帆今日過君門 話舊未  
終還報別

投宿高橋氏阻雨

客窓雨滴不成眠 一點殘燈耿枕邊 回首故園千萬里 平安兩  
字托誰傳

御塔門

劈破一江通萬航 平公塔下水中央 誰悲千古興亡事 打岸狂  
濤聲斷腸

廣島留別越智良碩

憶昔十年前 送君東海船 今來吾作客 君送鎮西邊

廣島

廿里城中無數家 山陽第一舊繁華 薰風五月值佳節 處々樓

臺旗影斜

嚴島

巍巍島勢拂雲開 澎湃濤聲打岸回 若值求仙尋藥士 鎮西亦  
自有蓬萊

錦帶橋

城鼓一聲烟欲消 朝陽照出錦川橋 錦川橋接橫空半 髣髴天  
弓張不搖

赤馬關夜泊

十里樓臺千里江 三更鼓柝五更雨 征人眠覺揭篷看 依舊關  
山啼杜宇

自播摩洋。至玄界洋。數百里之間。漁人生於艇死於艇。

不知土居者多矣。予奇其事。因賦絕句四首以記之

到處垂輪到處歌 浮家泛宅不堪多 除非一箇吟詩事 渾是高  
人張志和

答箬相隨舴艋舟 百年活計太風流 妻能搖櫓夫能釣 不為功  
名慕直鉤

柳為門巷艇為臺 世路風塵何肯來 知爾平生胸字淨 魚蝦叢  
裏酒千杯

浮榮不到釣人家 釣去釣來眠荻花 一葉扁舟好安宅 勝他公  
子七香車

玄界洋

載將筆視鎮西游 九萬鵬程一葉舟 於越勾吳何所處 浮空寸

碧是岐洲

瓊浦夜泊

瓊山々下雨初晴 浦口風秋氣色清 十里樓臺烟一帶 半江明  
月夜三更 露華滴瀝滿船纜 燈花依微蘭館檠 試問蠻人奏何  
樂 銅鑼聲和玉笙聲

長崎竹枝二首

鎮西此地別乾坤 夷往蠻來日夜喧 知道人情翻覆早 半通漢  
語半蘭言

豈唯言語近蠻夷 萬態千容總是奇 婦女就中風俗異 微波上  
面各橫眉

題鐵翁上人畫

江山欲暮路縈回 淡靄輕烟天倒開 認得蘆花洲盡處 扁舟載  
箇月明來

題逸雲居士畫

家住溪雲樹靄中 不容俗士利名通 某邱某水誰能管 只此厖  
眉一禿翁

石崎融思畫布袋像讚

溫顏含笑耳垂肩 鼓腹便々如許圓 若欠破囊施百福 不唯違  
佛又違天

觀木下逸雲草書有感

運筆從容氣脉濃 數行草字自藏鋒 春來何暇論唐宋 墨雨淋  
漓起臥龍

自諫早至佐賀。凡江程百二十餘里。其渡口。鑿杉木或楠

木以造舟。船頭曰圓木船。纜不過載舟師二人游客二人

也。二艘相接。各自掛蒲帆而行。其疾如飛鳥。舟師云。

長崎有變異則以此船訴。佐賀侯故備焉。豈不謂奇哉。不

可以不記。援筆題二絕句。

風送征帆浪貼天 舫齊危坐不須眠 宛如戲鳥翔空碧 千里行  
輕獨木船

丈餘小艇滿帆風 千里歸船一瞬中 回首肥州是平地 雲仙獨  
立刺天雄

大宰府謁菅公廟

天拜山前村路遙 振筇先過第三橋 菅公廟畔將昏暮 數點紅  
燈照寂寥

小倉矚目

江心收靄鑿於鏡 帆影映波寒似霜 遮莫酒家賒不得 典來一  
褐答風光

蟹

汝性同蠻字 橫行儘自由 若有心腸在 終爲萬國愁

漁歌子追次張志和韻

明月磯頭白鷺飛 蘆花水冷碧鱸肥 一笠子一蓑衣 烟波深  
處掉歌歸

投小豆島琴塚村賞晚景

幾箇茅廬住水汾 遙村樹暗日將曛 炊烟一簇開還合 忽作山



腰繫鸞雲

須磨浦

數行帆影白千頃 十里松嵐青一堆 莫怪山人拋筆去 名區却不入詩來

漁父

頭上一蕩笠 肩上一蒞蓑 扁舟日復日 百年寄烟波 歸來每夕陽 沙汀曬網羅 網羅未全乾 新月登巖阿 携魚走前村 沽酒楊柳坡 一醉天地濶 高唱欸乃歌

澗水夜歸

灑氣橫秋露未乾 輕篙觸處水風寒 山肩荷得短娥鏡 付與舟人半夜看

京師秋興

東奔西走了生涯 又見都門秋色移 正是蓴鱸好時節 孤征千里惹歸思

琵琶湖夜景

恰好清秋七月風 琵琶湖上聽鳴鴻 天公作意開雲匣 水美山妍月正中

磨針嶺

萬丈懸崖百尺樓 寸眸下瞰淡湖秋 須臾詩就清人骨 疑在雲林畫裏游

木會山中作

萬壑千峰不染塵 幾家村落與雲隣 曾辭利點名癡客 且號蕪

蕘雉兎人 數畝石田爲活計 一輪山月結交親 也知風俗殊城市 到處無懷太古民

確嶺

連山髣髴疊波濤 北望下毛南上毛 只道登臨寬眼界 宿雲屯處一泉號

隱栖

一閑占得老煙霞 無復人間名利譁 架上圖書甕中酒 爲吾斷送淡生涯

寄大沼子壽

蠶食春桑爲吐絲 君探梅里在吟詩 胸機織就百端錦 絢爛裝來句々奇

漁父吟

半夜江頭月色高 蘆花深處繫漁艘 篷間一唱滄浪曲 不覺露華沾弊袍

冷炙殘杯味不甘

好爲漁父釣江潭 篷窓無復世塵到 楊柳陰深春睡酣

春風一棹去沿洄

無數桃花夾岸開 洞口雲深不知處 恍然疑入武陵來

醒便垂綸醉便歌

渾家眠食在烟波 泛然南北無拘束 真是當今張志和

襖雷聲中葉似舟

得鮮換酒幾春秋 也無胥吏求魚稅 鷺鷥鄉一素侯

竹賽東坡 看花情寄在芳野 對月魂飛到更科 藉使無朋有村釀 春朝秋夕品題多

遊長林寺同星巖先生紅蘭女史賦

會聞風景好 風景實超凡 海水開明鏡 雲山啓畫函 傾城洲畔樹 田子浦邊帆 眼界寬如許 遙峰日欲銜

同星巖先生紅蘭女史登鋸山二首

振策同登古梵宮 松杉影裏路斜通 欄前峭壁皆神鑿 坐上奇峰悉鬼工 七島雲烟歸一掌 十州山嶽入雙瞳 詩成不怪脫凡調 身在天然圖畫中

寺在危巖亂石間

登臨探勝豈辭艱 溪聲松韻三層閣 浴鷺浮鷗十里灣 賴有遠公能許酒 儘教元亮不思還 功名富貴終何用 占得江山半日閑

送星巖梁川先生歸江戶

君是明星巖下客 百年功業以詩鳴 風花雲月常相友 水鳥山禽到處盟 千里挈家遊海角 一朝告別向江城 定知窓下繡奚錦 迸出波濤澎湃聲

壬寅元旦二首 (天保十三年)

滿枕春風吹夢清 起看遠岫早霞生 房山陽氣最天下 無數鶯兒出谷聲

滾々滿城車馬塵

何如荒境靜迎春 山人四十又加一 仍是平安無事人

送眞野美卿歸江戶

送眞野美卿歸江戶

腰繫鸞雲

須磨浦

數行帆影白千頃 十里松嵐青一堆 莫怪山人拋筆去 名區却不入詩來

漁父

頭上一蕩笠 肩上一蒞蓑 扁舟日復日 百年寄烟波 歸來每夕陽 沙汀曬網羅 網羅未全乾 新月登巖阿 携魚走前村 沽酒楊柳坡 一醉天地濶 高唱欸乃歌

澗水夜歸

灑氣橫秋露未乾 輕篙觸處水風寒 山肩荷得短娥鏡 付與舟人半夜看

京師秋興

東奔西走了生涯 又見都門秋色移 正是蓴鱸好時節 孤征千里惹歸思

琵琶湖夜景

恰好清秋七月風 琵琶湖上聽鳴鴻 天公作意開雲匣 水美山妍月正中

磨針嶺

萬丈懸崖百尺樓 寸眸下瞰淡湖秋 須臾詩就清人骨 疑在雲林畫裏游

木會山中作

萬壑千峰不染塵 幾家村落與雲隣 曾辭利點名癡客 且號蕪

繫艇楓根苔石間 沙鷗睡着夜汀閑 孤篷半揭疑天曉 月白蘆花十里灣

花十里灣

富貴功名水上萍 好將生事寄茶箬 茫茫塵土人皆醉 唯有江湖漁者醒

會向江湖稱長翁

厭聞俗士說窮通 蘆花爲被石爲枕 一夜醉眠明月中

水綠山青境自閑

沙洲爲郭柳爲關 莫言漁叟無功業 管領桃花灣復灣

萬頃風濤十里洲

直鉤何用釣王侯 人來若問窮通事 笑指蘆花月一船

綠笠青蓑自在身

桃花流水好爲隣 不知秋谷採樵客 孰與春江垂釣人

浴鷺浮鷗是比隣

蘆刀水甌每隨身 不聞塵土興亡事 萬古昇平世界人

先生住在白雲山

山作屏風雲作關 除却春花秋月外 圖書萬卷一身閑

翔靄山房雜興

餘生易養是溪山 爲住危峰怪石間 半夜倚窓窺月影 每朝支枕聽潺湲 更無塵熱侵茅舍 唯有清風度竹關 人是人非復何問 一身欲了百年閑

衡門賁趾倚巖阿

不蹈人間名利波 三尺孤琴小彭澤 數竿脩



春淺雪深人跡稀 可堪老子送君歸 金龍山畔休淹滯 無數櫻花香洗人

題所藏小豫山石

視山顛米老 仇池狂坡仙 二石今何在 圖中只空傳 吾鄉豫山下 觸崖一條泉 々中產玲瓏 泉水磨更妍 山翁亦好事 採樵過溪邊 揀取一尤物 持贈不要錢 其形何奇醜 其色何粲然 眞成小豫山 無乃鬼斧鑄 延之入吾室 敬之比名賢 吾癡同蘇米 三拜狂且顛

放吟四首

宅邊種竹意如何 爲使此君遮世波 四海茫茫誰似我 古來只有老東坡

浮家泛宅每隨身 山月江風好作隣 四海茫茫誰似我 古來只有姓張人

折腰何用戀浮榮 欲向田園學耦耕 四海茫茫誰似我 古來只有一淵明

先生詩膽大於天 儘入醉鄉爲酒仙 四海茫茫誰似我 古來只有李青蓮

秋夜宴妓樓 捲簾對月且開宴 四隣人定酒陪香 品字座

夜永樓頭情欲倦 間川字線

送大槻士廣大槻才輔橫山舒公遊銚子湖來

鴻鴈來時發武城 西征未了又東征 已從金谷山中下 更向天

津橋上行 千頃風濤驅萬馬 一村秋色送三生 如過九十九灣去 聽取大鵬振翼聲

會萬八樓 肯與群賢競雋才 只將吟醉寄悠哉 一杯到手醒酬味 不厭紅潮上面來

雨夜追次陸魯望韻同大沼子壽賦 雨打茅檐聲々大 生怪身聽波浪臥 雨師底爲勢如此 倩得風師故相佐 栗子今宵任他壓 只恐朝來芭蕉破 山人爲之眠不得 起挑殘燈向曉坐

山家秋晚二首同原直直鱸彥之賦 一村兩村露爲霜 千樹萬樹綠作黃 忙裏不知秋色老 家々菊稻悉登場

天留秋色秘幽林 酒興詩情孰淺深 看取山家閑富貴 栗裝紫玉柿裝金

送赤松季吉遊奧羽 君是關西游學生 鵬程萬里試東征 肯非心海釣名利 只釋詩田文圃行

初冬山居用范石湖韻 閱盡牛經覺夜長 兒童溫酒恰如湯 陶家風趣依稀在 殘菊瓶中逗晚香

霜夜 旅鴈風寒聲斷腸 繩床眠覺夜來長 紙窓微白偏疑月 起見橋

春興 杏艷桃嬌夾路勻 朝々盡醉典衣頻 春風堪賞還堪恨 使我顛狂使我貧

春日郊外 茅堂日午課初終 老子相携六七童 野草連綿隨處遍 山霞靄靄入看空 尋花問柳南將北 逐蝶追蜂西復東 不識不知歸路遠 賞心更在夕陽中

杉田村口號 半堤嫩草一郊烟 十里殘梅二月天 醉出旗亭風又軟 鶯兒夢穩伴花眠

狹隈村僑居二首 索寞僑居意晏如 床頭枕是讀殘書 也知朝夕過門客 應喚先生生事疎

功名何足向人誇 只合閑居避世譚 西走東馳非我事 好移生計入烟霞

夏雲 雷雨界空陰霧分 奇峰幾朵現斜曛 少焉月出風吹散 忽作尋常一樣雲

遊長安寺呈羅漢和尚房 古刹枕溪雲護關 依稀風景小廬山 我移生計將投老 分否高僧屋一間

新秋雨後作

頭便是霜

梅花書屋 讀書窗外日初長 和氣未浮桃李場 獨有梅花漏春色 拂簾風遞去來香

溪中早春 何人索句立橋邊 溪北溪南春未妍 伐木聲中山帶暖 釣竿影裏水生煙

兒權將游學於江戶因賦一絕以示 書生多是誤其身 況值江城佳麗春 北里櫻花南里柳 青衿莫染綺羅塵

貧居戲作 政是春風二月時 雨薇烟蕨足供飢 塵生甑底還何省 欲向西山學伯夷

寄櫻溪野村先生 莫道官居稀匹儔 圖書萬卷復何求 一生志業供經濟 七步才名遍遠陬 早已仁慈懷土俗 豈唯忠烈奉君侯 癡兒弱冠未嘗學 欲托先生能育不

題三浦氏小潭 雲含暉氣密 樹帶雨聲濃 不受垂綸客 潭中有蟄龍

乘馬換法帖 百金求帖不乘肥 村路高低信杖歸 爲見張顛奔放字 憶曾春陌一鞭飛

加藤霞石篇

一〇一



老去初知歲月忙 春光纔了又秋光 楓人浴雨消殘暑 石丈梳  
風弄晚涼 林下蟬癡頻墜地 窓前蛛巧浪張網 溪山景物幽如  
許 散策尋詩水一方

秋日同秋月上人訪三浦君美

家如王霸占烟霞 峰轉溪回細徑賒 未到衙門香滿袖 巖邊一  
樹木犀花

山家秋興

手拾霜薪煮石泉 貧居也自好因緣 莫言坐客無筵席 蕎麥花  
開敷白氈

霜橘

風霜摧衆菓 金色滿林齊 壁處香於栗 嚼時酸似梨 能醒董  
子睡 儘適醉人臍 元是淮南種 誰移栽北溪

書窓寒月分韻得枝

挑得寒燈詠小詩 木綿衣薄粟生肌 映窓釵影知何物 月上奇  
松第一枝

觀生方猛叔草書有感

家體雖逾美 超然草法工 筆神千里勢 氣韻數行中 健鶻懸  
孤木 狂濤蹴半空 何須論肉骨 自有伯英風

戊申僑居除夕 (嘉永元年)

自嗤活計細於絲 守歲窮愁欲訴誰 賴有故人來餉酒 燈前一  
笑始伸眉

己酉僑居元旦 (嘉永二年)

未慣僑居年又新 柳含翠色水含曠 一盆香餅仁人賜 忽得三  
元富貴春

客到

無端客到早梅天 當酒煎茶坐正圓 窓紙破來猶未補 東風吹  
雪落吟邊

鋸山七首

兩腋挾風攀鋸峰 鋸峰峰鋒利於鋒 先生親向山靈說 截破雲  
烟莫駭龍

攢峯骨立亂雲叢 恰似群龍跳半空 不用別尋方外去 登臨身  
是小仙翁

山自峩々水自流 恍疑身向畫圖遊 李劉筆意依稀在 破墨烟  
巒萬頃秋

飛流千尺落峰頭 南瀉房州北總州 何物移來分水嶺 一泉鳴  
破兩鄉秋

化工鑄出幾崔嵬 劃斷二州雲作堆 下瞰漁帆小於蝶 將言白  
屑舞風來

雨洗奇峰奇更奇 更奇之處立多時 不須儒術須仙術 縮取江  
山入小詩

攀盡崙峩到梵城 山高海闊望縱橫 人間何處無奇景 不許松  
洲獨擅名

吞海樓賞月 白雨乍來還乍晴 山風吹酒海樓清 滿天靶子須臾散 贏得金

盆一夜明

鋸山四首

天降丹青手 染成山水新 霧吞雲吐處 盡作亂柴皴  
山形如削玉 海色似磨銅 到處渾奇絕 依稀在畫中

龍虎鬪雲間 鯤鯨躍海灣 若通詩酒路 欲老此名山  
捫天凌絕頂 吞海醉飛樓 樓角高千丈 十州歸一眸

詠錢

阿堵青蚨孰是名 只應呼做孔方兄 非君百物渾難辨 爲酒爲  
茶幾變更

日本刀奉次佐賀侯韻

三尺寒光鑄出豪 凜如紫電照銀濤 洋西鈍賊誰當得 五大洲  
中第一刀

石榴花

百卉媚春紅幾堆 此花那獨後春開 年々五月裝成艷 壓倒珊  
瑚瑪瑙來

送秋月上人浴草津溫泉

聞說毛山路險巖 可堪多病老禪師 清貧我亦非無贖 截取枯  
藜寄一枝

猿蟹合戰圖

無腸公子性優柔 忍辱包羞志未酬 忽辱同盟三傑計 伏兵急  
拉巴西侯

市川三益園中。生小梅一樹。蓋天造而不費栽培者也。衆

加藤霞石篇

皆驚異焉。予歡賞之。賦一絕以寄。

開說喧妍屋角梅 情人不種倩天栽 知君他日類和靖 造化先  
傳消息來

留題僑居壁

淹留忽過一年強 烏兔胡爲如此忙 他日君來問陳迹 芭蕉葉  
上有詩草

昇平吟

黍稷一何實 皇天雨露均 郡縣一何治 公家德化鈞 撫民如  
愛子 憂民如傷身 人煙幾萬戶 各自風俗淳 野無盜賊患  
可以安行人 途無拾遺者 可以樂比隣 耕夫謠蒼莽 樵夫歌  
嶺岫 大哉我太守 求仁而得仁 聞說仁者壽 壽期幾千春  
竹九萬。解官再遊房州。阻雨於予掬露山房。戲賦二絕句  
以贈。

寸祿拋來天一方 醉顛吟嘖也何妨 新醅有味君須試 不讓蘭  
陵美酒香

憶昔紅顏始見公 十年一變不相同 髮如蓬艾面如鐵 髻髻鍾  
膺怒向風

庚戌元旦 (嘉永三年)

谷口風喧鶯試歌 溪南冰解水初波 只嫌青帝教人老 髮與梅  
花一樣皤

春興

世人莫訝囊囊空 今古詩家豈免窮 一笑新春閑富貴 寄情福



壽草花中

竹九萬與梨公錦。約過予搦靄山房。將遊奧山村。九萬時

患宿醒。竟不果。予戲賦小詩以寄。

囊底無錢據醉鄉。吟行儘被宿醒妨。麴神不管詩人事。爛却先

生錦繡腸

偶成

白雲叢與綺羅叢。畢竟朝昏情況同。看取吾儕歡樂別。不將一

石換三公

病中戲作

病魔窮鬼本同盟。日々提携惱此生。典盡衣裳無可典。半床筆

硯一爐鎗

予一日訪竹九萬僑居。九萬示以夏晚即目作。其詩曰。烟

霞痼疾竟難痊。不負山中清淨債。寫出眼前真景詩。傍人

誤認作題畫。予賞咏三四。適遠山雲如詩卷展在案頭。九

萬曰。戲以遠山雲如四字。冠句頭。各賦一詩。以可書其

後。予曰諾。仍用前詩韻。

遠游吟癖未曾瘥。山水爲驪多酒債。雲影波光到處題。如斯寫

出有聲畫

傲前體。以竹九萬別號醉死道人四字。與方猛叔別號不動

山人四字。冠句頭作二絕句。

醉客元來何後身。死生悟得只甘貧。道經携去換村釀。人喚當

年劉伯倫

不乖名位筆精工。動使龍蛇闕紙中。山鬼水神傳法否。人間無

此妙書風

梅雨

梅雨兼旬苦寂寥。茅堂何以慰無聊。要探囊底沽村酒。又恐前

溪沒土橋

分黃梅時節家々雨。爲韻得時

鳴蛙閣々雨如絲。留客床頭一局碁。隣寺鐘聲將報午。也知苦

闕不多時

遠山雲如再遊房州。逢兒權於途中。投詩草一部辭去云。

予戲喻之雲。以賦一絕且遺憾。

雲脚忙如鞭逐駒。須臾不駐御風趨。老眸髣髴空相望。落影何

處淡欲無

辛亥除夕 (嘉永四年)

僑居爲例若爲情。三擲烟霞入市城。何物明朝報青帝。却慚老

後小虛名

壬子元旦 (嘉永五年)

暖日冰銷春意和。滿城鶯語不堪多。化兒有術教人老。染得鬢

絲如許皤

城中僑居

如海紅塵漲比隣。此間誰與同詩酒。一盆竹石半窓梅。乃是我

家三益友

古豐臣氏之征伐朝鮮國也。加藤小西二氏。共爲先鋒。予

之下帷於萱葉坊也。與幸兵衛者。對門相居。彼姓小西。

予姓加藤。豈不謂奇哉。締交未數月而彼已辭去。遂不知

其所之。因戲作二十八字。

藤氏正兵西氏奇。兩雄戮力議征戰。元來智略不相同。西氏敗

軍藤氏殿

移居

正是春風二月初。瑠璃殿畔卜新居。無端門外梅花市。一夜聞

香廢讀書

題枕山詩抄 昌鄉大沼子壽一字

星巖遠去五山亡。都下詩田已欲荒。賴有昌鄉釋陳迹。才華挺

出滿天香

讀川本幸民所譯氣海觀瀾廣義有感

吾黨幸民奇士哉。要將理學育英才。書傳一萬三千里。譯就分

明問世來

友人方猛叔者。爲書家中之巨擘。下帷於江戶群松坊。纔

隔數武。有祝融之災。猛叔幸免其患。因有此寄。

何事天公降此災。千門萬戶忽爲灰。須臾烟沒城中穩。知道君

施墨雨來

將東游。留別大沼子壽 橫山舒公 生方猛叔 鷺津文郁

諸先輩

纔過重陽便上程。淒涼風物總關情。荒鷄十里侵殘霧。落月半

輪寒滿城。愁裏添愁舊詩友。客中爲客老書生。會無脚力君休

加藤霞石篇

評 寸步猶能信杖行

阿波玉潤禪師。賦小豫山石詩見寄。因次其韻併以謝

石丈不言何太頑。高僧一偈始開顏。吾唯摩翫如頭目。甘受顛

名落世間

矢那村訪嶺田士德僑居

幽居深擁幾崔嵬。密竹疎松繞屋栽。將道先生見機早。敲門聲

裏命杯來

笠森口號

山風霜氣逼人寒。恰是橙黃橘綠天。何管陰晴無定準。蓑翁流

落笠森邊

東金驛似河野子貞

古驛傍山通海涯。南總第二小繁華。豪門巨室連軒麗。才子文

人有幾家

曉發

荒鷄殘夢月西斜。處々曉風吹木瓜。白石敲光誰氏婦。厨烟青

上野人家

九十九里口占

路在彎環沙漠間。怒潮捲雪灑人寰。歸來誇說風波險。總海九

十九里灣

題芝山觀音寺

巍然傑閣聳雲端。便做廬山秋後看。只缺青蓮詩句好。滿林葉

落夕陽寒



宿芝山觀音寺。邂逅友人真野美卿。實可謂千里外之奇遇也。

因賦一絕以贈

投宿僧房未擁衾 偶然齋酒有知音 醉來堪喜還堪感 石上三生緣最深

寄龍海上人

揮灑縱橫筆有靈 龍蛇迸地墨痕腥 果知書法來懷素 磊落長同醉不醒

寄鈴木大年

北總良農字大年 晴耕雨讀腹便々 也應呼做陶彭澤 萬卷圖書二頃田

題金親氏烟霞窟

不辭幽討入煙霞 去問風流王霸家 夫讀道書妻鼓瑟 人間無此好生涯

銚子港

晨風吹度海螺城 水靄山烟次第晴 蛟蜃氣蒸洲盡處 觸崖萬馬斷腸聲

東寧河夜歸

東寧河上問歸程 寒氣稜々鷗夢驚 月滿篷窓霜滿岸 愁聞枯荻戰風聲

幽居

幽居種竹豈須多 纔有三竿俗可逶 露葉風梢涼似水 爲君幾

度引詩魔

今茲嘉永癸丑距永和脩禊。千五百年也。暮春之日。生方猛叔。招同社諸子於其相忘亭。集蘭亭記中字。以謀賦詩。予亦幸得關其席。賦一詩

群賢相會地 和氣自然生 俯察水無迹 仰觀山有情 日春蘭室靜 天暮竹林清 文化今猶盛 風流託老彭

送澁谷淡良陪筒井使君之長崎

追陪千里趁晴曦 西指九州天一涯 聞說洋船寄碣嶼 男兒是報國恩時

十一月朔過釜谷

蒼茫曉景帶霜看 草色枯來如許丹 貧士一裘何足怪 認他野馬耐飢寒

再浮東寧河二首

又將書劍向江鄉 不斷蘆汀不斷霜 風景微茫堪入畫 數行旅雁下寒塘

烟霞痼疾未會瘳 木下風邊再喚舟 來往年々閑自在 也隨鷗鷺學浮游

閱小見川八景兼示梅花道人。道人江戶人。以詩爲業。今茲應土人之囑。下帷於此云。故及。

超然景物美何如 水帶夕陽山帶霞 近有風流林和靖 新添一位老梅花

潮來竹枝詞二首

魚滿簞管酒滿瓢 老夫乘興試逍遙 嫦娥照出江心水 一片寒

光十二橋

筑波山下大江流 目斷常州々盡頭 鼓浦鱸魚霞浦酒 併看風月洞庭秋

次魁堂大夫賞牡丹韻

閑庭春景永 雨裏賞名花 賦白天香逞 嬌紅國色誇 一團湘水雪 五彩赤城霞 莫道無情物 偏歸富貴家

九日二首

荒陬遊遍入繁華 萱葉街頭購小家 昨夜重陽前一日 藥王祠畔買黃花

城市駸々節序忙

算來今日又重陽 天公昨夜役青奴 染出菊花如許黃

官居春興

官居有酒有疎梅 詩思日遭花酒催 始信東皇量太大 塵中也使素襟開

春日郊外

千山萬山花帶雨 五里十里草生烟 莫怪先生酒腸大 春如少女使人顛

三月念九日。月池館賞藤花。兼送春

愛此藤花入品題 水晶簾外紫雲低 不知春色歸何處 獨殿江南卷畫溪

有與魁堂大夫遊墨水之約。阻雨不果。乃作二十八字

加藤霞石篇

小院畫長慵守愚 屢憑欄角撚吟鬚 生憎春雨害幽討 他日江

村花有無

墨水游春。同魁堂大夫賦 不覺春風去路賒 追隨蝴蝶入芳霞 千條垂柳千條雨 十里長隄十里花 木母寺邊呼酒舫 孤王廟畔訪僧家 此間足寄平生快 莫笑山人醉帽斜

丙辰上巳 (安政三年)

每逢佳節苦無錢 典却春衣醉那邊 滿鬢插花誰氏子 桃花醉與海棠顛

題所藏石

怪石誕何地 吳耶將越耶 數峰欹硯北 坐對思無邪

弔雪山公子

春雪淡々兮 秋露蕭々兮 嗚呼公也猶韶齒 露碎雪消

送轟千里再赴宮館

崎人老去事遐征 想見關山千里情 正好風濤秋八月 鵬程重指北溟行

八月十四夜作

正及仙娥二七姍 天無纖翳地無烟 一分虧處看逾好 不必期他三五圓

遣興

刀圭餘事學吟詩 句々何須強吐奇 老眼睨來天地際 行雲流水是吾師



仕官

豈料虛名落措紳 竟爲五斗折腰人 還鄉衣錦非吾事 五十只  
同朱買臣

官居

塵土情殊邱壑情 竟他富貴與功名 伴誰此際同詩酒 欲向青  
山訴不平

題所藏石

天公何手段 鑄出小嶙峋 峰聳巒橫處 宛然荷葉皺  
次魁堂大夫秋晴思出遊韻

私綠作紅

得此新晴人倚欄 一天秋老大城中 請君莫誤遊郊約 草木無  
天恩

天恩

天恩廣被四邊均 腐草爲螢枯木薪 吾輩未應言贅物 年過五  
十始稱臣

端午即吟

又逢佳節祝殘軀 好對榴花倒酒壺 鸞殿螭廬同一樣 凌晨趁  
例插菖蒲

十三夜賞月得寒字

旅鴈聲中月色闌 二分缺處最奇觀 老夫求句憑欄角 一片銀  
光照眼寒

偶作

投老醉鄉無一塵 花朝月夕典衣頻 從來此是吾家格 不祭錢

神祭麴神

雪中吟分韻 六花片片點空枝 萬木回春滿目奇 不可等閑過此景 縱令無  
酒豈無詩

見招習靜亭

酒間走筆贈主人。 豪門迎客興悠哉 魯滿盤中酒漲杯 掬鬻山人何所報 依前又  
獻惡詩來

偶作

天教老子落人間 官事多端身未閑 莫道先生背松菊 夢魂無  
夜不家山

昌平吟

百歲收戈德化周 晏如六十有餘州 昌平阪上轉頭看 八百八  
街歸一眸

戊午正月三日記雪 (安政五年)

夜風吹雪逼人寒 曉起鈎窓袖手看 滿目玲瓏無寸碧 全家住  
在水晶盤

戲詠梅花

羅浮山下雨初晴 洗出新粧如許清 月裏妙香烟裏色 併看蘇  
川與崔鶯

暮春遊某侯別業

愛此園中春物嘉 殘紅嫩綠映晴霞 可憐一種蓮華草 不產僧  
家產俗家

月池館賞牡丹

沈香亭畔牡丹開 媚紫嬌紅錦繡堆 應似楊妃含笑立 無情花  
亦有情來

奉弔雪齋公

豈管風流了一生 高蹤喚做賽淵明 圖書萬卷詩千首 博得文  
人不死名

寄轟千里在蝦夷

一別天涯奈老何 光陰三歲疾於梭 南中春淺寒如此 想見北  
溟風雪多

春日出遊

春晴十日暖如煨 去問墨陀河上梅 到處店門多酒債 鶯花畢  
竟作驪來

新樹分韻

千林花謝一句強 柳暗槐深鶯又藏 却是風情歸嫩綠 勝他凡  
卉媚春陽

詠蛙分韻

幾百荷錢擲淤泥 黃梅雨裏買田雞 田雞不管村雞事 徹夜喧  
鳴歸品題

春雨即事

城中春半雨如膏 盡日書窓寂不囂 誰識山人閑理事 梅花香  
裏讀離騷

新荷分韻

加藤霞石篇

神祭麴神

雪中吟分韻 六花片片點空枝 萬木回春滿目奇 不可等閑過此景 縱令無  
酒豈無詩

見招習靜亭

酒間走筆贈主人。 豪門迎客興悠哉 魯滿盤中酒漲杯 掬鬻山人何所報 依前又  
獻惡詩來

偶作

天教老子落人間 官事多端身未閑 莫道先生背松菊 夢魂無  
夜不家山

昌平吟

百歲收戈德化周 晏如六十有餘州 昌平阪上轉頭看 八百八  
街歸一眸

戊午正月三日記雪 (安政五年)

夜風吹雪逼人寒 曉起鈎窓袖手看 滿目玲瓏無寸碧 全家住  
在水晶盤

戲詠梅花

羅浮山下雨初晴 洗出新粧如許清 月裏妙香烟裏色 併看蘇  
川與崔鶯

暮春遊某侯別業

愛此園中春物嘉 殘紅嫩綠映晴霞 可憐一種蓮華草 不產僧  
家產俗家

細雨空濛夏首天 半池荷葉小於錢 田々泛綠花猶未 誰辨紅  
蓮與白蓮

送谷口活堂之長島

西指長洲路幾程 可堪冒此瘴雲行 桑名驛畔休倦帶 蠶婦凝  
粧繫客情

觀筒井侯詩筆有感

豈管稱文傑 忠貞無匹儔 詩心雖慷慨 書態自風流 字々波  
瀾迸 篇々錦繡稠 龍川與海嶽 併看筒封侯

墨水探春

天過清明春尙賒 墨陀河上漾殘霞 官居不得及時出 辜負櫻  
花逢菜花

春日散策

一枝筇竹出城闌 雨氣纔收天氣新 柳暗深川橋畔綠 花明淺  
草寺邊銀 烟霞飄飄春如海 蝴蝶翩翩暖可人 多謝風光歸麗  
句 詩翁囊底未全貧

送梅溪野田大夫役長島

恰值烟霞閏月春 肩輿到處百花新 請君能化民風去 憂國如  
今有幾人

送笹倉某奉命赴西洋

所謂机峰者在南亞弗利加之絕巒 西洋船皆過此山下云 故及  
鵬程九萬里滄溟 決背狂濤屢氣腥 北極沒時南極出 机峰一  
髮刺天青

示清人

示清人



君是中華不丈夫 屬來夷狄跡模糊 如知海岳國恩重 請舉一帆歸舊都

歸鴈有感 松平三河老侯課題 一行歸雁影窓紗 字々分明整復斜 嗟我平生老塵土 十年不見故園花

寄大沼子壽 爲水爲魚良有以 作師作友豈無緣 交情已熟殊風趣 君是詩顛我石顛

偶成二首 慙吾平生負烟霞 無復才名上齒牙 誰道先生似樗櫟 擬將長壽報年華

車馬駸々往復回 城中無處不塵埃 故園松菊能存否 收拾殘骸歸去來

秋夜喜友人到 邂逅相逢談入玄 玄談難了夜如年 新茶一碗君須味 知是山人手自煎

八月望 會萬八樓 醉中走筆 酒氣和來磨墨香 筆頭到處得如意 傍人莫笑字欹斜 二八嬌娥留客醉

己未八月望患暴瀉病記事 (安政六年) 此病始於印度地方 蔓延於五大洲中 其禍萬死僅得一生 豈可不畏哉 病根一自此間栽 億兆民人埋却來 幸作庸醫免其死 一杯先

祝一周回

今歲庚申 令嗣年已十歲。十一月望。置酒祝之。諸臣各有歌詩。予亦不顧不肖。遂作二十八字奉賀。

北風吹雪不堪多 樹作梅花草作珂 天降此祥公可賀 遐齡百歲表眉顰

書松塘詩鈔後

吾黨先生字彥之 水雲深處下書帷 何妨才子住荒境 却使名聲轟海涯 烟月樓臺呼碧酒 梨花院落詠清詩 萬人爭誦新鐫集 爲是篇々具正奇

除夕

守歲一計每相違 苦思無如典幾衣 畢竟人間夢中夢 功名富貴是耶非

辛酉元旦 (文久元年)

官居幾度值春風 依舊梅花照眼紅 功業難成人易老 無能六十白頭翁

送巖谷誠鄉歸皆口

鴈正歸時君正歸 同來同去思依依 客程何處無春色 李艷桃嬌逐錦衣

予年已六十。未曾學問。今歲辛酉。將學於勿堂若山先生之門。而先生與予同甲。因不能無感。賦此以呈。

人生六十暗中行 不假雪螢爭得明 縱受他嘲也何厭 朝聞夕死是吾情

僧閑法海

同

詩情寄向寂寥中 美殺高僧隱草叢 白鹿垂頭承濟度 綠禽側耳聽談空 野烟淡淡封村舍 山靄蒼々護法宮 昨夜風人娶青女 醉顏猶映海霞紅

壬戌元旦二首 (文久二年)

山含瑞氣水含曠 山容水態兩闢新 老子依然似童子 笑迎六十年春

雞鳴狗吠半窓明 起看城中節序更 占斷春光誰最早 金衣公子二三聲

石讚

顏色雖然醜 幽奇誰敢讖 許多尤物裏 石丈獨超凡

元日雪

東風吹雪樹斜々 寒氣今朝幾倍加 片々飛來闔妍色 三千世界白梅花

觀星陵蓮池。賦小詩十首。以贈脇山

菱荷萬點柳千株 水靄蒼々淡欲無 我至不知他品隲 偶然喚做小西湖

占得壺中小有天

蓮塘繞屋水濺々 美君平素延眉壽 定是前身蘇軾仙 微波激瀾爛銀盤 冷眼看來暑亦寒 隔水樓臺高百尺 茶烟輕裊畫欄干

賀勿堂若山先生奉命謁幕府

老龍與俗不成群 抱玉懷珠潛水濱 近有名聲響天上 歎然奉命入青雲

題芭蕉翁像

人生誰無口 一言見肺肝 記取蕉翁句 秋風入唇寒

送大島子朴歸越州

秋天欲曉月依微 雁自南飛君北歸 莫道奚囊無一物 百端錦繡在胸機

送平岡子盛歸長島

鱸魚澆刺酒如油 今夜與君須獻酬 此去家山何日到 白雲紅葉滿林秋

送久我衡山歸長島

嗟君取路未曾行 峭壁攢峯數日程 恰似蜀中征討客 一鞭秋色入長城

奉賀太夫人壽筵

自古仁人性命全 天公假壽豈無緣 地仙容貌依稀在 喚做當年葛稚川

新爐

紅爐添炭堆 鼎裏鬪輕雷 今夜留僧話 新茶淪幾回

同中島竹馬都筑樂山青木綠窓。海晏寺探楓。得海字。兼似牛鳴禪師

霜染楓林未十分 却將微雨加鮮彩 好移生計養餘年 容否老



人煙懨懨倚池臺 無數荷花錦繡堆 自有淨因歸筆下 湘瀟風趣入詩來

衆芳皆俗態 幽客獨風流 自古占名位 宜封馨列侯

家住濂溪詩句中 紅濃素淡露未瓏 點塵不洗逍遙處 最見清高君子風

桃李花雖美 年々俗了春 此君曾不媚 瀟灑四時新

湖天雨歇夕陽微 楊柳陰深露未晞 風蕩漣漪荷氣細 一雙水燕蹴花飛

雪裏伴花眠 暗香凝欲凍 只嫌鶯語喧 喚醒羅浮夢

吟筇引過地仙居 山影湖光圖畫如 艷羨先生樓正好 一房荷氣半床書

節花和雨種 佳色報重陽 貪看小籬下 吹來風亦黃

湖邊漠々雨如絲 幾朵紅蕖和露披 纔吐蕊來香已溢 六郎醉寢半酣時

送大槻士廣歸仙臺 路入名區月色饒 金華松島水迢々 別來誰與同詩酒 都下文盟欲寂寥

無復人間塵熱侵 樓頭一望豁胸襟 青山驟雨添奇景 赤阪鳴蟬和客吟

壬戌十月望記事 支干壬戌小春期 想見坡翁游壁時 今夜妖蟆吞月去 無情造化返明暉

前臨烟海後霞關 只隔中間一朵山 山上有湖誰子釣 釣人機息睡鷗閑

題總宜樓二首 水烟淡々上平波 恰似佳人向鏡呵 莫怪詩成猶在袖 奈他山罵海嘲何

寄大槻士廣 知道從來功業昌 名聲嶽々卅年強 經學文章憂世志 風流好事養生方

明月窓前留客話 烟花榻上把杯嘗 翁兮吾黨奇才子 舊著新篇姓字芳

首戴紅冠足金距 欲將文武示人間 如今賺汝欠豪傑 閑却當年函谷關

蘭 三十年前 遊龍華寺 予愛其風景 今茲癸亥四月 有長島之役 途中淹留江尻驛者三日 適得閑重訪此寺 賦小詩以贈寺僧

古刹臨江眼界寬 一條洲背萬松蟠 歸來人若問奇景 東海道中三保看

客中偶作

老去何妨雪染髭 少年勇氣未曾衰 纔成歸省又行役 連月遠游第一枝

龍華寺 三十年前 遊龍華寺 予愛其風景 今茲癸亥四月 有長島之役 途中淹留江尻驛者三日 適得閑重訪此寺 賦小詩以贈寺僧

重尋江寺解吟鞍 風景依然照眼寒 三保松風富峯雪 併呈米法畫圖看

過薩埵嶺下記事 高巖爲谷我奚疑 天地變更無定期 薩埵山頭人路斷 只今唯傍海涯之

不見橫山舒公已六年矣 今歲癸亥四月 予投宿於吉田驛 因得面晤 可謂奇遇矣 故云

偶接溫顏似再生 匆々報別復傷情 人間合散如河嶼 莫道他時欠會盟

重過桶峽 用舊題韻 駿侯今川義元所亡

陣雲空散又空屯 想見當年瘞骨存 碑帶淚痕如許古 草凝腥氣不堪繁 無情風伯催山雨 有意行人薦綠繁 霸業難成謀易失 英雄千歲奈迷魂

訪平野氏習靜亭 戲作二十八字贈主人 經過風流彭澤家 疎松密竹路斜々 主人座右多清趣 萬卷圖

加藤霞石篇

書一鼎茶

遊八壺溪用星巖先生舊題韻 人間何處問仙都 只合齋糧游八壺 石語泉聲互相答 依稀盧岳雨中圖

長島客中作 又遭梅雨礙歸程 日與同人鬪酒兵 猶有魚蝦風味好 數行豪飲學長鯨

癸亥端午登多度山 閱一目連社祭 (文久三年) 古祠鬱在翠微中 雲吐霧吞山勢雄 騎馬爭奔超絕壁 土人說是鬼神功

投宿於吉原驛阻雨 到處泥深路更難 芙蓉峰下駐歸鞍 扶桑第一佳風景 空向黃梅雨裏看

吉原曉發 匹馬匆匆去向東 須臾雨霽日初紅 莫言造化無情物 洗出芙蓉插碧空

予未曾學畫 或誤聞能畫 持紙來有請焉者 固辭不允 揮染與之併題一絕

丈山尺木歸隨意 寸馬分人出自然 莫道先生無法則 吾家粉本是仙傳

觀蒸氣艦有感 夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人

夏蟲不信雪霜談 寒士曾疑蒸氣說 今日看來如此工 西洋人



物才華別

閑適

昇平韶歲浴恩波 沈溺風流醉且哦 對月將誇詩債少 看花不厭酒通多 偏甘邱壑寒生活 豈願烟霞痼疾痼 莫道山人無一事 虛心寫竹學東坡

買茶籃

莫怪先生向市探 青銅三百買茶籃 依稀陸羽清風趣 一鼎新煎滿坐饒

題桃源圖

洞天開處一溪通 獨有漁郎棹水中 只道武陵春色好 桃花夾岸浪皆紅

幽居

幽居寄在白雲隈 手自栽花手自培 何用別求詩料去 香風盡日入簾來

東坡左遷圖

絕代忠臣宋碩儒 却因諷諫放西湖 先生量大無遺恨 化作風流入畫圖

賀鈴木氏新婚

孔雀屏中各舉杯 小僮捧出小蓬萊 從今始結潘楊好 不日熊羆入夢來

飛鳥山即事

踏遍西郊十里程 游絲撩亂弄新晴 落花芳草春將暮 飛鳥山

頭飛鳥鳴

甲子元旦 (元治元年)

屈指今年六十三 老來富貴對花慙 不如脫繡歸鄉里 村釀山肴也自甘

寒江獨釣圖

雪灑篷窓風捲綸 一竿生計可安貧 羊裘畢竟惶他識 擬着蓑衣避紳指

冬菊

陶家籬落雪成團 傲骨峻嶒香更寒 真是花中隱君子 不將國色媚園官

題大職冠藤公畫像

一自代天誅逆臣 藤花為姓照千春 誰將絕筆摸遺像 只寫精神不寫人

鷗隣亭小集賞山茶花分韻

屋後奇芬是海紅 此花不肯媚春風 莫言寒卉無情物 應為嘉賓綻雪中

評梅

梅護江南隱者門 輕煙繞樹自寒溫 枝々々懸了木 朵々參差傍竹籬 露漏暗香花有淚 窓移疎影月無痕 清癯隔世依稀似 莫是林逋為返魂

偶成

山人得壽也能長 為是竹君醫俗腸 八尺床頭陳石丈 新添一

簡養生方

橫濱竹枝

樓臺匝地百蠻通 眞箇繁華冠海東 吹起銅鑼與喇叭 一聲々答月明中

賞春二首

日暖風微正好晴 水村山郭覓詩行 春來何處欠花樹 先問墨陀川上櫻

幽探盡日任西東

脉々游絲入眼空 到處櫻花如少女 道然含笑立春風

江南春色圖

江上春帆出沒 煙中楊柳模糊 不是雲林筆意 定應海嶽詩圖

春江晚渡圖

漁舍烟連蟹舍 江西水接江東 春柳陰中渡口 夕陽影裏歸鴻

夏山小景

寸筆危峰萬丈 尺箋飛瀑千尋 崖樹參差擁翠 溪雲匝匝成陰

夏山驟雨圖

迅雷不意驚人 驟雨無情逐北 水奔澗庭轟々 山隱雲中默々

江山秋晚圖

江濶寒潮捲地 山高霜氣橫空 石丈頭顛更白 楓人顏色偏紅

溪山雪霽圖

昨夜山風捲雪 今朝溪樹生花 漁客推篷買酒 樵人向戶烹茶

送春兼送中村某

加藤霞石篇

遠別愁邊柳色新

渡頭影落碧絲々 莫言流水無情物 半送行人半送春

新燕

燕子情何厚 來巢舊畫樓 樓頭風又暖 相對話春愁

訪中島司晨僑居

風景甚佳 賦長句以贈主人 僑居寄得水雲區 纔隔塵埃風景殊 詩酒閑遊聊復爾 釣魚真樂在茲乎 半灣明月掛楊柳 一抹翠烟封荻蘆 若使坡翁題目此 也應喚做小西湖

蘆雁圖

字々書空痕欲無 相呼相喚向江湖 江湖為畏虞人識 應伴蘆花隱畫圖

偶成

元是山居自在身 不知底事落風塵 殘埃冷炙悲辛足 只合拋官伍野人

題李白醉歸圖

落魄長安酒寄娛 風流磊々古今無 扶人醉態遭他寫 也勝金鑾侍宴圖

題赤壁圖

月照江山引興長 舉觴屬客水中央 坡翁賦就風流極 一變周郎古戰場

題所藏筆架

石丈呈奇飾墨場 好為筆架也何妨 依稀蝙蝠如張翼 美殺南



宮錦繡腸

送川田毅鄉歸松山

匹馬匆匆侵曉過 滿城霜氣不堪多 山郵水驛途千里 古渡荒  
橋雨一蓑 玉筍關邊雲縹緲 天龍河上月婆娑 吟鞭去矣休濡  
滯 塵海危於滄海波

題前赤壁圖集賦中字

江露橫空白 風清天地秋 挾仙凌萬頃 舉酒泛孤舟 洞壑簫  
聲響 山川月色幽 餘興何曾盡 東方水自流

恩田仰岳篇



# 孫子纂注

孫子纂注序

水有常心。而魚無常形。背高向卑。避實趨虛。倏而疾。忽而徐。分合寬窄。行所無事。歸所歸而止。是以善不屈於地之險。而能伸於地之上。其無常形。乃其所以善達常心也。若夫挾疾風驟雨而激怒。則拔隄防奪城邑。磐石以漂。大木以撥。其所向莫不壞破。轉眄間。百里蕩盡。無有孑遺焉。甚矣水之似兵也。孫子曰。兵形象水。洵然。古名將之行兵也。致而不致。枕水因地制流。是以無常形而有常勝矣。兵法興于上代。五禮有軍。大易有師。西漢所傳。垂二百家。而周秦多稱孫子。則所謂十三篇。是豈非集而大成者也歟。先焉者。孫子採而不漏。後焉者。不能外孫子。別發妙機神理。猶道之於孔子。譬之於張機。後之講其道者。莫不祖述而憲章焉。如六書。蓋十三篇之衍義也。而併稱七書。猶唐宋七家文之合韓愈號八家。恐非通論也。夫歷代名將。誰不讀孫子。苟得其塵垢秕糠。尙且陶鑄偉功。殊績足以煥炳天下後世。譬之汲水江河。各滿器而歸。以供其用。綽乎有餘裕。大哉孫子之道也。或曰。天地之化。日新不息。人事因以推移。今也火術精巧。於是兵制亦大變。昔日之長者。今則短。昔日之利者。今則

恩田仰岳篇

鈍。孫吳之略。何足稱于今日哉。曰不然。雖世有治亂時有污隆。未嘗以聖人之道爲迂而不適時用者也。兵之於孫子。亦何不然。旣已爲人經。何可廢。旣已行兵。武經何可棄。其或迂而不適時用者。蓋使乎法者。非使法者。是豈書之罪也哉。凡事窮而變。變而通。理勢之自然也。今夫器械。有所長則必有所短。鈇礮雖利。而豈無所窮乎。況國之於器。各有所便。他之利者。宜取。而我所用者。固不可棄也。本邦之於刀槍與弧矢。皇祖之所恃焉以定寇亂。闢寰宇。歷朝之所藉焉以保護億兆。震肅殊域。豈可不貴重哉。且邦人勇武之性。活機張旺。甚與三器相稱。非海外之所企及也。今火仗之出西洋。我已取而用之。則知我三仗。亦宜講而熟之。則彼一而我四。以鈇對鈇進。而弓。而槍。而刀。圓機活用。如環無端。卒然相救。以四當一。其勝敗之數。不待智者而知也。若或重出于外者。而輕具于內者。舍我利器。徒彼鈇礮之逐。豈不庶幾乎。所謂棄爾靈龜。見我朶頤者乎。往年嘗觀洋人畫卷。中有著我邦裝竹刀相擊刺之圖。頃日又聞。普王傭我刀師三人。以開教場。彼或已知其所窮耶。其講肄安知不及自刀而槍而弓乎。其研精之擊。又焉保不如我之今日乎。然則海外之器。未必止于鈇礮也。雖然是器耳。要在於善使器。而不使乎器而已矣。而其使器者法也。法誰若十三篇之精妙矣。雖然。亦在於善使孫子。而不使乎孫子而已矣。夫然。是以致而不致。有常勝而無常形。要之。神而明之。在乎其人。孫子其奈之何哉。世之注孫



子。殆數十家。互相得失。學者病旃。恩田世用。夙好韜鈴。尤覃思孫子。博讀諸家說。摘英撝華。作纂注三卷。寄示徵叙。閱之。析義精當。庶幾微旨可以窺矣。雖然。古人云。獲魚而忘筌。世用之意。亦將無爾嗟乎。予白首醉經。徒書滌以老。無一不朽立于世。今於世用之學。一以喜。一以愧。蓋其喜也可以叙。其愧也可以辭。久患目疾。文辭之請。概乎謝之。然相知之久。且懇請弗措。乃屢拭困眸。叙其旨。併及平生所持論。未知世用以爲何如。

明治辛未冬

瓠宇 芳野世育 撰

孫子纂注序

周道衰。而司馬法壞。司馬法壞。而兵家者起焉。春秋列國以來。士之述兵法以著書者。不知其幾也。漢初所傳一百八十二家。亦已夥矣。文成曲逆。刪取其要。定爲三十五家。今世所傳武經。蓋亦其內。而他皆既佚。其淺深不可得而知也。然周秦間多稱孫子爲兵法。太史公亦曰。世俗所稱師旅。皆道孫子十三篇。由此觀之。三十五家之書。莫深於孫子者。可知耳。凡士之立言。非原於聖人之法。則傳之後世。不能無其弊。孫子蓋原於司馬法者也。孫子齊人。而齊實太公封國也。太公佐文武定天下。司馬法之制。蓋有與焉。齊傳其法。管子祖之。以爲節制之師。

孫子纂注凡例

- 一嘗聞孫子注釋有數十家。而予未得悉見。今就所見者。收其可取而無漏。然不必標其名氏。特恐失煩冗也。非敢抄先賢之美。
- 一孫子之書。集注本爲最古。故文字不得據之。然義有可疑。亦從他本改正。
- 一近有清人孫星衍吳人驥同校孫子十家注本。校以杜氏通典太平御覽等諸書。頗爲詳核。故此編悉載之。如其改正。不必從之。
- 一直解講義之類。出明人之手者。概稱之近本。近本中若有異同。必注某本作某字。
- 一舊友福井子良。嘗得古寫本孫子。字畫端正。楮墨甚古。卷尾識曰文明十一年亥八月釋明徽寫。中有異同者。必注古寫本作某字。
- 一諸書所引孫子之文有異今本者。亦注其字下。

恩田利器 識

穰苴變之。以爲權詐之兵。然則孫子亦原之。而作十三篇。固無足怪也。故其所論。愛民慎戰。深致意於自治自守。若其權謀詭詐之術。特欲勝於易勝。使民不傷於鋒鏑之下而已。細繹其意。雖未盡醇。與臨事而懼。好謀而成者。無有大異。且至其形勢奇正之說。則泄千古之秘蘊。揭百勝之妙機。本末精粗。毫髮無遺。誠亘萬世。而不可易者也。但其書淵奧。微旨難窺。矧後世注家。多出儒生。字釋句解。詳則有之。而鮮得其要者。夫兵專門之學也。彼以詞章記誦之暇。遽欲窺兵聖之微旨。亦不已難乎。余武夫也。操觚之業。非所素習。常好讀孫子。鑽仰有年。竊以爲如有所得者。而今既老矣。風燭可虞。乃折衷衆說。間附己意。名爲纂注。以貽兒孫。雖然。兵者大事也。易言之者敗矣。當機之妙。必勝之訣。固非唇吻所能悉。蓋神而明之。存乎其人而已矣。

慶應乙丑夏日

恩田利器

孫子纂注卷一

恩田利器 纂注

孫子名武齊人。吳越春秋謂之吳人。以其仕吳也。武以伍員薦。事吳王闔閭。其未見闔閭。作十三篇以干之。故史記曰。武以兵法見於吳王闔閭。闔閭曰。子之十三篇。吾盡觀之矣。魏武亦曰。爲吳王闔閭。作兵法一十三篇。然漢書藝文志曰。吳孫子兵法八十一篇圖九卷。杜牧據之謂。孫武書數十萬言。魏武削其繁剩。筆其精粹。成此書。其言可疑矣。愚嘗考之。先秦古書。間有附後人之言者。所謂八十二篇。或亦如此。故魏武削其假存其真。使十三篇復於漢初之舊。今鄭樵通志。杜佑通典。太平御覽等。引孫子軼文。疑魏武所削者也。

計篇 近本作始

計。算也。出師之初。先計算彼我之優劣。料必勝而後動。管子曰。計先定於內。而後兵出境。形篇曰。勝兵先勝而後求戰。是用兵之先着。制勝之根柢也。十三篇以計爲首。其旨宜味焉。

孫子曰。兵者國之大事。死生之地。存亡之道。不可不察也。古寫本下有也字



國政之大者。莫大於兵矣。彼我相戰。一勝一敗。民由是而死者。國由是而存亡。奚可不察之哉。曰地。曰道。五文也。察者。覆審也。十三篇全勝之術。悉出於此。察字。荀子論兵曰。凡百事之成也。必在敬之。其敗也。必在慢之。故敬勝怠則吉。怠勝敬則滅。計勝欲則從。欲勝計則凶。夫敬者必察之。慢者不察之。死生存亡。由此而判矣。孫子開卷輒致丁寧。如此。後世主帥。內不修五事。外不校七計。或貪利而戰。或乘怒而動。勇者武進忘戒。怯者畏縮失機。至其甚者。濫修自肆。以廢武備。臨一旦有事。倉皇錯駭。自履覆亡之禍。皆孫子之罪人也。

故經之以五事。按之以計。而索其情。

按或作校。非。通典作經之以五按之計。十家注本從之。然據下文。則不改爲是。

此承上文言察之道也。經。常也。五事。即下文五者也。按。比校也。計。多寡之算也。索。曲求也。情者。敵之情實也。言欲察之者。先以五事爲兵之大經。而察己之修否。在己者既備。乃以己所已有。按其在敵者。而曲求其情實。則勝敗之理。可以前知也。凡古之知兵者。未有不下比按彼我。豫知勝敗者。韓信計項羽。荀彧論袁紹之類。不暇枚舉焉。然其獲勝之本。在自治之矣。所謂五事者。自治之道也。五事不修。則民怨兵叛。其亡不待按而決矣。此五事所以爲兵之大

經也。察之於己。大經已立。兵可以舉。然唯知己而不知彼。非所以必勝也。故又以計算按其優劣。夫知己不易。知彼尤難。兵者詭道也。安知不有毀形匿情。如管子內政寓兵法。呂蒙稱疾圖關羽之類。故特加而索其情一句。其示人之意爲至親切。然此未言所以索情之術。用間篇曰。先知者。不可取於鬼神。不可象於事。不可驗於度。必取於人。而知敵之情者也。以是觀之。則孫子之意。可知耳。

一曰道。二曰天。三曰地。四曰將。五曰法。

此舉五事之目。蓋用兵之道。人和爲本。故道居一。人心已和。而天時不可。則未可以舉兵。故天居二。天時已順。而地形不便。則未可以出軍。故地居三。三者已具。而其將無能。則戰必敗。故將居四。將已有能。而後法行勝全。故法居五。此五事之序也。然孟子曰。天時不如地利。地利不如人和。尉繚亦言之。則地當先於天。而此次天者。何也。一子所謂天時。專言時日支干孤虛旺相之類。而其論在攻戰之際。故曰天時不如地利。此曰天者。兼陰陽寒暑。而其算在出師之前。凡時有寒暑風雨水旱饑荒之變。則兵和地便。未可動兵。此所以其不同也。

道者。令民與上同意也。故近本無也。故二字。可以與之死。可以與之生。通典御覽。近本。通典御覽。孟子曰。一作人。俱無二字。而下有民字。不畏危。不疑一作人不

畏。近本。危下有也字。

此以下解五事之義。道者。仁義也。孟子曰。得道者多助是也。民字。所該廣。即免置干城之意。危者。危難也。夫兵家制勝之策固多矣。而要其指歸。莫先於先爲不可勝也。先爲不可勝之術。亦不爲少矣。而論其次第。以仁義爲先。若使人君廢仁義。則天地將法亦無益於勝一耳。此道所以居五事之首也。然此特舉道之功効。而不言其道何如。故後世注家。妄爲之說。率失孫子之意。唯杜牧解道爲仁義。其說得之。孟子曰。君行仁政。斯民親其上。死其長矣。荀子曰。彼仁義者。所以修政者也。政修則民親其上。樂其君。輕爲之死。又曰。仁人之兵。百將一心。三軍同力。臣之於君也。下之於上也。若子之事父。弟之事兄。若手臂之扞頭目。而覆胸腹也。可見令同生死而不畏危者。捨仁義何以哉。此義非唯孟荀言之而已。孫子固既言之矣。地形篇。視卒如嬰兒。故可與之赴深溪。視卒如愛子。故可與之俱死。夫視卒如嬰兒。如愛子。即如保赤子之義。而所謂仁政。推此心而已矣。然則道非仁義而何哉。

天者。陰陽寒暑時制也。通典。制上有節字。御覽。一引作節制。一引作時制。

陰陽。所該者廣。孤虛旺相。日月支干。風雲星象。水旱饑荒之屬。皆是也。寒暑。若吳子曰。疾風大寒。盛夏炎

熱之類。時制者。因時制其宜也。言陰陽寒暑之類。法

有順逆向背。而法不必拘。顧其時何如耳。夫陰陽之說。果可信耶。太公廢之。遂亡商紂。果不足信耶。史墨因之豫知吳亡。不信者本於太公。信之者踵於史墨。信與不信。俱有典據。而其理幽遠。常人易惑。是以後世主將。往往有拘而失機者。尉繚子欲有救之。故其論天官。專歸重於人事。其弊至於廢天官。然假時日鼓兵氣。亦兵家一奇。斯奚可廢。李衛公有見於此。故曰。兵者。詭道也。託之以陰陽術數。則使貪使愚。茲不可廢也。一子之言。其意固善。然詞氣之間。未能無弊。唯孫子以天次道。而揭時制二字。以示用捨之義。渾然無瑕。足解百世之惑矣。夫天時不如地利。地利不如人和。況惠迪吉。從逆凶。惟影響。苟使入君有道。則其向固可勵衆。而其背亦必吉。是以時當攻而攻。時當守而守。不必拘陰陽。不必執寒暑。此之謂時制也。焚龜折筮。太公先涉。六月棲棲。吉甫出師。君必有道。而後天時用捨。唯我所欲也。地者。遠近險易廣狹死生也。

彼我之地。其形有八。豫知八者。即迂直之計。步騎之利。衆寡之用。戰守之勢。凡可攻可圍。可城。可營。可進可退。可覆可伏。或宜用火。或宜用水之類。瞭然在目。而後內可以守。外可以攻。此特舉其目。詳



見行軍地形。及九地等篇。

潛夫論。引作。

將者。智仁勇嚴也。智仁敬信勇嚴。

豫察幾微。深通權變者。智也。誠信孚衆。衆不忍欺者。信也。恩惠慈愛。視卒如子者。仁也。果敢能斷。臨危不懼者。勇也。威望躋々。軍政整肅者。嚴也。何延錫曰。非智不可。以料敵應機。非信不可。以訓人率下。非仁不可。以附衆撫士。非勇不可。以決謀合戰。非嚴不可。以服強齊衆。全此五才。將之體也。

源君美曰。曹公曰。將宜五德備也。諸注依其義。然孫武言。將執有能。能。才也。何氏以爲才。是也。

法者。曲制官道。鶻冠子。主用也。

曲。同。局。局者。前後左右。部曲隊伍。有分局也。

制者。金鼓旌旗。進退分合。有節制也。官者。偏裨校

列。什伍首長。各有官司也。道者。營陳開闔。糧餉輜

重。各有道路也。主者。斥候擊柝。管庫廩養。各有主

掌也。用者。車馬器械。三軍須用之物。皆備也。

凡此五者。將莫不聞。知之者勝。不知者不勝。御覽。開下無知字。非是。

此結上文。聞者。謂徒聞之而無所得也。知者。謂真知之而盡精微也。五事皆以君言。此但論將知不知者。以按計必由將也。五者。蓋古者兵家常言。故世將莫不聞。然徒聞無益。真知之者。所技不謬。故必勝。不知者反之。故不勝。此尤重知字。蓋政因俗不同。法隨

也。

法令執行。

法。法制。令。號令。行者。謂下信而守之也。尉繚子

曰。號令明。法制審。故能使之前。亦謂之也。

兵衆孰強。士卒孰練。賞罰孰明。

兵衆。猶言兵士。本義。爲兵器軍衆者。非是。強者謂氣力強壯。如

齊桓募士五萬。以伯諸侯。晉文召爲前行四萬。以獲

其忠之類。練者。謂教習精熟也。開闔分合。坐作進退

之節。車騎弓弩。長短刺擊之法。慣習莫不如意。如吳

子所謂每變皆習之類。明者。謂賞罰必當。如武侯賞不

遺遠。罰不阿近。爵不以下無功。取。刑不以下以貴

勢。免上之類。此三者。皆法中之事。計按欲詳。故多其

目。以示學者。

吾以此知勝負矣。

此結上文。言比較如此。則勝負預決矣。

將聽。吾計用之。必勝。留之。將不聽。吾計用之。必

敗。去之。

將。帥也。聽。從也。吾計者。謂上所陳按計也。留。

留之任用也。去。罷去也。言爲將者。聽從吾按計。豫

料優劣。以用兵。則必勝。故留而任之。若不從。吾按

計。蕩然無慮。以用兵。則必敗。故罷去之。勿用也。

或以將爲辭。以去留爲孫子去留者。非其義。

時殊制。故於我是者。於彼未必是。於彼非者。於我

未必非。有今似利而後致害者。有今似害而後得利

者。爲將者。見其外。以察其內之是非。推其所已見。

而斷其所未見之利害。如操權衡以稱輕重。非真

知五事精微之理。其孰能之。若夫不知者。如無星之

秤。不析錙銖。其何以按彼我之優劣。而豫決勝敗哉。

如此而用兵。所謂瞽聞浪戰者。如之何其不敗也。

故按之以計。通典。故下有兵之道四。而索其情。

上陳五事者。自治之道。此以下舉七計者。料敵之法。

然七計。其實五事也。自治之道既立而後權己之所。以

按其在敵者。又索其情實何如。則優劣可知。勝敗可

決矣。

曰。主孰有道。

曰者。計按之辭。主。君也。以下道將天地法。即上文五事

也。

將孰有能。天地孰得。

能。五才也。此天地居將之次。與五事異序者。五事

以國言。七計以軍言。自國而言。則天地既得。而後將

當擇。自軍而言。則天地之得失。係乎將之能否。且將

有能。則不制於天地。而以天地助吾奇。如宋武以

往亡日拔廣固。李贇乘雪夜入蔡州。鄧艾由陰平而

破蜀。慕容垂經天門取平城之類。此其所以異序

計利以聽。乃爲之勢。以佐其外。

以聽。猶而聽也。言將以按計爲利便之術。而從之也。

佐。助之也。其字。指五經七計。蓋五經七計者。兵之常

法。而自治之道也。自治既立。則兵可以舉。然徒恃自

治。而攻堅摧銳。以爭勝於鋒鏑之間。則亦不爲善戰

者。故設爲之勢。以助常法之外。夫勢之所乘。鬼神避

之。矧自治既立。而助之以勢乎。其得勝也。如摧枯

拉朽。所謂勝於易勝。是也。上文已言自治之道。此

下說制勝之術。自治之道者。體而正。乃立於不敗之地。

之教。故謂之經。制勝之術者。用而奇。是勝於易勝之

訣。故謂之權。經權體用相待。而後其勝全矣。十三篇中

縱論橫說。總不外於明此二者耳。

勢者。因利而制權也。

權。稱錘也。義取其進退轉移。應物之輕重。而取其

平。故變化隨機。莫守常形。緩急弛張。皆適其宜。之

謂權也。言所謂勢者。因吾之所利。而制爲權謀。使

敵人膏然陷於吾術中耳。如此則戰自有勢也。此言勢

由制權而生。非釋勢之義。蓋因利而制權。則我治彼

亂。我實彼虛。鼓治實之衆。以乘亂虛之衆。所謂以礮

投卵者。而勢所由生也。

兵者詭道也。

此下言制權之事。詭詐也。即匿情誤敵之術。國語。葉



公子高曰。以謀蓋人。注蓋。掩也。詐也。故能而示之不能。

言吾實有能。而示敵以不能。凡示失政。示荒淫。示柔懦。示怯弱之類。皆是也。用而示之不用。

言吾實用之。而示敵以不用。用賢而示廢黜。用騎而示用步。欲用船而示用車。欲用正而示用奇之類。皆是也。

近而示之遠。言欲近襲敵。示以遠去之形。如耿弇擊張步。聲言攻西安。而拔臨淄。岑彭中令西擊山都。而潛兵渡沔。擊破秦豐之類。

遠而示之近。言欲遠襲敵。示以近進之形。如韓信欲渡臨晉。從夏陽而潛襲安邑。王阜欲破蒙山。見險阻。而聲言取蘄州之類。

利而誘之。以利餌之也。如利之以弱卒。而誘之以擊。利之以輜重。而誘之以爭。利之以地。而誘之以深入。利之以城。而誘之以進攻之類。亂而取之。

亂。亂敵也。如間諜以亂思慮。火鼓以亂視聽。覆伏掩

襲以亂其陣。偷號放火。以亂其營之類。實而備之。

示以我實。使敵備之。如韓信益為疑兵。陳船。以示渡臨晉之形。賀若弼大列旗幟。營幕被野。以示伐陳之形之類。

強而避之。示以我強。使敵避之。如虞詡增竈速行。而羗不取。逼徐盛架木編葦。而魏師引還之類。

怒而撓之。示以我怒。使敵屈撓。如齊國佐曰。畏君之震。師撓敗。卑而驕之。

示以卑屈。使敵驕怠。如句踐事吳之類。佚御覽同。而勞之。示以安佚。使敵勞弊。如鄭縣門不發。楚言而出。孔明

親而離之。示以親昵。使敵相離。如陳平佯為厚范增之使。以間項羽。曹公故與韓遂交馬語。以疑馬超之類。

攻其無備。出其不意。此兵家之勝。不可先傳也。御覽。先作豫。此結上文。無備不意。皆言其虛也。不意者。無備之病

### 孫子纂注卷二

作戰篇近本作作戰第二作。振起也。朱子解大學作新民曰。鼓之舞之之謂作。是也。此篇說下鼓舞士卒。以振起戰氣。故曰作戰。蓋按計有必勝之算。然後兵可出境。兵出而久。則財力困屈。必有危亡之禍。故戰貴速勝。而速勝之術。莫要於振起戰氣。此作戰所以次計篇也。劉氏曰。作。造也。廟堂既有成算。然後計程論費。起造戰事也。說者謂。作起士氣。使之死戰。但不得已。深入死地。氣衰力竭。作之可也。死戰亦可也。安有出師之初。而即為此計歟。殆非孫子意明矣。按司馬法曰。凡戰之道。既作其氣。因發其政。又曰。以力久。以氣勝。尉繚子曰。民之所以戰者。氣也。氣實則闔。氣奪則走。夫衆人之氣。須振作。然後有奮。故智將之於士。未嘗一日不用鼓舞之術也。安必待入死地而後作之哉。劉之說謬矣。

孫子曰。凡用兵之法。馳車千駟。革車千乘。帶甲十萬。此舉車甲之數。以起下文用兵之害。馳車。戰車也。馳騁

因。無備者。不意之見症。惟其不意。是以無備。或以無備為懈怠。不意為空虛。非其義。先猶豫也。傳。傳示也。謂不可先事而傳示也。蓋上文反復示詭道者。其意不過使敵有虛。然後疾出取之耳。夫制勝之術。莫善於出其不意。不意。則倉皇震駭之間。智者不及謀。勇者不及鬥。雖有猛將銳卒。亦無能禦也。此乃兵家必勝之訣。然其變無常。因利制權。實非言語之可盡者。故曰不可先傳也。夫未戰而廟算。勝者得算多也。未戰而廟算。不勝者得算少也。多算勝。少算不勝。通典。作少算敗。見上。乎。吾以此觀之。勝負見矣。通典。見上。此申言按計之義。以終一篇之意。古者出師。必告祖廟。先算勝敗之計。故謂之廟算。或謂之廟戰。南子。言七計之算。得多者勝。得少者負。無算妄動者。不待言矣。以此觀之。勝負可豫見矣。○此篇首言兵不可不察以起一篇之義。次言自治料敵之法。終言為勢制勝之術。其大旨不過欲使我堅實無隙。敵崩潰不支。以下十二篇。皆申明此術也。



輕捷。故謂之馳車。一車駕四馬。兩服在前。兩驂在後。故曰駟。革車。重車也。載衣糧器仗之類。以皮縵其輪。籠其轂。故謂之革車。帶甲。衿鎧也。謂結束鎧甲也。古者每兵車一乘。有甲士三人。步卒七十二人。分為前拒左右角。共七十五人。重車一乘。有炊子十人。固守衣裝五人。旣養五人。樵汲五人。共二十五人。故千駟千乘。則帶甲者十萬人。蓋周時井田之賦也。按曹公以馳車一重車。必有五所。然孟子禮記吳子淮南子等諸書。稱革車者。皆戰車。而非重車也。且馳車之名。古書甚少。管子七臣七主篇。有瑤臺玉舖。不足處。馳車千駟。不足乘。語。此謂田車也。以此觀之。馳車非重車之名。而言其馳勝輕捷也。故愚嘗取王哲之意。為之說。曰。馳車。即革車也。此言馳勝之車。駕馬千駟。則有綬輪籠轂之車一乘。被甲之士十萬人。千駟言馬數。千乘言車數。十萬言人數。而重車略之不詳也。未覺其果通。且此等處。非兜蓋家急務。姑存疑以俟識者。

千里饋糧。則內外之費。賓客之用。膠漆之材。車甲之奉。日費千金。然後十萬之師舉矣。通典御覽及古寫本。師作案。

此言學師之費。千里。言其遠也。周一尺。我曲尺七寸五分。乃我四尺八寸。又云。三百步為里。乃我四町也。千里則四町。乃百一十一里四町許。內。謂國中。外謂軍所。賓客。使命遊士也。膠漆。所以治器械也。車用之奉。膏油皮線之類。千金。言其凡也。何休公羊傳注。乃我。曹公曰。贈集注。賞猶在外。是也。然後者。言師之不易。舉而宜速之意。在於言外也。

其用戰也。勝。御覽無。久則鈍兵。銳。通典御覽古寫本鈍作頓。下同。到或作挫同。

攻城則力屈。久暴師則國用不足。

此言久暴之害。屈。盡也。暴。露也。言千里出師。戰雖勝人。久則鈍弊兵刃。挫折銳氣。又攻城而久。則物力困屈。凡暴師於外。遷延遲久。則國用亦不足以供之也。或曰。攻城之害。固同於久暴師。下篇可證。此非承久字。亦通。

夫鈍兵挫銳。屈力殫貨。通典御覽。作力屈貨殫。則諸侯乘其弊而起。雖有智者。不能善其後矣。

此言後日之害。殫。極盡也。夫兵疲於外。財殫於內。則諸侯之兵。乘機於疲弊之時。縱有智謀之士。安能救其禍於已然之後耶。兵久則勝猶如此。況於其不勝者乎。

故兵聞拙速。未睹巧之久也。舊注為神速之義者。失之。此唯對速。疾也。言不久也。舉久速。以論巧拙耳。未及於投機之妙。睹。見也。夫巧者必速。拙者必久。今以拙冠速上。以巧加久上。甚言久暴之為不利耳。非為兵可以拙用。又有巧而久者上。

夫兵久而國利者。未之有也。

此結上文之意。言兵久則力屈財殫。諸侯乘其弊。何利之有。

故不盡知用兵之害者。則不能盡知用兵之利也。

此承上文。汎言兵之利害。須豫究之義。以起下文。夫兵之利害。事件極多。逐件究之。一事不遺。之謂盡知也。自速利久害。至凡所以勝敗之故。皆是也。蓋

利害之變。機在瞬息。為將者。能應變於急遽倉卒之間。必避所害。以就所利。非豫究其理。決然無疑者。其孰能之。然其功夫之序。必以知害為先。所害於我者。纖悉備究。然後所利於我者。亦可得而知矣。於此二者。無所不知。是所以其應變制勝。而益我強也。

善用兵者。役不再籍。通典御覽。籍作藉。按。祭義。天子為藉。千畝。字从竹。周語。宣王即位。不藉。古相通。糧不三載。御覽。三。取用於國。因糧於敵。故軍食可足也。

此承上文。言因糧於敵之利。役。兵役也。籍。猶賦也。左傳襄二十五年。賦車籍馬。疏曰。賦與籍。俱是稅也。稅民之財。使備車馬。因車馬之異。故為其文也。

不再不三。五文以言籍載之不已。不三必拘其數也。張預曰。糧始出則載之。越境則掠之。用兵器也。左傳定四年。歸國則逐之。是不三載也。其拘。木也。我用軍器也。取用於國。言始備器用。以出。非用不足而取於國之謂也。蓋兵器之類。國各殊制。取於彼者。未必適我。故預備而出也。因糧於敵。謂因敵之糧。以為我食。有抄掠而獲者。有拔城而獲者。或課於降附。或糴於商民之類。皆是也。軍食。軍中之食也。施氏曰。用惟取於國。故軍可足。糧惟因於敵。故食可足。非。

國之貧於師者遠輸。遠輸則百姓貧。通典御覽。俱作遠師遠輸。遠師遠輸者。則百姓貧。

以下細論用兵之害。此言百姓貧於內之害。夫遠輸於

千里之外。以供十萬之師。所齎之物。耗於道路。農夫耕牛。俱失南畝。百姓安得不貧。此言國貧於師之故。而專論民之害。即百姓不足。君孰與足之意。

近於師者貴賈。於字。無。貴賈則百姓財竭。虛。虛則竭。師之民。乘時貪利。百物飲食。售賣必貴。故百姓之財。至竭盡無餘也。

財竭則急於丘役。御覽講義。無財字。

此言戰後民窮之害。急。窘也。迫也。丘十六井。井田之法。一夫受田百畝。廣四尺八寸許。長八十間。為二井。方我四。四井為邑。方我八町許。為田三千。乃十六井。方我十六町。為田一萬四。一丘出戎馬一疋。牛三頭。四丘為甸。方我三十二町許。為田五萬七。車一乘。戎馬四匹。牛十二頭。甲士三人。步卒七十二人。將重者。二十五人。此丘乘之法也。故兵役謂之丘役。魯作丘甲。鄭作丘賦。其義亦同。蓋丘乘。軍制之始也。然春秋諸侯。不必守周制。此亦恐非井田之法也。急於兵役。言百姓窘迫於兵役之供給。以失產業也。所謂彼奪其民時。使不得耕耨以養父母。父母凍餓。兄弟妻子離散者。是也。

力屈財殫中原。財殫二字。內虛於家。百姓之費。十去其七。



此結上文以算百姓之費。中原。原中也。言外則為暴師攻城。財力殫屈於原中。內則為遠輸久役。產業虛耗於私家。算其內外之費。則民財十而失其七。兵之害民如此。蘇秦亦曰。民之所費也。十年之田。而不償也。為將者宜察焉。

公家之費。御覽。費破車罷馬。開宗。誤車作軍。罷或作疲。同。甲冑矢弩。矢一弓。近本。戟楯蔽櫓。蔽御覽作千。丘牛大車。十去其六。御覽作五。六。一作七。

此算公家之費。戟有枝兵也。楯。干也。櫓。大楯。設之車上。可以屏蔽。故謂之蔽櫓也。丘牛。丘甸所出之牛。凡軍旅所駕。總稱丘牛也。大車。牛車。以載輜重也。百姓曰七。公家曰六。可見病民為甚矣。

故智將務食於敵。食敵一鍾。當吾二十鍾。蕙秆一石。當吾二十石。蕙音忌。與箕通。

此申言因糧之利。以結上文。然此害中之一利耳。猶有數費弊。故下文言作戰之術。以示速勝益強之利也。務食與因糧。意少異。因者。就其有而用之。務者。盡智力而得之。乃所以為智將也。食。食之也。鍾。量名。受六斛四斗。一鐘。凡我六斗五升餘。二蕙。豆稻。秆。禾藁。皆所以喂馬也。石。衡名。一百二十斤。一石。凡百錢許。二十石。則此言千里輓輸。率費二十。而致其一。然秦攻匈奴。使天下運糧。率三十鍾。而致一石。石。解。

而略怒者。蓋孫子恐後世嗜殺之弊也。十三篇中。必詳恩略威。九地篇。言無法之賞。而不言無法之罰。其他如卒未親附一章。視卒如嬰兒一章。其意可見矣。孫子言刑殺者。唯有問事未發而先開者。問與所告者。皆死之語耳。蓋有不得已也。而更其旗。車雜而乘之。卒善而養之。是謂勝敵而益強。

更其旗。易以我旗也。雜而乘之。令彼車不相聚。彼卒不同車。以防其變也。善而養。所獲之卒。恩信撫養。以為我用也。如此則其勝必速。而所獲車卒。又為我用。故曰勝敵而益強也。故兵貴勝。不貴久。

此申言久害。以結上文。兵固貴勝。然久而後勝。則公私困耗。禍患不測。亦何足貴哉。潛夫論。通典。御覽。近本。古寫本。俱無生字。似是。

故知兵之將。生民之司命。潛夫論。通典。御覽。近本。古寫本。俱無生字。似是。國家安危之主也。安危之主也。知兵之將。即盡知用兵之利害。而能振作速勝者也。司命。文昌宮第四星。司人之死生。故謂司命。周禮大宗伯。司中司命風師雨師。賈公彥引武陵太守星傳。曰。文昌宮六星。第一曰上將。第二曰次將。第三曰貴相。第四曰司命。第五曰司中。第六曰。夫將知兵則民免困屈死傷之害。國受省費益強之利。否則反之。將安可不知兵乎。○此篇始言舉師之費。以及久兵之害。終言振作之術。而深致意於將之知兵。其大要。不過速勝。而振作之妙。以怒貨二字發。

也。是費二百九十二石。而致一石也。漢通西南夷。千里負擔。率十餘鍾。而致一石。是費六十四石餘。蓋地有險易。輸有舟車負擔之異。故其所費不必同也。故殺敵者怒也。取敵之利者貨也。

此言振作之術。怒。將之威怒也。言使衆直前殺敵者。將示威怒以悚之。司馬法曰。凡人死怒死威。是也。嚴位篇云。凡人死愛。死怒。敵之利。謂土地人民糧食資財。凡敵之所利者。貨。即無處而餽之。是貨之也。之貨。言使衆爭進。奪敵之所利者。將示貨利以誘之。三略曰。示其所死。則所求者至。是也。上略云。禮者。士之所死。招其所歸。蓋怒貨。謂刑賞不常法者。示其所死。則所求者至。蓋怒貨。謂刑賞不常法者。夫刑賞。國之公法。法貴畫一。不可因時輕重焉。怒貨。將之私術。須寬猛隨機。出於人意之外。所謂無法之賞。無政之令。而振作之機。全在於此。故不曰刑賞。而曰怒貨也。舊說謂。激怒士卒。則敵可殺。以所得貨賞之。則利可取。失之。

故車戰。近本無。故字。得車十乘已。或作。上。賞其先得者。此承上文。言以貨振作之事。古人用兵。使車奪車。騎奪騎。步奪步。吳子與秦戰。令三軍曰。若車不得車。功是。故此舉車戰。以例騎步也。言戰而得敵車十乘以上。則其中必有先獲一二乘者。乃急賞之以重貨。而勸勵餘衆。如其常典之賞。俟戰終而後行之也。此但言貨。

之。簡而盡矣。為將者。誠知怒貨之用。則使三軍之衆。踊躍奔走。致死而不顧者。復何難之有。



孫子纂注卷三

謀攻篇 近本作謀攻第三

謀攻者。以智謀攻人也。舊說為攻城之義者。蓋攻者。自我擊人之稱。伊訓造攻自鳴條。司馬法。攻其國。軍爭篇。銳卒勿攻之類。皆非攻城之義也。此篇自伐謀至伐兵攻城。皆謀攻也。蓋計算已優。則軍可以舉。戰氣已作。則勝可以速。然非以謀制勝者。其利不全。故以謀攻。次作戰。

孫子曰。凡用兵之法。講義。本義。武備。志。開宗。凡作夫。全國為上。破國次之。全軍為上。破軍次之。全旅為上。破旅次之。全卒為上。破卒次之。全伍為上。破伍次之。全。謂不戰而屈之也。破。謂戰而勝之也。周制。萬二千五百人為軍。二千五百人為師。五百人為旅。百人為卒。二十五人為兩。五人為伍。此不言師與兩者。略之也。夫兵莫善於不殺。故不戰而敵服者。兵之上等。謀攻之極也。然割據之際。不能必無強悍不屈之敵。故詭道制權。破而後勝。亦兵之善者。但不如於全而勝者之至善耳。故不曰為下。而曰次之也。

是也。若奪其交與。剪其羽翼。則我伸而彼屈。如黠布屬漢。項羽勢屈。魏吳交合。關羽授首之類。我用力少。而所得者多。此所以次於伐謀也。其次伐兵。

伐兵。謂戰而破之。乃百戰百勝者也。夫謀攻之勝。不戰為上。然勝可知。而不可為。我伐其謀。而彼不服。又伐其交。彼猶不屈。於是。有伐兵之舉。奇謀致人。以勝於易勝。雖未免傷殘之害。亦可為其次矣。其下攻城。通典御覽。其下。作下政。又曹公李遂等注。有政之下也。故十家注本。改作下政。

其下者。兵之下等。而無次之者也。既不能使之屈。又不能使之戰。不得已而攻其城。攻城之法。客主勢殊。勞佚力倍。我有奇謀制權。能出其不意。攻其所不守。視之伐兵。猶且費財勞人。此所以為下等也。攻城之法。為不得已。古寫本。下有也字。以下言攻城為下之義。上者既不行。次者亦不得。彼堅不屈。清野收糧。據險力守。若捨而不攻。則彼伸我屈。其勢將至難制。於是乎。有攻城之法。此其所以不得已也。

修櫓。櫓。三國志陳泰傳。引作櫓。具器械。三月而後成。此言財費人勞。而功不速之害。修。治也。修其已有也。櫓。大楯也。櫓。四輪車。排大木為之。上蒙以

是故百戰百勝。非善之善者也。不戰而屈人之兵。善之善者也。此申上文之義。百戰百勝。即破之者。不戰而屈人之兵。是全之者也。兵固貴勝。百戰百勝。不可為不善。然必有傷人費財。故曰非善之善者也。不戰而屈人之兵。則我無一矢之費。彼亦不罹傷殘之毒。所以為善中之善者也。故上兵伐謀。

以下言謀攻有差等。伐謀者。以謀伐謀。沮其所為。以取勝於不戰。乃謀攻之至善也。其事。有摧未萌者。有制已形者。如齊威王用鄒忌之言。大賞諫者。燕趙韓魏聞之朝齊。國策稱之為戰勝於朝廷。淮南子曰。修政廟堂之上。而折衝千里之外。此用兵之上也之類。皆摧未萌者。而晏子折范昭之謀於樽俎之間。或恩信以感之。威武以懾之。或用辯士說之。或奪所恃屈之之類。諸使敵不得不屈者。乃制已形也。二者皆伐謀。而不不用戰。故為上等之兵也。

其次伐交。伐交者。謂間人之交。合我之交。所謂霸奪之與者。荀子王制云。王奪之人。霸奪之與。疆奪之地。奪之人者。而亦臣諸侯。奪之與者。友諸侯。奪之地者。敵諸侯。謀攻之善者也。夫敵人交合。則犄角勢成。應援相抗。故事大敵堅。蘇秦約六國。秦人閉關十五年。不敢窺山東。

生牛皮。下可容十人。往來運土填塹。木石所不能傷者也。具。備也。器械。攻城之具。如飛樓雲梯尖頭木。上之。距敵城。以窺虛實。故名曰距堙。一說。曲城。其狀回曲。以拒敵襲擊。距與拒通。或謂之過道。按。通典。曲城。而杜佑以。圍解。之。疑古相通也。且。曲城之外。有。回曲以障城者。詩鄭風。出其闔閭。傳云。曲城也。是自守之具。而非攻城之用也。若。土山。則攻城之具。宣十五年公羊傳。楚子反。乘堙而窺宋城。由是觀之。為。土山。皆所以覆庇我兵。使城易攻之具也。三月。言其久。不必拘數也。

將不勝其忿。其忿。通典。御覽。作心。而城不拔者。此攻之災也。此言力攻之害。忿者。怒敵不屈也。拔者。破而取之。如拔樹根也。災者。害之隨事而至者也。何休公羊傳注。至者。言為將者。怒敵不屈。而暴用其衆。不待攻器之成。不由謀攻之法。使士卒肉薄而上。若蟻之附牆。殺傷雖多。城終不拔者。由力攻而至之災也。故善用之者。屈人之兵。而非戰也。拔人之城。而非攻也。毀人之國。而非久也。必以全爭於天下。故兵不頓。而利可全。此謀攻之法也。

此言謀攻之利。以結上文。毀。破也。非久者。不久暴師也。以全爭於天下。言以萬全之謀。爭勝於天



下也。兵。戎器也。頓。與鈍通。蓋不戰而屈人之兵。不攻而拔人之城者。伐謀伐交之全勝。而不久而毀人之國者。乃伐兵之善勝也。其如此者。吾必有萬全之謀。以爭勝於天下。故兵不至鈍。而敵國服從。用兵之利。我可全收。所謂謀攻之法。如此而已。

故用兵之法。十通則圍之。十通則圍之。則圍之。以下專說伐兵之法。而此節示衆寡之用。夫兵有衆寡。各殊其用。審識衆寡之用。以進退屈伸者。伐兵之要務。全爭之通法也。十。謂十倍也。圍者。謂壘壘四合。絕其糧援。遏其逃逸。持久以待其敵也。凡圍者。去城稍遠。占地既廣。故須十倍之衆。乃無闕漏。此合圍之常法。故尉繚子曰。守法。一而當十。十而當百。百而當千。千而當萬。若言其變。則不必十倍然後圍之。下文五攻倍分。皆言常法也。

五攻倍分。皆言常法也。五攻倍分。皆言常法也。曹公曰。以五敵一。則三術爲正。二術爲奇。杜牧曰。術猶道也。言以五敵一。則當取已三分爲三道。以攻敵之一面。留己之二。候其無備之處。出奇而乘之。愚謂。曹公三正二奇之說。特舉其一端。以示學者耳。若謂五倍者必五分。則拘矣。倍則分之。倍者。分之爲二。或更迭以乘其勞。或腹背以掩其虛。

此結上文。堅者。謂將性堅忍也。夫知靜而退者。軍之善政也。若不曉謀攻之法。不識衆寡之用。徒堅忍強持。以與大敵爭鋒。安能不爲其所擒也。夫將者。國之輔也。輔周則國必強。輔隙則國必弱。此承上文。以起下文。輔。兩旁夾車木。以佐車可解脫之物也。國之有將。如車之有輔。相爲倚賴。故曰。國之輔也。周。備也。徧也。謂智慮周徧。無所不備也。隙。缺也。謂智慮有缺也。蓋謀攻之要。在審知彼己。既審知己。又能知彼。非智慮周徧者。不能必無遺算。故先揭周隙二字。起此節之義。

遺算。故先揭周隙二字。起此節之義。武備志。開宗。無以字。直解作故。故君之所。以患於軍者三。軍之所。以患於君者三。而曰。新本誤以君字在上。按通典。君字在上。杜牧注亦曰。君。國也。患於軍者。爲軍之患也。然則唐本既君字在上。不知劉氏所據何本。以下言己之所。以敗。患於軍者。患害於軍務也。下文三者是也。

不知軍之不可。以進。而謂之進。不知軍之不可。以退。而謂之退。是謂糜軍。此言內御之害。謂之。猶言命之也。糜。繫也。如羈糜牛馬。使不得馳騁。故謂之糜軍。夫兵以機勝。進退屈伸。皆有機矣。機生於兩陣之間。變化百出。間不容髮。豫料而俟之。猶恐其不及。況人君安坐廟廊之上。遙制千里之外。而欲事無遺策。應變制勝。不

敵則能戰之。

敵。當也。言其衆相當也。能。善也。戰地先處。制陣有法。進退當機。以實擊虛之類。是謂能戰。若無謀力戰。積尸滿野。安足爲能耶。下文曰能。皆言能而後事有成也。

少則能守之。原本。守作逃。按。曹公曰。高壁堅壘。勿與戰也。是守之義。而不可爲逃之解。且逃之與避。義甚相似。孫子之文。字字切實。恐當不如此。況穀梁。僅二十二年傳有倍則攻。敵則戰。少則守之語。故據武備志開宗古寫本改正。敵多我少。則宜能守以窺其隙。據險以自守。詭道以致人。或示己困屈。以俟其驕怠。或假入聲勢。以赴其所愛。能疑人之心。能分人之兵。然後出其不意。一舉制勝。是謂能守。若徒守自保。不能破敵。未足爲能也。

不若則能避之。不若者。氣力形勢。不敵也。避。迴避也。言暫避。其強銳。以俟其衰惰也。夫強者不常強。強驕則惰。弱者不常弱。弱激則張。范蠡有言曰。盡敵陽節。盈吾陰節。而奪之。誠知此訣。不若者。亦可能制勝矣。故必避於易。要之於險。必避於明。乘之於暗。避其所長。加其所短。避其銳氣。擊其惰歸。凡避而殺其鋒。開而誘其潰。是謂能避。若避而勢屈。怯而遽走。豈能避之謂哉。故小敵之堅。大敵之擒也。

亦難乎。如玄宗促哥舒翰。肅宗勅李光弼。未嘗不覆敗也。司馬法曰。進退惟時。無日寡人。三略曰。出軍行師。將在自專。進退內御則功難成。爲人君者。宜考而鏡之。不。知。三。軍。通。典。作。事。而。有。欲。字。同。三。軍。之。政。者。近。本。寫。本。無。則。軍。士。感。矣。

此言將不得專軍政之害。事者。凡軍事曲節。號令賞罰之類也。同。參預之也。凡軍中之政。不必拘常典。緩急弛強。自有妙機。若人君使不知其機者。參預其政。則弄權之猜。私恩之讒。紛然起於其間。此軍士所以惑亂也。仲達之壘渭南。李愬之撫降將。將吏尙有謗議。幸天子任而不疑。終成其功。不然則必至敗衄。唐憲宗將討蔡州。裴度奏去監軍。宋太祖欲伐江南。以匣劍授曹彬曰。副將而下。不用命者斬之。皆深知此害者也。

不知三軍之權。而同三軍之任。則軍士有覆字。疑矣。此言將不能專籌策之害。權。權謀也。任。委任也。夫合衆慮。以從善。審利害。以定謀。使發蹤指示之柄。不在於他人之手。此良將所以戰必勝攻必取也。若人君使不知其權謀者。同委任之柄。則謀議不協。動有違異。軍士何爲不疑貳。譬之二人噬一犬。一人指而左之。一人噬而右之。有韓盧之健。不能致搏擊。故指



示不一。則韓盧趨趙。謀有違異。則軍士疑貳。楚軍多寵帥賤。而兵敗於吳。晉帥乘和。孟獻子豫知有功。是足鑒矣。

三軍既惑且疑。則諸侯之難至矣。是謂亂軍引勝。

此結上文。亂軍者。自亂吾軍也。引。導也。謂導敵勝我也。三略曰。衆疑無定國。衆惑無治民。凡物不自壞。則亦莫之壞。樹自朽。而風折之。軍自敗。而敵乘之。疑惑。軍之大患也。敵國奚不窺而乘之哉。上文三者。皆己之所以敗也。人君能慮斯患。當慎選於其始。以委分閫專斷之柄。不宜蓄猜於其後。招違異掣肘之害。然此不獨爲人君言。爲將者。亦宜詳之於受命之始。可受而受。可辭而辭。勿貽債事辱國之罪。六韜曰。將已受命。拜而報君曰。臣聞國不可從外治。軍不可從中御。一心不可以事君。疑志不可以應敵。臣既受命。專斧鉞之威。臣不敢生還。願君亦垂一言之命於臣。君不許臣。臣不敢將。君許之。乃辭而行。軍中之事。不聞君命。皆繇將出。孫子之意。蓋亦如此耳。故知勝有五。

以下承上文。言知勝之道。既知所以以敗。又知所以以勝。然後兵可伐。此乃謀攻也。

知下可以與戰。不可與戰者。勝。十家注本。作知可以戰。與不可以戰者勝。敵有大小強弱。地有輕重死生。加之形勢虛實之變。條

無一不備。則將心安靜。而士卒力佚。心靜者。見機必明。力佚者。乘變必疾。故徐窺其不虞。疾攻其無備。百戰百勝。其本在此。然慮變於未萌。備事於未形。不知事權者。輒以爲過計。夫亡國不可復存。死者不可復生。與其敗而後悔。不若過計而不敗之爲善也。故十三篇。常致意於此。但非孫子獨然。凡典籍所載。蓋不可縷數。書曰。儆戒無虞。左傳曰。不備不虞。不可不以師。又曰。無備。雖衆不可恃。吳子曰。安國家之道。先戒爲寶。尉繚子曰。無困。在於豫備。此皆制勝之本源。聖賢之明誨也。

將能而君不御者勝。能者。五才備也。御。制御也。言左右之如御車也。將五才備。則上文四者。皆必能之。然其要。在人君任而不疑。不使不知事權者妨其施設矣。夫知人固難。選將最難。幸而得其人。固當授鉞推轂。以委閫外專斷之柄。不宜掣肘分威。而廢死綏任咎之志。六韜曰。君親操鉞持首授將其柄。曰。從此上至天者。將軍制之。復操斧。持柄授將其刃。曰。從此下至淵者。將軍制之。見其虛則進。見其實則止。勿以三軍爲衆而輕敵。勿以受命爲重而必死。勿以身貴而賤人。勿以獨見而違衆。勿以辯說爲必然。士未坐勿坐。士未食勿食。寒暑必同。夫如是。故威

忽生乎兩陣之間。爲將者。明知進退戰守之理。而不失其宜者。必勝。吳子曰。不卜而與之戰者八。不占而避之者六。謂之也。

識。通覽。御。衆寡之用者。勝。

衆之與寡。其用不同。司馬法曰。用寡固。用衆治。寡利煩。衆利正。用衆進止。用寡進退。衆以合。寡則遠。裏而闕之。若分而迭擊。寡以待衆。敵若衆。則相衆而受。敵若寡若畏。則避之開之。吳子曰。用衆者務易。用少者務隘。管子曰。衆若時雨。寡若飄風。皆言衆寡之用也。且如分數必詳。形名必明。六步七步乃止齊。晉進如風雨。退如山移。吳之類。亦用衆之法。而避之於易。邀之於阨。子。因其驚駭。因其勞倦暮舍。六去備而齊致死。左傳昭二十一年。齊烏枝鳴曰。用少。莫兵矣。請皆用劍。如齊致死。齊致死。莫如去備。彼多注。備。長兵也。之類。乃用寡之術也。明知其運用之理。而不失其宜者。必勝。

上下同欲者勝。將長吏卒。分雖各殊。一意徇國。同所期願。則謀議必和。軍政必立。如心使臂。臂使指。豈有不勝之理哉。然其要。在將之恩威有素耳。以虐待不虞者勝。虞。度也。謂豫度而備之也。用兵之道。莫善於虞。莫不於善於不虞。凡當慮之變。無一不慮。當備之事。

立令行。將之所麾。莫不從移。將之所指。莫不前死。量力行之。相時而動。投機之際。進退自如。此其所以必勝也。此五者。知勝之道也。

以上五者。乃上文之三患。去患則必勝。故五者。重在君不御。而尤重。在將能二字。君不御。則無糜軍疑惑之患。然將必能而後有功。能將者。必知戰守之機。必知衆寡之用。必上下同欲。必以虞待不虞。如此而君無撓其權。乃全勝可必矣。若將不能。而授專斷之柄。適足以覆軍辱國。可不慎哉。

故曰。知彼知己者。百戰不殆。不知彼而知己。一勝一負。不知彼不知己。每戰必殆。北堂書鈔。及近本。必殆。作。此引古語。以總結上文。殆。危也。夫謀攻之要。莫先於知彼己。計篇既舉五事七計。此篇又陳三患五勝。其術益精矣。由是以知彼己。而後利害可見。兵可伐。城亦可攻。若唯知己。而不知彼。則己之所恃。彼或有待。彼之所表。己未能悉。故勝敗無常。而況彼已皆不知哉。○此篇。前言謀攻有差等。而意之所重。特在伐謀不戰之勝。後專說伐兵之法。而致意於將之智能。君之不御。蓋伐謀不戰之勝。固有神明之用。雖孫子不能傳之於人。故後段唯示伐兵之法。然能將守謀攻之



法者。其迹有似保身性戰。是以往往招人君之疑。而不得展其能。此孫子所以反覆陳三患也。

### 孫子纂注卷四

形篇近本。作軍形第四。

有可見之狀。之謂形。軍亦有形。地利之得失。制陳之巧拙。隊部之動靜治亂。兵卒之多寡強弱。皆是也。凡物莫不有形。有形必有勢。勢由形而生。形所以為勢也。今夫弓矢形也。其射遠洞堅者。勢也。弓矢不良。則不能射遠洞堅。軍形不善。則不能為勢破敵。故形有三巧拙。而勢有三強弱。形者。靜而體也。勢者。動而用也。體用動靜。相為倚伏。不可岐而二之。故此篇說形。而不遺勢。下篇論勢。必本之於形。蓋形勢者。自固制勝之大本。而謀攻伐兵之術。外此無道矣。故以形次謀攻。而勢又次形。吁形勢之妙。必勝之術。古人所秘於千萬世之上者。一揭之。以示後世。風后之握奇。武侯之八陣。其法亦不外於此。讀者宜致思。

孫子曰。昔之善戰者。先為不可勝。以待敵之可勝。為不可勝。為敵人不可勝。我之備也。五經既立。七計既優。加之先戒豫備。則分合適宜。奇正相應。其陣渾然。無有絲毫隙。此謂為不可勝也。待敵之

可勝。俟我可勝彼之釁也。不虞失計。狐疑怯怖。勞倦饑渴。驕惰擾亂。地形失便。營陣未定。諸如此者。皆可勝也。此直言形。以揭一篇之大指。而其要在先為以待四字。非先為者。不能全不可勝之備。非以待者。必失可勝之機。先為。故心靜氣專。而其機可見矣。以待故投機於呼吸轉盼之間。而不失其敗矣。先為者。守也。以待者。守中伏攻機也。統此二者。所謂之形也。

不可勝在己。可勝在敵。故善戰者。能為不可勝。不能使敵必可勝。原本必有之字。十家注本。從通典御覽。故曰。勝可知。而不可為。

此申明上文。為不可勝。其備在己。在己者。可必焉。故善戰者。必先為之。可勝。其釁在敵。在敵者。不可必焉。故雖善戰者。但當待之。不能使敵果有釁。先為以待。故勝可知。待而無釁。戰安能勝。故勝不可為。此引古語。以證其言也。

不可勝者。守也。可勝者。攻也。此釋上文之意。言敵不可勝我者。以吾善守也。我可勝敵者。以吾善攻也。夫陳而不知守法。則形有間隙。善守。故敵不可勝我。不下必據高城深池。而後謂之守。所謂立於不敗之地。是也。戰而不知攻法。則勢必挫衄。善攻。故我可勝敵。不必武進鏖戰。而後謂之

攻。所謂不敵之敗。是也。此以守字。明形之實體。以攻字。示勢之妙用。以下反覆申明其義。精微無所不至矣。

此承上文。明攻守之意。言守己。則當兢兢業業戒慎。如力不足者。攻敵。則當果斷奮擊。如力有餘者。不足。言心之畏敵也。有餘言氣之發溢也。夫守如不足者。則思慮周密。臨事而懼。莫所不戒。莫所不備。遷延畏縮。柔如處世。如此而形立矣。攻如有餘者。則見虛乘之。決然不疑。并力一向。電驚雷怒。勁如飄風之捲飛蓬。如此而勢成矣。然非不足者。不能為有餘。守者體。而攻者用。未有不體不立而用行者也。故曰勢由形而生。形所以為勢也。

善守者。藏於九地之下。善攻者。動於九天之上。此以譬喻。明不足有餘之妙。九者。數之極。言其深高不可窺測也。曰下曰上。甚言之也。藏於九地之下。言其守備周密。韜用藏機。而敵不能窺也。尉繚子曰。若秘於地。若邃於天。亦謂之也。動於九天之上。言其發動迅疾。如空中擊下。而敵不覺及拒也。淮南子曰。若從地出。若從天下。是也。夫形藏於九地之下。則其機冥々。敵見吾守。而不料吾攻。彼不料吾攻。則其備必有隙。我待其有隙。疾出乘之。所謂攻其無



備。出其不意者。而勢如雷震。孰能禦之。故曰。動於九天之上。故能自保。而全勝也。此結上文。保。守而全之也。善守。故能自保。善攻。故能全勝。

見勝不過衆人之所知。非善之善者也。

以下推明有餘全勝之意。而歸重於廟勝之大本。夫望陣窺列。見其虛隙。以知可勝。衆人亦能之。是可爲善。未爲至善。見勝於出師之前。乃可爲至善耳。

戰勝而天下曰善。御覽曰。下有軍字。非善之善者也。

破堅摧銳。勝於難勝。然後天下曰善。善則有之。未曰盡善。以至實。破至虛。不用力而勝。乃可曰盡善耳。

故學秋毫不爲多力。見日月不爲明目。聞雷霆不爲聰耳。

秋毫。獸毛至秋銳細也。霆。雷餘聲也。三者人皆爲易。

無稱其善。以起下文勝於易勝者無名功也。

古之所謂武備志。善戰者。勝。御覽。下又有一勝字。於易勝者也。故善戰者之勝也。無智名。無勇功。

以多算。擊少算。其勝可必矣。善戰者。猶且慎之。必俟其有隙。而後乘之。故用之甚微。收功甚博。此謂勝於易勝者也。唯其勝於易勝。人以爲學秋毫。見日

月之類。故無智名。無勇功。所謂善之善者。是也。故其戰勝不志。不志者。其所措必勝。近本。無必字。勝已敗者也。

志。差也。不志謂全勝而不危也。措。猶施行也。已敗者。未戰之前。彼固已敗也。言勝於易勝。故百戰百勝。未嘗差志。其所以如是者。以能施行必勝之術於已敗之敵也。蓋七計之算。我多彼少。是我強而固勝。彼弱而已敗。其戰當不勞力。然猶不敢自足。必先爲不可勝。故強者益強。而又待其易勝之虛。疾出破之。如衝風捲飛蓬。此謂措必勝之術於已敗之敵也。

故善戰者。立於不敗之地。而不失敵之敗也。此言全勝之本。在於自保也。立於不敗之地。即首章先爲不可勝之意。自吾言之。爲不敗之地。自敵言之。曰不可勝。其實一也。然首章言形之本體。未分攻守。故曰以待。此承勝已敗。故對舉攻守。曰不失也。夫立於不敗之地者。將帥心靜。士卒力佚。一意窺機。以待可勝。故審必勝於至微之初。而不失其敗於瞬息之間。斯可謂之善戰者矣。

是故勝兵。先勝而後求戰。敗兵。先戰而後求勝。善用兵者。修道而保法。故能爲勝敗之政。

此又言立於不敗之地之本。先勝。即多算。而先戰是無算也。道即五事之一。君固當有道。將亦不可無道。地帶甲車騎之多少。穀粟之蓄。器械之利。以及兵之強弱。國之利害。其量已料敵。一如孫武所引之法。蓋古者兵家有此說耳。

故勝兵。若以鎰稱銖。敗兵。若以銖稱鎰。二十兩爲鎰。二十四銖爲兩。銖乃鎰之四百八十分一也。廟廷之算。我固已勝。然不敢以自足。必爲不可勝。故重者愈重。彼固已敗。猶且慎之。必待其易勝。而後乘之。故輕者益輕。此所以我爲鎰彼爲銖也。

勝者之戰。十家注本。下有民也二字。若決積水於千仞之谿者。形也。此結一篇之意。水本至柔。積而聚之。以喻形之本體。守則不足。是也。八尺曰仞。千仞之谿。至深也。決積水。以赴之。其奔注湍悍。不可遏止。以喻勢之妙用。攻則有餘。是也。鼓積實之兵。以乘至虛之釁。軍形如此耳。故以形也結之。此篇舊注多謬。蓋形勢。虛實。九地之篇。兵家之神秘。必勝之秘訣也。讀者宜致思矣。

○此篇始對舉攻守二字。以示形勢之全體大用。終言勝於易勝之義。歸重於廟勝之本源。蓋彼我相對。而有軍形。軍形之要。備攻守之利而已矣。故曰先爲不可勝。以待敵之可勝。守者貴戒慎。故曰不足。攻者貴勁銳。故曰有餘。守以不足。則形藏於九地之下。故能自保。攻以有餘。則勢動於九天之上。故能全勝。兵固貴勝。然勢而得勝。非善制勝者。故曰勝於易勝。所謂勝於

形篇所謂視卒如嬰兒。如愛子。乃將之道也。法。亦五事之一。法本出君。在將唯當保之。司馬法曰。與下畏法曰法。此保之義也。此不言天地將者。將既有能。而善用兵故也。將有能則天地亦在其掌握。故不言之也。爲勝敗之政。猶言操勝敗之權也。蓋廟勝者。軍形之根柢也。根柢既立。而又自守以不足之心。此謂立於不敗之地。既立於不敗之地。然後勝可見。可乘。此謂不失敵之敗。唯其如斯。故勝敗之權。操在我手矣。

兵法。一曰度。二曰量。三曰數。四曰稱。五曰勝。地生度。度生量。量生數。數生稱。稱生勝。

此引兵法。以示古人先勝之計。蓋七計。孫子自得之算。而此五者。乃古法也。度。丈尺。以度長短。量。斛斛。以量多少。數。算數。以數千百。稱。權衡。以稱輕重。勝。勝算也。因丈尺。以知敵國之長短廣狹。是地生度也。既知其長短廣狹。則租稅之多少可量。故曰。度量既審。則士民之衆寡可算。故曰量生數。數已得。則彼我之輕重。可以稱。故曰數生稱。稱已明。而我有制勝之道。故曰稱生勝也。蓋古者因井田以制兵賦。各國無大異。故五者可知其大概。源君美曰。管子書。有參國伍鄙之法。尉繚子。亦有稱地稱人稱衆之說。蘇秦合從六國。始見其君。必先說地之廣狹險易。

恩田仰岳篇



易勝。非唯乘其虛。本在廟勝。故曰勝已敗。廟算雖勝。自守不固。則未可乘其虛。故曰立於不敗之地。而不失敵之敗也。苟欲立於不敗之地。非五經全備者。未可必其能立。故曰修道而保法。五經既全。廟算既勝。加之自守必固。又能乘其虛。此謂以益稱銖。其勢沛然。若決積水於至深之谿。孰能當之。所謂軍形如此而已矣。其言叮嚀反覆。本末兼盡。無有餘蘊矣。

### 孫子纂注卷五

勢篇近本。作兵勢第五。

氣焰不可當。之謂勢。勢伏於形。形動而勢生焉。猛獸將搏。必伏其形。鷲鳥將擊。必斂其翼。是乃形也。能伏能斂。故發動迅疾。莫免其搏擊者勢也。前篇已說形。故以勢次之。凡戰之勝敗。由勢之得失。勢得則寡能破衆。勢失則大制於小。謀攻伐兵之術。要不過善爲勢耳。故自此篇。至火攻。皆言爲勢之術也。

孫子曰。凡治衆如治寡。分數是也。

下將言勢。故先說形。分者。分別也。謂分偏裨校列之任也。數者。人數也。謂定部曲隊伍之數也。周制。五人爲伍。伍有長。二十五人爲兩。兩有司馬帥之。百人爲卒。卒有長帥之。五百人爲旅。旅有帥帥之。二千五百人爲師。師有帥帥之。一萬二千五百人爲軍。軍有將帥帥之。此分數也。分數已定。則遞相統屬。各加訓練。大將操綱領。偏裨有責成。無有不達之情。故兵雖衆。骨節相應。脉絡相通。不異於用十數人。此淮陰所以多多而益善也。

闕衆如闕寡。形名是也。

闕者。人自相擊也。旌旗曰形。金鼓曰名。蓋旌旗有形。因形傳命。以爲分合。故曰形。金鼓有聲。因聲辨名。以爲進止。故曰名。形名已明。則勇者不獨進。怯者不獨退。進退分合。如使數人。而人人相奮。有如私闕。故曰闕衆如闕寡也。

三軍之衆。可使必受敵而無敗者。奇正是也。

奇。詭也。正之反也。曲禮。國君不乘奇車。注。奇邪不正之禽也。據之。知奇詭俱有不正之義。論語曰。晉文公譎而不正。齊桓公。正而不譎。老子曰。以正治國。以奇用兵。計篇。以五事爲經。以詭道爲節制分明。謂之正。變化隨機。權。奇正之義。可以見。節制分明。謂之正。變化隨機。謂之奇。凡奇正。有以體言者。所謂四正四奇是也。八陳圖解云。天地風雲。龍虎。有以用言者。所謂奇正之變是也。以體言之。則正者。踐繩墨。慎進止。戰如守。行如戰。奇者。進退輕銳。變化無方。星耀鬼行。襲虛投隙。正以守己。故不敗。奇以應形。故必勝。其聯屬救應。如左右手。以用言之。則正中有奇。節制之中。固具變化之機。奇中有正。變化之際。必不廢節制之法。故隨機應變。則正變爲奇。奇亦爲正。體用相須。而攻守動靜不殆。此其所以必受敵而無敗也。此專言形。故不曰攻敵。而曰受敵。不曰勝而曰無敗。此主自保之意也。兵之所加。如以礮投卵者。虛實是也。礮。都玩反。或作礮。音退。按。礮。

二字相似。而字書俱注石也。又同爲礮石。故有誤作礮者。此當作礮。从石从段。者非也。

上文三者言形。此言勢也。礮。鍛鐵石砧也。大雅公劉之取礮。毛傳云。鍛。石也。鄭箋云。鍛石。所以爲礮也。疏云。質。椎也。言鍛金之時。須山石爲椎質。故取之也。陸德明音義云。礮。本又作礮。正韻云。礮同礮。可見礮是。雞子鐵鑊。古者有以石爲之也。舊說爲礮石者失之。卵。雞子也。夫合軍聚衆。先定分數。分數已定。然後形名可明。形名已明。然後奇正分合。唯我所欲。所謂之實。我兵已實也。而徐窺其虛。疾出乘之。其勢如舉礮投卵。莫敢當其鋒矣。詳見下篇。

凡戰以正合。以奇勝。兵法釋云。一本作爲奇勝。當從之。漢初已作以奇勝。釋謬矣。古寫本。勝下有二字。也。後漢書皇甫嵩傳注。引之亦有二字。此言奇正之所以制勝。凡合戰者。必踐節制。戰廢節制。則體不實而易敗。制勝者。必由變化。兵無變化。則用不圓而有蹙。故曰以正合。以奇勝。故善出奇者。北堂書鈔。奇作兵。十家注本云。作兵者義長。按。又皇甫嵩傳。史記田單傳贊云。善之者。出奇無窮。然則書鈔謬矣。無窮者。無窮如天地。不竭如江河。本。不作無。近本。河。終而復始。日月是也。一本脫死而復生。四時是也。本義講義。

此承上文。言善出奇者應變無窮。蓋以實擊虛者。所以善爲勢。而奇正者。以實擊虛之法也。故此下專說奇正。夫正以守己。奇以制勝。兵之妙用。在善出奇。善出奇者。因敵圓轉。譬如天地悠久。江河汪洋。



未嘗窮竭。日月運轉。入而復出。四時化成。死而復生。豈有終極哉。張氏曰。喻奇正相變。非也。此未說及奇正之變。

聲不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>五。五聲之變。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝聽也。色不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>五。五色之變。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝觀也。北堂書鈔。觀作視。味不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>五。五味之變。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝嘗也。

此言三者。以起下文。奇正之變。言聲不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>宮商角徵羽。耳。至於其變。則鳥啼蟲吟。耳不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝聽。色不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>青赤白黑黃。耳。至於其變。則紅紫雜采。目不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝觀。味不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>酸苦辛鹹甘。耳。至於其變。則鼎飪調和。口不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝嘗也。

戰勢不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>奇正。奇正之變。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝窮也。奇正相生。如循環之無<sub>レ</sub>端。孰能窮<sub>レ</sub>之。近本。下有。有哉字。

循環謂<sub>レ</sub>循<sub>レ</sub>歷玉環。以求<sub>レ</sub>首尾也。夫善爲<sub>レ</sub>勢者。必以<sub>レ</sub>實擊<sub>レ</sub>虛。奇正所以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>虛實也。故曰戰勢不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>奇正。而奇正之妙。在<sub>レ</sub>旋轉相變。正中藏<sub>レ</sub>奇。奇中體<sub>レ</sub>正。故正可以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>奇。奇亦可以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>正。試舉<sub>レ</sub>一端。則進者正。而伏者爲<sub>レ</sub>奇。伏者起。則奇變爲<sub>レ</sub>正。進者退。則正變爲<sub>レ</sub>奇。推而至於前後左右。攻守動靜之類。旋轉相變。莫<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>端涯。故曰奇正之變。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝窮。正既生<sub>レ</sub>奇。奇必復<sub>レ</sub>正。一正一奇。迭爲<sub>レ</sub>其根。圓活運轉。如<sub>レ</sub>車輪然。故曰奇正相生。如<sub>レ</sub>循環之無<sub>レ</sub>端。夫唯相生。是以能變。奇正之妙至<sub>レ</sub>其相

變。真無<sub>レ</sub>餘蘊<sub>レ</sub>矣。御覽。作鷺鳥之擊。孫星衍曰。當<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>擊。按尉繚子曰。發<sub>レ</sub>之如<sub>レ</sub>鳥擊。六韜曰。鷺鳥將<sub>レ</sub>擊。卑飛歛<sub>レ</sub>翼。呂氏春秋曰。若<sub>レ</sub>鷺鳥之擊<sub>レ</sub>也。搏攫則磔。據<sub>レ</sub>之。則作<sub>レ</sub>擊者。是<sub>レ</sub>似<sub>レ</sub>。至於毀折<sub>レ</sub>者節也。

鷺。鷹鷂之類。能執<sub>レ</sub>衆鳥。故名<sub>レ</sub>鷺。夫水至柔。激<sub>レ</sub>之則其力至<sub>レ</sub>於漂<sub>レ</sub>蕩巨石。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>勢焉。鷹鷂雖<sub>レ</sub>微。乘<sub>レ</sub>勢搏擊。則其勁至<sub>レ</sub>於毀<sub>レ</sub>折毛骨。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>觀<sub>レ</sub>節焉。上文既言<sub>レ</sub>奇正。奇正相變。而勢生<sub>レ</sub>於斯。故此又言<sub>レ</sub>勢。勢之強弱。必由<sub>レ</sub>節生。強弩之末。不能<sub>レ</sub>穿<sub>レ</sub>魯縞。衝風之衰。不能<sub>レ</sub>揚<sub>レ</sub>輕塵。戰失<sub>レ</sub>其節。則勢亦無<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>於勝。此其所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>併及<sub>レ</sub>節也。

是故。善戰者。其勢險。其節短。近本。無。是字。險。謂<sub>レ</sub>勢峻急而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>犯也。短。促也。謂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>近不<sub>レ</sub>遠。而勢適<sub>レ</sub>宜處<sub>レ</sub>也。險短二字。戰勢妙訣。折<sub>レ</sub>微入<sub>レ</sub>神。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>意會。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>言盡。夫勢生<sub>レ</sub>於形。形不能<sub>レ</sub>同。故險不<sub>レ</sub>必均。節出<sub>レ</sub>於勢。險不<sub>レ</sub>必均。故短有<sub>レ</sub>遠近。猛虎搏<sub>レ</sub>獸。一蹴而登<sub>レ</sub>之於十步之外。家猫擊<sub>レ</sub>鼠。雖<sub>レ</sub>竭<sub>レ</sub>全力。不能<sub>レ</sub>越<sub>レ</sub>一步之內。虎之與<sub>レ</sub>猫。形勢不同。則險短亦隨<sub>レ</sub>而異矣。且夫勢者氣也。氣有<sub>レ</sub>三變。初微而漸盛。盛極而衰。今試置<sub>レ</sub>鐵甲於數步之間。使<sub>レ</sub>善射者射<sub>レ</sub>之。則必能穿<sub>レ</sub>其札。若移<sub>レ</sub>之於三尺之內。或退<sub>レ</sub>之於百步之外。則十矢無<sub>レ</sub>一洞<sub>レ</sub>焉。何者。甚近者勢尙微。而甚遠者勢既衰也。麴義

破<sub>レ</sub>公孫瓚。兵起<sub>レ</sub>於數十步之內。袁紹與<sub>レ</sub>公孫瓚戰。瓚步騎爲<sub>レ</sub>兩翼。左右各五千匹。白馬義從。爲<sub>レ</sub>中隊。亦分作<sub>レ</sub>兩隊。左射<sub>レ</sub>右。右射<sub>レ</sub>左。旌旗鎧甲。光照<sub>レ</sub>天地。紹令<sub>レ</sub>兵八百。爲<sub>レ</sub>先登。瓚騎千張。夾乘<sub>レ</sub>之。紹自<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>兵數萬。結<sub>レ</sub>陣於後。瓚見<sub>レ</sub>其少。便放<sub>レ</sub>騎。欲<sub>レ</sub>陵<sub>レ</sub>踏<sub>レ</sub>之。義兵皆伏<sub>レ</sub>。下<sub>レ</sub>不動。未<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>數十步。乃同時俱起。揚<sub>レ</sub>塵大叫。直前衝突。瓚軍敗績。周訪克<sub>レ</sub>杜曾。所<sub>レ</sub>中必倒。臨<sub>レ</sub>陣斬<sub>レ</sub>甲首千餘級。瓚軍敗績。周訪克<sub>レ</sub>杜曾。奔<sub>レ</sub>赴<sub>レ</sub>於三十步之外。六鼓。趙嗣屬<sub>レ</sub>左。甄敗鳴<sub>レ</sub>三鼓。兩甄敗鳴<sub>レ</sub>馬告<sub>レ</sub>訪。訪怒<sub>レ</sub>叱<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>更戰。嗣號<sub>レ</sub>哭還戰。自<sub>レ</sub>且<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>申。兩甄皆破。訪開<sub>レ</sub>鼓音。選<sub>レ</sub>精銳八百人。自行<sub>レ</sub>酒飲<sub>レ</sub>之。勅<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>妄動。聞<sub>レ</sub>鼓音。乃進。賊未<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>三十步。訪親<sub>レ</sub>鳴<sub>レ</sub>典章擊<sub>レ</sub>呂布。持<sub>レ</sub>戟大呼。鼓。將<sub>レ</sub>士皆騰躍奔<sub>レ</sub>赴。會<sub>レ</sub>遂大潰。蓋<sub>レ</sub>勢節之妙。雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>親起<sub>レ</sub>於五步之間。皆由<sub>レ</sub>此決<sub>レ</sub>也。蓋<sub>レ</sub>勢節之妙。雖<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>易<sub>レ</sub>親測<sub>レ</sub>。由<sub>レ</sub>此索<sub>レ</sub>之。則庶<sub>レ</sub>乎<sub>レ</sub>其有<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>矣。

勢如<sub>レ</sub>彊<sub>レ</sub>弩。節如<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>機。彊同<sub>レ</sub>彊。音霍。

此以<sub>レ</sub>譬<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>險短之義。彊。張滿也。彊弩。喻<sub>レ</sub>險而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>犯也。機。弩牙也。發機。喻<sub>レ</sub>短而莫<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>破也。弩之爲<sub>レ</sub>物。以<sub>レ</sub>三寸之牙。任<sub>レ</sub>千鈞之力。機若<sub>レ</sub>一撼。莫<sub>レ</sub>物不<sub>レ</sub>破。其勢不<sub>レ</sub>亦險<sub>レ</sub>乎。至<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>機。必中而破。其節不<sub>レ</sub>亦短<sub>レ</sub>乎。險短相須。而敵莫<sub>レ</sub>敢當<sub>レ</sub>其鋒<sub>レ</sub>矣。

紛紛紜紜。鬪亂而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>亂也。渾渾沌沌。形圓而不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>敗也。近本。無。二也字。

此復言<sub>レ</sub>形以起<sub>レ</sub>下文。紛紛。士卒鬪亂之貌。渾沌。陳體無<sub>レ</sub>缺之貌。形圓者。謂<sub>レ</sub>四面八向無<sub>レ</sub>間隙<sub>レ</sub>也。蓋<sub>レ</sub>分數形名奇正。三者皆備。而先爲<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>勝。以待<sub>レ</sub>敵之可<sub>レ</sub>勝。故其合<sub>レ</sub>戰也。什伍縱橫。長短皆當。進退聚散。前衝橫擊。

士卒鬪亂。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而亂<sub>レ</sub>之。旗指旌麾。或奇或正。陽旋陰轉。動靜相應。其陣渾然。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而敗<sub>レ</sub>之。軍形之妙。至<sub>レ</sub>此而極矣。

亂生<sub>レ</sub>於治。怯生<sub>レ</sub>於勇。弱生<sub>レ</sub>於強。此承<sub>レ</sub>上文。言<sub>レ</sub>已實然後能毀<sub>レ</sub>其形<sub>レ</sub>也。亂怯弱者。示<sub>レ</sub>敵之詭形。而所以<sub>レ</sub>動<sub>レ</sub>敵爲<sub>レ</sub>勢也。治勇強者。在<sub>レ</sub>己之實體。而所以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>亂<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>敗也。我軍素治矣。士氣素勇矣。力又素強矣。故能爲<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>敵以<sub>レ</sub>亂怯弱之形。若在<sub>レ</sub>己者。未<sub>レ</sub>全。安能詭形動<sub>レ</sub>敵哉。

治亂。數也。勇怯。勢也。強弱。形也。此申<sub>レ</sub>上文之意。數。分數也。分數。治亂之本。分數素定。則雖<sub>レ</sub>衆必治。不定。則雖<sub>レ</sub>寡必亂。兵勢。勇怯之本。勢得<sub>レ</sub>則怯者勇。勢失則勇者怯。軍形。強弱之本。形實則力合而強。形隙則力分而弱。是故善戰者。必務<sub>レ</sub>其本。本立。而後形可<sub>レ</sub>毀。敵可<sub>レ</sub>動矣。然分數者。形中一事。此分數與<sub>レ</sub>形並稱者。強弱之本。其目尤多。自<sub>レ</sub>五事七計。至<sub>レ</sub>分數形名奇正。皆不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>缺。故統<sub>レ</sub>之曰<sub>レ</sub>形也。如<sub>レ</sub>治亂。則特由<sub>レ</sub>分數明<sub>レ</sub>耳。皆舉<sub>レ</sub>其要<sub>レ</sub>也。

故善動<sub>レ</sub>敵者。形<sub>レ</sub>之敵必從<sub>レ</sub>之。予<sub>レ</sub>之敵必取<sub>レ</sub>之。以利動<sub>レ</sub>之。以本待<sub>レ</sub>之。本。原本作<sub>レ</sub>卒。何氏梅氏。以<sub>レ</sub>勁兵卒解<sub>レ</sub>之。今從<sub>レ</sub>太宗問對。及近本古寫本。改正。

此言<sub>レ</sub>詭形動<sub>レ</sub>敵。以益<sub>レ</sub>我勢<sub>レ</sub>之術。乃上文善出<sub>レ</sub>奇者。而破卵之勢。所<sub>レ</sub>由<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>也。形<sub>レ</sub>之。謂<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>亂怯弱之類。計篇



示不能。示不用。示遠近。亦是也。予之謂予。小利而收大利。所謂利而誘之之類也。利者。敵之所欲。我形之予之。故敵動而赴之。本者。我之所恃。治勇強是也。夫彼我相持。非彼有動。間隙胡生。故以利動之。彼動而隙生。非有本待之。安能乘機於瞬息之間。待而乘隙。故用力至少。得功甚易。此乃勝於易勝者也。故善戰者。武備志。無求之於勢。不責於人。直解開宗實能擇人而任勢。集注云。任勢一作任之。古寫本同。下有之字。故

此承上文。言擇人以任勢。不責於人。謂不督責士卒。強令力戰也。擇人。謂簡揀驍勇。以為選鋒也。蓋以利動之。以本待之者。欲勢之險耳。勢險則勝全。故善戰者。必求勝於勢。不使人強為戰。我勢已險。而又有簡擇之士。先登倡勇。則兵氣益奮。人各樂戰。此其所以擇人而任之勢也。地形篇曰。兵無選鋒。曰北。尉繚子曰。士不選。則衆不强。然則擇之法。任之術。不可不講也。吳子曰。民有膽勇氣力者。聚為一卒。樂以進戰効力。以顯其忠勇者。聚為一卒。王臣失位。而欲見功於上者。聚為一卒。棄城去守。欲除其醜者。聚為一卒。此五者。軍之練銳也。有此三千人。內出可以決圍。外入可以屠城矣。又曰。一軍之中。必有虎賁之士。力輕扛鼎。足輕戎馬。率旗斬將。必有能者。若此之等。選而別之。愛而貴之。是

術。而悉之於九地之篇。讀者宜詳焉。○此篇始揭為勢之條目。次言奇正為勢之術。次言勢節相因之理。次言以實擊虛。以示奇正之妙用。終全括所以為勢之術。以結一篇之意。精粗兼至。本末并盡。其示人以勢也。可謂即兩端兩竭焉矣。

謂軍命。其有用五兵。材力健疾。志在吞敵者。必加其爵列。可以決勝。厚其父母妻子。勸賞畏罰。此堅陳之士。可以與持。能審料此。可以擊倍。愚謂。選士之說。後世益詳。然大要不出於吳子之言。且其曰。別之貴之。曰厚其父母妻子。勸賞畏罰。乃所以使之任勢之要術也。任勢者。通典。無。其戰人也。如轉木石。木石之性。安則靜。危則動。方則止。圓則行。

戰人。使人自為戰也。木石之性。不危則不動。不圓則不行。使之能圓。而居之危地。又能轉之。乃人為之也。無情之物。且猶如此。況鼓有有情之人。有本之兵。以乘其間隙。選鋒又倡之耶。故善戰人之勢。通典。無。如轉圓石於千仞之山者。勢也。此總結一篇之意。圓石。喻形之實體。圓活運轉無窮也。千仞之山。至危而易轉之地也。圓石在千仞之山。勢不待不動。況有人推而轉之。其為勢何如哉。夫勢生於形。形實而勢自生。然不乘其虛。彼或有待。故以利用動之。以本待之。待而乘虛。其勢必動。然非有倡勇者。人不樂戰。故能擇人而任勢。人既樂戰。然戰不得地。則勢有時而屈焉。故置石必於千仞之山。四者皆備。而又能轉之。則其勢如雷如霆。震震冥冥。天下莫當其鋒矣。蓋將之微權。全在轉字。此不言其

### 孫子纂注卷六

虛實篇 近本。作虛實第六。

虛實者。謂以我實擊敵虛。前篇破卵二字。既發其義。夫以破投破者。我雖有勢。彼亦有待。虛實者。所以險我勢也。警虛防變者。彼我俱同。非我有詭道致人。安能使敵必有虛。奇正者。所以使敵虛也。故此篇所言皆奇正之術。乃所以變彼之實為虛也。

孫子曰。凡先處。御覽。作。下。同。戰地。而待敵者佚。後處戰地。而趨戰者勞。

戰地者。會戰之地也。先處之。則地利可得而據。守備可得而豫。氣完而力佚。後趨之。則遠遑奔走。氣匱而力勞。佚者必實。勞者必虛。一先一後。勞佚虛實判矣。此況言先後之利害。以起下文。

故善戰者。致人而不致於人。此揭一篇之大指。致者。使之至也。夫會戰之地。我所欲者。彼不必欲。而使彼必至於其所不欲者。由我有致之之術也。我有此術。故先處而待之。致人者。以實乘虛。致於人者。以虛就實。破卵之分。皆生



於斯矣。能使敵人自至者。利之也。能使敵人不得至者。害之也。

此言致人之術。至。來也。言我欲其來。而不來者。當示利以誘之。我欲其不來。而來者。當示害以止之。人情莫不趨利避害。故以此形之。則敵之進止。在我掌握矣。前篇善動敵之章。但言以利動之。此詳言其術。故利害並舉。夫能形利。又能形害。而致人之術。無餘蘊矣。

故敵佚能勞之。飽能饑之。安能動之。或形利。或形害。能察其情。因以措權。則莫有不

可致之敵矣。勞饑之類。示其一端耳。

近本。必作。趨其所不意。

其所必趨。彼所最愛也。我分兵趨之。以害形之。則彼不得趨也。彼有所趨。則必有所不意。我乘而趨之。其勢如從天下。孰能禦之。

行千里而不勞者。行於無人之地也。出其不意。則有敵猶無。況其未及備耶。雖行千里。何勞之有。

攻而必取者。攻其所不守也。守而必固者。守其所不攻也。

取者。言其易也。凡攻人。莫善於出其不意。故攻其

其聲。此之謂無聲也。無形者。形之微。無聲者。勢之神。無形。故無聲。無聲。故敵之死生。唯我所欲。可不謂之司命乎。不然。則三軍之衆。旗靡鼓鳴。安得無形與聲哉。

進而不可禦者。衝其虛也。退而不可追者。速而不可及也。御覽及李注。速作遠。誤。

進退之機。先於事見。則敵豫為應之之備。其虛變為實。故進雖有勢。彼亦有禦。退雖疾走。追者必及。是以兵貴無形。無形。故進退皆出其不意。夫唯不意。故進不可禦。退不可及也。所謂速者。非急走之謂。但出其不意。則退雖緩徐。敵不可及也。管子曰。分制莫知其將至也。至而不可圍。莫知其將去也。去而不可止。意與此同。舊注失之。

故我欲戰。敵雖高壘深溝。不得與我戰者。攻其

十家注本。脫。戰下雖字。

所必救也。我不欲戰。雖畫地而守之。敵

不得與我戰者。乖其所之也。此復言致人之術。起下文我專敵分之義。攻其所必救。即出其所必趨也。畫地。謂無營壘之固也。乖背戾也。所之者。敵意之所趣向也。彼意當守者。我不守之。彼意當攻者。我不敢攻。凡如強弱衆寡。進退緩急之類。皆出敵人意料之外。謂之乖其所之。如此則彼心疑惑。攻守之計。不知所出。故守雖不固。敵

所不守。則攻而必取。守已。莫要於戒不虞。故守其所不攻。則守而必固。守其所不攻者。常立於不敗之地。攻其所不守者。必不失敵之敗。

故善攻者。敵不知其所守。善守者。敵不知其所攻。

上陳以利害形人之術。以下言實體無形之妙。以明虛實之大本。夫敵不知其所攻守者。以我無攻守之形也。蓋形人之術。無形為本。我若有形。則其術雖巧。亦不可行矣。右手舉。左手提。肉。瞋目。以呼。門前之犬。而犬不肯至者。以其有將撻之形也。是故善戰者。必務無形。攻發於無形。則勢動於九天之上。故敵不知其所守。守潛於無形。則形藏於九地之下。故敵不知其所攻。

微乎微乎。至於無形。神乎神乎。至於無聲。故能為敵之司命。通典。作微乎微。微至於無形。神乎神。神至於無聲。故能為司命。為變化司命。御覽。作微乎微乎。故能隱於常形。神乎神乎。故能為敵司命。

微者。隱微幽冥而難窺也。無形者。非真無形。謂有不能視也。神者。變化不測而難睹也。無聲。亦非實無聲。謂有不能聽也。夫形者主守。非徒自守。能韜晦運用。如龍潛於淵。以待敵之可勝。其機冥冥。藏於九地之下。彼睹吾守形。不料有攻機。此之謂無形也。我既無形。而徐窺其不意。疾攻其無備。其勢烈烈。動於九天之上。彼急遽錯駭之際。氣絕膽落。無聽

不肯戰。若鄭縣門不發。楚言而出。楚人夜遁。孔明開門却洒。仲達不敢攻之類。

故形人而我無形。則我專而敵分。分。一誤。我專為一。敵分為十。是以十誤作敵。攻其一也。十家注本從之。

敵寡。近本。無。而字。

形人者。示人以詭形也。夫心疑者北。力分者弱。形人所分。人之兵。疑人之心也。其術不過形利害而已。凡列炬張旗。揚塵播鼓。或舉偽烽。築假城。以張衝橫截。後襲虛奪窟之形。諸如此者。皆形害。使敵疑懼以分兵也。示怯弱。示饑亂。或誘以采樵輜重糧食城砦之類。諸如此者。皆形利。使敵貪得而分兵也。所形者詭形。而我實無形。養氣蓄力。以窺其分。合衆并力。一向直衝。是以我十倍之兵。攻敵之一分也。則我兵專一。雖少為衆。敵兵分散。雖衆為寡。是乃變寡為衆。變客為主之術也。

能以衆擊寡。通典御覽。擊作。敵。寡下有者字。則吾之所與戰者約矣。約。省約也。使敵備於十處。而吾所攻在一處。故曰約矣。

吾所與戰之地。不可知。則敵所備者多。敵所備者多。則吾所與戰者寡矣。

彼見詭形。而不能窺無形。安得知吾兵果何出果何攻。彼惟不知。故多方備我。備我既多。而吾從一方



攻之。故吾所與戰者。不得其不寡也。故備前則後寡。備後則前寡。備左則右寡。備右則左寡。無所不備。則無所不寡。寡者備人者也。衆者使人備己者也。

所備者愈多。則所戰者愈寡。寡者。原不寡。因備人而寡。衆者。原不衆。因使人備己而衆。致於人。故備人。致人故使人備己。

故知戰之地。知戰之日。則可千里而會戰。不知戰地。不知戰日。則左不能救右。右不能救左。前不能救後。後不能救前。而況遠者數十里。近者數里乎。

能使人備己。而已以無形。一方取之。則戰地戰日。唯我所欲。故千里之遠。尚可會戰。若夫備人而分兵。則戰出不意。豈能知戰地日哉。夫唯不意。故倉遽接戰。

而前後左右。尚不能救。況其相去之遠乎。舊說以蹇叔知晉禦師在崤函之間。孫臏料龐涓日暮至馬陵。爲知戰地日之證者。失其義。

以吾度之。近本。吾作吳。或曰。吾吳古通用。今按。此當爲吾之義。作吳非是。越人之兵雖多。亦奚益於勝敗哉。近本。無是。字。非是。

吾。孫子自稱也。吳越相讎。故舉越人。言我有使人備己之術。則越人之兵雖多。不能爲衆之用。故無益於勝敗之數也。

故曰勝可爲也。御覽。作勝可知。而不。可。敵雖多。可使爲也。蓋因形篇致誤也。

害形之。因其進退動靜。以知其所據之生死也。角之。而知有餘不足之處。

角。觸也。言以我輕兵。觸其左右。因應之之形。以知其兵力何處有餘。何處不足也。夫用兵之法。校計爲先。其計有失。則我有可勝之利。故先知其計之得失。其計或得之。然兵之運用。固有定理。彼若有動靜戰守。不適其理者。則亦有可乘之隙。故又知動靜之理。彼之動靜。已適其理。然戰地失利。則亦有可攻之隙。故又知死生之地。戰地已利。然其軍有強弱殊科者。則亦有破弱縮強。碎堅震脆之術。故又知有餘不足之處。既策而且候。既形而又角。四術俱用。而形兵致人。吾有所裁矣。

故形兵之極。至於無形。無形。則深間不能窺。智者不能謀。此承上文。申明無形之妙。形兵者。形人之兵也。極。至極也。深間者。深微之間諜也。夫以形示敵。或利或害。變化萬狀。無可端倪。然所示非其實。所形非我形。我本無形。若龍潛於淵。安得間窺智謀哉。因形而錯。御覽作作。勝於衆。衆不能知。人皆知我所以勝之形。而莫知吾所以制勝之形。

我以策候形角之術。施之於敵。則敵之形情。瞭然在目。我因其形。而施行制勝之方略於我之兵衆。使下之從吾

無闕。

此引古語。以結上文。夫用兵之妙。至形人而我無形。則莫有不可致之敵。故勝可爲也。敵人雖衆。其所備多。則所戰者寡。故可使有徒備而無闕者也。形篇曰。勝可知。而不可爲者。言正之體也。此曰勝可爲者。言奇之用也。正主自治。故必在己者。不必在敵者。言奇主權變。故無不可致之敵。物皆有本末。正本也。奇末也。故自治已立。然後我無形。我無形。然後形人術行矣。勝不可爲者。虛實之本體。勝可爲者。軍形之妙用。體用本末。相須。而自保全勝。萬無一失矣。故策之。而知得失之計。

致人之要。在審知敵情。故此下言揣度之術也。策籌也。言籌策敵情。以知其計之得失。即校之以計。而索其情之意。

候之。而知動靜之理。候。原本作作。近本同。李筌賈林王哲御覽鄭氏遺說虎鈴。注。爲候字。其義似長。故今從通典經古寫本。改正。

理與否也。候或作作。作者。挑動敵人。言微以意挑之。以起其端。若孔明遺巾幘之類。或可備一說。張賁改作爲詐者。非也。

形之。而知死生之地。進退不利。謂之死地。出入皆便。謂之生地。言以利

指縱以破敵軍。此謂因形而錯勝於衆也。但其形則在乎敵。而因之則在乎我。我本無形。設形示敵。故我所因而錯之方略。不唯敵不能窺。雖我兵衆亦不能知之。且其所以勝之形。唯乘其虛耳。乘虛以勝。人皆視之。吾所以制勝之形。便使敵有虛之術。所謂形人無形是也。此豈衆人所能知哉。

故其戰勝不復。而應形於無窮。此言無形之因應無窮。以結上文。蓋我無形。故因敵形。權利以應之。敵形無窮。而我應之術。亦無有窮。夫唯無窮。是以不復用已勝之術也。所謂不復者。不執一術。隨敵轉化之謂也。若言先用伏而勝。後必不用伏。則非孫子之意矣。

夫兵形象水。水之形。孫星衍。從劉晔子及通典御覽。作水之行。避高而趨下。或作移。趨俗字。兵之形。避實而擊虛。通典御覽古寫本。下有故字。水因地而制流。通典。兩引皆作制形。御覽。兵因敵而制勝。

此下反覆上文之意。以贊嘆無形因應之妙也。水本無形。故必避高而趨下。兵亦無形。故能避實而擊虛。水因地之高下。而制其流。曲直緩急。必殊其形。兵因敵之虛實。而制其勝。剛柔屈伸。常不同勢。此重在因制二字。蓋以策候形角。知敵之情形。因形出奇。伏能勞之。飽能饑之。安能動之。以我無形。擊其不意。此吾所以制勝也。



故兵無常勢。水無常形。能因敵變化。因通典而取勝者。謂之神。  
 以無形視敵形。敵形萬變。吾因其變。權利應之。豈有常勢哉。變化在敵。能因在我。因而擊虛。是以有勢。勢所以取勝。而非所以制勝也。以我至實。乘敵至虛。故曰取勝。因敵變化。而我亦變化。我所變化。不可窺測。故謂之神。朱鹿岡曰。玩而字。語氣是轉。進一步話頭。若在因敵下。用一而字。轉語。變化取勝。四字一連。則變化屬我。今此因敵變化。四字一連。而字在變化字下。則變化屬敵。須辨之。此本張預之說。尤詳密。張氏曰。能因敵變動。應而勝之。其妙如神。諸注以變化屬我者。非是。

故五行無常勝。四時無常位。日有長短。月有死生。

此以讀語結之。夫五行遞剋。無恒久之勝。四時代謝。無恒久之位。日以三至。短者復長。月以晦朔。死者復生。交換轉移。莫有端涯。兵之因應。蓋亦如此。然其所無窮者。皆無形之變化也。凡物有形。則其用有窮。圓者不能方。長者不能短。以其有形也。造化無形。故能生萬物。人心無形。故能應萬事。兵亦無形。故因應無窮。無形者。軍形之極致。而其要在守則不足一句耳。我唯以不足自守。而無貪勝之心。則能靜能幽。其機自潛。故謂之無形。故曰藏於九地之下。或

曰難知如陰。孫子非故為此怪怪奇奇之言。唯其不足二字。所以為無形也。蓋孫子之法。自保全勝而已矣。以其有位置區分之制。謂之形。以無所不戒備。謂之守。以踐繩墨慎節制。謂之正。以氣充力壯。無有間隙。謂之實。以機潛情匿。敵不能窺。謂之無形。皆言自保之道也。以氣焰銳烈。謂之勢。以疾出擊敵。謂之攻。以變化無常。謂之奇。以趨其不意。謂之虛。以詭形誘敵。謂之形人。皆言全勝之術也。然自保。本也。全勝。末也。本固而後末自茂。自保立而後全勝自至。故十三篇中。深意所注。常在求不敗。而不在于求勝。讀者宜潛心玩索焉。

### 孫子纂注卷七

軍爭篇近本。作軍爭第七。

軍爭者。兩軍爭利也。軍之所利。以地為大。得地勢伸。失地勢屈。趙奢據北山。秦軍失利。郭淮據北原。孔明不克。地利之得失。勝敗係乎此。故前篇既發其端。曰。先處戰地。而待敵者佚。後處戰地。而趨敵者勞。地利安得不爭哉。乃此篇所以次虛實也。

孫子曰。凡用兵之法。將受命於君。合軍聚衆。交和而舍。莫難於軍爭。

合軍聚衆者。合聚兵衆也。軍門為和門。周禮。以旌。鄭司農曰。軍門曰和。史記楚世家。昭陽移和而攻齊。蓋和於衆。而舉兵之義也。彼我軍門相對。故曰交和。齊策。秦攻齊。齊使章子將而應。舍止也。此言自始受命。合聚兵衆。以至與敵相對而止。事之尤難。莫甚於軍爭也。

軍爭之難者。以迂為直。以患為利。軍爭所以為難者。以其能變迂途為直路。轉患害為便利也。蓋其途實迂。而我必先入至。謂之以迂為直。彼先據則為我患。而我先處以待敵。謂之以患為利。

利。誠能此術。則千里之遠。亦可爭利。然其如此者。事之至難。非知迂直之計者。孰亦能之。

故迂其途。而誘之以利。後人發。先人至。此知迂直之計者也。通典。此下有先字。

此言以迂為直之計也。迂其途者。示敵以我必由迂途也。示由迂途。則彼意已怠。而又誘之以利。使彼貪得。以不料吾所欲。然後疾出其不意。而間趨吾所欲。故發在人後。至必先人。亦形人無形之意。如趙奢救閼與。去國三十里而留。二十八日不行。復益增壘。此示以迂也。及遣秦間。卷甲而趨。二日一夜。至閼與。又據北山。此後發先至也。賈氏曰。敵途本近。我能迂之者。或以贏兵。或以小利。於他道誘之。使不得以軍爭赴也。亦可為一說。

故軍爭為利。軍爭為危。通典近本。俱作衆爭為危。此結上文而起下文。言均之軍爭也。知迂直之計。則為利。不知則為危。為將者不可不察也。

舉軍而爭利。則不及。一本。誤。舉作故。委軍而爭利。則輜重捐。以下言軍爭之危也。委。棄置也。輜。厠也。謂軍糧什物。雜厠載之。以其累重。故稱輜重。此言舉全軍而與人爭利。則行緩不能及事。委大軍而輕兵赴利。則行疾輜重棄捐。此其所以為危也。是故卷甲而趨。通典。下有利字。日夜不處。倍道兼行。百里而爭



利。則擒三將軍。勁者先。罷者後。其法十一而至。  
通典。作十而一至。

卷。同。捲。捲甲。秦甲也。甲重人疲。故秦甲而趨也。  
張預曰。卷甲。猶悉甲。謂輕重俱行。非也。源君美曰。據史趙奢卷甲而趨。與之下。二日一夜而至。秦人悉甲而至。卷甲悉甲。義自不處。止也。不處。謂不休息也。倍道者。凡軍日行三十里為一舍。今日馳二日之道也。兼行者。一人兼二人之行也。三將軍。謂上中下軍之帥。鄒陽馬氏曰。二軍。則中言百里。我十一而爭利。勁健者先至。疲弱者必後。以兵法算之。則至戰地者。為得十分之一也。我勞而寡。彼佚而衆。其帥安得不所擒哉。

五十里而爭利。則蹙上將軍。其法半至。  
通典。作以半至。

蹙。謂軍敗而死也。曹注。蹙。猶挫。蓋謂戰敗挫兵威也。亦通。上將軍。上軍之將也。上軍居前為先鋒。勞倦遇敵。故其將敗死也。蓋五十里。我五里。不為甚遠。但以其行急。至者減半。故止蹙上軍之將也。

三十里而爭利。則三分之二至。  
通典。下有以是知。軍爭之難。七字。

我三里。軍行一日之途。然一二時間。奔馳趨利。故三分之二至。其途不遠。而後軍或繼至。故不至擒蹙。但其勝敗未可知耳。此不言其法者。帶上文也。以上皆言不知迂直之計。委軍而爭利之害也。直解一說。此孫子教人爭利之法。言百里爭利者。當令最勇者先至。罷弱者繼後而行。五十里者。一半先往。三十里

山巘曰險。水隔曰阻。水草漸洳者為沮。衆水所歸而不流者為澤。凡此地形。悉能知之。然後迂直之計。得有所裁也。

不用鄉導。不能得地利。  
通典。脫能字。

鄉導者。用其鄉人。為我導引之稱。凡丘陵原衍之向背得失。城邑道路之險易迂直。非用鄉導。不能得其詳也。蓋軍爭之要。在於交諸侯。知地形。而最要在用鄉導。然鄉導多出於虜獲。須必察色考言。參驗之數人。以防其反覆。若夫使其人信服致身。則存乎將之心術矣。或曰。鄉同嚮。言指向導引也。

故兵以詐立。以利動。以分合為變者也。

此下承上文。言軍爭之法。以詐立者。謂以詭道成事。乃迂其途之類也。以利動者。謂以利動敵也。  
杜牧曰。見利始動。諸注從之者。非也。以分合為變者。謂奇分正合。圓活相變。因以制勝也。此重在分合。蓋分合者。奇正之妙用。而詐利之術。由是以成矣。故下文專言奇正也。

故其疾如風。其徐如林。

奇兵趨虛者。迅疾直前。如風之倏忽扇物。正兵持重者。齊整徐進。如林之森然不亂也。

侵掠如火。不動如山。  
直解云。張貴本。不動如山。山句。在難知如陰之下。酒師掠境曰侵。奪取財蓄曰掠。言枝軍侵掠。其勢烈烈。如火之燎原。不可嚮邇。本軍舒進。其形屹然。

者。三之二往。觀二段有兩法字。可知。愚按。此說本杜牧。亦用兵之一術。然非此章之義。

是故軍無輜重。則亡。無糧食。則亡。無委積。則亡。

此結上文。輜重。專言器械衣裝。糧食。言米粟鹽蔬。委積。言貨財。凡言輜重。則糧食委積。在於其中。此欲明示人。故並舉三者也。  
按。委積。牢米薪芻之總名。並舉。則專指貨財也。少曰委。多曰積。見於周禮注。是委積本義。此與糧食。夫奔馳爭利。則途近至多。猶為三分之二。況於輜重牛車之遲緩乎。其棄捐不繼。可知矣。三者。皆軍所恃以為命者。棄之而爭利。如之何。其不亡也。張氏曰。上三節言舉軍爭利之害。此言委軍爭利之害。失之。

故不知諸侯之謀者。不能豫交。

此下言得地利之要有三。以起下文軍爭之法。蓋以迂為直者。必有假人之途。藉人之兵。故近隣諸侯。不可不結交也。苟欲結交於諸侯。非先知其所謀。交不可合。管子曰。不明于敵人之情。不可約。是也。凡交貴豫。豫交者。合交於無事之時也。若臨有事。厚聘求交。抑亦晚矣。故豫交者。列國用兵之先務。蘇秦曰。明於諸侯之故。察於地形之理者。不約親。不相質。而固。不趨而疾。此章之義。鄭霧謂。知諸侯之智謀孰勝。擇人而與之交。失之。不知山林險阻沮澤之形者。不能行軍。

如山之鎮靜。不可搖動也。  
難知如陰。動如雷震。十家注本。從通。我實體無形。如陰雲蔽天。莫觀辰象。敵不能窺謀。見虛而發。則其勢險短。如雷之空中擊下。敵不知所避。龍韜曰。善者。見利不失。巧者。一決而不猶豫。是以疾雷不掩耳。赴之如驚。用之如狂。當之者破。近之者亡。乃雷震之意也。以上山林難知。言正體也。風火雷震。言奇用也。體無爭利之形。而用乘其不意。或奇引敵於他道。而正掩其無備。故能後發先至也。

掠鄉。通御覽。作指鄉。賈林注。作指鄉。廓地分利。

此言誘敵於他道也。利固可誘敵。害亦當致人。故我出奇兵。以掠其鄉邑。使敵分其衆而防之。或進我枝軍。以開廓境土。使敵分守地利。以備之。如此則彼不料吾所爭之地何處。我窺其不測。直趨所爭之處。亦形人無形之術也。  
按。分字。自有為守之意者。將線拒。舊說。掠財則分與衆人。開地則分賞有功。或曰。掠敵鄉。則須分番次第。使衆皆得往。故衆皆欲與敵爭利。開敵地。則分兵以守其地利。皆非其義。懸權而動。

權。所以稱輕重也。將亦有權。知迂直之計。乃將之權也。先知其計。故風火雷震。山林難知。或掠或廓。裁



之於心。隨敵制宜。如懸於衡。不失錙銖。尉繚子曰。權敵審將。而後舉。吾若無權衡。安能權敵。先知迂直之計者勝。此軍爭之法也。

勝者。謂得所爭也。此重先知二字。先知。故雖後人發。必先入至。以上所言。皆兩軍爭利之法也。故以此

一句。通結上文。

軍政曰。言不相聞。故為金鼓。近本。為下有之字。下同。十家注本。從通典御覽北堂書鈔。鄭氏遺說。作視不相見。故為旌旗。

此下言自治之法。以明軍爭之本也。軍政。軍之舊典也。視與示通。言兵多地廣。將之言語。不相聞。故為金鼓。以明其耳。將之指示。不相見。故為旌旗。以明其目也。

夫金鼓旌旗者。所以一人之耳目也。北堂書鈔。太平御覽。人云。作人。避諱改也。今按。作人者。是。人既專一。則勇者不獨進。怯者不獨退。此用衆之法也。

坐作進退。必聞金鼓。分合聚散。必見旌旗。不如此令者罪。此所以專一衆人之耳目也。人之耳目。既能專一。唯在於金鼓旌旗之令。則進退齊整。雖百萬衆。如使一人。此為節制之兵。而風火雷震。山林難知。皆因斯而成矣。用衆之法。如此而已。

故夜戰多火鼓。晝戰多旌旗。所以變人之耳目也。通典。變作便。御覽。人作民。非是。

是故朝氣銳。晝氣惰。暮氣歸。

此言氣有盛衰。以起下文。凡人之氣。始則銳。中則惰。終則倦而衰。故平旦之氣。銳烈欲進。日午之氣。怠惰欲休。至日暮力困。則氣益倦而思歸。行旅戰陳。未嘗不然也。故李衛公曰。所謂朝氣銳者。非限時刻而言也。舉一日始末為喻也。苟能推一日之氣。以察始中終之變。則治吾之氣。以乘敵之衰。何難之有。故善用兵者。近本古寫本。無故字。通典。治作理。避諱也。下同。避其銳氣。擊其惰歸。此治氣者也。

善用兵者。敵氣正銳。則我不與之俱銳。按兵避之。詭道勞之。待我氣正奮。彼氣已衰。鼓譟乘之。此善治我軍之氣者也。范蠡曰。竭彼陽節。盈我陰節。而奪之。曹沫曰。一鼓作氣。再而衰。三而竭。彼竭我盈。故克之。皆謂此訣也。

以治待亂。以靜待譁。此治心者也。我先為不可勝。以待敵之可勝。故軍治而靜。將心安定。而可以見機。可以應變。可以乘彼之亂譁。而不失其敗。此善治己之心者也。

以近待遠。以佚待勞。以飽待饑。此治力者也。戰地則我先處之。士卒則我先養之。糧食則我先足之。待彼之疲勞。而後乘之。此善治我兵之力者也。無邀正正之旗。十家注本。從北堂書鈔太平御覽。改邀作要。按。邀伊堯反音腰。正韻曰。通作要。然則不

此承上文。言因旗鼓以制敵也。旗鼓固治己之具。而又可以制敵。制敵之術。要在多字。夫耳目者。心之官也。官亂則心氣從而所梏矣。故我多設疑兵。以變亂其耳目。則敵莫測吾眾寡虛實。晉之破齊。晉使司馬卞之險。齊侯越之破吳。越與吳夾水而陳。越為左右勾卒。夜鳴鼓而進。吳分兵禦之。越潛涉水。襲破吳。廉范燕火。范。拒匈奴。日暮令軍各縛兩炬。變頭中軍。齊賢中夜遣兵由城南。持炬燬齊賢營。齊賢驚走。齊賢伏兵。掩擊大破之。

皆用此術也。近本。無故字。

故三軍可奪氣。將軍可奪心。近本。無故字。

司馬法曰。戰以力久。以氣勝。又曰。本心固。新氣勝。夫人有勇怯強弱。聚為一軍。使之進戰。雖死不省者。氣使然也。故善戰者。必先養吾氣。使之常新。奪敵氣。使之必衰。吾氣常新。然後敵氣可得而奪矣。將軍之心。三軍所倚賴以為氣也。治亂勇怯。悉生於斯。夫心奪者思慮亂。思慮亂者進退狐疑。三軍之氣。豈能不衰。吳子曰。用兵之害。猶豫最大。三軍之災。生於狐疑。是也。故良將必先治己心。使安靜而不亂。然後敵之心。可得而奪矣。所謂多火鼓旌旗者。奪之之術也。彼之耳目。既亂而疑。則心惑氣衰。攻守之計。不知所施。我徐窺其機。鼓吾新氣。險短以乘之。乃勝於易勝之術。而軍爭之要旨也。

必改。勿擊堂堂之陳。勿武備。志作無。此治變者也。

邀。避也。正正。謂旌旗齊整。堂堂。謂陳體盛大。皆大衆有制之形也。敵形如此。豈可輕戰。夫遇敵而戰者。兵之常。見其強大而避者。其變也。知難而退。見害而避。此善治處變之道。以應敵形者也。以上四治。皆用兵之要法。而軍爭之先務也。

故用兵之法。高陵勿向。背丘勿逆。御覽。背作倍。

此下推行治變之意。以明有所避之法。向者。仰也。背者。倚也。逆者。迎也。凡仰高者勢屈。赴低者勢伸。故敵據高者。不仰攻。倚丘者。不迎戰。宜遠去布陳。引至平地而擊之。

敵無當敗之實。而奔北者。必有詭計。故不可從逐。宜按兵自守。察其變動。敵有勇銳樂戰之氣者。難與爭鋒。故不可進攻。宜且少避之。以俟其驕惰。

餌兵勿食。通典。食歸師勿退。餌。釣魚之物。魚貪餌而死。兵貪利而敗。故以利誘敵。謂之餌兵。若楚莫敖屈瑕。無扞采樵。以餌絞人。李牧以人畜。餌匈奴。曹操以畜產。餌馬超。以輜重。餌袁紹之類。李筌杜牧為實。毒之義。謬也。過者。迎而止之也。凡人有歸心。則其氣銳於歸。而怯於闕。若遮其歸路。則歸心激為鬪心。故但當犄角其後。宜勿



迎而止之。韓信謂漢王曰。從思東歸之士。何所不克。曹公既破劉表。謂荀彧曰。虜退吾歸師。而與吾死地。吾是以知勝。是也。

圍師必闕。窮寇勿追。追一作追。東坡大臣論引之亦作追。蓋字之訛。圍敵者。四周守急。則彼知不免。致死於我。其勢不易。故必開一面。示以生路。使彼無必死之心。可因以擊。司馬法曰。衆以合寡。則遠裏而闕之。即此義也。窮寇者。窮困之寇。援絕糧竭。欲決死生於一戰者。緩之則走。迫之則反噬人。夫概王曰。困獸猶鬪。此善喻也。趙充國逐先零羌。羌棄輜重。欲渡湟水。道阨狹。充國徐行驅之。或曰。逐利行遲。充國曰。窮寇也。不可迫。緩之則走不顧。急之則還致死。果大破虜。是用此訣也。

此用兵之法也。鄭氏遺說。法下有妙字。蓋衍也。

以上八者。皆因敵而變之事也。夫用兵之道。合於利而動。不合於利而止。兵豈一於戰乎。或避之。或縱之。謂之懸權而動。然徇名畏罪之徒。不慮利害之所。無謀強戰。往往至覆軍債國者。皆坐於不知用兵之法也。故孫子揭此一句。提醒後之為將者。其垂戒深矣。○此篇始立舉軍爭之利危。而注意於迂直之計。次言奇正分合之術。以示軍爭之法。次言自治然後能制人。以示軍爭之大本。終言因敵而變之教。以

明用兵之法。蓋一篇要旨。在爭以智而不以力。其術總不外形人無形也。

### 孫子纂注卷八

九變篇近本。作九變第八。

常之反為變。蓋兩軍爭利者。兵之常。而不攻不擊不爭。是其變也。若守其常。而不知其變。則戰必有挫。故前篇治變一節。已發其端。又於此篇詳其義也。其目蓋有九。故以九變為名。然篇中所陳。其數不明。是以古今注家。紛紛為說。張預曰。從圯地無舍。至死地則戰。此為九變。止陳五事者。舉其大略也。九地篇中。說九地之變。惟言六事。亦陳其大略也。凡地有勢有變。九地篇上所陳者。是其勢也。下所叙者。是其變也。何以知九變為九地之變。下文云。將不通九變。雖知地形。不能得地利。又九地篇云。九地之變。屈伸之利。不可不察。以此觀之。義可見矣。下文既說九地。此復言九變者。孫子欲叙五利。故先陳九變。蓋九變五利。相須而用。故兼言之。趙本學駁之曰。其謂九變即後篇九地之變。固非孫子之本意。且九地在後。九變在先。見於前者。或舉其大略於後。安有見於後者。而舉其大略於先邪。又有

恩田仰岳篇

何氏及鄭霧注釋。則復截自圯地無舍。而至地有所不爭。為九變。除君命有所不受一句。為是總申上文九事。又謂五利。即圯地無舍五句。夫圯地五句。既指其為九變。復指其為五利。此不通之甚。又有過於張者。愚謂。趙氏之論固當矣。然其從劉氏直解。謂前篇高陵勿向八句。當合此篇絕地無留一句。為九變。錯簡在上。此篇圯地無舍四句。特下九地篇文。錯簡在此。又以將受命於君。合軍聚衆九字。為衍文者。率意無據。妄改先秦之書。孰信其果然。或曰。九言其多也。僖九年公羊傳。葵丘之會。叛者九國。言叛者衆。非實有九國。趙鵬飛曰。會葵丘。惟六國。會鹹牡丘。皆七國。會淮八國。猶漢紀云。叛者九起也。此九變。亦不必拘其數。茅元儀曰。五地及五有所不。共十變也。大略舉數曰九。此得之。愚謂。五地言常法。指之為變。固不可也。況九地舉實數。而此獨以九為多之義。殆非其例。他如鄭氏遺說。黃氏開宗。率不免牽強。竊疑。此篇塗有所不。由之前。有許多脫文。而五有所不。乃九變存其五。外猶須有四變。而脫矣。此比他篇。為尤難讀。豈無其故耶。強索其說。恐失孫子之意。讀者欠疑可也。

孫子曰。凡用兵之法。將受命於君。合軍聚衆。解見前篇。







有所利。唯利是見。則一於進取。必有意外之患。故以害雜於利。明利中之害。而我專務可伸也。如鄭師克蔡。國人皆喜。子產獨懼之曰。小國無文德。而有武功。禍莫大焉。後楚果伐鄭。是也。雜於害而患可解也。

此言在害思利也。凡事有所害。唯害是患。則一於自屈。而無濟事之功。故以利雜於害。詳害中之利。而我患難可解也。如下張方之在洛陽。連戰皆敗。或勸方宵遁。方曰。兵之利鈍常事。貴因敗以為勝耳。夜潛進逼敵。遂致克捷。是也。是故屈諸侯者以害。

此承上文。言致人之術。屈服也。言以害形之。則彼畏害。而屈於我。既使敵人不待至者。害之也。之意。

役諸侯者以業。役。役使也。謂吾欲其攻。使之攻。吾欲其援。使之援。之類也。業。功業也。言動之以其功業之輕重。則彼有所邀。而為我所役使也。或激以威權之不立。或勵以取名著功之說之類。皆其術也。舊注云。業。事也。言構多事以煩勞之也。失之。趨諸侯者以利。趨令彼來也。言以利示之。使彼貪利而就於我。即

故將有五危。

此承上文。言性之偏者。不能雜思利害。而至於危害也。夫率兵對敵。孰不欲就利避害。然性之偏者。臨事之隙。思之不詳。忘其有害。以招敗覆之禍。孫子說五危。蓋欲人以此自省。又以此致人耳。必死可殺也。近本。無也字。下四句同。

偏於勇者。其失易至必死。將偏於勇。而不能慮利害。則武進輕合。不戰為辱。如是者。誘而殺之。誠不難也。吳子曰。凡人論將。常觀於勇。勇之於將。乃數分之一耳。夫勇者輕合。輕合而不知利。未可也。亦此意也。

必生可虜也。偏於智者。其失易至必生。將偏於智。而不能慮利害。則常恃其智。而憚死戰。憚死之人。進退多疑。司馬法曰。上生多疑。吳子曰。上疑而下懼。其將可虜。言如是者。可襲而虜之也。

忿速可侮也。偏於剛者。其失易至忿速。將偏於剛。而不能慮利害。則暴怒偏急。睚眦必報。故可凌侮至致之。廉潔可辱也。偏於義者。必好廉潔。徒好廉潔。而不能慮利害。則狷狹徇名。無受毫挫。故可詬辱而致之。

使敵人自至者利之也。之意。以上三件。皆以利害致人之術也。蓋在利思害。在害思利者。自固之正法。而以利害致人者。制勝之奇術也。故於我參雜慮之。於彼用之。以致人。皆所以自保而全勝也。近本。也作

故用兵之法。無恃其不來。恃吾有以待之也。通典御覽古寫本。作恃吾無恃其不攻。恃吾有所不可攻也。有能以待之也。恃其不攻。恃吾不可攻也。孔鮒諫陳涉引之。作無恃敵之不我攻。恃吾之不可攻也。此復言慮利害。以起下文。恃。賴也。待者。豫備也。蓋其不來不攻者利也。我恃其利。則必有不虞之敗。故豫備嚴整。常如力不足者。無所不備。無所不守。是以無害矣。劉氏曰。備而且理。惟深思利害者能之。蓋法防勇戰。用兵之道也。必斥堠常謹。堡柵常固。行陳常整。法度常申。器械常利。車馬常調。視未戰如將戰。視既戰如未戰。不以敵去而侮。懼有伴退之理。不以以勝敵而驕。懼有必報之心。戒酒省眠。養氣寡慾。忍寒耐暑。服勞分苦。雖經年積月之後。無異於始集之時。雖暴雨嚴霜之夜。無間於風高馬嘶之辰。一心周流乎萬里之外。鑿戒不離於几席之前。如是則常有恃。萬無可攻。倉卒意外之變。何為而起也。苟無自固之本。而偷或然之安。則雖極其思慮之精。亦無益於智也。愚謂。劉氏之言。真自固之要法。學者其可不省耶。

愛民可煩也。

偏於仁者。必務愛民。徒務愛民。而不能慮利害。則柔懦姑息。唯憚勞民。故可出沒侵掠。令其煩擾。而後取之。

凡此五者。將之過也。用兵之災也。覆軍殺將。必以五危。不可不察也。覆。敗也。此五者。皆將之一材也。然唯其所向。而不加省察。則必陷於一偏。而有敗死之災。若夫慮雜於利害。知其當變。而能變者。柔有所設。剛有所施。弱有所用。強有所加。故事無失策。戰勝無災。又安有五危哉。為將者。不可不自省察也。○此篇文理不貫。蓋有脫文之故也。然自智者之慮。必雜於利害以下。血脈貫通。一篇大旨。可以觀矣。夫兵固貴變。然非慮雜於利害者。不能知其當變而變。故利中之害。害中之利。反復並舉。而歸重於豫備自固。真用兵之龜鑑也。



# 孫子纂注卷九

行軍篇近本。作行軍第九

此篇言師行之際。擇其利害也。凡地有水陸山谿。陰陽死生之不同。敵有動靜進退。治亂虛實之不一。而我處之。又有據去攻守之利害。若不知其利害之所。則所謂地利敵形。果何擇而何爭。何擊而何避乎。前篇言慮利害而變之義。此篇乃示知利害之所。在。而據去攻守之法。處軍四法者。明據去之利害。相敵三十二法者。詳攻守之利害。二者悉知。而軍行不危矣。

孫子曰。凡處軍相敵。處。居也。謂安處我軍也。相。視也。謂視形察情也。處軍有四法。相敵有三十二法。下文詳之。絕山依谷。視生處高。戰隆無登。通典。御覽古寫本。隆作降者。此處山。下有谷字。之軍也。此言處山之法。絕。猶越也。依。附近也。凡軍行。過山而止舍者。近谷有水草之便。故必依之。生地。有戰守之利。故必向之。高地。有衝突之勢。故必處之。敵在。高而戰。則低者勢屈。故無登。此處山之常法也。隆。

客。恐敵不肯渡也。失之。絕斥澤。惟亟去無留。直解武備志開。若交軍於斥澤之中。與御覽。若必依水草。而背衆樹。云。樹一作木。此處斥澤之軍也。斥澤。厓也。或曰。鹹鹵之地。其地卑下漸洳。車騎陷沒。進退不便。遇敵於此。恐取覆敗。故宜速去。毋止軍。若不不得已而遇敵。則必就其中。擇有水草處。而處軍。依水草。則樵汲不乏。背衆樹。則地堅實不陷。且足倚爲固。處斥澤之軍。此二者爲法。平陸。處易而右背高。近本。無。前死後生。此處平陸之軍也。地高爲生。低爲死。前死。令敵處低。後生。我據其高。淮南子地形訓曰。高者爲生。下者爲死。丘陵爲牡。谿谷爲牝。又見家語。兵略訓曰。所謂地利者。後生而前死。左化而右壯。按。攻守俱利。謂之生地。進退多疑。謂之死地。故高者屬生地。低者屬死地。凡軍處坦易。則車騎無礙。右背高地。則受敵有便。前低後高。則衝突有勢。處平陸之軍。此三者爲法。凡此四軍之利。講義開宗。黃帝之所以勝四帝也。武備志開無之字。講義無此字。

四軍之利。即四地處軍之法也。四帝未詳。曹公曰。黃帝始立。四方諸侯亦稱帝。源君美曰。其傳之久。必既失之也。凡軍好高而惡下。十家注本。從通典。御覽。好作喜。貴陽而賤陰。養生而

恩田仰岳篇

或作降。降下也。謂戰宜下。毋仰登也。無。毋通。絕水必遠水。通典。上有。若二字。非。此下言處水上之法。凡軍行過水而止舍者。宜深進以遠於其水。若近後其水。即背水之陳。尉繚謂之絕地。可不戒乎。舊說。遠退引敵使渡者。失之。客絕水而來。勿迎之於水內。令半濟而擊之利。近本作度。御覽。

水內。水中也。或曰。內儒稅切。同。泗。水涯也。失之。半濟。謂前既濟後未接也。凡兵在水中。一意欲濟。其氣甚銳。故迎者勢不支。及其半渡。而後軍未接。則首尾失援。渡者意懼。故擊之易勝。如公孫瓚敗黃巾於東光。薛萬均破竇建德於范陽之類。若夫全軍既渡。行列既定。則我迫其前。水阻其後。所謂陷之死地者。而去梯之勢成矣。擊之必敗。如宋公不聽子魚之言。而敗績於泓之類。此亦不可不察也。欲戰者。無附於水而迎客。直解武備志開。無者字。宗。無於字。視生處高。無迎水流。此處水上之軍也。附。近也。謂迫水涯也。迎水流。當水之來處也。言彼我阻水。而欲相戰者。必不可近於水而迎戰。先審其地形。視生地。處高隆。乘便以擊其半渡。如此者勝。但毋迎水而處軍。恐有客乘流薄我。或暴漲浸軍。此六者處軍水上之常法也。舊說謂無附水迎

處實。生下而字。近本皆無。軍無百疾。是謂必勝。通典御覽古寫本。無百疾。梅氏注亦同。此下統論處軍之法。凡軍居高。則便於顧望。利於攻守。潦水不及。澇暑不侵。下則反之。故好高惡下也。陽。明也。山之前爲陽。陰。蔭也。山之後爲陰。處山之前。面向平野。則明而氣舒。且戰守有憑。故貴之。處山之後。面向叢林。則晦而氣鬱。又碍於進退。故賤之。養生。謂利於人畜也。處實。謂居堅實之地也。高陽之地。乾燥堅實。人馬無疾疫之患。車騎無陷沒之害。故曰養生而處實。形勢既便。軍又無百疾。所以謂必勝也。

丘陵隄防。必處其陽。而右背之。此兵之利。地之助也。此四者。雖非至高。必居其前。而右背之。此皆用兵之利。得地形之助也。上雨。水沫至。通典御覽。水上有二字。欲涉者。待其定也。必待其定。以決進止也。凡地有絕澗。天井。天牢。天羅。天陷。天隙。必亟去之。勿近也。通典御覽。天井上有過字。又天隙作兩山夾水曰澗。谿谷深峻。絕人行者。爲絕澗。物出自然曰天。外高中下。衆水所歸者。爲天井。言其如入井中。山險環繞。入而難出者。爲天牢。言其如